

新 信 者 必 読



神の羊は
神の御声を聞く

新 信 者 必 読



神の羊は 神の御声を聞く

序文

神を信じている人はたくさんいるが、神への信仰とは何を意味するか、神の心に従うためには何をしなければならないかを理解している人はほとんどいない。人々は「神」という言葉や「神の働き」のような語句はよく知っているが、神を知らないし、ましてや神の働きなど知らないからである。それなら、神を知らないすべての人々がでたらめな信仰に取りつかれているのは無理もない。人々は神への信仰を真剣には受け止めない。なぜなら神を信じることは彼らにとってあまりにもなじみのないものであり、あまりにも不慣れなことだからである。これでは、彼らが神の求めに応えることなどできない。言い換えれば、人々が神を知らなければ、神の働きを知らなければ、神に使われるには適さないし、ましてや神の望みに応じることなどできない。「神への信仰」とは神の存在を信じることを意味し、これは神に対する信仰の最も単純な考えである。さらに、神の存在を信じることは、真に神を信じることと同じではない。むしろそれは強い宗教的含みを持つ単純な信仰である。神への真の信仰とは、神はすべてのことに支配権を持つという信念に基づいて神の言葉と働きを経験することを意味する。墮落した性質から解放され、神の望みに応じ、神を知ることができる。そのような道程を経てのみ、神を信じていると言える。しかし、人々はしばしば神に対する信仰を、何か単純で取るに足らないものだと考える。このような形で神を信じる人は、神を信じることの意義を失っており、最後の最後まで信じ続けるかもしれないが、神の承認を得ることは決してない。なぜなら、彼らは間違った道を歩んでいるからである。今日でも、文字上でだけ、空しい教義上でだけ神を信じている人々がいる。彼らは自分たちの信仰には本質がないことや、自分たちが神の承認を得られないことに気が付かず、依然として平安と神からの十分な恩恵を願って祈っている。わたしたちは立ち止まって次のように自問するべきである。神を信じることは本当に地上で最も容易なことなのだろうか。神を信じることは神から十分な恩恵を得ることではないのだろうか。神を信じているが神を知らない人々、神を信じているが神に反抗している人々は本当に神の望みを満たすことができるのだろうか。

神と人を同等なものとして語ることはできない。神の本質と神の働きは人にとって最も深遠で理解しがたい。神が人の世でみずから働きを行わず、言葉を話さなかったら、人は決して神の意志を理解することはできないし、全生涯を神に捧げてきた人々でさえ、神の承認を得ることはできない。神の働きがなければ、人の行いがどんなによくても

無駄である。神の考えはいつも人の考えより高く、神の英知は人にとって測り知れないものだからである。そこで、神と神の働きが「はっきりと見える」人々は無力で、皆傲慢で無知だとわたしは言う。人は神の働きを決め付けるべきではないし、その上、人は神の働きを決め付けることはできない。神の目には人は蟻よりも小さいのに、どうして人が神の働きを推し測ることなどできようか。「神はあんな方法やこんな方法では働かない」とか「神はこのようである、あのようである」といつも言っている人々――彼らは皆高慢ではないだろうか。わたしたちは皆、肉体を持つすべての人々はサタンによって墮落させられていることを知るべきである。神に反抗するのは彼らの本性であり、彼らは神と同等ではなく、ましてや神の働きに助言することなどできない。神が人をいかに導くかは神自身の働きである。人は服従するべきであり、これこれしかじかの意見を持つべきではない。人はちり芥にすぎないのだから。わたしたちは神を見つけようとしているのであり、神が考慮すべき神の働きの上に自分たちの観念を重ね合わせるべきではないし、神の働きに故意に反対するために自分たちの墮落した性質を用いることなどもってのほかである。そのような行為はわたしたちを反キリストにさせるのではないだろうか。どうしてそのような人々が神を信じているなどと言えるだろう。わたしたちは神の存在を信じているので、神を満足させ、神を見たいと望んでいるので、真理の道を求め、神と融和するための道を探すべきである。わたしたちはかたくなに神に反抗するべきではない。そのような行動に何の益があるだろう。

今日、神には新しい働きがある。あなたはこれらの言葉を受け入れないかもしれない。あなたには奇妙な言葉に感じられるかもしれないが、わたしはあなたに本性を表さないよう忠告する。神の前で本当に義に飢えかわいている人々だけが真理を得ることができ、本当に敬虔な人々だけが神によって啓発され、導かれることができるからである。口論を通して真理を求めてもそこからは何も生じない。静かに求めることによってのみわたしたちは結果を得ることができる。わたしが「今日、神には新しい働きがある」と言う時、わたしは神が再び肉となることに言及している。おそらく、あなたはこれらの言葉を気にしないか、これらの言葉を軽蔑するか、あるいはおそらくあなたにとって極めて興味深い言葉であるかもしれない。いずれにせよ、わたしは神の出現を本当に切望するすべての人々がこの事実を直視し、慎重に考慮することを希望する。結論に飛びつかない方がよい。これが賢い人々の行動すべきやり方である。

このようなことを考察するのは難しいことではないが、わたしたちそれぞれにこの真理を知ることが要求される。受肉した神は神の本質を有し、受肉した神は神による表現

を有する。神は人間の姿になるので、なすべき働きを打ち出し、神は人間の姿になるので、自分が何であるかを表して、人に真理をもたらし、人にいのちを与え、人に進むべき道を示すことができる。神の本質を含んでいない肉体が受肉した神ではないことは間違いなく、これについて疑う余地はない。受肉した神かどうか調べるためには、その人が表す性質や話す言葉からそれを決めなければならない。つまり、人間の姿になった神かどうか、それが真の道かどうかは、その人の本質から判断しなければならない。そこで、人間の姿になった神かどうかを決定するとき¹⁰¹、鍵となるのは、外見よりもむしろその人の本質（働き、言葉、性質、その他いろいろ）に注意を払うことである。外見だけを見て本質を見落とす者は、自分の無知、単純さをさらけ出すことになる。外見は本質を決定しない。その上、神の働きは決して人の観念と一致することはない。イエスの外見は人の観念とはまったく違っていたのではないか。イエスの外見と衣服はイエスの真の正体に関し何らの手がかりも与えることができなかったのではないだろうか。古代のパリサイ人がイエスに反対したのは、彼らがイエスの外見をみただけで、イエスの語る言葉を真剣に受け止めなかったからではないだろうか。神の出現を求める兄弟姉妹には歴史の悲劇を繰り返さないで欲しい。あなたがたは、現代のパリサイ人になって神を再び十字架につけるようなことをしてはならない。あなたがたは神の再来をどのように歓迎するか慎重に考え、真理に服従する人になるにはどうしたらよいか、はっきりした考えを持つべきである。これが、イエスが雲に乗って再臨するのを待っているすべての人の責任である。わたしたちは霊的な目をこすり、非現実的な考えに満ちた言葉の餌食になってはならない。わたしたちは神が現実に行なう働きについて考え、神の実際的な面を見るべきである。イエスをまったく知らず、見たこともなく、イエスの旨をどう行ったらよいかわからないあなたがたを引き上げるために、主イエスが突然雲に乗ってあなたがたのもとに降りて来る日をひたすら楽しみにしながら、調子に乗ったり、空想にふけて自分を見失ったりしてはいけない。現実的な事柄を考えているほうがよい。

あなたは研究のため、あるいは受け入れるつもりでこの本を開いたのかもしれない。あなたの態度がどうであれ、わたしはあなたがこの本を最後まで読み、簡単に脇に押しやってしまわないことを希望する。おそらく、これらの言葉を読んだ後、あなたの態度は変わるだろうが、それはあなたの動機と理解度次第である。しかし、あなたが知っておくべきことが一つある。神の言葉は人の言葉として語ることはできないし、ましてや人の言葉は神の言葉としては語ることはできない。神に使われる人間は受肉した神ではなく、受肉した神は神に使われる人間ではない。ここに実質的な違いがある。これらの

言葉を読んだ後、あなたはこれらが神の言葉であることを受け入れず、ただ啓示を受けた人の言葉として受け入れるかもしれない。そうだとすれば、あなたは無知ゆえに目が見えなくなっているのだ。どうして神の言葉が啓示を受けた人間の言葉と同じでありえようか。人の姿になった神の言葉は新しい時代を開始し、人類全体を導き、奥義を明らかにし、人に新しい時代に向かう方向を示す。人が獲得する啓示は単純な実践、あるいは認識にすぎず、人類全体を新しい時代に導くことはできないし、神自身の奥義を明らかにすることもできない。神は結局神であり、人は人である。神は神の本質を持っており、人は人の本質を持っている。神によって語られた言葉を単に聖霊による啓示と見なし、使徒や預言者の言葉を神自らが語る言葉として受け取るならば、それは間違っている。とにかく、あなたは決して正しいものを誤りとするべきではないし、高いものを低いものとして話すべきではないし、深いものを浅いものとして話すべきではない。とにかく、あなたは真理であると知っていることを決して故意に論駁するべきではない。神の存在を信じる人はすべてこの問題を正しい観点から考えるべきであり、神の新しい働きと言葉を神の創造物として受け入れるべきである——さもないと神に排除されるであろう。

ヤーウェの働きの後、人のあいだで神の働きを行うためにイエスは受肉した。イエスの働きは単独で実行されたのではなく、ヤーウェの働きの上に築かれた。それは律法の時代を神が終わらせた後の新しい時代のための働きであった。同様に、イエスの働きが終わった後、神は次の時代のためにさらに神の働きを続行した。神による経営（救い）全体はいつも前進しているからである。古い時代が過ぎると、新しい時代に置き換えられ、古い働きが完了すると、新しい働きが神の経営（救い）を続行する。今回の受肉はイエスの働きの完了に続く神の二回目の受肉である。もちろん、この受肉は単独で起こるのではなく、律法の時代と恵みの時代の後の第三段階の働きである。神の働きの新しい段階はそれぞれいつも新しい始まりと新しい時代をもたらす。そこで神の性質、神の働き方、神の働く場所、神の名前にもそれに付随した変化がある。したがって、人にとっては、新しい時代の神の働きを受け入れるのが難しいのは無理もない。しかし、いかに人が反対しようと、それには関係なく、神はいつも自分の働きを行っており、いつも人類全体を前方に導いている。イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れる

ことができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了しただけで、人の贖罪のためのささげものとなり、人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかった。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

人々が恵みの時代に留まっていれば、彼らは墮落した性質を決して免れないし、ましてや神の本来の性質を知ることはない。人々がいつも豊かな恵みの中に生きていても、神を知らず、神を満足させることができるようになる生き方をしていなければ、いくら神を信じていても決して本当に神を得ることはないだろう。それはなんと哀れな形の信仰ではないか。あなたがこの本を読み終えた時、神の国の時代における受肉した神の働きの各段階を経験した時、あなたは長年の希望がついに実現されたことを感じるだろう。あなたはそのとき初めて本当に神を直接見たとを感じるだろう。初めて神の顔をじっと見つめ、神自らの発言を聞き、神の働きの英知を正しく理解し、神がなんと現実的で全能かを本当に感じるだろう。あなたは過去の人々が決して目にしたり、所有したりしたことのない多くの事柄を獲得したことを感じるだろう。この時、あなたは神を信じるとは何か、神の心に従うとは何かをはっきりと知るだろう。もちろん、あなたが過去の考えに執着し、神の二度目の受肉の事実を否定、あるいは拒絶するならば、あなたがたは手ぶらなままでとどまり、何も獲得せず、ついには神に反抗するという罪を犯すだろう。真理に従い、神の働きに服従する人々は再び受肉した神——全能神の名の下に集うだろう。彼らは神自らの導きを受け入れ、さらに多くの高い真理を手に入れ、本当の人生を受けるだろう。彼らは過去の人々が決して目にすることのなかったビジョンを見るだろう。「そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽

のようであった。」（ヨハネの黙示録1:12～16）このビジョンは神の全性質の現れであり、このような神の全性質の現れは、今回人の姿となった神の働きの現れでもある。刑罰と裁きを連発する中で、人の子は言葉を話すことによって本来の性質を表現し、その刑罰と裁きを受け入れるすべての人々が人の子の本当の顔、ヨハネが見た人の子の顔の忠実な描写である顔を見ることを認める。（もちろん、このすべては神の国の時代の神の働きを受け入れない人々には見えないだろう。）神の本当の顔は人間の言葉では十分明確に表現することはできないので、神はその本来の性質の表現を用いて人に本当の顔を示す。すなわち、人の子の本来の性質を経験した人々はすべて、人の子の本当の顔を見たのである。神はあまりに偉大なので、人の言葉で十分明確に表現することができないからである。いったん神の国の時代における神の働きの各段階を経験したら、ヨハネが燭台の明かりの中で人の子について語った言葉の意味を人は知るだろう。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。」その時、あなたは、これほどの多くの言葉を語ったこの普通の人間が本当は神の再来であることをまったく疑う余地なく知るだろう。そしてあなたは自分がいかに祝福されているかを本当に感じ、自分がもっとも幸運であると感じるであろう。あなたはこの恩恵を受け入れたくないだろうか。

この本の内容は『言葉は肉において現れる』から選定したもので、もちろん、諸教会に向けた聖霊の言葉でもある。これらの言葉はまたヨハネの黙示録の中の「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」という言葉の成就でもある。その中には預言、奥義の啓示、いのちの道など数種類の発言といった豊かな内容が含まれている。神の国の未来の預言、神の経営（救いの）計画に関する奥義の啓示、人の本質の詳細な分析、忠告の言葉や警告、厳格な裁き、心からの慰めの言葉、人生についての話、入ることについての話などがある。要するに、神の持っているもの、神であるもの、神の性質などすべてが神の働きと言葉の中に表されている。もちろん、神の今回の受肉において、神の働きは主に刑罰と裁きを通して神の性質を表すことである。これを基礎として、神は人により多くの真理をもたらし、より多くの実践方法を示し、こうして人を征服し、墮落した性質から人を救うという神の目的を達成する。これが神の国の時代における神の働きの背後にあるものである。あなたは新しい時代に入りたいのか。あなたは自分の墮落した性質を排除したいのか。あなたは高い真理を獲得したいのか。あなたは人の

子の本当の顔を見たいのか。あなたは価値のある生涯を送りたいのか。あなたは神によって完全にされたいのか。そうならば、あなたはどのようにイエスの再来を歓迎するつもりなのか。

脚注

a. 原文では「～かどうかに関しては」と書かれている。

神の現れによる新時代の到来

六千年間にわたる神の経営（救いの）計画が終わりを告げようとしている。そして、神の国の門は神の現れを求める人々にすでに開かれている。兄弟姉妹たちよ、何を待っているのか。あなたがたが探し求めているものは何か。神の現れを待っているのか。神の足跡を探し求めているのか。ああ、神の現れがどれほど慕わしいものか。だが、神の足跡を見出すことがいかに難しいことか。今のような時代に、このような世界で、神の現れる日をこの目で見えるために何をしなくてはならないのだろうか。神の足跡をたどるには何をしなければならないのだろうか。神の現れを求める人であれば、だれでもそのような疑問を持つものである。あなたがたもそのような疑問を抱いたのは一度や二度ではないと思うが、その結果はどうだったか。神はどこに現れるのか。神の足跡はどこで見つかるのか。そうした疑問に対する答えは見つかっただろうか。そうした問いに対して、次のように答える人が多い。「神は自分に聞き従う人々に現れ、神の足跡は私たちのただ中にある。そんなに難しいことではない。」決まり切った答えであればだれにでも言える。だがあなたがたは、神の現れとは何かを、神の足跡とは何かを本当に理解しているのか。神の現れとは、神が仕事を行うためにみずから地上に来ることである。神としての身分と性質は保ったままで、また神自身の方法で、神は時代を始め、時代を終わらせるために人間世界に下ってきた。このような神の現れは儀式のようなものではない。それは何かのしるしでも、絵画でも、奇跡でも、大いなる幻でもない。ましてや宗教的な儀式でもない。それは、実際に手で触れ、見ることのできる動かしがたい事実である。このような神の現れは何かの手順を踏むためのものでも、短期間の仕事のためのものでもない。それは、神の経営（救いの）計画の中にある一つの段階を実現するためのものである。神の現れは必ず何かの意味があり、必ず神の経営（救いの）計画と関係している。ここで言う現れは、神が人を導き、先導し、啓くときの現れとは全く異なる。神は自身を現す度に、神の大いなる業の一つの段階を実行に移すのである。この働き

は他のどの時代の働きとも異なる。それは人には想像もできないもので、人が経験したことがないものである。その働きは、新しい時代を到来させ、古い時代を完結させるもので、新しい、一歩進んだ、人類を救う働きである。さらには、人類を新しい時代に導き入れる働きである。神の現れが持つ意義はそこにある。

神の現れについて理解するとともに、神の足跡をどのように探し求めるべきなのだろうか。この問いに答えるのはさほど難しくはない。神の現れがあるところで神の足跡も見つかるからだ。そう言うとは単純に聞こえるが、実際に見つけるのは単純なことではない。多くの人々は、神がどこで自分を現すか、ましてや神がどこで自分を現したいか、現すべきかを知らないからである。ある人々は、聖霊の働きがあるところには神が現れると何の考えもなく思っている。または、霊的な指導者がいるところに神が現れると思っている。あるいは、人々の知名度が高いところに神が現れると思っている。そうした考えが正しいかどうかは、今のところは深く考えないでおこう。このような問題を解説するには、まず目的をはっきりさせる必要がある。私たちが探し求めているのは神の足跡である。霊的な指導者を求めているのでもなく、ましてや有名人でもない。私たちがたどっているのは神の足跡である。神の足跡を探し求めている私たちは、神の心と、神の言葉、神の発する声を探り求める必要がある。神の新しい言葉があるところには神の声があり、神の足跡があるところには神の業があるからである。神による表現があるところには神の現れがあり、神の現れがあるところには真理と、道と、いのちがある。神の足跡を探し求める中で、あなたがたは「神は真理であり、道であり、いのちなのです」という言葉を無視していた。そのため、真理を受け取っても神の足跡を見出したとは思わない人が多いのである。ましてや、神の現れを認めることなどない。なんと大きな過ちだろうか。神の現れは人が思うようなかたちで来ることはない。ましてや神が人の言うままに現れるようなことはない。神は、自分の判断で動き、自分の計画に従って働く。さらに、神には神自身の目的と方法がある。神は自分のしよとすることを人に相談したり話し合ったりする必要はない。ましてや一人一人に自分がしよとすることを知らせるようなことはない。これが神の性質であり、それはすべての人が認めるべきことである。もし神の現れをその目で見たいと思うなら、神の足跡をたどりたいと願うなら、自分自身の観念というものを超越しなければならない。神にこれをせよあれをせよと命じることは許されない。ましてや神を自分の枠の中に閉じ込めたり、自分の観念の中に押し込めたりすべきでない。そうではなく、どのように神の足跡をたどるべきか、どのように神の現れを受け止めるべきか、どのように神の新しい働きに従うべきかと問う

べきなのである。これが人のすべきことである。人は真理ではなく、真理を持っているわけでもない。だから人は探し求め、受け入れ、従うべきである。

アメリカ人でも、イギリス人でも、どこの国の人でも、自分という枠を乗り越え、自分という存在を超越し、神の創造物として神の働きを見なくてはならない。そうすれば、神の足跡を枠にはめることはないだろう。それは、特定の国や民族に神が現れることはないだろうと考えている人が多いからである。ああ、神の働きの意義はなんと深く、神の現れはなんと重要か。それは人の観念や考えで測ることなどできるのだろうか。そのため、神の現れを探し求める際には、みずからの国籍や民族性という枠を突き抜けるべきである。そうすれば、自分自身の観念に制約されることなく、神の現れを喜び迎えることができる。そうでなければ、暗闇の中にいつまでもとどまり、神から認められることもない。

神は全人類の神である。神が自分を一つの国や民族の所有物とすることはしない。神が自分の計画にある働きを、形式や国、民族といった制限を受けることなく行う。これまであなたはこのような形式を考えたこともなかったかもしれないし、そのような形式があることを否定するかもしれない。神が現れる国や民族は差別されている最貧国かもしれない。しかし、神には神の知恵がある。神は、自分の力によって、また自分の真理と性質を通して、自分と心が一つになっている人々をすでに得ている。それは神が求めていた人々で、神に征服され、苦しい試練とあらゆる迫害に耐え、最後の最後まで神に従うことのできる人々である。神が形式や国の制約を受けずに現れる目的は、神が自分の計画どおりに働きを完成できるようにするためにである。たとえば、神がユダヤの地で肉となったとき、その目的は十字架の働きを完成させ、人類をあがなうためだった。しかし、ユダヤ人は神にそのようなことができるわけがないと考えた。神が肉となって、主イエスの姿をとって現れることなどありえないと考えたのである。この「ありえない」という思いが、ユダヤ人が神を罪に定め、神に敵対してしまう原因となった。そして、最終的にはイスラエルの破滅へとつながった。今日も、多くの人が同じような間違いを犯している。神は今すぐにでも現れるかもしれないと当てもなく言いながらも、神の現れを罪に定める。その「ありえない」という思いが再び、神の現れを自分たちの想像できる範囲に押し込めてしまっているのである。わたしは、神の言葉に出会って、それを一笑に付した人々を数多く見てきた。このような態度は、神を罪に定め、冒涇したユダヤ人と何ら変わりがないではないか。真理と真剣に向き合うことがなく、ましてや真理を慕い求めることもしない。ただやみくもに研究し、気楽に待っているだけである。

そのように研究し、待っていることで得られるものは何なのか。あなたは神から個人的な導きを受け取ることができるか。神が語った言葉を聞き分けることができないなら、神の現れをどうやってその目で見ることができるのか。神が現れるところでは、真理の現れと神の声がある。真理を受け取ることができる人だけが神の声を聞くことができる。そしてそういう人だけが神の現れを見ることができる。まずは、自分の観念を脇に置きなさい。立ち止まって、次の言葉をよく読みなさい。あなたが真理を慕い求めるなら、神はあなたの知性を明るくし、神の心と言葉を理解できるようにしてくれる。「ありえない」という思いを脇に置いておきなさい。人が不可能だと思えば思うほど、実際に可能になる。神の知恵は天より高く、神の思いは人の思いより高く、神の働きは人の思いや観念をはるかに超越するものだからである。不可能であればあるほど、そこには探し求めるべき真理がある。人の観念と想像を超えるものであればあるほど、そこには神の心が詰まっている。どこで自分を現そうとも、神は神だからである。神の本質が現れる場所や方法で変わることはない。神の性質は、神の足跡がある場所によらず、いつも同じである。神の足跡がどこにあらうとも、神は全人類の神である。たとえば、主イエスはイスラエル人の神というだけでなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の神でもある。さらに言えば、全宇宙で唯一無二の神である。だから、神の語る言葉から神の心を探し求め、神の現れを発見し、神の足跡に従おう。神は真理であり、道であり、いのちである。神の言葉とその現れは共存する。また、神の性質と足跡はいつでも人類に対して開いている。兄弟姉妹たちよ。ここに記した言葉に神の現れを見てとってほしい。そして、新しい時代に向かって神の足跡をたどってゆき、神の現れを待ち望む人々に用意された新天新地にたどりついてほしいのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の現れによる新時代の到来」より

神の裁きと刑罰に神の出現を見る

私たちは主イエス・キリストに従う他の何億人もの人々と同じように、聖書の律法と戒めに従い、主イエス・キリストの豊かな恵みを受け、主イエス・キリストの名の下に集まり、祈り、賛美し、仕えている。そしてそのすべてを、主の配慮と加護のもとに行っている。私たちは時として弱くなったり強くなったりするが、自分たちの行動はすべて主の教えに従うものだと思っている。そのため言うまでもなく、自分たちが天の父の旨を行う道にいることも信じている。私たちは主イエスの再来を、その輝かしい降臨を待ち望んでおり、また地上における生活の終わりと、神の国の出現、そしてヨハネの黙

示録に預言されたことすべての実現を待ち望んでいる。主が到来して災害をもたらし、善人をねぎらい、悪人を懲らしめ、そして主に従いその再臨を歓迎するすべての人々を天に引き上げ主にまみえさせる。このことを考えるたび、私たちは感動し、感謝の念に包まれずにはいられない。私たちはこの世の終わりに生まれ、幸運にも主の到来を目の当たりにすることができるのだ、と。私たちは迫害の苦難を受けているが、その見返りに「永遠の重い栄光をあふれるばかりに」受けたのだ。何と素晴らしい祝福だろうか。こうしたすべての切なる願いと主から授けられた恵みによって、私たちは油断なく祈るようになり、より熱心に集っている。おそらく来年、明日、さらには誰も予想できないほど早く、主は突然やって来て、主をひたすら待ち望んできた人々のもとに現れることだろう。主の出現を目の当たりにする最初の集団となるために、天に引き上げられる人々の一員となるために、みな遅れを取らないよう、我先にと争っている。私たちはその日のために、どんな犠牲もいとわず、すべてを捧げてきた。仕事をあきらめた者や家族を捨てた者もいるし、結婚を放棄した者、蓄えをすべて寄付した者もいる。何という無私無欲の献身であろう。このような誠意と忠誠心は、過去の聖徒たちさえも超えるに違いない。主は自らが好む者に恵みを与え、自らが好む者に哀れみをかけるので、私たちの献身や支出はもうずっと前から神の目に留まっているものと私たちは信じている。そして私たちの心を込めた祈りも神の耳に届いているし、主が私たちの献身に報いてくださるものと信じている。しかも神はこの世を造る前からすでに私たちを慈しんでおり、誰も私たちに与えられた神の祝福や約束を取り上げることはできない。私たちはみな未来のための計画を立てており、当然のこととして献身や支出を、天に引き上げられ主に会うための逆手、または見返りの元手としている。さらには何のためらいもなく、私たちが将来玉座に就き、すべての国とすべての民族を支配する、あるいは王として治めるものと考えている。私たちはこれらのことをすべて、当然の、当たり前期待されるものと捉えているのである。

私たちは主イエスに逆らうすべての人々を軽蔑しており、彼らは皆最終的に滅ぼされることになる。一体誰が彼らに、主イエスが救い主であることを信じるなど言ったのか。もちろん私たちは主イエスに習って、世の人々に対し思いやりを持つときもある。彼らは理解していないのであり、私たちは寛容になって彼らを許すべきなのだ。私たちの行いはすべて聖書の言葉に従っている。聖書と一致しないものはすべて異教であり、異端だからである。このような信念は私たち一人一人の心の中に深く根付いている。私たちの主は聖書の中にあり、聖書から離れなければ、主からも離れることはない。この原

則に忠実であれば、私たちは救われるのだ。私たちは互いに励まし合い支え合っており、集まる時はいつでも、私たちの言動のすべてが主の旨に適い主に受け入れてもらえることを願っている。過酷な環境の中でも、私たちの心は喜びに満ちている。これほど簡単に手に届く祝福のことを思えば、棚上げにできないものなどあるだろうか。手放しがたいものなどあるだろうか。これらはすべて言うまでもないことであり、すべては神の目に注意深く見守られている。掃きだめから引き上げられたこの一握りの貧しい者である私たちは、主イエスのすべての信奉者たちと同様に、天に引き上げられること、祝福を受けること、そしてすべての国を治めることを夢見ている。私たちの墮落は神の目の前にさらけ出されており、私たちの欲望と貪欲さは神の目から見れば罪に定められている。それでもこうしたことはみなごく普通に、ごく論理的に起こることなので、私たちの誰も自分の切望が正しいかどうかなどと疑問を持たないし、ましてや誰一人自分の固守しているすべてのことの的確さを疑いもしない。誰が神の旨を知ることができるのだろうか。人が歩いているのは一体どんな道なのか、私たちは探すことも調べることも知らず、ましてや尋ねようとする関心などない。なぜなら私たちが気にしているのは、自分たちが天に引き上げられるかどうか、祝福が受けられるかどうか、天の国には自分の居場所があるかどうか、いのちの川の水といのちの木の果実の分け前にあずかれるかどうかということだけだからである。私たちはこれらを得るために主を信じ、主に従っているのではないのか。私たちの罪は赦され、わたしたちは悔い改めて、苦き杯から飲み、十字架を背負った。私たちの払った代価を主が受け入れないなどと誰が言えるだろう。私たちが油を十分準備していなかったなどと誰が言えるだろう。私たちはあの愚かな乙女にも、捨てられた者の一人にもなりたくない。しかも私たちはしばしば神に祈り、偽キリストに騙されないようにと主に求めている。それは、聖書に次のようにあるからだ。「そのとき、だれかがあなたがたに『見よ、ここにキリストがいる』、また、『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう。」（マタイによる福音書24:23-24）私たちは皆こうした聖書の言葉を記憶に刻み、すべて諳んじていて、それらを貴重な宝であり、いのちであり、救われ天上に引き上げられるかどうかを決める信用状だと考えているのだ。

何千年もの間、生者はその願望や夢を携えて亡くなっていったが、その人たちが天の国へ行ったのかどうかについて、誰一人本当に知る者はない。死者は戻って来るが、過去に起こったことはすべて忘れてしまい、依然として先人の教えや歩んだ道に従ってい

る。このためどれほど月日が経とうとも、主イエスが、神が、私たちのすることをすべて本当に受け入れてくれるかどうかは誰にもわからない。私たちはただ一つの結果を待ち望み、これから起こるすべてのことを想像するだけだ。しかし神は沈黙を守り通しており、人間の前には一切姿を現さず、言葉を発することもない。だから私たちは聖書に従い印に基づいて、自らの意思で神の旨と性質を判断している。私たちは今では神の沈黙に慣れてしまい、自分たちの行動が正しいか間違っているかの判断を自らの見方で測ることに慣れてしまった。そして神の私たちに対する要求ではなく、自分の知識、観念、道徳的倫理に依存することに慣れてしまった。神の恵みを享受することに慣れてしまい、神の助けが必要な時にいつでも神が与えてくれることに慣れてしまった。さらに神に向かって両手を伸ばしてあらゆるものを求め、神にあれこれ指図することに慣れてしまい、ただ規則を守るだけで、聖霊の導きに注意を払わないことにも慣れてしまった。そしてそれ以上に、自分自身が自分の主人である日々慣れてしまった。私たちはこのようにして、一度も直接会ったことがない神を信じている。神の性質とはどんなものか、神が所有するものと神そのものとはどんなものか、神はどのような姿をしているのか、神が現れたとき私たちはそれが神だとわかるだろうか、などという疑問はどれも重要ではない。重要なのは、神がわたしたちの心の中にいるということと、私たちが皆神を待ち望んでいるということであり、私たちは神の姿をこうだあだだと想像できるだけで十分なのだ。私たちは自分の信仰を評価し、自分の霊性を大切にしている。私たちはすべてを不潔なものとし、すべてのものを踏みつけていく。私たちは栄光なる主を信じる者なので、その旅路がいかに長く困難であろうとも、いかなる苦難と危険に晒されようとも、私たちが主に従って行くとき、私たちの歩みを止めることができるものは何もない。「いのちの水の川は、水晶のように輝き、神と小羊の御座から出ていた。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。」（ヨハネの黙示録22:1-5）この言葉を唱えるたびに、私たちの胸は無限の喜びと満足感に満たされ、目からは涙が溢れ出る。主が私たちを選ばれたことに感謝し、主の恵みに感謝する。私たちは神からこの世で百倍もの報いを受け、来世では永遠の命を与えられている。もし神に今死になさいと言われれば、私たちは一言の文句も言わずそうするだろう。ああ主よ、どうぞ早く来てください。私たちがどれほどあなたを待ち焦がれており、あなたのためにすべてを捨てた

かをご覧になって、もう一分も、一秒も遅らせないでください。

神は沈黙しており、私たちの前に姿を現したことはないが、神の働きは止むことがない。神は全世界を見渡し、あらゆる物事を支配しており、人の言葉と行動の一切をつぶさに見ている。神はその経営を計画に従ってゆっくりと慎重に行っており、それは静かに、特に劇的な効果も見せず進行しているが、神の歩みは一步一步進んでますます人類に近付き、神の裁きの座は電光石火の速さで宇宙に設けられ、その直後に神の玉座が私たちのもとに降りて来る。それは何と神々しい光景であり、威厳と神聖に満ちた情景だろうか。鳩のように、うなり声をあげるライオンのように、聖霊が私たちのもとにやって来る。神は知恵であり、義であり、威厳である。神は権威を持ち、愛と哀れみに満ちて、そっと私たちの間にやって来る。誰も神の到来に気づかず、誰もその到来を歓迎せず、その上誰も神がこれからしようとしていることを知らない。人の生活は相変わらずで、心にも変化は無く、毎日がいつも通りに過ぎていく。神は私たちの間に、普通の人のように、信仰者の中で最も取るに足らない者として、平凡な一信者として生きている。彼には独自の探求や目標があり、そのうえ神は普通の人にはない神性を備えている。誰もその神性の存在に気づいておらず、誰も彼と人の本質の違いを見抜いていない。彼は私たちの目には取るに足らない一人の信者にしか見えないので、私たちはのびのびと恐れることもなく彼と共に暮らしている。彼は私たちの一挙一動を観察しており、私たちの考えや思いつきはすべて彼の前に晒されている。誰一人として彼の存在に関心を持たないし、その役割を想像もせず、さらに誰一人その正体をかけらも疑っていない。私たちはただ自分たちの活動を継続している。あたかも彼は私たちと何の関係もないとでも言うように。

聖霊がたまたまこの人を「通して」一遍の言葉を発することもあり、それは非常に意外なことのよう感じられるが、私たちはそれを神の発した声だと認め、すぐに神から出たものとして受け入れる。なぜならその言葉を誰が発しようと、それが聖霊から出たものである限り、私たちはそれを受け入れるべきであり、否定することはできないからだ。次の発言は私を通して出されるかもしれないし、あなたや他の誰かを通して出されるかもしれない。それが誰かにかかわらず、すべては神の恵みなのだ。しかしそれが誰であろうと、その人を崇拜してはならない。何があろうとその人が神であることはありえないし、そのようなごく普通の人を選んで私たちの神とすることは決してできないからだ。私たちの神は非常に偉大でかつ尊い。どうしてそのような取るに足らない人が、神に代わることなどできようか。さら私たちは神が天の国へと連れ戻しに来てくれるの

を待っているのに、そのような重大で困難な仕事を、そんな取るに足らない人がどうして行えようか。主が再臨するとすれば、白い雲の上に乗って現れるはずなのだから、すべての人がそうとわかるだろう。それは何と荘厳なことだろうか。どうして神が平凡な人々の中にそっと隠れていることなどできるだろうか。

しかしそれでも、人々の間に紛れているこの平凡な人こそが、私たちを救うための新しい働きを行っているのだ。この人は何も説明することはないし、来た理由を話すこともなく、ただ意図した働きを整然と、自分の計画に沿って行うだけだ。彼はますます頻繁に声を発し、発言するようになる。それには慰め、励まし、忠告、警告から非難や懲らしめまで、そして穏やかで優しい口調から荒々しく荘厳な言葉までがあり、そのすべてが人に哀れみを与えるとともに戦慄を植え付ける。彼が言うことはすべて、私たちの奥深くに隠された秘密に命中し、彼の言葉は私たちの心を突き刺し、霊を突き刺し、私たちを耐え難いほど恥じ入らせ、どこに隠れてよいかもわからない気持ちにさせる。そして私たちは、この人物の心の中にいる神は本当に私たちを愛しているのか、一体何をしようとしているのか、と疑い始める。もしかすると、このような痛みには耐えなければ天国に引き上げてもらえないのだろうか。これからの行く先や未来の運命について、私たちは頭の中で思案する。しかしそれでもまだ、誰一人として神がすでに肉体を得て私たちの間で働きを行っているとは考えない。神はこれほど長い間私たちと共にあり、これほど多くの言葉を私たちに直接語ってきたが、私たちはいまだにそのような平凡な人を、自分たちの未来の神だとは認めたがらないし、ましてその取るに足らない人に自分たちの未来と運命の支配を任せたりはしたがらないのだ。私たちは彼から絶えることのないいのちの水を享受し、彼を通して神と向き合いながら生活している。しかし私たちは天におられる主イエスの恵みには感謝するが、神性を備えたこの普通の人の気持ちには一切注意を払ってこなかった。それでも彼は従来どおり、肉体の中に隠れて謙虚に仕事を続け、その心の奥に秘めた思いを表し、人類が彼を拒んでも気にもならないかのように、また人の稚拙さも無知も永久に赦すかのように、自らに対する人々の非礼をひたすら黙認しているのだ。

私たちが知らないうちに、この取るに足らない人は私たちを神の働きの一つ一つの段階へと導き入れてきた。私たちは数え切れないほどの試練に耐え、数々の懲らしめを受け、死をもって試される。そして神の義なる威厳に満ちた性質を知り、神の愛と哀れみも享受し、神の偉大な力と知恵を感じられるようになり、神の愛らしさを目のあたりにし、そして人類を救いたいという神の強い願いを目にする。この平凡な人の言葉を通し

て、私たちは神の性質と本質を知り、神の旨を理解し、人の本性と本質をも理解し、そして救いへの道と完全にされるための方法を知るようになる。その言葉は私たちを「死なせ」、そして「生き返らせる」。その言葉は安らぎを与えるが、同時に罪悪感と恩義の念で私たちを苦しめもする。その言葉は私たちに喜びと平安をもたらすが、同時に無限の痛みも与える。私たちは時にその手によって屠られる子羊のようであり、時に最愛のもののようにその慈愛を享受する。また時にはその人の敵のようでもあり、そのまなざしのもとでその怒りによって焼かれ灰にされる。わたしたちは彼に救われる人類であり、その目から見れば蛆であり、彼が日夜見つけ出そうと躍起になっている迷える子羊である。彼は私たちに対して慈悲深くもあれば、私たちを軽蔑もし、立ち上がらせ、慰め励まし、導き啓き、懲らしめ鍛え、そして呪いさえする。彼は昼も夜も私たちのことを心配し続け、昼も夜も守り気遣い、決して私たちの傍を離れず、私たちのためにその心血を注ぎ、いかなる代償も払う。この小さく平凡な肉体から出る言葉の中に、私たちは神のすべてを享受し、神が私たちに授けた終着点を見た。それにもかかわらず、私たちの心の中ではいまだ虚栄心のために問題が起こっており、このような人を積極的に神として受け入れることができずにいる。この人は私たちに非常に多くのマナや、多くの喜びを与えたが、それでも私たちの心の内にある主の地位を奪うことはできない。私たちはこの人の特別な身分と地位を嫌々ながらに尊重しているのだ。彼が口を開いて、私たちに自分が神であることを認めるよう求めない限り、私たちは決してこの人を、まもなく現れる、そして同時にすでに私たちのもとで長く働いてきた神として、あえて認めようとはしないだろう。

神は発話を続けており、さまざまな方法や観点をを用いて私たちにすべきことを諭しつつ、同時にその心を言葉に表している。その言葉は生命力を備えており、私たちが歩むべき道を示し、真理とは何かを理解させてくれる。私たちはその言葉に引き付けられるようになり、その口調や話し方に注目し始め、そして無意識のうちに、この目立たない人の心の内に関心を持ち始める。彼は私たちのために労力を惜しまず、私たちのために睡眠も食欲もなくし、涙を流し溜息をつき、病気に苦しみ、私たちの終着点と救いのために屈辱を耐え忍び、私たちが鈍感で反抗的なために心から涙と血を流している。このような存在とその持てるものは、普通の人を超えているし、墮落した人間が誰一人として所有も到達もできないものだ。彼には普通の人にはない寛容と忍耐力が備わっており、その愛はどんな被造物にも授けられていないものなのだ。私たちの考えをすべて知り、私たちの本性や本質をこれほど明確かつ完全に把握し、人類の反抗的で墮落した性質を

裁き、天国の神の代理として私たちに語りかけ、このように人の間で働くことができる人は、この人をおいて他にいない。彼以外に神の権威、英知、そして威厳を授けられている者はいない。この人からは神の性質、そして神が所有するものと神そのものが、あますところなく発せられている。この人以外に、私たちに道を示し、光をもたらせる者はいない。彼以外に、神が天地創造から今日まで明かしてこなかった奥義を明らかにできる者はいない。彼以外に、私たちがサタンの束縛や私たち自身の墮落した性質から救える者はいない。彼は神を体現しており、神の心の奥底にあるものと訓戒、そして全人類に対する神の裁きの言葉を表現している。彼は新しい時代、新しい紀元を開き、新たな天地と新しい働きを到来させた。そして彼は私たちに希望をもたらし、漠然としていた私たちの生活を終わらせ、私たちの全存在をもって救済の道を完全にはっきりと目撃できるようにしてくれたのである。彼はわたしたちの存在そのものを征服し、わたしたちの心を得た。その瞬間から私たちの心は覚醒しており、霊が生き返ったように思われる。この平凡で取るに足らない人物、私たちの間で生きながらも長年私たちに拒否され続けてきたこの人こそ、私たちが寝ても覚めても絶えず思い続け、日夜待ち望んできた主イエスではないだろうか。そう、彼なのだ。実際そうなのだ。この人こそが私たちの神なのだ。彼こそが真理であり、道であり、いのちである。彼は私たちがもう一度生きて光を見ることができるようにし、私たちの心のさまよいを止めてくれたのだ。私たちは神の家に戻り、神の玉座の前に戻り、神と顔を合わせ、神の顔を目撃し、行く手にある道をこの目で見た。今、私たちの心は完全に彼に征服され、私たちはもはや彼が誰であるか疑わず、もうその働きや言葉に反抗することもなく、ただ彼の前にひれ伏す。私たちの望みは、ただ残りの人生をずっと神の足跡に従って生きること、神に完全にされること、そして神の恵みと私たちへの愛に報い、神の指揮と采配に従い、神の働きに協力し、できる限りのことをして神に委ねられた物事を全うすることだけである。

神に征服されることは、まるで武術の試合のようだ。

神の言葉は一つ一つが私たちの急所を突き、私たちは傷ついて恐れに満たされる。彼は私たちの観念、想像、そして墮落した性質を明らかにする。すべての言動から思いや考えの一つ一つに至るまで、私たちの本性や本質は神の言葉によって暴かれ、私たちは恥じ入って隠れる場所もなく恐怖に震える。彼は私たちの行動、目的や意図、そして自分でも知らなかった墮落した性質まで、すべてを一つ一つ私たちに示すので、私たちは自分の惨めな不完全さをすべて見せつけられ、さらには完全に打ち負かされた気持ちになる。彼は私たちが反抗したことを裁き、神を冒瀆し糾弾したことで私たちを罰し、自

分たちが神の目には何の贖うべき特徴もなく、生きたサタンなのだと思わせる。希望は粉々にされ、もはや神に理不尽な要求をしたり希望を持ったりすることもなくなり、夢さえも一夜にして消え去る。これは誰一人として想像できず、受け入れることもできない事実である。一瞬のうちに私たちは内面の平静を失い、この先どうやって進んでいけばいいのか、どうやって信仰を保っていけばいいのかわらなくなる。まるで自分たちの信仰が振り出しに戻ったような、そして主イエスに会ったことも、主を知ったこともないような気持ちになる。目の前のすべてが私たちを困惑させ、ためらいに揺れ動かせる。私たちは狼狽し、落胆し、そして心の奥深くには抑えきれない憤りと屈辱感がくすぶる。そしてうっぷんを晴らそう、出口を探そうと試み、さらには救い主イエスを待ち続けて、イエスに胸中を打ち明けようとさえ考える。表面上は平静で、高慢でも謙虚でもないように見えるときもあるが、心の中ではこれまでにない喪失感に苛まれている。ときには表面上いつになく冷静に見えることもあるかもしれないが、内面は荒れた海原のような苦悶に揺れている。彼の裁きと刑罰は私たちの希望と夢のすべてを奪い去ったため、贅沢な望みはみな葬られ、私たちはあの人々が救い主で自分たちを救えるのだと信じようとはしなくなる。彼の裁きと刑罰は私たちと神との間に亀裂を作り、それがあまりに深いため、誰も渡ろうとさえしない。彼の裁きと刑罰によって、私たちは人生で初めてこれほどの挫折と屈辱を感じたのである。私たちは彼の裁きと刑罰によって、神の名誉と人の侮辱に対する神の不寛容とを本当に認識した。それと比べると、私たちはなんと卑しく汚れていることか。彼の裁きと刑罰によって私たちは初めて、いかに自分たちが傲慢で尊大か、いかに人間が決して神と同等でなく、神と肩を並べることは一切ないかを悟らされた。神の裁きと刑罰によって、私たちはもうこのような墮落した性質の中で生きをやめたい、この本性と本質からできるだけ早く抜け出したい、神にとって卑劣で不快なものでなくなりたいと願うようになった。神の裁きと刑罰によって、私たちは神の言葉に喜んで従うようになり、もはや神の指揮と采配に反抗することはなくなった。彼の裁きと刑罰によって、私たちは生き残ることを再び切望するようになり、喜んで彼を救い主として受け入れるようになった。……私たちは征服の働きから抜け出し、地獄から、死の影の谷から抜け出した。……全能神は私たちを、この一群の人々を得たのだ。神はサタンに打ち勝ち、数多くの敵を打ち倒したのだ。

私たちはごく普通の、墮落したサタンのような性質を持つ人々の集団であり、有史以前から神によって運命の定められた、神が掃きだめからすくい上げた貧しい者たちである。私たちはかつて神を拒絶し糾弾したが、今は神に征服されている。私たちは神から

いのちを受け、永遠のいのちの道を授かった。地球上のどこにいても、どのような迫害や試練を受けても、全能神の救いから離れることはできない。なぜなら神こそ私たちの創造主であり、唯一の贖い主であるからだ。

神の愛は泉の水のように溢れ出て、あなたや私や他の人々に、そして真理を求め神の出現を待ち望むすべての人々に与えられる。

終わりのない昼夜の入れ替わりの中で月がいつも太陽を追っているように、神の働きは決して止むことがなく、あなたや私や他の人々に、そして神の足跡に従い神の裁きと刑罰を受け入れるすべての人々に行われる。

2010年3月23日

目録

第1章 全能神がすべてを創造した唯一の真の神である

1. 全能神はすべてのものを支配する唯一の真の神である
2. 全能神は再臨した主イエスである
3. 救いは全能神への信仰を通してのみ達成される

第2章 神の名の真理

1. なぜ神には名前があるのか、ひとつの名前は神の全体を表すことができるのか
2. なぜ神は異なる時代に異なる名前と呼ばれるのか

第3章 神の働きの三段階についての真理

1. 人を経営する働きとは何か
2. 神の働きの三段階の目的
3. 神の働きの三段階のそれぞれの目的と意義
4. 神の試練と精錬の働きの意義
5. 神の働きの三段階を知ることが神を知る道と言われるのはなぜか

第4章 終わりの日の神の働きの真理

1. 神の言葉の働きの意義
2. 神の征服の働きの意義
3. 神の裁きと刑罰の働きの意義

4. 神の試練と精錬の働きの意義

5. 救われ完全になるために、どのように神を信じなければならないか

第5章 神の受肉についての真理

1. 受肉とは何か、受肉の本質とは何か

2. 肉となった神の重要性

3. 受肉した神の働きと霊の働きの違い

4. 墮落した人類は受肉した神の救いがさらに必要である

5. 二度の受肉が受肉の意義を完成させる

第6章 神への信仰において備えるべきいくつかの識別

1. 神の働きと人の働きの識別

2. 聖霊の働きと悪霊の働きの識別

3. 真のキリストと偽キリストたちの識別

4. 真の道と偽りの道、真の教会と偽の教会の識別

5. 神に従うことと人に従うことの違い

6. 真の指導者たちと偽の指導者たち、真の羊飼いと偽の羊飼いの識別

7. 外的な善行と性質の変化の違い

第7章 神への信仰において理解すべき真理の他の側面

1. 神への信仰において神の新しい働きへの人々の反対の根源を知ること

2. 真の道を探し求めるには、理知を持たなければならない

3. 神を信じることに於いて、神との正常な関係を確立すべきである

4. 神の信者がもつべき聖徒らしい品格

5. 神への信仰は平和と祝福を求めるためだけであるべきではない

6. 苦しみの意義と神の信者が負わなければならない苦しみの種類

7. 神の信者は十分な善行により終着点に備えるべきである

第8章 さまざまな種類の人々の終末と人間への神の約束

第1章 全能神がすべてを創造した唯一の真の神である

1. 全能神はすべてのものを支配する唯一の真の神である

関連する神の言葉

この世界にあるすべてが、全能者の思いによって、全能者の目の下で、急激に変化している。人類が一度も聞いたことのない事が、突然到来する一方、人類が常に所有してきたものが、知らないうちに消え去ってしまう。誰も全能者の所在を推し量ることはできないし、まして全能者の生命力の超越性や偉大さを感じることも到底できない。人には知覚できない事を知覚できるゆえに全能者は超越的である。人類によって捨てられたにもかかわらず人類を救う方であるゆえに全能者は偉大である。彼は生と死の意義を知っている。それだけでなく、自身が創造した人類の存在を司るのに適した法則を知っている。彼は人類の存在の基礎であり、人類を復活させる贖い主である。彼は幸せな心に悲しみという重荷を負わせ、悲しむ心を幸福で引き上げる。これらは全て彼の働きのためであり、彼の計画のためである。

『言葉は肉において現れる』の「全能者のため息」より

広大な宇宙に、どれほどの生ける物が、一つの不変の規則にしたがって生き、いのちの法則に何度も何度もしたがって、生き、再生しているのか。死ぬ者は生きる者の物語を抱えて行き、生きている者は死んだ者と同じ悲劇的な歴史を繰り返す。そこで、人類は自問せずにはいられない。なぜわたしたちは生きるのか。そして、なぜわたしたちは死ななければいけないのか。誰がこの世界を支配しているのか。そして、誰がこの人類を創ったのか。人類はほんとうに大自然の生み出したものなのか。人類はほんとうに自分の運命を支配しているのだろうか。…人類は、宇宙万物の支配者が誰であることを知らないし、まして、人類の始まりも未来も知らない。人間はこの法則の中で、ただ生きている、否応なしに。誰一人、逃れることができないし、誰もこれを変えることはできない。あらゆる物事の間と天において、永遠から永遠にすべてを支配しているのは、ただお一方だけだからである。それは、かつて人間が見たことがないお方、人類が知ることもないお方、その存在を人類は信じたこともない。しかし、それは人類の祖先に息を吹き込み、人類にいのちを与えたお方である。人間の生存のために施し、養い、今日まで導いて来たお方である。さらに、人類が生き残るために依存する唯一のお方なのである。彼は万物を支配し、天の下のすべての生ける物を支配している。彼は四季を支配し、

風と霜、雪、雨を呼ぶ。彼は人類に陽光を与え、夜の訪れをもたらす。天と地とを整え、人間に山々と湖、川、すべての生き物を与えたのは彼である。彼の業はあらゆるところにある。その力はいたるところにある。その知恵はいたるところにある。その権威はいたるところにある。その法則や規則の一つひとつは彼の業の具現であり、その一つひとつが彼の知恵と権威とを明らかにしている。誰が彼の支配を免れることができようか。また、誰が彼の采配から逃れることができようか。万物は彼の眼差しの下にあり、さらに、彼の支配の下で生きている。彼の業と力の前に人類は、彼が実際に存在し、万物を支配していると認めざるを得ない。神を除いては、他の何も宇宙を支配できず、まして、やむことなく人類に施すこともできない。神の業を認識できるかどうか、神の存在を信じているかどうかにかかわらず、あなたの運命は神の定めるところであって、神が永遠にあらゆるものの支配権を持ち続けることに疑いはない。神の存在と権威とは、人間に認められ理解され得るかどうかによって左右されるものではない。神だけが人間の過去・現在・未来を知り、神だけが人類の運命を定めることができる。この事実を受け入れられるかどうかに関りなく、人類は近い将来、これらのことすべてをその目で見ることになる。そして、これは神が間もなく実現する事実である。人類は神の目の下で生き、死ぬ。人類は神の経営のために生きているのであり、その目が最期に閉じる時もまた、神の経営のためなのである。人間は何度も何度も来ては去り、行き来を繰り返す。例外なく、これはすべて神の支配し、定めていることである。神の経営は常に前進しており、やむことがない。神は人類に自身の存在を知らせ、神の支配を信じさせ、神の業を見させ、神の国に戻らせる。これが神の計画であり、何千年にもわたって神が行ってきた働きなのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

いのちの道は、誰でも持てるものではなく、誰にでも簡単に得られるものでもない。なぜなら、いのちは神のみに由来しているからだ。それはすなわち、神自身のみがいのちの本質を持っており、神自身なくしていのちの道は存在せず、神のみが、いのちと永遠に流れつづけるいのちの生ける泉の源であることを意味する。神が世界を創造したとき以来、神はいのちの活力に関わる多くの働きをし、人にいのちを与える多くの働きをし、人がいのちを得られるよう多大な代償を払ってきた。神自身が永遠のいのちで、神自身が、人が復活できる道だからである。神が人の心に不在であることはなく、常に人の中に生きている。神は人の生活の原動力であり、人の存在の基盤であり、誕生後の人の存在にとっての豊かな鉱物である。神は人を生まれ変わらせ、人が自分の持つあらゆる

る役割においてしっかりと生きられるようにする。神の力と、神の消えることの無いいのちの力のおかげで、人は何世代も生きてきた。その間ずっと、神のいのちの力は人の存在の支えであり、神は普通の人間が誰も払ったことのないような代償を払ってきた。神のいのちの力は、いかなる力にも勝る。そしていかなる力をも超越する。神のいのちは永遠であり、神の力は非凡であり、神のいのちの力はいかなる被造物や敵の力によっても簡単に圧倒されない。神のいのちの力は存在し、時と場所にかかわらず明るい輝きを放つ。天地は激変するかもしれないが、神のいのちは永遠に不変である。万物は過ぎ去るが、神のいのちは依然としてそこにある。それは、神が万物の存在の源であり、それらの存在の根幹だからだ。人のいのちは神に由来し、天の存在は神に拠り、地の生存は神のいのちの力から生じる。活力を有するいかなる物体も神の主権を越えることはできず、いのちの力を有する何物も神の権威の及ぶ範囲から逃れ出すことはできない。このようにして、誰もが神の支配下に服従し、神の命令の下で生きねばならず、誰も神の支配から逃れられない。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

宇宙、すなわち惑星、天の星は、すべて人類が出現する以前に、既に存在していた。マクロレベルでは、こうした天の物体は、神の支配下で、それらが存在している年月を通して、軌道を規則的に回り続けてきた。どの惑星が、何時、何処に移動するか、どの惑星が何時どのような役割を果たすか、どの惑星がどの軌道に乗るか、どの惑星が何時消滅するか、置換されるかなどといった事柄は、すべて寸分違わず正確に進行している。惑星の位置や惑星同士の間の距離は厳密な規則に従っており、正確なデータで説明可能である。惑星が移動する経路、速度、そして軌道の規則、特定の位置に到達する時刻は、正確に数値で表し、特定の法則により説明できる。数十億年にわたり、惑星は、これらの法則に全く逸脱することなく従ってきた。惑星の軌道や、惑星が従っている規則性を変化させたり中断させたりすることのできる力は存在しない。惑星の運動を律する特定の法則と、それを解明する正確なデータは、創造主の権威により事前に決定されており、惑星は創造主の統治と制御の下で、そうした法則に自然と従う。マクロレベルでは、ある程度の規則性やデータ、そして異常で説明出来ない法則や現象を見出すことは、人間にとってそれほど困難ではない。人類は神が存在することを認めず、創造主が万物を造り、支配しているという事実を受け入れず、さらには創造主の権威の存在を認めないにもかかわらず、人文科学者、天文学者、物理学者は、宇宙における万物の存在、そして万物の運動を律する原理と法則が、巨大で目に見えない暗黒のエネルギーにより

支配され、制御されているという結論に達することが益々多くなってきている。この事実により、人間は、こうした規則性の中に全能者が存在し、全てを指揮しているということに向き合い、認めざるを得なくなっている。彼の力は非凡であり、その素顔を見ることが出来る者はいないものの、彼は常に全てを支配し、制御している。彼による統治を超えることが出来る者や力は存在しない。こうした事実に鑑み、人間は万物の存在を支配する法則は人間が制御したり変えたり出来ないものであること、こうした法則は人間が完全に理解できないものであることを認める必要がある。さらに、そうした法則は自然に発生するものではなく、支配者により支配されている。こうした物事は、全て人間がマクロレベルで認識できる神の権威が表出されたものである。

ミクロ段階では、人間が地上で見る山々、川、湖、海、大陸、人間が体験する季節、植物、動物、微生物、人類を含めた地球上の万物は、全て神の権威の対象であり、神により支配されている。神による統治と支配の下においては、万物は神の旨に従って出現し、消滅し、その生命は全て特定の法則により管理され、その法則に従って生長し、繁殖する。これらの法則を超える人間や物事は存在しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一の神自身 3」より

神は、万物創造時に、山、平野、砂漠、丘、河川、湖沼の境界を定めた。地上には山、平野、砂漠、丘、そして様々な水域が存在する。これらは異なる地形ではなかろうか。神は、様々な種類の地形全ての間に、境界を定めた。境界の設定といった場合、山と平野にはそれぞれの領域が、砂漠には一定の範囲が、丘には一定の面積があることを意味している。さらに、河川や湖沼などの水域にも一定の水量がある。つまり、神が万物を造った時、神は全てを明確に分割した。…こうした神が造った様々な地形や地理的環境の中では、あらゆる物事を、計画された秩序ある方法で神が管理している。そうしたわけで、これら全ての地理的環境は、それを神が造ってから数千年、数万年後の現在も依然として存在する。こうした地理的環境は、依然としてそれぞれの役割を果たしている。ある期間に火山が噴火したり、地震が発生したり、地面が大きく動くことがあるが、それでもなお神は地形がその機能を喪失することを許さない。人間が享受し、見ることのできるこれら全てが地球上で秩序をもって存在することができるのは、ひとえにこのような神の管理とそれらのものに対する神の支配、そして法則を掌握しているからである。…

神は、様々な地理的環境を定めたほか、様々な鳥、獣、魚、昆虫、植物の境界も定めた。また、神は法則も定めた。様々な地理的環境の差異、そして様々な地理的環境が存

在することが原因で、様々な鳥、獣、魚、昆虫、植物には、それぞれ異なる生存環境がある。鳥、獣、昆虫は、様々な植物の中で生活し、魚は水中で生活し、植物は地面の中で育つ。…こうした奇妙に見える現象について話をしている理由は、それが1か所に固定されているか、鼻から呼吸できるかどうかを問わず、神が造った万物には、それぞれの生存法則が存在するということを、あなたがたに理解してもらうためである。神がこれらの生き物を造る遥か以前に、神はそれらの生き物のための棲息地、つまり固有の生存環境を用意した。これらの生き物には、それぞれ固定された生存環境、固有の食料、固定の棲息地、生存のための気温などがそうした生き物の生存に適した、固定された棲息地がある。このように、そうした生き物は方々を彷徨ったり人間の生存を侵害したり、人間の生活に影響を及ぼしたりすることは無い。これが、神が全ての生き物を管理する方法である。こうした事は、すべて人間に最適な生存環境を与えるためのものである。万物のうち、生き物には、それぞれ固有の生存環境の中に生き延びるための食料がある。その食料により、生き物は土着の生存環境に固定されている。そうした環境においては、生き物は、それらの生き物のために神が定めた法則に従い、依然として生存と繁殖を続けている。この種の法則や神の予定があるため、あらゆる生き物は人間と調和して相互作用し、人間とあらゆる生き物は相互依存している。

『言葉は肉において現れる』の「唯一の神自身 9」より

産声を上げてこの世に生まれて来た瞬間から、あなたは自分の責任を尽くし始める。神の計画と神の定めにおける役割を担いつつ、あなたは人生の旅路を始める。これまでの背景がどうであろうと、これからの旅路がどのようなものでであろうと、天が備えた指揮と采配を逃れることができる者はひとりもおらず、自分の運命を支配できるものはひとりもない。万物を支配するその方のみが、そのような働きを行うことができるからである。人が存在するようになった日から、神はそのように働き、宇宙を経営し、万物の変化の規律と動きの軌道を指揮してきた。万物と同様に、静かに、知らないうちに人は神から甘味と雨と露を受け取る。万物と同様に、人は知らないうちに神の手による采配の下で生きている。人の心と霊は神の手の中にあり、人の生活の全ては神の目に見られている。あなたがこのことを信じようと信じまいと、生けるものも死せるものも、ありとあらゆるものが、神の思いどおりに移ろい、変化し、新しくされ、消え去る。これが神が万物を支配する方法である。

夜が忍び寄っても、人は気づかない。なぜなら、人の心は、どのようにして暗闇が近づくのか、それがどこから来るのか知覚できないからである。夜が静かに過ぎ去るとき

、人は日の光を歓迎する。しかし人の心は、光がどこからやって来たのか、どのようにしてそれが夜の闇を追い払ったのか、なおさら、はっきり知ることはなく、気づくこともない。そのような昼と夜の周期的な交替は、人をひとつの時期から別の時期へと連れていく一方、神の働きと神の計画が、それぞれの時期とあらゆる時代を通じて、遂行されることを確かなものとする。

『言葉は肉において現れる』の「神は人間のいのちの源である」より

世界の創造以来、わたしはこの一群の民、すなわち今日のあなた方を予め定め、選び始めた。あなた方の気質、素質、外見、霊的背丈、あなたが生まれた家族、あなたの仕事と結婚、あなたの全て、あなたの髪や肌の色、またあなたが生まれた時間さえも、すべてはわたしの手によって定められたのである。あなたが為すことや、あなたが日々出会う人たちさえ、わたしの手によって定められており、今日あなたが私の前に来たのも、実際、わたしの采配であるという事実は、言うまでもない。あなたは混乱に陥ってはならない。落ち着いて前進すべきである。

『言葉は肉において現れる』第一部「諸教会への聖霊の言葉」の「第七十四章」より

人類の運命と万物の運命は、創造主による統治と密接に絡み合い、創造主の指揮と不可分の繋がりがあり、最終的にそれらの運命を神の権威から引き離して翻弄することはできない。人間は、万物の法則により創造主の指揮と統治を理解するようになり、生存の法則により創造主の統治を認識し、万物の運命により創造主がその万物に対する統治と支配を行使する方法に関して結論を得る。また人間は、人間と万物のライフサイクルによって、万物やあらゆる生物に対する創造主の指揮と采配を真に経験し、そうした創造主による統治や采配が、この世の法令や規則、制度その他の権力や威力よりも優先されるのを目の当たりにする。これに鑑みると、創造主による統治は、いかなる被造物も侵害出来ないものであり、いかなる権力も創造主によって予定された物事に干渉したり変更したり出来ないものであることを、人類は認めざるを得ない。人類や万物の何世代にもわたる生活や繁殖は、こうした神性の法則や規則の下で行われる。これは創造主の権威が真に具現化されたものではなからうか。

『言葉は肉において現れる』の「唯一の神自身 3」より

(一篇の御言葉)

神は全人類の運命を支配する

人類の一員として、また敬虔なクリスチャンとして、神が委ねた任務を全うするために心と体を捧げるのは私たちすべての責任であり、義務である。何故なら、私たちの全存在は神から来たものであり、神の支配のおかげで存在しているからである。私たちの心と体が神の委ねた任務のためでも、人類の正義の目的のためでもないなら、私たちの魂は神が委ねた任務のために殉教した人々に値しなくなり、ましてや、私たちに全てを与えた神には値しなくなる。

神はこの世界を創造し、この人類を創造した。また、それだけではなく、神は古代ギリシア文化ならびに人類文明の設計者でもあった。神のみがこの人類を慰め、神のみが日夜人類のことを思いやる。人類の発展と進歩は神の支配と切り離すことはできない。また、人類の歴史と未来は神の計画から切り離せない。あなたが真のクリスチャンならば、あらゆる国または民族の興亡は、神の意図によって起こるということを必ず信じるであろう。神のみが国または民族の運命を知っており、神のみがこの人類の進むべき道を制御する。人類が良い運命を望むなら、また国家が良い運命を願うなら、人類はひれ伏して神を礼拝し、神の前で悔い改め、罪を告白しなければならない。さもなければ人類の運命と終着点は災難となることは避けられない。

ノアの箱舟の時代を振り返って見よう。人類はひどく墮落し、神の祝福から迷い出てしまっていた。もはや神の配慮は得られず、神の約束を失ってしまっていた。闇の中を、神の光のないまま生きていた。そうして彼らの性質は放縦となり、おぞましい墮落に身を任せた。このような人々はもはや神の約束を受けることはできなかった。彼らは、神の顔を仰ぎ見るにも、神の声を聞くことにも相応しくなかった。何故なら彼らは神を見捨て、神から与えられたものすべてを放棄し、神の教えを忘れてしまったからである。彼らの心は神から離れて行くばかりで、それにつれてあらゆる理性と人間性を失って墮落し、さらに邪悪なものとなった。こうして彼らは死に接近し、神の怒りと罰を受けた。ノアだけが神を礼拝し、悪を避けたので、神の声を聞くことができ、神の指示を聞くことができた。ノアは神の言葉の指示に従って箱舟を建て、あらゆる種類の生物を集めた。こうして一旦全ての準備が整うと、神は世界に破滅をもたらした。ノアとその家族7人だけが破滅を逃れて生き残ったが、それはノアがヤーウェを礼拝し、悪を避けたからであった。

それでは現代に目を向けてみよう。ノアのように神を礼拝し、悪を避けることのできる正しい人はいなくなってしまった。それでもなお、神はこうした人類に対して恵み深く、この終末の時代においても人類の罪を赦す。神は神の現われを切望する人々を探し

求める。神は神の言葉を聞くことができる人々、神の任務を忘れず、心と体を神に捧げる人々を探し求める。神は神の前で赤子のように従順で、神を反抗しない人々を探し求める。あなたが何もののにも妨げられずに神に献身するならば、神はあなたを好意の眼差しで見、祝福を授けるだろう。たとえあなたが高い身分で、名声があり、知識が豊富で、有り余るほどの資産の持ち主で、多くの人々の支持を得ていたとしても、それらのものが、神の要求することを行うために、神の前に出て神の召命と任務を受ける妨げにならないならば、あなたの為す全ては、地上で最も意義深く、人類の間で最も正しいことになる。もしあなたが地位や自分自身の目標のために神の召命を拒むならば、あなたの為すことはすべて神によってのろわれ、忌み嫌われさえするだろう。あなたは大統領かもしれない、あるいは科学者、牧師、長老かもしれないが、あなたの地位がどんなに高くても、自分の知識と能力を頼りにして事業に着手するならば、あなたはいつも失敗し、いつも神の祝福をのがしてしまう。神はあなたの為すことは何も受け入れず、あなたの実績が正しいものとは認めず、あなたが人類の益のために働いているものとは見なさないからである。あなたの為すことは全て、人類の知識と力を用いて人から神の保護を奪い、神の祝福を否定することであると、神は言うだろう。あなたは人類を暗闇の方向へ、死の方向へ、人が際限なく神と神の祝福を失う存在の始まりへ導いていると、神は言うだろう。

初めて社会科学の考えを持つようになってから、人の精神は科学と知識に占領されてしまった。それからすぐ、科学と知識は人類を支配する道具となり、もはや人が神を礼拝する十分な余地はなくなり、神を礼拝する好ましい条件もなくなった。人の心の中で占める神の位置はどこまでも低められていった。人の心の中に神の居場所が無い世界とは、暗く、何の希望も無く、空虚である。そこで、人の心と精神を満たすために、多くの社会学者、歴史家、政治家が現れて、社会科学の理論、人類進化の理論等、神が人を創造したという真理に反する理論を述べた。こうして、神が万物を造ったという真理を信じる人はますます少なくなり、進化論を信じる人の数は増加の一途をたどっている。神の働きの記録と旧約の時代の神の言葉を、神話や伝説として取り扱う人々はますます多くなっている。人々の心は、神の威厳と偉大さに対して、また神が存在し、万物を支配しているという信条に対して無関心になっている。人類の生存、そして国家と民族の運命はもはや彼らにとって重要ではない。人は飲食と快楽の追求にしか関心のない虚しい世界に生きている。…神が今日どこで働きを行っているのか、あるいは、神が人の終着点をいかに支配し、定めているのか、それを自らすすんで探し求める者はほとんど

いない。こうして、人間の文明は、人の知らないうちに、ますます人の望みどおりには行かなくなり、多くの人々がこんな世界に生きている自分達は、亡くなった人々に比べて不幸せだと感じてさえいる。過去に高度の文明を築いた国々の人たちでさえそのような不満をあらわにしている。何故なら、神の導きなしには、支配者たちや社会学者たちが人類の文明を維持するためにどんなに頭を悩ませても何の役にも立たないからである。誰も人の心の中の空洞を埋めることはできない。誰も人のいのちとなることはできず、どんな社会学的理論も、心をむしばむ虚しさから人を解放することはできないからである。科学、知識、自由、民主主義、余暇、快適な暮らしは、つかの間の慰めに過ぎない。これらのものがあっても、人は必然的に罪を犯し、社会の不公正を嘆く。これらのものは、人の探求への欲求や願望を抑えることはできない。人は神によって造られたからであり、人の無意味な犠牲や探索はさらなる苦悩につながるだけである。人は常に恐怖に怯えて存在し、人類の将来にどのように向き合うべきか、目の前にある進路にどのように対峙すべきか分らない。人は科学や知識に脅かされるほどになり、自分の中にある空虚感をそれらのもの以上に恐れるようになる。この世であなたが自由な国に住もうと、人権のない国に住もうと、人類の運命から逃れることは決してできない。あなたが支配者であろうと、支配される者であろうと、人類の運命、奥義、そして終着点を探求しようとする願望から逃れることは到底できない。ましてや、途方にくれるほどの空虚感から逃れることはできない。全人類に共通するこの現象を、社会学者は社会現象と呼んでいる。しかし、このような問題を解決できる偉大な者が現れることはない。人間は結局、人間に過ぎない。神の地位といのちにとって代われる人間はいない。人類は、誰もが食べる物に満ちたり、平等かつ自由である公平な社会だけではなく、神の救いと神によるいのちの満たしが必要なのである。神の救いといのちの満たしを受けて初めて、人間の欲求、探究心、そして霊的空虚感が解消されるのである。或る国や或る民族の人々が神の救いや配慮を得ることができなければ、そうした国や民族は暗黒に向かって、破滅への道を突き進み、神によって滅ぼされるであろう。

あなたの国は今のところ繁栄しているかもしれない。しかし、国民が神からそれることをあなたが許すなら、あなたの国はますます神の祝福から遠ざかることになるだろう。あなたの国の文明はどんどん踏み躪られ、間もなく人々は神に反対して立ち上がり、天を呪うだろう。こうして一国の運命は人の知らないうちに破滅に終わるだろう。神は神によって呪われた国々に対処するために強大な国々を興すだろう。またそうした国々を地球上から一掃することさえあり得る。一つの国や一つの民族の興亡は、その支配者

たちが神を礼拝しているかどうか、その国民を神に近づけ、神を礼拝する方向に導くかどうかによって決められる。しかし、この終末の時代に、真に神を求め神を礼拝する人々はますます少なくなっているのです。神はキリスト教を国教とする国々に特別な恩恵を授ける。神はそれらの国々を結集させて比較的正義である世界の陣営を形成する。一方無神論の国々、あるいは本当の神を礼拝しない国々は正義である陣営の敵対者になる。このようにして、神はその働きを行うための場所を人類の中に持つだけでなく、正義なる権力を行使できる国々を獲得し、神に抵抗する国々に制裁と制限を課す。しかしそれに関わらず、神を礼拝するために前向きに取り組む人々がまだ増えないのは、人間が神からあまりにも遠く離れてしまい、神は人間の思考からあまりにも長いこと抜けてしまっているからである。地上にはただ正義を行使し、不正に抵抗する国々があっただけである。しかし、これは神の願望とは程遠い。どの国の支配者も神が自国民を統括することを許さず、どの政党も神を崇拝するために人々を結集させたりしないからである。神は各国、民族、与党の中心において、さらには各人の心の中においてでさえ、正当な位置を失った。確かにこの世界には義なる勢力が存在するが、人の心の中に神が正当な位置を占めていない統治は脆弱である。神の祝福がなければ、政治の舞台は混乱に陥り、攻撃を受けやすくなってしまうだろう。人類にとって神の祝福がないことは、太陽の光を受けないようなものである。どんなに熱心に支配者が国民に貢献しようが、どんなに数多く正義なる会議を人類が集まって開催しようが、どれも事態を方向転換させることはなく、人類の運命を変えることはないだろう。人々が衣食を与えられる国、平和に共に暮らす国はよい国であり、良い指導者の国だと人は考える。しかし、神はそうは思わない。神は、神を礼拝する者のいない国は滅ぼされるべき国であると考えている。人の考え方は、神の考え方とはあまりにも食い違っている。だから、もし国の長が神を崇拝しなければ、その国の運命は悲劇的なものになり、国の終着点はないだろう。

神は人間の政治に参加しないが、国または民族の運命は神によって支配されている。神はこの世界と全宇宙を支配している。人の運命と神の計画は密接に関連しており、誰もどの国も民族も神の支配から免れない。人間の運命を知りたいなら神の前に来なければならない。神は神に従い、神を崇拝する人々を繁栄させ、抵抗し、拒絶する人々に衰退と絶滅をもたらす。

神がソドムを滅ぼしたときの聖書の場面を思い出してみるがよい。ロトの妻がどうして塩の柱になったかも考えてみるがよい。二ネベの人々が荒布をまとい、灰の中に座していかに罪を悔い改めたかを思い返し、二千年前にユダヤ人たちがイエスを十字架に釘

づけにしたあと何が起きたかを思い起こしてみるがよい。ユダヤ人はイスラエルから追放され、諸国に逃亡した。多くは殺され、全ユダヤ民族は前例を見ない破壊を受けた。彼らは神を十字架に釘付けにし一凶悪犯罪を犯し一そして神の性質を侵害した。彼らは自分たちが為したことの代価を払い、その行動の結果に耐えなければならなかった。彼らは神を罪に定め、神を拒絶したので、たどる運命は一つしかなかった。すなわち、神の罰を受けたのである。これが彼らの支配者たちが彼らの国と民族にもたらした苦い結果と災害である。

今日、神は自身の働きを行うために世界に戻ってきた。神が最初に留まった所は、独裁的支配者たちの大いなる集り、すなわち無神論の頑強な砦、中国である。神はその知恵と力によって一群の人々を獲得したが、その間にも神は中国共産党によってあらゆる手段をもって追跡され、塗炭の苦しみにさらされ、枕する場所もなく、避難する場所を見つけることもできない。それにも関わらず、神は意図した働きを続行している。つまり神は声を発し、福音を広める。誰も神の全能性を推し量ることはできない。神を敵と見なす国、中国で、神は決してその働きをやめてはいない。それどころか、ますます多くの人々が神の働きと言葉を受け入れている。神は人類の一人一人を救うためにできる限りのことをしているからである。私たちは、いかなる国家も勢力も神が果たそうと願うものの前に立ちはだかることはできないと信じている。神の働きを妨害し、神の言葉に抵抗し、神の計画をかき乱し、阻害する者たちは最終的には神に罰せられる。神の働きに逆らう者は地獄に送られる。神の働きに反抗する国家は滅ぼされる。神の働きに反対するために立ち上がる民族は地上から一掃され、消滅する。私は、すべての民族、国家、そしてあらゆる業種の人々が神の声に耳を傾け、神の働きに目をやり、人類の運命に留意し、ひいては神をもっとも聖なる、至尊の、至高の、人類唯一の礼拝の対象とし、アブラハムの子孫がヤーウェの約束の下に暮らしたように、最初に神によって造られたアダムとエバがエデンの園で暮らしたように、人類全体が神の祝福の下に生きることができるようにすることを強く勧める。

神の働きは強く打ち寄せる大波のようなものである。誰も神を引き留めることはできないし、誰も神の歩みを停止させることはできない。神の言葉に注意深く耳を傾け、神を探し求め、渴望する人々だけ神の歩みをたどり、神の約束を受けることができる。そうしない者は圧倒的な災難を被り、当然の罰を受ける。

『言葉は肉において現れる』より

2. 全能神は再臨した主イエスである

関連する神の言葉

ヤーウェの働きの後、人のあいだで神の働きを行うためにイエスは受肉した。イエスの働きは単独で実行されたのではなく、ヤーウェの働きの上に築かれた。それは律法の時代を神が終わらせた後の新しい時代のための働きであった。同様に、イエスの働きが終わった後、神は次の時代のためにさらに神の働きを続行した。神による経営（救い）全体はいつも前進しているからである。古い時代が過ぎると、新しい時代に置き換えられ、古い働きが完了すると、新しい働きが神の経営（救い）を続行する。今回の受肉はイエスの働きの完了に続く神の二回目の受肉である。もちろん、この受肉は単独で起こるのではなく、律法の時代と恵みの時代の後の第三段階の働きである。神の働きの新しい段階はそれぞれいつも新しい始まりと新しい時代をもたらす。そこで神の性質、神の働き方、神の働く場所、神の名前にもそれに付随した変化がある。したがって、人にとっては、新しい時代の神の働きを受け入れるのが難しいのは無理もない。しかし、いかに人が反対しようと、それには関係なく、神はいつも自分の働きを行っており、いつも人類全体を前方に導いている。イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れることができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了しただけで、人の贖罪のためのささげものとなり、人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかった。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けよう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得よう。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

イエスがその働きを行っていたとき、イエスに関する人の認識は依然として漠然として不明瞭だった。人は昔からイエスをダビデの子と信じ、偉大な預言者で人の罪を贖

う情け深い主であると宣言した。信仰によって、イエスの衣の端を触っただけで癒された人々もいれば、盲人たちが見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が人に深く根づいているのが発見できず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉による平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、病人の癒しなど多くの恵みを受けた。残りは人による良い行いや外見上の信心深さであった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はますます良い信者と思われたのである。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされた。それは彼らが救われたことを意味する。しかし、彼らはその生涯において、いのちの道を全く理解していなかった。彼らはただ罪を犯しては告白し、それを常に繰り返すのみで、性質が変えられる道へ進んでいる訳ではなかった。これが恵みの時代の人間の状態であった。人は完全な救いを得たのであろうか。いや、得なかった。だから、その段階の働きが終わってからも、依然として裁きと刑罰の働きが残っている。この段階は人に従う道を与えるように、言葉を通して人を清くする。もし悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。というのは、人の罪深い本性が捨てられることもないだろうし、人は罪が赦されるというところで行き詰まるだろうからである。罪のためのいけにえを通して、人は罪を赦されてきた。というのは十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に留まっており、人は依然として罪を犯し、神を拒むことができ、よって神はまだ人類を得ていない。だからこの段階の働きで神は言葉を用いて人の墮落した性質を示し、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段階よりもっと意味があり、もっと有益である。というのは、今、人に直接いのちを提供し、人の性質を完全に新しくできるのは言葉だからである。それはもっと徹底的な働きの段階である。だから、終わりの日の受肉は神の受肉の意義を完成し、人の救いのための神の経営計画を完全に終了したのである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

わたしはかつてヤーウェとして知られていた。わたしはメシアとも呼ばれ、また、人々はかつてわたしを救い主イエスとも呼んだ。わたしを愛し、尊敬したからである。しかし、今日わたしは人々が過去に知っていたヤーウェでもイエスでもない。わたしは終わりの日に戻ってきた神、時代を終らせる神である。わたしは、わたしの全性質を余すところなく顕し、権威、名誉、栄光に満ちて地の果てから立ち上がる神自身である。人々は一度もわたしと関わったことがなく、わたしを知ったことがなく、ずっとわたしの

性質に無知であった。天地創造から今日に至るまで、わたしを見たことがある者はひとりとしていなかった。これは終りの日に人の前に現れるが、人々の間に隠れている神なのである。神は真実で現実的に、照りつける太陽や燃え立つ火のように、力に満たされ、権威にあふれて人々のあいだに存在する。わたしの言葉によって裁きを受けない人や物は一人として、一つとしてない。燃える火によって浄化されない人や物は一人として、一つとしてない。最終的には、あらゆる諸国はわたしの言葉のために祝福され、わたしの言葉のために粉々に砕かれもする。このようにして、終わりの日にすべての人は、わたしが戻ってきた救い主であり、人類のすべてを征服する全能神であり、かつては人のための罪の捧げものであったが、終わりの日にはすべてを焼き尽くす太陽の炎にもなり、またすべてのものを露わにする義の太陽でもあることを理解するだろう。それが終わりの日のわたしの働きである。わたしはこの名前を名乗り、この性質を持ち、すべての人がわたしが義の神であり、照りつける太陽、燃え立つ火であることが理解できるようにする。そうするのはすべての人が唯一の真の神であるわたしを崇め、わたしの本当の顔を見ることができるようになる。わたしはイスラエル人たちの神であるだけでなく、贖い主であるだけでなく、天、地、海の至る所にあるすべての創造物の神である。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

神による発話は続いていて、様々な方法や観点をを用いて私達にすべきことを諭し、その心の声を表す。その言葉は生命力を備え、私達が歩むべき道を示し、真理とは何かを理解できるようにする。私達はその言葉に引き付けられるようになり、その声音や話し方に注目し始め、そして意識下において、この小さな取るに足らない人の心の声に関心を持ち始める。彼は私達のために労力を惜しまず、私達のために睡眠も食欲も無くし、私達のために涙も流し溜息をつき、病気に苦しみ、私達の終着点と救いのために屈辱を耐え忍び、私達が鈍感で反抗的なために、その心は涙と血を流すのである。この人のそのような存在ともてるものは、普通の人を超えているし、墮落した者には誰も到達することが出来ないものである。彼には、普通の人にはない寛容と忍耐力が備わり、その愛はどんな被造物にも持ちえないものなのだ。私達の考えていること全てを知っていて、私達の本性や本質をこのように把握し、人類の反抗的で墮落した性質を裁き、天国の神を代理して私達に語りかけ、このように人の間に働くことができる人はこの人以外に居ない。彼以外に神の権威、英知、そして威厳を持つ者はいない。神の性質と神が持っているもの、神であるものが、この人からあますところなく発せられているのだ。この人

以外に、私達に道を示し、光をもたらす者はいない。彼以外に神が天地創造から今日まで明かしてこなかった奥義を明らかにできる者はいない。彼以外に私達をサタンの束縛や私達の墮落した性質から救える者はいない。彼は神を代表し、神の心の声と訓戒、そして人類すべてに対する神の裁きの言葉を表現する。彼は新しい時代を、そして新しい紀元を開き、新しい天と地そして新しい働きを持ってきた。そして彼は私達に希望をもたらし、漠然と生きてきた私達の生活を終わらせ、救済の道を私達に余すところ無く見せてくれたのである。彼は私達の存在そのものを征服し、私達の心を得た。その瞬間から私達の心は覚醒し、私達の霊は生き返ったように思われる。この平凡で取るに足らない人物、長い間私達の間に交じり生活しながらも私達に拒否され続けてきたこの人こそ、私達が絶えず考え、日夜待ち望んできた主イエスではないだろうか。彼なのだ。実際そうなのだ。この人こそが私達の神なのだ。彼こそが真理であり、道であり、いのちである。

『言葉は肉において現れる』の「神の裁きと刑罰に神の出現を見る」より

現在なされている働きは恵みの時代の働きを推し進めた。すなわち、六千年経営（救いの）計画全体における働きは前進した。恵みの時代は終わったが、神の働きはさらに前進している。なぜわたしは今の段階の働きは恵みの時代と律法の時代を基礎にしていると繰り返し言うのだろうか。これは、今日の働きは恵みの時代に行われた働きの延長であり、律法の時代に行われた働きを向上させたものであることを意味する。三つの段階は密接に相互関連しており、一つはその次の段階に繋がっている。なぜわたしは今の段階の働きはイエスによってなされた働きの上に築き上げられるとも言うのだろうか。この段階がイエスによってなされた働きの上に築き上げられなければ、キリストの磔刑、つまり過去に行われた贖いの働きはこの段階でなお実行されなければならない。だが、これは無意味なことであろう。従って、働きは完全に終わったのではなく、時代が前進し、働きは以前に比べていっそう高まったということである。今の段階の働きは律法の時代、および、イエスの働きの堅固な支えを基礎に置いて築かれるということができるだろう。働きは段階ごとに築かれ、今の段階は新しい始まりではない。三つの働きの段階の組み合わせのみを六千年にわたる経営(救いの)計画とみなすことができる。今の段階は恵みの時代の働きを基礎にして行われる。これら二つの働きの段階に関連がなければ、なぜ今の段階には磔刑がないのか。なぜわたしは人の罪を背負わないのか。わたしは聖霊による受胎により来るのではないし、人の罪を背負うために磔刑にされることもないだろう。むしろ、わたしは人を直接罰するためにここにいる。磔刑のあとわたし

が人を罰しなければ、そして今わたしが聖霊による受胎を通して来るのでないならば、わたしは人を罰する資格がないだろう。わたしがイエスと一つなのであるからこそ、わたしは人を罰し、裁くために直接来るのだ。今の段階の働きは完全に過去の段階を基礎にしている。だからそのような働きだけが段階を追って人を救済に導くことができる。イエスとわたしは同じ霊から来ている。わたしたちの肉体には何の関連性もないが、わたしたちの霊は一つである。わたしたちがすることやわたしたちが担う働きは同じではないが、わたしたちは本質的に同じである。わたしたちの肉体の形は異なるが、これは時代の変化ならびにわたしたちの働きの必要性のためである。わたしたちの職分は同じではないので、わたしたちが作り出す働きや、わたしたちが人に明らかにする性質も異なっている。そういうわけで、今日人が見るものや受け取るものは過去のものと同じではない。それは時代の変化のためである。彼らの肉体の性や形は異なっているが、そして彼らは同じ家族から生まれたのではなく、ましてや同じ期間に生まれたのではないが、彼らの霊は一つである。彼らの肉体は血縁関係も物理的関係も決して共有していないが、それによって彼らが二つの異なる時期において受肉した神であることを否定することにはならない。彼らは同じ血統ではなく、共通する人間の言語を持っていないが（一人はユダヤ人の言語を話す男性であったし、もう一人は中国語しか話さない女性である）、彼らが受肉した神であることは否定できない真実である。これらの理由から、彼らは異なる国で、異なる期間になすべき働きを行う。彼らの霊は同じで、同じ本質を持っているという事実にも関わらず、彼らの肉体の外見には完全な類似性はまったくない。彼らは同じ人間性を共有しているだけで、彼らの肉体の外見と誕生は似ていない。これらのことはそれぞれの働きや、人が彼らに関して持つ認識に何の影響も与えない。なぜなら結局彼らは同じ霊であり、誰も彼らを分けることはできないからである。彼らには血縁関係はないが、存在全体は彼らの霊によって指示されているので、肉体は血統を共有しないままに、彼らは異なる期間に異なる働きを引き受けている。ヤーウェの霊はイエスの霊の父ではなく、イエスの霊もヤーウェの霊の子ではない。彼らは同じ霊である。今日の受肉した神とイエスと同様である。彼らに血縁関係はないが、彼らは一つである。これは彼らの霊が一つだからである。彼は慈愛と憐れみの働きを行うことができ、同様に義である裁きの働きや人を罰する働き、人にのろいをもたらす働きも行うことができる。結局、彼は世界を破壊し、不道德な人々を罰する働きを行うことができる。彼はこのすべてを自分自身で行うのではないのだろうか。これは神の全能性ではないのだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「二度の受肉が受肉の意義を完成させる」より

第二の受肉の働きは、人々には最初のものとはまるで違って見える。あまりに違うので、二つには何の共通点もないように見える。最初の働きのようなことは、今回は何も見られない。第二の受肉の働きは最初のものとは異なっているが、それは両者の源が同一ではないということではない。同じかどうかは、肉の体で行われる働きの性質によるのであって、外形によるのではない。三段階の働きの間に神は二度受肉し、いずれのときも受肉した神は新たな時代を開き、新しい働きをもたらした。二度の受肉は相補うのである。人間の目では、二つの肉の体が同じ源から来ていると見極めることは不可能である。言うまでもなく、これは人間の目や心の能力を超えている。しかし、両者の本質は同じである。二人の働きは同じ霊に発しているからである。受肉した二つの体が同じ源から発しているかどうかを判断できるのは、二人の生まれた時代と場所やそのような他の要素によるのではなく、二人の表す神性の働きによるのである。第二の受肉による体はイエスの行った働きは何も行わない。神の働きに慣習的な決まりはなく、それぞれが新たな道を開くからである。第二の受肉は最初の肉に関する人々の心にある印象を深めも固めもしないが、それを補い、完成させ、神についての人間の認識を深め、人々の心にある、あらゆる規則を破り、人々の心にある神についての誤った姿を消し去る。神自身の働きのどの段階も個別には、人間に神についての完全な認識を与えることはできないと言える。各段階は、全部ではなく、一部分だけを与えるのである。神はその性質を完全に示したが、人間の理解力が限られているため、神についての認識はまだ不完全なままである。人間の言語で神の性質を完全に言い表すのは不可能である。まして、神の働きの一段階だけで、どれほど完全に神を表せるだろうか。神は普通の人間性の陰に隠れて肉において働く。そして、その神性が現れてはじめて、人間は神を知ることができるのであり、その外見を見てのことではない。神はさまざまな働きを通して人間が神を知ることができるように受肉するのだが、働きの二段階は同じではない。このようにしてはじめて、人間は肉における神の働きについて、一つの面だけでなく、完全な認識をもてる。受肉しての二度の働きは別々のものだが、肉の本質とその働きの源は同一である。ただ、どちらも二つの異なった段階の働きをするために存在し、二つの別の時代に来るということである。いずれにしろ、受肉した神の肉は同じ本質と由来をもつ。これは誰も否定できない真理である。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

3. 救いは全能神への信仰を通してのみ達成される

関連する神の言葉

イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れることができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了しただけで、人の贖罪のためのささげものとなり、人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかった。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

最初の受肉は人を罪から贖う、つまりイエスの肉体を通して人を罪から贖うためであった。つまり、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質は依然として人の中に留まった。二番目の受肉はもはや罪のためのいけにえとしての役割ではなく、罪から贖われた人たちを完全に救うことであった。それにより、赦されたものが罪から解放され、完全に清められ、性質が変えられ、それによりサタンの暗闇の影響を打ち破り、神の玉座の前に戻ってくるためである。このようにしてのみ、人は完全に清められる。神は律法の時代が終わってから、恵みの時代に救いの働きを開始した。これは神が人間の不従順に対する裁きと刑罰の働きを終えて人類を全く清める終わりの日まで続く。その時が来てはじめて、神は救いの働きを終え、安息に入る。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

終わりの日の働きは言葉を語ることである。大きな変化が言葉を通して人にもたらされる。言葉を受け入れた人たちにもたらされた変化は、恵みの時代にしるしや不思議を受け入れた人たちにもたらされた変化よりもはるかに大きい。というのは、恵みの時代に、悪霊は按手と祈りによって人から立ち去ったが、墮落した性質は人の中に残ったままであった。病気が癒され、罪が赦されたが、人の中にある墮落したサタンの性質が

ら人がどのように浄化されるかということに関しては、この働きは人の中ではまだなされていなかったからである。人は信仰の故に救われ罪が赦されただけで、人の罪深い本性は取り去られず内面に残ったままであった。人の罪は神の受肉を通して赦されたが、それは人の中に罪がないという意味ではない。人の罪は罪のためのいけにえによって赦されることができたが、どうすれば人がもはや罪を犯さないようにし、その罪深い本性が完全に取り去られ変えられるかということに関しては、人にはこの問題を解決する方法はないのである。人の罪は神の十字架の働きの故に赦されたが、人は古い、墮落したサタンの性質の中で生きてきた。そのため、人は墮落したサタンの性質から完全に救われなければならない。そうすることで、人の罪深い本性が完全に取り除かれ、二度と芽生えなくなり、人の性質が変えられるのである。そのためには、人はいのちの成長の筋道、いのちの道、そして性質を変えるための道を知らなくてはならない。また、人はこの道に沿って行動することが必要とされる。その結果、人の性質は次第に変わり、光の輝きの下で生きることができ、すべてを神の心に沿って行なうことができ、墮落したサタンの性質を捨て去ることができ、サタンの暗闇の影響から解放されることができ、それにより罪から完全に抜け出ることができる。このとき初めて人は完全なる救いを受けることができる。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

イエスがその働きを行なっていたとき、イエスに関する人の認識は依然として漠然として不明瞭だった。人は昔からイエスをダビデの子と信じ、偉大な預言者で人の罪を贖う情け深い主であると宣言した。信仰によって、イエスの衣の端を触ただけで癒された人々もいれば、盲人たちが見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が人に深く根づいているのが発見できず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉による平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、病人の癒しなど多くの恵みを受けた。残りは人による良い行いや外見上の信心深さであった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はますます良い信者と思われたのである。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされた。それは彼らが救われたことを意味する。しかし、彼らはその生涯において、いのちの道を全く理解していなかった。彼らはただ罪を犯しては告白し、それを常に繰り返すのみで、性質が変えられる道へ進んでいる訳ではなかった。これが恵みの時代の人間の状態であった。人は完全な救いを得たのであろうか。いや、得なかった。だから、その段階の働きが終わってからも、依然として裁きと刑罰の働きが残っている。この段階は人に従う道を与え

るように、言葉を通して人を清くする。もし悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。というのは、人の罪深い本性が捨てられることもないだろうし、人は罪が赦されるというところで行き詰まるだろうからである。罪のためのいけにえを通して、人は罪を赦されてきた。というのは十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に留まっており、人は依然として罪を犯し、神を拒むことができ、よって神はまだ人類を得ていない。だからこの段階の働きで神は言葉を用いて人の墮落した性質を示し、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段階よりもっと意味があり、もっと有益である。というのは、今、人に直接いのちを提供し、人の性質を完全に新しくできるのは言葉だからである。それはもっと徹底的な働きの段階である。だから、終わりの日の受肉は神の受肉の意義を完成し、人の救いのための神の経営計画を完全に終了したのである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

あなたは終わりの日にイエスが降臨することだけは知っているが、正確にはどのように降臨するのだろうか。あなた方のように贖われたばかりで、まだ変えられておらず、神に完全にされてもいない罪人が、神の心に適うだろうか。古い自我を持ったままのあなたは、イエスによって救われたのは事実であり、神の救いのおかげで罪人とは見なされなくなったが、これは、あなたには罪や汚れがないという証拠ではない。変えられないままであれば、あなたはどのようにして聖いものとなれるのか。内側では、あなたは汚れに満ち、自分勝手に卑劣であるにもかかわらず、イエスと共に降臨することを望む――あなたはそこまで幸運ではない。あなたは神を信じる上での段階を一つ見落としている――あなたは単に罪から贖われただけで、変えられてはいないのである。あなたが神の心に適うためには、神が自らあなたを変えて清める働きをしなければならない。もしあなたが罪から贖われただけなら、聖さを得ることはできない。このように、あなたは、神が人を経営する働きの一段階、つまり変えられて完全にされるという重要な段階を逸したために、神の良き祝福を共有する資格はないであろう。よって、贖われたばかりの罪人であるあなたは、直接神の嗣業を受け継ぐことはできないのである。

『言葉は肉において現れる』の「呼び名と身分について」より

終わりの日の働きにおいては、言葉はしるしや不思議の顕示よりも力強く、言葉の権威はしるしや不思議の権威を超越する。言葉は人の心のすべての墮落した性質を現す。あなたは自分でそれらを認識することはできない。それらが言葉を通して明らかにされ

るとき、あなたは当然それを認識し、否定することはできず、完全に確信するであろう。これは言葉の権威ではないであろうか。これは言葉の現在の働きによって得られる成果である。だから、病気を癒したり悪霊を追い出したりすることで、人が罪から完全に救われることはなく、またしるしや不思議を顕すことによっても、すっかり完全にされることはないのである。癒したり悪霊を追い出したりするための権威は人に恵みを与えるだけで、人の肉は依然としてサタンに属し、墮落したサタンの性質は依然として人の中に残っている。すなわち、まだ清められていないものは依然として罪と汚れに属しているということである。人は言葉によって清められて初めて、神のものとされ、清められる。人から悪霊を追い出したり、人を贖ったときは、それはただサタンの手から人を捕まえ、神のもとに戻したことでしかなかった。神によって清められていないし、変えられてもいないなら、人は墮落したままである。人の中には、依然として汚れ、敵対心、そして不従順が存在する。人は贖いを通して神のもとに帰っただけで、人は神について何の認識もなく、依然として神に抵抗し、神を裏切っている。人が贖われる前、サタンの毒の多くがすでに人の中に植え付けられていた。サタンによる墮落を何千年も経た人間には、神に抵抗する性質が既に定着して存在していた。だから、人が贖われたとき、それは人が高い代価で買い取られた贖い以上のものではなく、人の中の毒を持った性質は取り除かれてはいなかった。ここまで汚れた人は、神に仕えるにふさわしくなる前に変えられなければならない。裁きと刑罰の働きを通して、人は自分の中の汚れて墮落した本質を完全に知るようになる。そして、人は完全に変わり、清くなることができる。この方法でのみ、人は神の玉座の前に戻るのにふさわしくなることができる。この日なされるすべての働きは人が清められ変えられるためである。言葉による裁きと刑罰、また精錬を通して、人は墮落を捨て、清くされることができる。この段階の働きを救いの働きと考えるよりは、むしろ清めの働きと言った方が適切であろう。実際、この段階は第二段階の救いの働きであるとともに征服の段階である。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

神の今回の受肉において、神の働きは主に刑罰と裁きを通して神の性質を表すことである。これを基礎として、神は人により多くの真理をもたらし、より多くの実践方法を示し、こうして人を征服し、墮落した性質から人を救うという神の目的を達成する。これが神の国の時代における神の働きの背後にあるものである。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

終わりの日の神の裁き、刑罰の働き、すなわち、最後の清めの働きの中でゆるがず耐

え抜ける人たちが、神と共に最後の安息の中に入る人たちである。したがって、安息に入る人はみな、神の最後の清めの働きを経て初めて、サタンの支配から振りほどかれ、神によって得られるだろう。最終的に神によって得られたこのような人々が最終的な安息へと入るのである。刑罰や裁きという神の働きの実質は、人類を清めることであり、それは、最終的な安息の日のためである。さもないと、全人類は、それぞれ自身と同類のものに属することができないか、あるいは安息の中に入ることができない。この働きは、人類が安息の中に入るための唯一の道なのである。清めの働きこそが人類の不義を清め、刑罰と裁きの働きこそが人類の中のそれらの不従順なものを全部さらけ出すのである。それによって、救うことのできる人と救うことのできない人とが識別され、生き残ることのできる人と生き残ることのできない人とが区別されるようになる。神の働きが終わる時、生き残ることのできる人は、清められ、人類のより高い領域の中に入って、地上でのよりすばらしい第2の人生を享受する。すなわち、彼らは人類の安息の日に入って神と共に生活する。生き残ることのできない人が刑罰や裁きを受けた後、彼らの正体が全て露呈される。それから彼らはみな滅ぼされ、サタンと同じように、もう地上で生きることができなくなる。未来の人類はもうこのような人々を含まない。このような人々は究極の安息の地に入る資格がなく、神と人が共有する安息の日に入る資格もない。なぜなら、彼らは懲らしめの対象であり、悪者、義なる人ではないからである。…悪を罰し、善に報いるという神の最終的な働きは、全て全人類を完全に清めるために行われる。そうすることによって、完全に清くなった人類を永遠の安息に導き入れることができる。神のこの段階の働きは最も重要な働きであり、神の経営の働き全体の最後の段階である。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

終わりの日のキリストはいのちをもたらし、変わることなく永遠に続く真理の道をもたらす。この真理を通して人はいのちを得ることができ、この真理を通してのみ、人が神を知り神に良しと認めてもらうことができる。あなたが終わりの日のキリストが与えるいのちの道を求めないのなら、あなたは決してイエスに良しと認めてもらうことはできず、天の国の門をくぐる資格を得ることはない。なぜなら、あなたは歴史の操り人形であり歴史に囚われた人だからだ。規則や文字に支配され、歴史に束縛される者は、決していのちを得ることはなく、永遠のいのちの道を得ることはない。なぜなら、彼らが持っているのは、玉座から流れるいのちの水ではなく、彼らが何千年もしがみついていた汚水でしかないからだ。いのちの水を与えられない者は永遠に死体であり、サタンの

おもちゃであり、地獄の子である。そのような者がどうして神に会うことができようか。あなたが過去にしがみつき、足踏みをしながら現状維持しようとし、現状を変え歴史を棄てようとししないなら、あなたは神に常に反することになるのではないか。神の働きの歩みは、押し寄せる波や轟く雷鳴のごとく広大で力強い。それでも、あなたは自分の愚に固執して何もしないまま、座して自滅を待っている。このままで、あなたが小羊の足跡に従う者だと見なされることはあろうか。あなたが神として固執するものが、常にあたらしく古びない神だと言えようか。あなたの黄ばんだ本の言葉があなたを新しい時代に運んでくれることがあろうか。神の働きの歩みをたどれるよう導いてくれようか。そして、それらがあなたを天国に引き上げられるだろうか。あなたの手につかんでいる物は、つかの間の慰めを与えられる文字でしかなく、いのちを与えられる真理ではない。あなたが読む言葉は、あなたの舌を肥やせるだけで、あなたが人の人生を知るうえで助けとなる知恵の言葉ではなく、ましてやあなたを完全にするように導いてくれる道などではない。この食い違いを見て、あなたはよく考えてみようとは思わないだろうか。そこに含まれる奥義を理解させてはくれないだろうか。あなたは、自分で自分を天国に引き上げ、神に会わせることができるのか。神が来なくても、あなたは自らを天国に引き上げ、神と共に家族の幸福を楽しむことができるのか。あなたは未だに夢を見ているのか。それなら、わたしは勧める。夢を見るのを止めよ。そして誰が今働いているのかを見よ。誰が今、終わりの日に人を救う働きをしているのかを見よ。そうしなければ、あなたは決して真理を得ることはなく、決していのちを得ることもない。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

キリストが語る真理に依り頼むことなくいのちを得ることを望む者は、地上で最も愚か者であり、キリストがもたらすいのちの道を受け入れない者は幻想の世界で迷子になった者だ。だから、終わりの日のキリストを受け入れない者は神から永遠に嫌われるとわたしは言う。キリストは、終わりの日に神の国への門となる存在であり、誰も迂回することはできない。キリストを通してでなければ、誰も神に完全にしてもらうことはできない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を受け入れ、神の道に従わなければならない。真理を受け取ることも、いのちの供給を受け入れることもなく、祝福だけを得ようと考えてはならない。キリストは、彼を真に信じる者にいのちを与えるために終わりの日にくる。その働きは、古い時代を終わらせ新しい時代に入るためのもので、新しい時代に入る人が必ず進まなければならない道だ。あなたが彼を認めず、彼を非難したり、冒涇したり、さらに迫害したりするなら、あなたは永遠に火で焼かれなければ

ならず、神の国には決して入れない。このキリストこそ、聖霊の現れであり、神の顕現であり、神が地上での業を託した者だからだ。だから、あなたが終わりの日のキリストがする全てのことを受け入れられないなら、あなたは聖霊を冒瀆しているとわたしは言うのだ。聖霊を冒瀆する者が受けなければならない報いは、誰の目にも明らかだ。そして、あなたが終わりの日のキリストに敵対し、拒むなら、誰もその結末をあなたに代わって引き受けることはできないともわたしは言おう。さらに、これから先、あなたが神に認めてもらう機会はない。たとえあなたが自らの罪を償おうとしても、あなたが神の顔を拝することは二度とない。なぜなら、あなたが敵対したのは人ではなく、あなたが拒んだのは卑小な存在ではなく、他でもないキリストだからだ。あなたはこの結末に気づいているのか。あなたが犯したのは小さな過ちではなく、重罪だ。だから、全ての人に忠告する。真理の前に牙をむき出したり、軽率に批判したりすることのないように。あなたにいのちを与えるのは真理以外にはなく、あなたを生まれ変わらせ、神の顔を仰ぐことができるようにしてくれるものは、真理以外にはないからだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

第2章 神の名の真理

1. なぜ神には名前があるのか、ひとつの名前は神の全体を表すことができるのか

関連する神の言葉

「神は私たちと共におられる」というイエスの名は神の性質の全体を表すことができるであろうか。それは神をはっきりと表現することができるであろうか。もし人が神はイエスとだけ呼ばれ、神はその性質を変えることができないので、他の名前を持つことはないと言うなら、そのような言葉は神への冒瀆である。あなたがたは、「神は共におられる」というイエスの名が神の全体を表すことができると信じてるのだろうか。神は多くの名前で呼ばれることができるが、それらの多くの名前の中に、神がもっているすべてを要約できる名前はひとつとしてなく、神を完全に表すことができる名前はひとつもない。そして神は多くの名前を持っているが、これらの多くの名が神の性質を余すところ無く明確に表現することはできない。というのは神の性質はあまりにも豊かで、人の認識をはるかに越えているからである。人間の言語は、神を余すところ無く要約する

ことができない。神の性質について人間が知っていることすべてを要約するには、人間には限られた語彙しかない。偉大な、りっぱな、驚くべき、計り知れない、至高の、聖なる、義なる、知恵に満ちたなど、言葉が多すぎる。このように限られた語彙では、人間が神の性質に関して目の当たりにしたことのほんの少しでも記述することは不可能である。もっと最近になって、多くの人々が心の中の熱情をもっと上手に記述しようと、さらに言葉を追加した。神は偉大すぎる。神は神聖すぎる。神は美しすぎる。今日、このように言うことはその頂点に達しているが、それでも人間は神を明確に表現できずにいる。だから、人間にとって神には多くの名前があるが、神には名前がない。これは神の存在はあまりに豊富で、人間の言語は不十分すぎるからである。ひとつの特定の言葉あるいは名前では神のすべてを表すにはあまりにも不十分である。では神はひとつの決まった名前を持つことができるだろうか。神はあまりにも偉大で聖であるのに、なぜ神がそれぞれの新しい時代に名前を変えてはいけないのか。それだから、神が自ら働きを行なうそれぞれの時代に、神が行なう働きを要約するその時代に合った名前を用いるのである。神はその時代における神の性質を表すために、その時代の意義を反映する特定の名前を用いる。神は自身の性質を表現するために人間の言葉を用いる。それでも、霊的な体験をし神をじかに見たことのある多くの人々が、ひとつの特定の名前が神のすべてを表現することはできないといまだに感じている。これはなんと残念なことであろうか。それで人間は神を名前で呼ぶことはなく、ただ「神」と呼ぶのである。人間の心は愛であふれているようでありながら、それはまた矛盾に悩まされているようでもある。人間は神をいかに説明するべきかが分からないからである。神であるものは豊かすぎて、それを表現する方法などどうしても存在しないのである。神の性質を要約できるひとつの名前はなく、神がもつもの、神であるもののすべてを表現できるひとつの名前もないのである。もしも誰かがわたしに「正確には何という名前を使いますか」と尋ねるならば、こう言うであろう。「神は神である。」これこそが神にとって最良の名前ではないのか。神の性質の最高の要約ではないのか。神の名を求めてなぜそんなに骨をおるのか。名前のことで寝食を忘れて、なぜそこまで熱心に考えるのか。神がヤーウェ、イエス、メシヤと呼ばれない日がやって来るだろう――神はただ創造主と呼ばれるであろう。その時、神が地上で呼ばれたすべての名前は終わりを迎える。というのは神の地上での働きは終わり、その後神は名前を持たなくなるからである。すべての物が創造主の支配下に入るときに、何故神を適切ではあるが不完全な名前で呼ぶのか。今も神の名を求めているのか。未だに神はヤーウェとしか呼ばれないと敢えて言うのであろうか。未だに神はイエスとしか呼ばれないと敢えて言うのであろうか。神を冒瀆する罪を負うこと

ができるのか。神は本来どんな名前も持たなかったということを知るべきである。神にはすべき働きがあり、人類を経営しなければならなかったので、一、二の、あるいは多くの名前を持っただけであった。どのような名で呼ばれるにしても、それは神自身が自由を選んだのではないだろうか。神はそれを決めるのに被造物を必要とするだろうか。神が呼ばれる名前は人が理解できること、人の言葉にそったものであるが、その名前は人によって要約されることはできない。ただ天には神がいて、それは神と呼ばれ、それは偉大な力を持った神であり、あまりにも知恵があり、あまりにも崇められ、あまりにも素晴らしく、あまりにも神秘的で、あまりにも全能で、そしてそれ以上言うことはない。それがあなたが知っていることのすべてである。このように、イエスの名だけで神を表すことができるだろうか。終わりの日が来ると、神の働きは依然として神が行なうが、時代が異なるので神の名は変わらなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（3）」より

各時代、各段階の働きにおいて、わたしの名前は根拠のないものではなく、代表的意味を持っている。それぞれの名前は一つの時代を表す。「ヤーウェ」は律法の時代を表し、イスラエルの人々が崇拝した神の敬称である。「イエス」は恵みの時代を表し、恵みの時代に救われたすべての人々の神の名前である。人が終わりの日に救い主イエスが到来することをまだ望み、ユダヤの地にいたときの姿で到来することをまだ期待するなら、6000年の経営（救いの）計画全体は贖罪の時代に停止し、それ以上進展することはできないだろう。そのうえ、終わりの日は決して来ることはなく、時代にピリオドが打たれることはないだろう。救い主イエスは人類の贖罪と救済のためだけにあるからである。わたしは恵みの時代のすべての罪人のためにイエスの名を名乗ったのであり、わたしが人類全体を終らせるのはこの名においてではない。ヤーウェ、イエス、メシアはすべてわたしの霊を表すが、これらの名前は単にわたしの経営（救いの）計画の異なる時代を示すものであり、わたしの全体を表すものではない。地上の人々がわたしを呼ぶ名前のどれも、わたしの性質全体、わたしであるすべてを明確に示すことはできない。それらは単に異なる時代にわたしが呼ばれる異なる名前にすぎない。だから最後の時代——終わりの日の時代——が来た時、わたしの名前はまた変わるのである。わたしはヤーウェやイエスとは呼ばれないし、ましてやメシアとは呼ばれないが、力ある全能の神自身と呼ばれ、この名前の下でわたしは時代全体を終らせるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

2. なぜ神は異なる時代に異なる名前と呼ばれるのか

関連する神の言葉

それぞれの時代で、神は新しい働きを行い、新しい名前と呼ばれる。どうして神が異なった時代に同じ働きをすることができるのか。どうして神が古いものにしがみついていることがありえようか。イエスの名は贖いの働きのために使われたが、それならば終わりの日にイエスが再臨するとき依然として同じ名前と呼ばれるであろうか。イエスはまだ贖いの働きをするのであろうか。なぜヤーウェとイエスはひとつであるのに、違う時代には異なる名前と呼ばれるのか。それは働きの時代が違うからではないのか。ひとつの名前で神全体を現わすことができるのだろうか。この様に、神は違う時代には異なる名前と呼ばれなければならない。そして時代を変え時代を現わす名前を用いなければならない。なぜなら、ひとつの名前だけで神を完全に表すことはできないからである。そしてそれぞれの名前はある時代の神の性質を表すだけで、神の働きを表すためだけに必要である。よって、神は時代全体を表すために、どんな名前であれ神の性質に合う名前を選ぶことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（3）」より

「ヤーウェ」はわたしがイスラエルで働きを行っている間に用いた名前であり、人を憐れみ、人をののしり、人の生活を導くことのできる、イスラエル人（神に選ばれた人々）の神という意味である。それは偉大な力を所有し、英知に満ちた神という意味である。「イエス」はインマヌエルであり、愛に満ち、慈悲心に満ち、人の罪を贖う捧げものを意味する。イエスは恵みの時代の働きを行い、恵みの時代を表すので、経営（救いの）計画の一部分しか表すことはできない。すなわち、ヤーウェだけがイスラエルの選ばれた人々の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、モーセの神、イスラエルのすべての人々の神である。そこで現代、すべてのイスラエル人は、ユダヤの部族は別として、ヤーウェを崇拝している。彼らは祭壇でヤーウェに捧げものをし、神殿で祭司の祭服を着て神に仕える。彼らが望むのは、ヤーウェの再来である。イエスだけが人類の救い主である。イエスは罪から人類を救った捧げものである。つまり、イエスの名前は恵みの時代から来ており、恵みの時代の贖罪の働きのために存在した。イエスの名前は恵みの時代の人々が生き返り、救われるために存在したのであり、全人類の贖罪のための特別な名前である。そこで、イエスという名前は贖罪の働きを表し、恵みの時代を意味する。ヤーウェの名前は律法の下に生きたイスラエルの人々のための特別な名前であ

ある。各時代、各段階の働きにおいて、わたしの名前は根拠のないものではなく、代表的意味を持っている。それぞれの名前は一つの時代を表す。「ヤーウェ」は律法の時代を表し、イスラエルの人々が崇拝した神の敬称である。「イエス」は恵みの時代を表し、恵みの時代に救われたすべての人々の神の名前である。人が終わりの日に救い主イエスが到来することをまだ望み、ユダヤの地にいたときの姿で到来することをまだ期待するなら、6000年の経営（救いの）計画全体は贖罪の時代に停止し、それ以上進展することはできないだろう。そのうえ、終わりの日は決して来ることはなく、時代にピリオドが打たれることはないだろう。救い主イエスは人類の贖罪と救済のためだけにあるからである。わたしは恵みの時代のすべての罪人のためにイエスの名を名乗ったのであり、わたしが人類全体を終らせるのはこの名においてではない。ヤーウェ、イエス、メシアはすべてわたしの霊を表すが、これらの名前は単にわたしの経営（救いの）計画の異なる時代を示すものであり、わたしの全体を表すものではない。地上の人々がわたしを呼ぶ名前のどれも、わたしの性質全体、わたしであるすべてを明確に示すことはできない。それらは単に異なる時代にわたしが呼ばれる異なる名前にすぎない。だから最後の時代――終わりの日の時代――が来た時、わたしの名前はまた変わるのである。わたしはヤーウェやイエスとは呼ばれないし、ましてやメシアとは呼ばれないが、力ある全能の神自身と呼ばれ、この名前の下でわたしは時代全体を終らせるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

わたしはかつてヤーウェとして知られていた。わたしはメシアとも呼ばれ、また、人々はかつてわたしを救い主イエスとも呼んだ。わたしを愛し、尊敬したからである。しかし、今日わたしは人々が過去に知っていたヤーウェでもイエスでもない。わたしは終わりの日に戻ってきた神、時代を終らせる神である。わたしは、わたしの全性質を余すところなく顕し、権威、名誉、栄光に満ちて地の果てから立ち上がる神自身である。人々は一度もわたしと関わったことがなく、わたしを知ったことがなく、ずっとわたしの性質に無知であった。天地創造から今日に至るまで、わたしを見たことがある者はひとりとしていなかった。これは終りの日に人の前に現れるが、人々の間に隠れている神なのである。神は真実で現実的に、照りつける太陽や燃え立つ火のように、力に満たされ、権威にあふれて人々のあいだに存在する。わたしの言葉によって裁きを受けない人や物は一人として、一つとしてない。燃える火によって浄化されない人や物は一人として、一つとしてない。最終的には、あらゆる諸国はわたしの言葉のために祝福され、わたしの言葉のために粉々に砕かれもする。このようにして、終わりの日にすべての人は、

わたしが戻ってきた救い主であり、人類のすべてを征服する全能神であり、かつては人のための罪の捧げものであったが、終わりの日にはすべてを焼き尽くす太陽の炎にもなり、またすべてのものを露わにする義の太陽でもあることを理解するだろう。それが終わりの日のわたしの働きである。わたしはこの名前を名乗り、この性質を持ち、すべての人がわたしが義の神であり、照りつける太陽、燃え立つ火であることが理解できるようにする。そうするのはすべての人が唯一の真の神であるわたしを崇め、わたしの本当の顔を見ることができるようである。わたしはイスラエル人たちの神であるだけでなく、贖い主であるだけでなく、天、地、海の至る所にあるすべての創造物の神である。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

神の名は変わらないという人たちがいる。ではなぜヤーウェという名前がイエスになったのか。メシアの到来についての預言はあるが、ではなぜイエスという名の人々が来たのか。なぜ神の名は変わったのか。そのような働きはずっと以前に実行されなかったか。神は今日新しい働きをすることはできないのか。昨日の働きは変えることができ、イエスの働きはヤーウェの働きから続いて起こることができる。ではイエスの働きを別の働きが継承することはできないのか。ヤーウェの名前をイエスに変えることができるなら、イエスの名前も変えることはできないのか。これは特異なことではなく、人々がそう考えるのはひとえに彼らの短絡思考のせいである。神はつねに神であり、神の働きや名前が変化しようとも、その性質や知恵は永遠に変わらない。神はイエスという名前ではか呼ぶことはできないと信じているならば、あなたはあまりに無知である。イエスが永遠に神の名前であり、神は永遠に、そしてつねにイエスという名前で知られており、これは決して変わることはないとあえて断言するのか。律法の時代を終わらせたのはイエスの名前であり、最後の時代を終わらせるのもそうであると確信をもって断言するのか。イエスの恵みが最後の時代を終わらせることができると誰が言えるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「自己の観念で神を定義する人がどうして神の啓示を受けることができるのか」より

もしどの段階においても神の働きが常に同じで、神がいつも同じ名前と呼ばれるなら、人はどのように神を知るのだろうか。神はヤーウェと呼ばれなければならない、ヤーウェと呼ばれる神以外に、他の名前と呼ばれるものは神ではない。あるいは神はイエスとだけ呼ばれ、神がイエス以外の他の名で呼ばれることはない。イエス以外では、ヤーウェは神ではなく、全能神も神ではない。人は神が全能であると信じているが、神は人と

ともにいる神である。神は人とともにいるから、イエスと呼ばれなければならない。こうすることは教義に従い、神をある範囲に束縛することである。神がそれぞれの時代に行なう働き、神が呼ばれる名前、神が持つ姿、今日までの神の働きのそれぞれの段階などは、ひとつの規律に従うことはないし、いかなる束縛にさらされることもない。神はヤーウェであり、しかしイエスでもあり、メシヤ、全能神でもある。神の働きは徐々に変わることができ、それにあわせて神の名にも変化がある。どのひとつの名も神を完全に表すことはできず、神が呼ばれるすべての名が神を表すことができ、神がそれぞれの時代に行なう働きが神の性質を表している。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

イエスが行った働きはイエスの名を表し、恵みの時代を代表した。ヤーウェによってなされた働きはヤーウェを表し、律法の時代を代表した。それらの働きはひとつの霊による二つの異なる時代における働きであった。…それらは二つの違った名前と呼ばれたが、二つの段階の働きはひとつの霊によって行なわれ、第二の働きは第一の働きの続きであった。名前が違い、働きの内容も違っていたように、時代も違った。ヤーウェが来たときは、それはヤーウェの時代で、イエスが来たときは、それはイエスの時代であった。だから神が来るときはそのたびに神はひとつの名で呼ばれ、神はひとつの時代を表し、新しい道を開く。それぞれの新しい道で神は新しい名前を持ち、それは神は常に新しく、決して古くないということと、神の働きは常に前進していることを示すのである。歴史は常に前進しており、神の働きは常に前進している。神の六千年の経営計画が終わりに達するためには、前進し続けなければならない。毎日、神は新しい働きを行なわなければならない、毎年、神は新しい働きを行なわなければならない。神は新しい道を開き、新しい時代を始め、新しくさらに偉大な働きを始め、そして新しい名前と新しい働きをもたらさなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

第3章 神の働きの三段階についての真理

1. 人を経営する働きとは何か

関連する神の言葉

人類を経営する働きは三つの段階に分けられるが、それは人類を救う働きが三つの段階に分けられることを意味している。これら三つの段階には、天地創造の働きは含まれず、むしろ、律法の時代、恵みの時代、そして神の国の時代の三つの段階の働きのことである。天地創造の働きは、人類全体を作り出す働きであった。それは人類を救う働きではなく、人類を救う仕事には関係がなかった。なぜなら、天地創造の時、人類はサタンによって墮落させられておらず、人類を救う働きを実行する必要がなかったからである。人類を救う働きは、人類がサタンに墮落させられた後によりやく始まり、そこで人類を経営する働きも人類が墮落させられた後によりやく始まったのである。言い換えれば、人を経営する神の働きは、人類を救う働きの結果として始まったもので、天地創造の働きから生じたものではない。人類が墮落した性質を持つようになったあと初めて、経営の働きが存在するようになった。だから人類を経営する働きは、四つの段階もしくは四つの時代というよりも三つの部分を含むのである。これこそが人類を経営する神の働きへの正しい言及の仕方である。最後の時代が終わるとき、人類を経営する働きは完全に終わっている。経営の働きの終結は、人類すべてを救う働きが完全に終了し、人類がその旅路の終わりに到達したことを意味する。人類全てを救う働きがなければ、人類を経営する働きも存在しないし、三つの段階の働きもないだろう。それは正に人類の墮落ゆえに、また人類がそれほど性急に救いを必要としていたがために、ヤーウェは天地創造を終わらせ、律法の時代の働きを始めたのである。そうして初めて、人類を経営する働きが始まったのだが、それはつまり人類を救う働きもそこで初めて始まったことを意味する。「人類を経営する」とは、新たに造られた地上の人類（つまり、まだ墮落させられていない人類）の生活を導くという意味ではない。むしろそれは、サタンによって墮落させられた人類の救いであり、つまりは、この墮落した人類を変化させることである。これが人類を経営することの真意である。人類を救う働きが天地創造の働きを含まないのだから、人類を経営する働きも天地創造の働きを含まず、ただ天地創造とは別の三つの段階の働きだけが含まれる。人類を経営する働きを理解するには、三つの段階の働きの歴史を知ることが必要であるが、これは、救われるために、すべての人が知っていなければならないことである。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

経営の働きは、ただ人類のため故に生じたのであり、それは人間の存在によってのみ生み出されたことを意味している。人類が存在する以前、あるいは天と地と万物が造ら

れた時には、経営はなかった。もし神のすべての働きにおいて人間に有益な実践が無かったならば、すなわち神が墮落した人間に適切な要求をしなかったならば（神によって行われた働きの中に人間の実践に適した道が無かったならば）、その働きは神の経営とは呼べないであろう。神の働き全体に含まれるのが、墮落した人間に実践の取り組み方を教えることだけで、神が自身の事業を行わず、神の全能性や知恵をほんの少しも示さなかったとしたら、神の人間への要求がどれほど高度であったとしても、また神が人間の間でどれほど長く生活したとしても、人間は神の性質について何も知ることがないであろう。そうした場合、この種の働きは尚更、神の経営と呼ばれる価値が無いであろう。簡単に言えば、神の経営の働きは、神によって行われる働きであり、神のものとされた者たちが神の導きの下で行う全ての働きである。そうした働きは、経営として要約することが可能であり、人間に対する神の働き、及び神に従うすべての者たちによる神への協力を指している。全てを総称して経営と呼ぶことができる。ここでは、神の働きをビジョンと呼び、人間の協力を実践と呼んでいる。神の働きが高度であればあるほど（つまりビジョンが高度であればあるほど）、神の性質が人間にとって一層明白となる。そして、それが人間の観念と相入れなければ相入れないほど、人間の実践と協力は一層高度になる。人間に対する要求が高度であればあるほど、神の働きは人間の観念とは一層相入れないものとなり、その結果、人間の試練と、人間が満たすよう要求される基準もまたより高度なものとなる。この働き完了する時には、全てのビジョンが完成され、人間が実践することを要求される事は、完全の極みに達するであろう。この時は、各人が種類によって分類される時でもある。なぜなら、人間が知ることを求められている事は、この時既に人間に示されているからである。したがって、ビジョンが絶頂に達する時、働きもそれに従って終わりを迎え、人間の実践もまた頂点に達するであろう。人間の実践は、神の働きに基づき、神の経営は、人間の実践と協力があって初めて、完全に表されるのだ。人間は神の働きの傑作であり、神による経営の働き全体の目的であり、また神の経営全体の産物でもある。もし神が単独で、人間の協力無くして働くなら、神の働き全体の結晶として機能するものは無く、それでは神の経営にほんの少しの意義も無いであろう。神の働き以外にあり、その働きを表現し、その全能性と知恵を証明することができる適切な対象を選択することによってのみ、神の経営の目的を達成し、この働きの全てを用いてサタンを完全に打倒するという目的を達成することが可能となる。したがって、人間は、神の経営の働きにおいて不可欠な部分であり、神の経営を結実させ、その最終目的を達成することができる唯一の存在である。人間以外には、そうした役割を担える生物は無い。人間が真に経営の働きの結晶となるには、墮落した人類の不従

順を完全に一掃しなければならない。それには、人間が様々な場合に適した実践を与えられ、また、それに対応する働きを神が人間の間で行うことが要求される。このようにしてのみ、最終的に、経営の働きの結晶となるべき人々の群を得ることができる。人間の間で為される神の働きは、それだけでは、神自身を証しすることができない。そうした証を実現するためには、神の働きを達成するに適した生きた人間が必要である。神は、まずこれらの人々に対して働きを行い、これらの人々彼らにより神の働きが表現され、そのようにして、創造物の中で神のこのような証しが為されるのだ。そして、この点において、神は働きの目的を達成することになる。神は独りで働いてサタンを打ち負かすことはしない。なぜなら、神はあらゆる創造物の中で、直接的自らを証しすることはできないからである。もし神がそうするならば、人間を完全に確信させることは不可能である。したがって神は、人間を征服するためには、人間に働きかけなければならず、そうして初めて神は全ての創造物の中で証しを得ることができるようになる。もし神が単独で働き、人間の協力が無く、また人間の協力が要求されないなら、人間は決して神の性質を知ることができず、神の旨に永遠に気付かないであろう。このような場合、それを神の経営の働きと呼ぶことはできないであろう。もし人間だけが懸命に努力して、求め、労するだけで、神の働きを理解しないのなら、人間はいたずらをしているようなものである。聖霊の働きが無ければ、人間の為すことはサタンのものであり、人間は反抗的であり、悪を行う者である。墮落した人間によって行われるすべての事の中にサタンが示され、神と一致する事は一切無く、全てはサタンの表れとなる。述べられた全ての事のうち、ビジョンと実践以外の事は一切無い。人間は、自らの観念を捨てて従来備えていなかった事を得ることができるようになり、ビジョンの基礎の上に実践と、服従への道を見つけるのだ。神は、人間が神に協力すること、人間が神の要求に完全に服従することを求める。そして人間は神自身が行う働きを目の当たりにすること、神の全能の力を経験し、神の性質を知ることがを求める。要約すると、これらが神の経営である。神が人間と一体となることが経営であり、それは最大の経営である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

これが神による経営である。人類をサタンに引き渡し—神が何であるか、創造主が何であるか、神をどう礼拝するか、なぜ神に服従することが必要なのかを知らない人類を——サタンが墮落させるままにしたのである。神はそれから一步一步、人間が完全に神を礼拝しサタンを拒むまで、人間をサタンの手から取り戻す。これが神の経営である。これはみな神話的な物語のようで、わけがわからないように思われる。人々がこれを神

話的な物語のように感じるのは、過去数千年の間にどれほど多くのことが人間に起こったかを知らないからであり、まして、この宇宙の広がりにおいてどれほど多くの物語が生まれたか、思いも及ばないからである。そのうえ、物質界の外に存在する、さらに驚くべき、はるかに恐ろしい世界があるのを意識することができず、人間の目では見ることができないでいるからである。これは人間には理解し難いことに思われるが、それは人間には神による人類の救いや神の経営の働きの意義が理解できず、また、人間が最終的にどのようなことを神が望んでいるかを知らないからである。そのような人類は、サタンに墮落させられる前のアダムとエバのようなものだろうか。いや、そうではない。神の経営は、神を礼拝し、神に従う一群の人々を得るためのものである。この人類はサタンにより墮落させられたが、もはやサタンを父とみなしておらず、サタンの醜い顔に気づいて拒み、神の裁きと刑罰を受けるため、神の前に来る。その人間は何が醜いか、それが聖いものとどう異なっているかを知っており、神の偉大さとサタンの邪悪さを認識している。このような人類は、もはやサタンのために働かず、サタンを崇めず、サタンを祭ることをしない。それは、その人たちが真に神のものとなった人々だからである。これが神による人類経営の意義である。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

2. 神の働きの三段階の目的

関連する神の言葉

わたしの全経営（救いの）計画、六千年にわたる経営（救いの）計画は三段階、あるいは三時代から成る。それは始まりの律法の時代、次に恵みの時代（贖いの時代でもある）、そして終わりの日の神の国の時代である。これら三時代におけるわたしの働きは、各時代の性質によって異なるが、それぞれの段階においてこの働きは人間の必要性に対応している。正確には、わたしがサタンに対して行なう戦いでサタンが用いる策略に応じて働きは行われる。わたしの働きの目的は、サタンを打ち負かし、わたしの知恵と全能を明らかにし、サタンの策略をすべてあばくことであり、それによりサタンの支配下に生きる人類全体を救うことである。それはわたしの知恵と全能を示し、サタンの耐え難いおぞましさを明らかにするものである。それに加えて、被造物が善悪を区別し、わたしこそがすべてを治める者であることを認識し、サタンが人類の敵であり、下の下、悪い者であることをはっきりと見極められるようにし、善と悪、真理と偽り、聖さと

汚れ、偉大さと卑劣の違いを絶対的な明白さをもって区別できるようにすることである。それにより無知な人類は、人類を墮落させるのはわたしではなく、創造主であるわたしだけが人類を救うことができ、人々が享受できるものを彼らに授けることができることをわたしに証しし、わたしこそがすべてを治める者であり、サタンは後にわたしに背いたわたしの被造物の一つにすぎないと人類は知ることができる。わたしの六千年の経営（救いの）計画は三段階に分けられており、わたしがそのように働くのは被造物がわたしの証人となり、わたしの心を知り、わたしこそが真理であることを知らしめるといふ成果を達成するためである。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

あなたは、神の働きが何であれ、その働きの目的は変化せず、神の働きの核心は変化せず、そして神の人に対する心も変わらないことを知らなければならない。神の言葉がどれほど厳しいものであっても、環境がどれほど不利であっても、神の働きの原則は変わらないし、人を救うという神の意図も変わらないのである。それが人の終わり、あるいは人の終着点の啓示ではなく、最終段階の働き、あるいは神の経営（救いの）計画全体を終わりにする働きでもないならば、また神が人に対して働いている最中のことであるならば、神の働きの核心は変わらない。つまりそれは常に人類の救いなのである。これこそがあなた方の神への信仰の基盤であるべきだ。三つの段階の働きの目的は全人類の救いであり、すなわちそれは人をサタンの領域から完全に救い出すことを意味する。三つの段階の働きには、それぞれ異なる目標と意味があるが、そのいずれもが人類を救う働きの一部であり、人類が必要とするものに応じて実行される異なる救いの働きなのだ。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

ここでは、神が人間を創った時点以降における神の旨と考え、そして行動についてまとめ、天地創造から恵みの時代の開始時点までに神が行った行為について検討する。その後、神の考えのうち、人間に知られていないものがどれかを知ることが出来るようになり、そうした未知の考えから、神の経営計画の秩序を明確化して神が経営の業を作った背景やその起源と展開過程を完全に理解し、そして神の経営の業により神が望んでいる結果、すなわち神の経営の業の核心と目的について完全に理解することが可能となる。これらの事柄を理解するためには、人間が存在しなかった、遠い過去の静寂の時代まで遡る必要がある…

神が目覚めた時、神が最初に考えたことは、常に神とともに生きる人、すなわち命ある人間を創ることであった。この人間は神の言葉を聞き、神が信頼して話すことのできる者であった。次に、神はまずひと握りの土を取り上げ、神が考えていた最初の人間を創り、その人間をアダムと名付けた。命を持ち、息をする人間を創った後、神は何を感じたであろうか。神は、ともに過ごす愛すべき人間が居ることの喜びを、初めて感じたのである。また神は、父としての責任と、それに伴う憂いを初めて感じた。この生ける人間という存在は、神に幸福と喜びを与えたので、神は初めて慰めを感じた。これが、神が自身の考えや言葉だけでなく、自身のふたつの手によって実現した最初の業であった。こうした命を持ち、息をして、肉と血で創られた身体を持ち、神と話ができる人間の存在が神の前に現れた時、神は嘗てない喜びを感じた。神は責任を真剣に感じ、人間という生き物に心惹かれるだけでなく、人間の行動すべてが神を感動させ、神の心を和ませた。こうして、この人間という生き物が神の前に現れたときに初めて、神は、更なる人間を得たいという考えを持った。こうした一連の出来事は、こうした神の当初の考えから始まったことである。神にとって、こうした出来事は初めてのことであったが、その当初の出来事においては、神が感じたのが喜びであれ、責任であれ、憂いであれ、神が感じたことを分かち合う相手が、神には存在しなかったのである。この時以降、神は、それまで感じることのなかった、真の寂しさと悲しさを感じた。神は、人間が神の愛と憂いや、神の人間に対する意志を受け容れることも理解することも出来ないと感じたので、神は引き続き悲しみと心の痛みを感じていた。神は人間に対してこのようなことを行なったにもかかわらず、人間はそれに気付くことがなく、理解することもなかった。人間が神に与えた喜びと慰めは、幸福のほか、ほどなくして悲しみと寂しさも神に与えたのであった。以上が、この時点で神が考え、感じていたことである。そうした事を行っている間、神の心には憂いが入り交じり、それは喜びから悲しみへ、そして悲しみから痛みへと変化していった。神が望んだのは、人間に神の心にある事柄を早急に知らせ、神の旨を理解させることのみであった。そうすれば、人間が神に従うようになり、神と調和するようになる。人間は神の言葉を聞いてなお黙していることがなくなり、神の業をどのように支援するかを知らずにいることはなくなり、そしてなによりも、人間が神の要望に無関心でいることはなくなるであろう。こうした神が最初に完了した事柄は、極めて有意義であり、神の経営計画と現在の人間にとって大いに有意義であった。

神は万物と人間を創った後、休むことはなかった。神は自身の経営を実施するのを待

ちきれず、また自身が愛する人間を得るのも待ちきれなかった。

.....

…神は、人間を経営し救うことが、何よりも重要であると考え。神はこうした業を、自身の考えのみで行うのでもなく、また言葉のみ行うのでもなく、とりわけ何気なく行うのではない。神は、こうした業のすべてを計画に基づき、目的をもって、基準を定め、神の旨にしたがって行う。こうした人間を救う業は、神と人間の両方にとって極めて重要であることは明白である。業がいかに困難であったとしても、障害がいかに大きかったとしても、人間がいかに弱かったとしても、あるいは人間の反逆心が強かったとしても、神にとっては、そのいずれも困難とはならない。神は絶え間なく丹念な努力を続け、神が行う意向である業を経営する。また、神はすべてを計画し、すべての人間と、神が完了させたいと望むすべての業を経営しているが、そうした業はそのいずれも嘗て行われたことがない。神がそうした方法によって、人間を経営し救う大規模な計画に対して甚大な犠牲を払ったのは初めてである。神がこうした業を行っているうちに、神は、神の甚大な努力、神の中にある物事、神の存在、神の英知と全能たる存在、そして神の様々な性質について、人間に対し、少しずつ、かつ率直に示す。神は、従前行われたことがなかった啓示を、そうした事柄のすべてについて、少しずつ、かつ率直に行う。したがって、全宇宙において、神が経営し、救おうとする人間を除いては、神にそれほど近づき、緊密な関係を持つ生命体は存在しない。神の心において、神が経営し、救うことを望む人間が最も重要であり、したがって神はこうした人間を最も重要視する。たとえ神がこうした人間のために甚大な犠牲を払ったとしても、またこうした人間により神がひたすら傷つけられ、背かれたとしても、神はこうした人間を見捨てることは決してなく、不平不満を言うことも後悔することもなく、神の業をひたすら続行する。これは、遅かれ早かれ人間は神の呼び声で目覚め、神の言葉により動かされ、神が創造主であることを認め、神のもとへ戻ることを、神が知っているからである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

神がすることが何であれ、その手段がどのようなものであれ、代償がどれほどであれ、方針がどのようなものであれ、神がすることの目的は変わらないということである。神の目的は、神の言葉、神が要求するもの、そして神の心を人間に対して働くことである。つまりそれは、神が自身の段階に沿って善と思うもの全てを行ない、人間が神の心を理解できるようにし、神の本質を理解できるようにし、神の支配に従えるようにし、そうすることによって神を恐れ悪を避けるようにするためである。これが神のすること

全てにおける神の目的のひとつの側面である。もうひとつの側面は、サタンが引き立て役で神の働きにおいては仕えるものであるため、しばしば人間はサタンの手に渡されるのである。これは人間がサタンの誘惑と攻撃のただ中であって、サタンの邪悪さ、醜さ、そして卑劣さを理解するために神が用いる手段であり、そうすることで人々がサタンを憎み、悪であるものを知り、理解できるようにするためである。このような過程を通ることにより、人々はサタンの支配から徐々に解放され、サタンの非難、妨害、攻撃から解放される。そして神の言葉により、彼らの知識と神への従順、神に対する信仰と畏れにより、サタンの攻撃に勝利し、サタンの非難に勝利する。そうして初めて、人々はサタンの支配から完全に解放される。サタンから解放されるということは、サタンが打ち負かされたということであり、彼らはサタンの獲物でなくなるということである。彼らを飲み込む代わりに、サタンは彼らを手放したのである。なぜなら、そのような人々は正しく、信仰を持っており、従順であり、神を畏れていたからであり、サタンと完全に決別したからである。彼らはサタンを辱め、怖じ気づかせ、完全に打ち負かした。神に付き従うという彼らの確信、神への従順と畏れがサタンを打ち負かし、そしてサタンに自分たちへの攻撃を諦めさせるのである。このような人々だけが真に神のものとされ、そうなることが正に人間に対する神の救いの最終目標なのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

これが神による経営である。人類をサタンに引き渡し—神が何であるか、創造主が何であるか、神をどう礼拝するか、なぜ神に服従することが必要なのかを知らない人類を——サタンが墮落させるままにしたのである。神はそれから一步一步、人間が完全に神を礼拝しサタンを拒むまで、人間をサタンの手から取り戻す。これが神の経営である。これはみな神話的な物語のようで、わけがわからないように思われる。人々がこれを神話的な物語のように感じるのは、過去数千年の間にどれほど多くのことが人間に起こったかを知らないからであり、まして、この宇宙の広がりにおいてどれほど多くの物語が生まれたか、思いも及ばないからである。そのうえ、物質界の外に存在する、さらに驚くべき、はるかに恐ろしい世界があるのを意識することができず、人間の目では見ることができないでいるからである。これは人間には理解し難いことに思われるが、それは人間には神による人類の救いや神の経営の働きの意義が理解できず、また、人間が最終的にどのようなことを神が望んでいるかを知らないからである。そのような人類は、サタンに墮落させられる前のアダムとエバのようなものだろうか。いや、そうではない。神の経営は、神を礼拝し、神に従う一群の人々を得るためのものである。この人類

はサタンにより墮落させられたが、もはやサタンを父とみなしておらず、サタンの醜い顔に気づいて拒み、神の裁きと刑罰を受けるため、神の前に来る。その人間は何が醜いか、それが聖いものとどう異なっているかを知っており、神の偉大さとサタンの邪悪さを認識している。このような人類は、もはやサタンのために働かず、サタンを崇めず、サタンを祭ることをしない。それは、その人たちが真に神のものとなった人々だからである。これが神による人類経営の意義である。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

神は人類を創造し、人類を地上に置き、今日まで導いてきた。その後、人類を救い、人類のための罪のいけにえとなった。終わりの時に、彼は人類を征服して、人類を完全に救い出し、人に本来の姿を回復させなければならない。これが、彼が始めから終わりまで従事してきた働きである。つまり、人を元のイメージへ回復し元の姿へ回復させるのである。神は自身の国を打ち立て、人に本来の姿を回復させる。つまり神は地上における自身の権威を回復し、あらゆる被造物の間における自身の権威を回復する。人はサタンに墮落させられた後、神を畏れる心を失い、被造物として持つべき機能を失って、神に背く敵になった。人はみなサタンの権威の下に生きようになり、サタンの命令に従った。それゆえ、神は被造物の間で働くことができず、被造物からの畏れ敬いを得ることはさらにできなかった。人は神に造られており、神を礼拝すべきであるが、人は神に背いてサタンを崇拝した。サタンは人の心の中の偶像になった。こうして、神は人の心における立場を失い、つまり人を造った意義を失った。だから、神が人を造った意義を回復しようとするなら、人に本来の姿を回復させ、人に墮落した性質を脱ぎ捨てさせなければならない。人をサタンの手から奪い返すには、人を罪の中から救い出さなければならない。このようなやり方によってのみ、神は次第に人に本来の姿を回復させ、本来の機能を回復させる。そして遂には、神の国を回復する。最終的にそれらの不従順の子を徹底的に滅ぼすのも、人がよりよく神を礼拝し、よりよく地上で生存することができるためである。神は人類を造ったので、人に自身を礼拝させる。神は人に本来の機能を回復させたいので、徹底的に、しかも混じりけが少しもないように、回復させる。神が自身の権威を回復することは、人に自身を礼拝させることであり、自身に従わせることである。それは、人を神ゆえに生きようようにすることであり、神の権威ゆえに神の敵を滅ぼすことであり、神のあらゆる部分全てが人の間で、全く拒否されることなく存続するようにすることである。神が打ち立てようとする国は神自身の国である。神が求める人間は自身を礼拝する人間であり、完全に従う人間であり、神の栄光を持つ人間であ

る。もし神が墮落した人間を救い出さなければ、神が人を造った意義は無となる。神は人の間で権威を持たなくなり、地上に神の国が現れることもない。もし神に背く敵を滅ぼさなければ、神は完全な栄光を得ることができず、地上で神の国を打ち立てることもできない。人類の不従順な者たちを徹底的に滅ぼし、完全にされた者たちを安息の中に連れていく——これは彼の働きが終わったことのしるしであり、神が偉業を達成したしるしである。人類がみな本来の姿を回復し、それぞれ自分の本分を尽くし、自分の立場を守り、神のすべての定めに従うことができたなら、神が地上で一団の、自身を礼拝する人たちを得、自身を礼拝する国を打ち立てたことになる。神は地上で永遠の勝利を得、自身に敵対する者たちは永遠に滅びる。これは神が最初に人を造った時の意図を回復し、神が万物を造った意図を回復し、地上での神の権威、万物の中での神の権威、敵の間での神の権威をも回復したことになる。これらは神が完全に勝利を得たことのしるしである。その後人類は安息に入り、正しい軌道に乗った生活に入る。神も人との永遠の安息に入り、神と人が共有する永遠の生活に入る。地上の汚れと不従順は消え、地上の嘆き悲しみも消える。神に敵対する地上のあらゆるものも存在しなくなる。神と神に救われた人たちだけが残り、神の創造物だけが残る。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

三つの段階の働きが終わるとき、神を証しする者たちの一集団、つまり神を知る者たちの一団が作られる。この人たちはみな神に対する認識があり、真理を実行することができる人たちである。彼らには人間性と理知があり、皆三つの段階の救いの仕事を認識している。これが最後になし遂げられる働きであり、この人たちは6000年にわたる経営（救い）の働きの結晶であり、最終的にサタンを打ち負かした最も有力な証しである。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

現在まで六千年に渡る神の働きの実行の後、神は自らの行為の多くをすでに示しているが、それは主にサタンを倒し、すべての人間を救うためだった。神は、その機会を通して、天のすべてのもの、地上のすべてのもの、海の中のすべてのもの、および、神が創造した地上のあらゆるものがひとつ残らず、神の全能を知り、神のすべての行為を知るようにする。神はサタンを倒すための機会を捕らえ、人間に自らのすべての行為を示し、人々が神を褒めたたえ、サタンを倒す神の英知を賛美できるようにする。地に、天に、そして海の中にあるすべてのものは、神に栄光をもたらし、神の全能性を褒めたた

え、神のすべての行為を褒めたたえ、神の聖なる名前を叫ぶ。それは神がサタンを倒した証である。神がサタンを征服した証である。さらに重要なこととして、神が人間を救った証である。神の創造したすべては、神に栄光をもたらし、敵の打倒と勝利の帰還において神を褒めたたえ、偉大な勝利の王として神を褒めたたえる。神の目的はサタンの打倒だけではないため、神の働きは六千年間続いている。神はサタンの打倒を通して人間を救う。神はサタンの打倒を通して自らのすべての行為を現わし、自らの栄光のすべてを現わす。神は栄光を手にするだろうし、天使たちすべては神のすべての栄光を見るだろう。天の使者たち、地上の人間たち、そして地上のすべての創造物は、創造主の栄光を見るだろう。これが神の行う業である。天と地における神の創造物は、すべて神の栄光を目の当たりにし、神はサタンを完全に倒した後、意気揚々と帰還し、人間に神を褒めたたえさせる。こうして神は、これらふたつの側面を勝利の中に成し遂げる。最後にすべての人間は神によって征服され、拒否したり反抗したりする者、つまり、サタンに属する者すべてを、神は一掃する。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは人類全体が現在までどのように発展してきたかを知るべきである」より

すべての人々は地上におけるわたしの働きの目的、つまりわたしの働きの最終目標と、この働きが完成するまでに、それにおいてどの程度をわたしが達成しなければならないかを理解しなければならない。もし、今日までわたしとともに歩んできておきながら、わたしの働きが一体何であるのかを理解していないならば、人々はむだにわたしと歩んできたのではないのか。わたしに従う人々は、わたしの心を知っているべきである。わたしは地上において何千年もこのように働いてきたのであり、今日もこのように働いている。わたしの働きには格別に多くの項目が含まれているものの、この働きの目的は変わらないままである。それは、例えば、わたしが人間に対する裁きと刑罰で満ちていても、ひとたび人間が完全にされれば、わたしの行なうことはやはり人間を救うためであり、わたしの福音をよりよく広め、わたしの働きをあらゆる異邦人の国においてさらに展開するためであるのと同じである。だから今日、多くの人が随分前より希望を大いにくじかれている時にあっても、わたしはいまだに働きを続けており、人間を裁き、罰するために行なうべき働きを続けているのである。わたしが言うことに人はうんざりしているにもかかわらず、また人はわたしの働きに関与したいと思っていないにもかかわらず、わたしはいまだに自分の務めを果たしている。なぜなら、わたしの働きの目的は変わらないままであり、わたしの元来の計画は打ち破られることがないからである。わ

わたしの裁きの役目は、人間がわたしによりよく従えるようにすることであり、わたしの刑罰の役目は、人間がさらに効果的に変えられることができるようにすることである。わたしが行なうことはわたしの経営（救い）のためであるものの、わたしはこれまでに人間に有益でないことを行なったことはない。これは、イスラエルの外にわたしが足場をもてるように、イスラエルの外のあらゆる民族をイスラエル人と同様に従順にし、彼らを真の人間にしたいからである。これがわたしの経営である。それはわたしが異邦人の諸国のあいだで成し遂げている働きである。今でさえ、多くの人がわたしの経営をいまだに理解していない。なぜなら、そのようなことに関心がなく、自分自身の将来と終着点だけを気にかけているからである。わたしが何を言おうと、人々はわたしの行なう働きにはいまだに無関心であり、その代わりに将来における自分の終着点だけに関心を集中させている。もし物事がこのように進行すれば、どうしてわたしの働きを拡大させることができるだろうか。どうしてわたしの福音を世界中に広めることができるだろうか。わたしの働きが拡大したとき、わたしはあなたがたを分散させ、ちょうどヤーウェがイスラエルの諸部族の一つひとつを撃ったようにあなたがたを撃つことを、あなたがたは知るべきである。これはすべて、地球のいたるところにわたしの福音を拡げ、異邦人の諸国にわたしの働きを広げるために行なわれる。それにより、わたしの名が大人にも子供にも同様に賛美され、わたしの聖なる名があらゆる国々、民族の人々の口にて褒め称えられるようにするためである。それは、この最後の時代において、わたしの名が異邦人の民族のあいだで賛美され、わたしの業が異邦人たちに見られ、わたしの業ゆえに彼らがわたしを全能者と呼び、わたしの言葉がまもなく実現するためである。わたしはイスラエル人の神であるだけでなく、わたしが呪った民族をも含む異邦人のすべての民族の神であることをわたしはあらゆる人々に知らしめる。わたしはすべての被造物の神であることをあらゆる人々に知らしめる。これがわたしの最も大きな働き、終わりの日のための働きの計画の目的、終わりの日に成就される唯一の働きである。

『言葉は肉において現れる』の「福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある」より

3. 神の働きの三段階のそれぞれの目的と意義

関連する神の言葉

ヤーウェが、イスラエル人の地で行った働きは、人間の中に、神の地上においての発祥地、神が居た聖なる場所を創った。神は、イスラエルの人々に自身の働きを限定した

。初め神は、イスラエルの外では働かなかった。代わりに、神は働きの範囲を制限するため、適切であると思う人々を選んだ。イスラエルは、神がアダムとエバを創った場所であり、その場所の塵から、ヤーウェは人を創った。それが、地上におけるヤーウェの働きの本拠地である。ノアやアダムの子孫であるイスラエル人は、地上におけるヤーウェの働きの出発点であった。

イスラエルにおけるヤーウェの働きの意義、目的、段階は、その働きをイスラエルの中心から他の国々へ徐々に広げながら、全地でその働きを始めることであった。これは、全宇宙を通しての神の働きの原則である。すなわち、雛形を確立し、宇宙のすべての人が彼の福音を受け入れるまで、それを広げるというやり方である。最初のイスラエル人は、ノアの子孫であった。これらの人々は、ヤーウェの息を持ち、生活における基本的な必要品をまかなうことができたが、ヤーウェがどんな神であるかを知らず、神の心、ましてや全ての創造物の主を畏れる方法など全く知らなかった。アダムの子孫は、彼らが従わなければならない規則や掟を知らず、創造されたものが、創造主にどんな仕事をすべきかを知らなかった。彼らが知っていたのは、夫は家族を養うために汗を流して労働し、妻は夫に従い、ヤーウェが創造した人類を永続させなければいけないということだけだった。つまり、この人々は、ヤーウェの息とその命だけを持っていて、神の律法への従い方あるいは創造主を満足させる方法は知らなかった。彼らは、あまりに理解が少なかった。したがって、彼らの心には、ゆがんだものやずるがしこいものは何もなく、嫉妬や闘争心はもっていなかったものの、全ての創造主ヤーウェを知らず、理解していなかった。彼ら人間の祖先は、ヤーウェが創ったものを食し、ヤーウェが創ったものを享受することは知っていても、ヤーウェを畏れることは知らなかった。彼らは、跪き、ヤーウェを礼拝すべきことを知らなかった。なぜ彼らを神の創造物と呼べようか。したがって、「ヤーウェは全ての創造主である」や「神は、自分の表現として人を創り、彼に栄光を与え、自身を現すこととした」と話すことは無駄ではなかっただろうか。ヤーウェを畏れない人々が、どうしてヤーウェの栄光の証しとなり得るだろうか。どうして彼らがヤーウェの栄光の表現になれるだろうか。このとき、ヤーウェの言葉「わたしは、わたしに似せて人を創った」は、悪の存在であるサタンの掌中の武器にならないだろうか。これらの言葉は、ヤーウェが人を創造したことへの不名誉の印にならないだろうか。働きのそのような段階を完了するため、ヤーウェは、人類を創った後、アダムからノアまで人類への教示または導きをしなかった。彼がアダムとノアの子孫であるイスラエル人を正式に導き始めたのは、やっと洪水の後になってからであった。イスラエ

ルにおけるヤーウェの働きと言葉は、全土のすべての人々の生活を導いた。そして、ヤーウェは、人がヤーウェの命をもち、塵から形作られ、神の創造物になるように人に息を吹き込んだだけでなく、人類を支配するための杖を使って人類を炎で焼くこともできるし、人類を呪うこともできることを、ヤーウェの働きと言葉によって人に示した――ヤーウェが地上で人の生活を導き、昼と夜との時間によって人の中で語り、働くことができるのを人が知るために。人はヤーウェにより拾い上げられた塵から来て、人はヤーウェより創られたということを創造物である人自身が知ることができるように、ヤーウェはひたすら働きを行った。さらにまた、他の人々と民族（実際にはイスラエルとは別の人々と民族ではなく、イスラエル人から分かれ出た人々と民族であり、依然としてアダムとエバの子孫である）が、イスラエルからヤーウェの福音を受け取るようになり、宇宙における全ての創造物がヤーウェを畏れ、ヤーウェを崇めるようになるために、ヤーウェはイスラエルで働きを始めた。イスラエルでヤーウェがその働きを始めることをせず、人類を創っただけで、彼らに地上で気楽な生き方をさせたなら、人の肉体の本性（本性とは、人は自分が見ることができないものは決して知ることができないということ、すなわち、ヤーウェが人類を創ったとは人は知らず、ましてやなぜ創ったかなど知らないことを意味する）故に、人は、ヤーウェが人類を創ったこと、全ての物の主であることを知ることは決してなかっただろう。もしヤーウェが、人を創り、自分の喜びのために地上に置いたあとは手の塵を払って何もせず、一定の期間、人の中で指導するようなこともなかったというなら、全人類は無に帰していただろう。人を含めて、彼が創った天地万物までも無に帰し、サタンに踏みつけられただろう。したがって、「ヤーウェは、地上に立つ場所、自身が創ったもののの中に聖なる場所を持たなくてはならない」というヤーウェの望みは打ち砕かれていただろう。だからヤーウェは人類を創った後、彼らを彼らの生活の中で先導し、彼らに話しかけた――自分の希望を実現するために、自分の計画を達成するために。イスラエルにおけるヤーウェの働きは、ヤーウェが全ての物を創る前に決めていた計画を実行するためのものである。したがって、ヤーウェのイスラエル人の中での最初の働きと万物の創造はお互いに相容れないものではなく、両者は、ヤーウェの経営と働き、そして栄光のためであり、人類を創造した意味を深めるためのものであった。ヤーウェは、ノアの後には二千年間、地上で人類の生活を先導し、その間、人々に万物の創造主ヤーウェをどのように畏れるべきかを教え、生活の仕方、人生の生き方、そして何よりも、ヤーウェの証人としての振舞い方、自身への従い方、そしてどのようにヤーウェを畏れるべきかや、どのようにしてダビデや彼の祭司たちのように音楽でヤーウェを賛美するべきかを教えた。

ヤーウェは人類を創造したが、つまり人類の祖先であるエバとアダムを造ったが、それ以上に彼らに知性や知恵を与えなかった。彼らはすでに地上で暮らしていたが、ほとんど何も理解していなかった。そのためヤーウェの人類創造の働きは半分完了しただけで、決して完了していなかった。ヤーウェは土で人間の雛形を形作り、それに息を吹き入ただけで、人間に神を崇めようという十分な意欲を与えなかった。初めのうち、人間は神を崇めたり畏れたりする心をもたなかった。人間は神の言葉に耳を傾けることを知っただけで、地上における生活についての基本的知識や適切な生活の規則に関しては無知であった。このようなわけで、ヤーウェは男と女を造り七日間の作業を終えたものの、人間をすっかり完成させなかった。人間は殻でしかなく、本当にひとりの人ではなかったからである。人は人類を創造したのはヤーウェだということだけを知っていたが、ヤーウェの言葉と律法にいかに従うべきかについては何も知らなかった。だから人類創造の後、ヤーウェの働きは決して完成といえるようなものではなかった。ヤーウェはまた、人々が地上で共に暮らしヤーウェを崇めることができるように、ヤーウェに導かれた後、人々が地上における適切な人間としての生活をおくるための正しい道程に入れるように、ヤーウェの面前にて人間をしっかりと導かなければならなかった。これがなされて初めて、主にヤーウェの名の下で行なわれた働きはすっかり完成された。つまり、そうなる初めてヤーウェの世界創造の働きが完全に完了したのである。このように、ヤーウェが人類を創造して以来、人類がヤーウェの命令と律法に従い、地上における人間として適切な生活のあらゆる活動に携わることができるように、ヤーウェは人類の地上における生活を何千年間も導かねばならなかった。これで初めてヤーウェの働きはすっかり完成した。ヤーウェはこの働きを人類を創造した後に開始し、この働きはヤコブの時代まで、ヤコブの十二人の息子たちがイスラエルの十二部族になるまで続いた。それ以降は、イスラエルのすべての人が地上で正式にヤーウェに導かれる民となり、イスラエルは神がその働きを行なう地上における特別な場所となった。ヤーウェはこれらの人々を地上での正式な働きをそのあいだで行なった最初の集団とし、イスラエルの全土をヤーウェの働きの起点とした。ヤーウェはイスラエルの人々をさらに偉大な働きの先駆けとして用いたのは、ヤーウェから生まれた地上のすべての人々がいかにヤーウェを崇め、いかに地上で生きるべきかを知るようになるためであった。このように、イスラエルの人々の行いは、異邦人が後に続くべき模範となり、イスラエルの人々のあいだで語られたことは、異邦人に聞かれるべき言葉となった。イスラエルの人々はヤ

ーウェの律法と掟を受け取った最初の民であり、ヤーウェのさまざまなあり方をいかに崇めるべきかを最初に知った民であったからである。イスラエルの人々はヤーウェのあり方を知っていた人類の祖先であり、ヤーウェに選ばれた人間の代表であった。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

律法の時代を通じて、ヤーウェは多くの戒めを定め、モーセがエジプトを出て彼に従うイスラエル人にそれを伝えるようにした。ヤーウェは、この戒めをイスラエル人に与えた。それはエジプト人とは無関係で、イスラエル人を律する意味があり、イスラエル人にヤーウェが課した要求であった。人が安息日を守ったか、両親を敬ったか、偶像を崇拝したかなど、人が罪を犯したか、義であるかを裁く上での原則であった。人がヤーウェの火により焼かれるか、石打ちで処刑されるか、ヤーウェの祝福を受けるかは、これらの戒めに従ったかどうかで決められた。安息日を守らない者は、石打ちで処刑される。祭司で安息日を守らなかった者は、ヤーウェの火により焼かれた。両親を敬わなかった者も、石打ちで処刑にされた。これら全ては、ヤーウェによって称されたことである。ヤーウェは戒めと律法を設定し、彼らの生活を導く際に人々がヤーウェの言葉に聞き従い、そして背くことのないようにした。ヤーウェはこれらの律法を、新たに生まれた人類を治めるために、そして自身の働きの基礎を作るために用いた。したがって、ヤーウェが行った働きにより、この最初の時代は律法の時代と呼ばれた。ヤーウェは多くを語り、多くの働きをしたが、これら無知な人々に、どのようにして人間になるか、如何に生きるか、ヤーウェの道をどのようにして知るかを教え、ひたすら前向きに導いた。ヤーウェの仕事の大半は、人々がヤーウェの道を守って、ヤーウェの律法に従うことを目的としていた。この働きは、少しだけ墮落した人々の上になされた。それは、性質を変えることあるいはいのちの成長には関係しない。ヤーウェは人々を制約し、治めるために律法を使うことだけを考えて。その時代のイスラエル人にとっては、ヤーウェはただの神殿の神であり、天の神でしかなかった。ヤーウェは雲の柱で、火の柱であった。ヤーウェが彼らに求めたことは、人々が今日、神の律法や戒めとして知っている規則と呼ぶこともできるものに従うことだけであった。なぜなら、ヤーウェの働きは、人々を変えることではなく、人々が持つべきものをより多く与えるため、そして直接語るためであった。それは、人が創造された後、自分が持つべきものが何かを何も知らなかったからである。したがって、ヤーウェは、人が地上で生活するにあたり持つべきものを与え、自身が導いてきた人々を先祖であるアダムとエバを超えるほどの人々にした。ヤーウェが最初にアダムとエバに与えた以上のものを、彼らに与えたのである。にもかか

わらず、ヤーウェがイスラエルでした働きは、ただ人類を導き、人類に彼らの創造主を認めさせることであった。ヤーウェは、彼らを征服したり、変えたりしなかった、ただ導いただけであった。これが、律法の時代の働きのすべてである。これがイスラエル全土におけるヤーウェの働きの背景であり、真実の物語であり、本質である。そして神の六千年にわたる働き——ヤーウェの手によって人類を治めるための働きの始まりである。ここから、神の六千年の経営（救いの）計画における更に多くの働きが生れた。

『言葉は肉において現れる』の「律法の時代における働き」より

イエスの働きは、その時代における人の必要性に応じて行われた。その務めは人間を贖い、その罪を赦すことであるがゆえに、イエスの性質は全体が謙遜、忍耐、愛、敬虔、寛容、憐れみ、慈しみであった。イエスは人間に豊かな祝福と恵みをもたらし、平和、喜び、イエスの寛容と愛、その憐れみと慈しみといった人々が享受することのできるあらゆるものをもたらした。その当時、人が受け取ったあふれんばかりの楽しむことがら、すなわち心の平安と安心、霊の慰め、救い主イエスによる支え、これらのものは、人の生きた時代ゆえにもたらされたのである。恵みの時代、人はすでにサタンにより墮落させられていたので、すべての人を贖う働きを完遂するためには、満ちあふれる恵み、限りない寛容と忍耐、そしてさらに、人間の罪を贖うのに十分な捧げ物が必要であった。恵みの時代に人々が見たのは、人間の罪のためのわたしの捧げ物であるイエスに過ぎなかった。人々は神は憐れみ深く寛容であり得ることだけしか知らず、イエスの慈しみと憐れみしか見なかった。それはひとえに、彼らが恵みの時代に生まれたからである。そのようなわけで、贖われる前に人々はイエスが彼らに授けるさまざまな恵みを楽しみ、その恩恵を受けなければならなかった。それにより、彼らは恵みを享受することでその罪を赦されることができ、イエスの寛容と忍耐を享受することで贖われる機会を得ることができた。イエスの寛容と忍耐を通してのみ、彼らは赦しを受け、イエスが授けるあふれる恵みを楽しむ権利を手にすることができた。それはイエスが、「わたしは義人ではなく罪人を贖い、罪人がその罪を赦されるようにするためにきたのである」と言ったとおりであった。もしイエスが裁きと呪い、人間の過ちに対する不寛容の性質を持って受肉していたなら、人には決して贖われる機会はなく、永遠に罪深いままでいたことであろう。もしそうになっていたなら、六千年の経営（救いの）計画は律法の時代で止まり、律法の時代は六千年間続いていたであろう。人の罪は数が増し、よりひどいものとなり、人間の創造は無価値なものとなっていたであろう。人は律法のもとでのみヤーウェに仕えることができたではあるが、彼らの罪は最初に創造された人間の罪をも上

回るものとなっていたであろう。イエスが人類を愛し、その罪を赦し、十分な慈しみと憐れみを与えれば与えるほど、人類はイエスにより救われ、イエスが大きな代価で買い戻した迷える子羊と呼ばれる資格があった。イエスは自分の追随者をあたかも母親が我が子を腕のなかであやすように取り扱ったので、サタンはこの働きに干渉することができなかった。イエスは人々に対して腹を立てたり嫌ったりせず、慰めに満ちていた。人々とともにいても激怒するようなことは決してなく、「七の七十倍までも相手を赦しなさい」と言うほどまでに罪に寛容で、人々の愚かさや無知を見逃した。そのようにしてイエスの心は他者の心を変容させ、それゆえに人々はイエスの寛容を通して赦しを受けた。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

受肉したイエスには全く感情がなかったが、常にその弟子たちを慰め、施し、助け、支えた。どれほどの働きをしても、どれほどの苦しみを耐えても、決して人々に過大な要求を課すことなく、常に忍耐強く、彼らの罪を耐え忍んだ。そのため恵みの時代の人々はイエスを「愛すべき救い主イエス」と愛情を込めて呼んだ。当時の人々、すべての人々にとって、イエスが持っているものとイエスであるものは、慈しみと憐れみであった。イエスは決して人々の過ちを心に留めず、人々への接し方がその過ちをもとにするようなことは決してなかった。それは異なる時代だったため、イエスはよく食べ物をたっぷり人々に与え、彼らが十分食べられるようにした。イエスは追随者すべてに優しく接し、病人をいやし、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせた。人々がイエスを信じ、その行いすべてが真剣かつ真心からのものであることが分かるように、腐った死体をよみがえらせることさえして、その手の中では死人さえも生き返ることを彼らに示した。このようにしてイエスは人々のあいだで静かに耐え忍び、その贖いの働きを行なった。十字架につけられる前でさえ、イエスはすでに人間の罪を負い、人類のための罪の捧げ物となっていた。十字架につけられる前から、イエスは人類を贖うために十字架への道をすでに開いていた。ついに十字架で釘づけにされ、十字架のために自分自身を犠牲として捧げ、そのすべての慈しみ、憐れみ、そして聖さを人類に授けた。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

イエスの贖いがなければ、人類は永遠に罪の中に生き、罪の子、悪魔の子孫となっていたはずである。この状態が続けば、地上全体がサタンの住む地、その住まいとなっていたであろう。しかしこの贖いの働きは人類への慈しみと憐れみを示すことを必要とした。そのような手段によってのみ、人類は赦しを受け、ついに全き者とされ、神に完全

に得られる資格を得ることができた。この働きの段階がなければ、六千年の経営（救いの）計画は前に進むことはできなかつたろう。もしイエスが十字架にかけられることなく、ただ病人をいやし、悪霊を追い出したただけだったなら、人々はその罪を完全に赦されることはなかつたであろう。イエスが地上で働きをなした三年半のあいだ、イエスはその贖いの働きを半分完成させただけであり、十字架に釘づけにされ、罪深い肉の姿となり、悪しき者に引き渡されることによってのみ、イエスは十字架での働きを完成させ、人間の運命を掌握した。サタンの手に引き渡されて初めて、イエスは人類を贖った。三十三年半のあいだイエスは地上で苦しみ、あざけられ、中傷され、見捨てられ、まくらする場所や休む場所さえないほどにまで放置され、その後十字架につけられ、聖なる罪のない体であるイエスの存在全体が十字架で釘づけにされた。イエスはあらゆる苦しみに耐えた。権力者たちはイエスをあざ笑い、むち打ち、兵士たちはその顔に唾を吐きさえした。それでもイエスは黙ったまま最後まで耐え忍び、死にいたるまで無条件に従い、そこですべての人間を贖った。そのとき初めてイエスは安息することができた。イエスが行なった働きは、恵みの時代のみを表すものであり、律法の時代を表すものではなく、また終わりの日々の働きに代わるものでもない。これが人類にとっての第二の時代である贖いの時代という、恵みの時代におけるイエスの働きの本質である。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

当時、イエスの働きは人類すべての贖いであつた。イエスを信じるすべての人の罪は赦された。イエスを信じているならば、イエスはあなたを贖う。イエスを信じたなら、もはや罪人ではなく、罪から解放されたのである。これが救われるということである。信仰によって義とされるということである。しかし、信じている人たちの中には反抗的で、神に逆うものが残っており、それはやはりゆっくり取り除かれなければならなかつた。救われることは人が完全にイエスのものとなったことを意味したのではなく、その人はもう罪の中にはおらず、罪が赦されたことを意味した。信じるならば、もう罪の中にはいないということである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（２）」より

イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらしした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れることができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了しただけで、人の贖罪

のためのささげものとなり、人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかった。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

神の今回の受肉において、神の働きは主に刑罰と裁きを通して神の性質を表すことである。これを基礎として、神は人により多くの真理をもたらし、より多くの実践方法を示し、こうして人を征服し、墮落した性質から人を救うという神の目的を達成する。これが神の国の時代における神の働きの背後にあるものである。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

終わりの日の働きは言葉を語ることである。大きな変化が言葉を通して人にもたらされる。言葉を受け入れた人たちにもたらされた変化は、恵みの時代にしるしや不思議を受け入れた人たちにもたらされた変化よりもはるかに大きい。というのは、恵みの時代に、悪霊は按手と祈りによって人から立ち去ったが、墮落した性質は人の中に残ったままであった。病気が癒され、罪が赦されたが、人の中にある墮落したサタンの性質から人がどのように浄化されるかということに関しては、この働きは人の中ではまだなされていなかったからである。人は信仰の故に救われ罪が赦されただけで、人の罪深い本性は取り去られず内面に残ったままであった。人の罪は神の受肉を通して赦されたが、それは人の中に罪がないという意味ではない。人の罪は罪のためのいけにえによって赦されることができたが、どうすれば人がもはや罪を犯さないようにし、その罪深い本性が完全に取り去られ変えられるかということに関しては、人にはこの問題を解決する方法はないのである。人の罪は神の十字架の働きの故に赦されたが、人は古い、墮落したサタンの性質の中で生き続けてきた。そのため、人は墮落したサタンの性質から完全に救われなければならない。そうすることで、人の罪深い本性が完全に取り除かれ、二度と芽生えなくなり、人の性質が変えられるのである。そのためには、人はいのちの成長の筋道、いのちの道、そして性質を変えるための道を知らなくてはならない。また、人はこの道に沿って行動することが必要とされる。その結果、人の性質は次第に変わ

り、光の輝きの下で生きることができ、すべてを神の心に沿って行なうことができ、墮落したサタンの性質を捨て去ることができ、サタンの暗闇の影響から解放されることができ、それにより罪から完全に抜け出ることができる。このとき初めて人は完全なる救いを受けることができる。イエスがその働きを行なっていたとき、イエスに関する人の認識は依然として漠然として不明瞭だった。人は昔からイエスをダビデの子と信じ、偉大な預言者で人の罪を贖う情け深い主であると宣言した。信仰によって、イエスの衣の端を触っただけで癒された人々もいれば、盲人たちが見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が人に深く根づいているのが発見できず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉による平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、病人の癒しなど多くの恵みを受けた。残りは人による良い行いや外見上の信心深さであった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はまずまず良い信者と思われたのである。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされた。それは彼らが救われたことを意味する。しかし、彼らはその生涯において、いのちの道を全く理解していなかった。彼らはただ罪を犯しては告白し、それを常に繰り返すのみで、性質が変えられる道へ進んでいる訳ではなかった。これが恵みの時代の人間の状態であった。人は完全な救いを得たのであろうか。いや、得なかった。だから、その段階の働きが終わってからも、依然として裁きと刑罰の働きが残っている。この段階は人に従う道を与えるように、言葉を通して人を清くする。もし悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。というのは、人の罪深い本性が捨てられることもないだろうし、人は罪が赦されるというところで行き詰まるだろうからである。罪のためのいけにえを通して、人は罪を赦されてきた。というのは十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に留まっており、人は依然として罪を犯し、神を拒むことができ、よって神はまだ人類を得ていない。だからこの段階の働きで神は言葉を用いて人の墮落した性質を示し、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段階よりもっと意味があり、もっと有益である。というのは、今、人に直接いのちを提供し、人の性質を完全に新しくできるのは言葉だからである。それはもっと徹底的な働きの段階である。だから、終わりの日の受肉は神の受肉の意義を完成し、人の救いのための神の経営計画を完全に終了したのである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

神の国の時代には、肉となった神は、神を信ずるすべての人たちを征服するために、

言葉を用いる。これが、「言葉が肉において現れる」ということである。神は、この働きをするために終わりの日にやって来た。つまり、神は、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためにやって来た。神は言葉を話すだけであり、事実の到来は稀である。これがまさに、言葉が肉において現れることの実体である。そして肉となった神が自身の言葉を話すとき、これが肉における言葉の出現であり、肉へ入り来る言葉である。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。そして言は肉となった。」このこと（言葉が肉において現れるという働き）が、終わりの日に神が成し遂げるだろう働きであり、自身の全経営計画の最終章である。したがって、神は地上に来て、肉の中で自身の言葉を表さなければならない。今日行われること、未来において行われるであろうこと、神によって成し遂げられるであろうこと、人の終着点、救われるであろう人々、滅ぼされるであろう人々、等々、最後に成し遂げられるべきこのような働きはすべて、明確に述べられてきた。そしてこれらはすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げることを目的にしている。かつて発行された行政命令や憲法、滅ぼされるであろう人々、安息へ入るであろう人々、これらの言葉はすべて成就されなければならない。これが主として、終わりの日を通じて、肉となった神によって成し遂げられた働きである。神は、神によって運命づけられた人々はどこに属し、運命づけられない人々はどこに属するか、神の民や息子たちはどのように分類されるか、イスラエルに何が起こるだろうか、エジプトに何が起こるだろうかを人々に理解させる。未来には、これらの言葉のすべてが成し遂げられる。神の働きの歩みは加速している。神は、あらゆる時代に何がなされるべきか、終わりの日の肉となった神によって何が行われるよう予定されているか、そして行われるべき神の働きが何であることを、人に明らかにするための手段として言葉を用いる。これらの言葉はすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためのものである。

『言葉は肉において現れる』の「すべてが神の言葉によって達成される」より

神の国の時代に神は言葉を使い、新たな時代の到来を知らせ、神の働きの方法を変え、その時代全体の働きを行なう。これが言葉の時代において神が働く原則である。神は異なる視点から語るために肉となり、肉に現れる言葉である神、神の知恵と驚くべき素晴らしさを人間が本当に見ることができるようにした。このような働きは、人間を征服し、人間を完全にし、人間を淘汰する目的をよりよく達成するために行なわれる。これが言葉の時代において働くために言葉を使うことの真の意味である。言葉をとおして、神の働き、神の性質、人間の本質、人間が何に入っていくべきかを人間は知るようになる

る。言葉をとおして、言葉の時代に神が行ないたい働きはその全体が結実される。言葉をとおして、人間は明らかにされ、淘汰され、試される。人間は言葉を見、言葉を聞き、言葉の存在に気づいた。その結果、人間は神の存在、神の全能性と知恵、また神の人間への愛と人間を救う願望を信じる。「言葉」という語句は単純でごく普通であるが、受肉した神の口から出る言葉は宇宙全体を揺るがせる。それは人間の心、観念、古い性質、世界全体が以前にはどのように表れていたかを変革する。時代をとおして、今日の神だけがこのような働き方をし、今日の神だけがそのように語り、そのように人間を救いに来る。それ以降は、人間は言葉の導きの下に生き、言葉により牧され、施しを受ける。全人類は言葉の世界に、神の言葉の呪いと祝福の内に生きようになった。そして言葉の裁きと刑罰との下に生きようになったさらに多くの人間がいる。これらの言葉とこの働きはすべて人間の救いのため、神の旨を成就するため、過去の創造における世界の元来の状況を変えるためである。神は言葉をもって世界を創造し、宇宙の人間を言葉をもって導き、言葉をもって征服し救う。ついに、神は言葉を使って古い世界全体を終わらせる。そのときはじめて、経営(救いの)計画がくまなく完了する。神の国の時代をとおして神は言葉を使って働きを行ない、働きの成果を達成する。神は不思議や奇跡は行なわない。神はただ言葉をとおして働きを行なうにすぎない。言葉ゆえに人間は養われ、施しを受ける。言葉ゆえに人間は認識と真の経験を得る。

『言葉は肉において現れる』の「神の国の時代は言葉の時代である」より

時代を終わらせる神の最後の働きでは、神の性質は刑罰と裁きであり、それが不義なるもの全てを現わし、すべての人々を公に裁き、神を真に愛する人たちを完全にします。このような性質のみが時代を終わらせることができる。終わりの日はすでに来ている。あらゆるものは種類によって区分され、性質に従って種類分けされる。この時に神は人の最後と終着点を明かにする。もし人が刑罰と裁きを受けなければ、人の不従順と不義を明かす方法はないであろう。刑罰と裁きを通してのみ、あらゆるものの終局を明かすことができる。人は罰せられ裁かれて初めて本当の姿を示す。悪は悪に、善は善に、人は種類によって区分される。刑罰と裁きを通して、すべてのものの最後が明かされ、悪人は罰せられ、善人は褒美を得るであろう。そして、すべての人たちは神の支配の下に従属することになるであろう。すべての働きは義なる刑罰と裁きを通して達成されなければならない。人の墮落は頂点に達し、人の不従順はあまりにも深刻になってしまったので、おもに刑罰と裁きであり、終わりの日に明らかにされる神の義なる性質のみが人を完全に变えて全き者とする事ができる。この性質のみが悪を暴露し、よってすべて

の不義なる人々を厳しく罰することができる。よって、この様な性質は時代の意義を持ち、神の性質の顕示と表示はそれぞれの新しい時代の働きのためである。神はその性質を気まぐれに意味もなく顕すことはない。もし、人の終末が終わりの日に明らかにされるときに神が依然として人に無尽蔵の憐れみと愛を与えるなら、もし神が依然として人を愛情深く、人を義なる裁きにさらさずに寛容、忍耐、赦しを示すなら、人がどんなに深刻な罪を犯しても、義なる裁きなしに依然として人を赦すなら、神の経営のすべてに一体終わりはあるのだろうか。このような性質がいつ人類を正しい終着点に導くことができるのだろうか。たとえばいつもいつくしみ深く、優しい、柔和な裁判官を例に取ってみよう。この裁判官は犯した罪に関係なく人々を愛し、誰であっても、いつくしみ深く寛容である。それでいつ正しい判決にたどり着くことができるのか。終わりの日には、義なる裁きのみが人を分類し、新しい領域に連れて行くことができる。この様に、時代全体に神の裁きと刑罰の義なる性質を通して終わりがもたらされるのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

4. 神の試練と精練の働きの意義

関連する神の言葉

これらの試練は、人々の心の中のどのような状態に狙いを定めているのだろう。それらは、神に満足してもらうことのできない人間の反抗的性質を対象としている。人々の心の中には汚れたものや偽善的なものがたくさんある。だから神はそれらを清めるために試みに遭わせるのである。…

神の性質を知らなければ、あなたは試練の最中に必ず倒れるだろう。なぜならあなたは神がどのように人々を完全にするか気づいていないし、どのような手段で神が人々を完全にするか、いつ神の試練があなたに降りかかり、それらがあなたの観念に合わないかを気付かないので、しっかり立っていることができないからである。神の本当の愛は神の全性質であり、神の全性質があなたに示される時、これはあなたの肉体に何をもたらすだろう。神の義である性質があなたに示される時、あなたの肉体は必然的に多くの痛みを苦しむだろう。あなたがこの痛みを苦しまなければ、あなたは神によって全き者とされないし、本当の愛を神に捧げることもできないだろう。神があなたを全き者とすれば、神は必ずその全性質をあなたに示すだろう。天地創造の時から今日まで、神が人にその全ての性質を見せたことはなかった――しかし、終わりの日のさなか、神は自ら

運命づけて選んだこの人々の一群に神の性質を明らかにし、人々を全き者とさせることによって神の性質をさらけ出し、それによって人々の一群を完全にする。それが人々に対する神の本当の愛である。人々に対する神の本当の愛を経験するには、激しい痛みを耐え、高い代償を払うことが要求される。この後ようやく人々は神のものとされ、彼らの本当の愛を神に還元することができ、そうして初めて神の心は満ち足りる。人々が神により全き者とされることを望むなら、また、神の意志を行い、彼らの本当の愛を十分に神に捧げることを望むなら、彼らは多くの苦しみとたくさんの苦痛を周囲の状況から経験しなければならず、死よりもひどい痛みを苦しむためには、結局彼らは本当の心を神に還元することを強いられる。本当に神を愛しているかどうかは困難と純化の期間に明らかにされる。神は人々の愛を清めるが、これも困難と純化の真ただ中でしか達成されない。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

人間の状態と神に対する態度に直面し、神は新しい働きを行い、神に対する認識と服従を人に得させ、愛と証しの両方をも得させた。従って、人は神による精錬、神の裁き、取り扱いや刈り込みを経験しなければならず、それなしでは人は神を知ることも決してなく、神を真に愛し、神への証を立てることもできない。神による人間の精錬は一方的な効果のためだけでなく多面的な効果のためである。決意と愛を完璧にするため、このような方法でのみ、真理を求めようとする人々の中で神が精錬の働きを行う。真理を求めようとする人々、そして神を慕う人々には、このような精錬より意味のあるもの、大きな援助となるものはない。つまるところ神は神であり、神の性質はそれほど容易に人により知られ理解されるものではない。一日の終わりに神が人と同じ性質を持つようなことはなく、したがって人が神の性質を知ることは容易ではない。真理は人が本質的に持っているものではなく、サタンによって墮落した人々が容易に理解するものではない。人には真理がなく、真理を実践する決意がなく、苦しみを受け、精錬されあるいは裁かれなければ、人の決意は決して完璧にならないだろう。すべての人々にとって精錬は耐えがたく、受け入れ難いものであるが、神が義なる性質を人に明らかにし、人に対する要求を公にし、より多くの啓きとより現実的な刈り込みと取り扱いを与えるのは精錬の間である。事実と真理の比較により、神は人自らについてのより大きな認識と真理を人に与え、神の心をより深く理解させ、そうしてより真理に近く純粋な神への愛を人に得させる。それらは精錬を実行する神の諸目的である。人の中で神が行う働きのすべてには固有の目的と意義がある。神は無意味な働きをせず、人に恩恵がない働きもしな

い。精錬は人々を神の前から取り除くことを意味するものではなく、地獄で人々を滅ぼすことも意味しない。それは精錬の間に人の性質を変え、動機や従来の見方を変え、神に対する人の愛を変え、人の一生を変えることを意味する。精錬は人の真の試練のひとつであり、真の鍛錬の一形態であり、精錬の間のみ人の愛はその本質的な機能を果たすことができる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

神の精錬が大きいほど人々は神をさらに愛することができる。人々の心の苦しみは人々のいのちに有益であり、神の前でより平穏になり、神との関係がより近くなり、神の至高の愛と救いをよりよく理解できる。ペテロは何百回も精錬を経験し、ヨブはいくつかの試練を受けた。あなた方が神によって全き者になることを望むのであれば、あなた方も同じく何百回も精錬を経験しなければならない。この過程を通過してのみ、この過程に依拠することによってのみ、あなたは神の心を満たすことができ、神によって全き者になるのである。精錬は、神が人を完全にする最も良い手段である。精錬と厳しい試練だけが神への真の愛を人々の心にもたらす。苦難がなければ人々は神への真の愛に欠ける。もし人々が試練により試されず、真に精錬されなければ、人々の心は常に外側を漂い続けるだろう。ある程度まで精錬された後、あなたは自分の弱みと困難を理解し、どれほど欠けるところがあるか、遭遇する多くの問題をどれほど克服できないか、あなたの不従順がいかに大きなものかを知るようになるだろう。試練の間のみ人々は現実の状態を正しく知ることができるだろう。そして試練によって人々が全きものとなるのがより可能になる。

その生涯を通じ、ペテロは数百の精錬を経験し多くの苦難を受けた。この精錬は神に対するペテロの至高の愛の基礎となり、ペテロの一生で最も重要な経験となった。ペテロが神への至高の愛を持つことができたのは、ある意味では、神を愛する決意ゆえであった。しかし、より重要なのは、それはペテロが経験した精錬と苦しみゆえであった。この苦しみは神を愛する行路の指針となり、ペテロにとって最も記憶に残ったものとなった。神を愛する際に人々が精錬の苦しみを受けなければ、人々の愛は自然さと嗜好に満ちたものである。そのような愛はサタンの考えに満ちており、神の心を満たすことはまったくできない。神を愛する決心を持つことは真に神を愛することと同じではない。人々の思考には人間的な発想がないかのように、人々の思考はすべて神のためであるかのように、心の中で考えることがすべて神を愛するためであり、神の意を満たすためであるとしても、その人々の思考が神の前に出された時、そのような思考は神により賞賛

も祝福もされない。人々が真理をすべて十分に知り、すべての真理を完全に理解しても、それが神を愛することの印であるとは言えず、すべての真理を十分に理解した人々が実際に神を愛しているとは言えない。多くの真理を理解したにもかかわらず、精錬を経験していない人々は、これらの真理を実践することができない。精錬の間においてのみ人々はこれらの真理の本当の意味を理解し、そうして初めてそのような真理の内的な意味を純粋に認識できる。その時、人々が再び試みると、真理を適切に実践することができ、神の心と調和することができる。その時、人々の人間的な考えは少なくなっており、人間としての自然性の程度は下がり、人間的な感情は消え去る。そのようになってのみ人々の実践は神への愛の真の表明となる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

神が人間を精錬する業を行う時、人間は苦しむ。精錬が大きいほど人間の神への愛は深まり、人間の内に神の力がさらに現される。人間の精錬が少なければ少ないほど、人間の神への愛も少なくなり、人間の中に現される神の力も少なくなる。人間の精錬と苦痛、苦悶が多ければ多いほど、人間の神に対する真の愛が深まり、神への信仰も更に純粋なものとなり、神に関する人間の認識も深まる。多くの精錬と苦痛、多くの取り扱いと懲らしめを受ける者は、神への深い愛を持ち、神に関して、もっと深遠で鋭い認識を持つようになることを、あなたは経験の中で知るであろう。取り扱いを体験しなかった者には、表面的な認識しか無く、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を楽しめるように、彼らに恵みを授けられる。」と言うことしか出来ない。取り扱いと訓練を体験した場合、人間は神に関する真の認識を話すことができるようになるのだ。したがって、神による人間の内なる業が驚異的であればあるほど、それは一層貴重であり、有意義なものである。あなたにとって、それが測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの見解と相容れないものであればあるほど、神の業は、さらにあなたを征服し、あなたを獲得し完全にすることができる。神の業の意義とは、かくも甚大である。もし神がこのように人間を精錬しなかったら、もし神がこのような方法によって働かなかったら、神の業は効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。これが、神が終わりの日に一群の人々を選んだ特別な意義の背後にある理由である。神がこの会衆を選び獲得するであろうことは、以前に語られていた。神によってあなたがたの内に遂行される業が大きければ大きいほど、あなたがたの神に対する愛は一層深く純粋なものとなる。神の業が大きければ大きいほど、人は神の知恵を一層味わうことが出来るようになり、神に関する認識もより深くなる。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」
より

神は肯定的側面と消極的側面の両面で人間を完全にすることが出来る。それはあなたが経験出来るか、また神により完全化されることを追求するか否かにより異なる。あなたが神により完全にされることを真に求めるならば、消極的側面により損失を被ることはなく、消極的側面はあなたに一層現実的なものをもたらし、あなたが自分に欠如しているものをもっと知ること、自分の真の状態をもっと把握すること、人間は何も持っておらず何でもないことを知ることが出来るようにする。試練を経験しないならば、あなたは知らないままであり、常に自分が他人よりも上で、優れていると感じるであろう。こうしたことをとおして、あなたはこれまで遭遇したことは全て神が行ったことであり、神により保護されていたことを知るであろう。試練に入ることにより、あなたは愛も信仰もなく、祈りが欠如し、讃美歌を歌うことが出来ない状態に陥る。そして気付かぬうちに、この真最中にあなたは自分自身を知る。神には人間を完全にする手段が多数ある。神はありとあらゆる環境を用いて人間の墮落した性質を取り扱い、様々な物事を用いて人間を暴き出す。神は、ある点に関しては人間を取り扱い、別の点に関しては人間を暴き、また別の点に関しては人間を明らかにし、人間の心の奥にある「秘密」を掘り出して明示し、人間にその数々の状態を明らかにすることにより本性を示す。神が実践的であることを人間が知ることが出来るように、神は暴く、取り扱い、精錬、刑罰など、様々な手段で人間を完全にする。

『言葉は肉において現れる』の「実践を重視する者だけが完全にされることが出来る」より

人が神への信仰において求めるのは、将来のための祝福を得ることです。それが人の信仰における目的なのです。誰もがこの意図と望みを持っていますが、人間の本性にある墮落は試練を通じて解決されなければなりません。あなたが清められていない側面はどれも、あなたが精錬されなければならない側面です。これが神の采配です。神はあなたのためにある環境を作り、そこで強制的に精錬されるようにすることで、自らの墮落を知ることが出来るようにさせます。最終的に、あなたはむしろ死んで自分の企みや欲望を捨て、神の主権と采配に服従したいと思うまでになります。それゆえ、数年間の精錬を受けておらず、ある程度の苦難を経していない人は誰も、自身の考えや心における肉の墮落の束縛を捨て去ることが出来ないでしょう。あなたはどの側面においてもいまだサタンに束縛され、自分の欲望と要求を抱いていますが、それらの側面において試練を受けなければなりません。人は試練を通じることでのみ教訓を学び、真理を得て、神の

意図を理解することができます。実際、多くの真理はつらい試練を経験することで理解されます。楽な環境にいるときや状況が好都合なとき、神の考えを理解したり、神の全能性と知恵を認識したり、神の義なる性質を正しく理解したりすることは誰にもできません。そのようなことはありえないでしょう。

『キリストの言葉の記録』の「試練のさなかに神を満足させるには」より

5. 神の働きの三段階を知ることが神を知る道と言われるのはなぜか

(一篇の御言葉)

神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である

人類を経営する働きは三つの段階に分けられるが、それは人類を救う働きが三つの段階に分けられることを意味している。これら三つの段階には、天地創造の働きは含まれず、むしろ、律法の時代、恵みの時代、そして神の国の時代の三つの段階の働きのことである。天地創造の働きは、人類全体を作り出す働きであった。それは人類を救う働きではなく、人類を救う仕事には関係がなかった。なぜなら、天地創造の時、人類はサタンによって墮落させられておらず、人類を救う働きを実行する必要がなかったからである。人類を救う働きは、人類がサタンに墮落させられた後によりやく始まり、そこで人類を経営する働きも人類が墮落させられた後によりやく始まったのである。言い換えれば、人を経営する神の働きは、人類を救う働きの結果として始まったもので、天地創造の働きから生じたものではない。人類が墮落した性質を持つようになったあと初めて、経営の働きが存在するようになった。だから人類を経営する働きは、四つの段階もしくは四つの時代というよりも三つの部分を含むのである。これこそが人類を経営する神の働きへの正しい言及の仕方である。最後の時代が終わるとき、人類を経営する働きは完全に終わっている。経営の働きの終結は、人類すべてを救う働きが完全に終了し、人類がその旅路の終わりに到達したことを意味する。人類全てを救う働きがなければ、人類を経営する働きも存在しないし、三つの段階の働きもないだろう。それは正に人類の墮落ゆえに、また人類がそれほど性急に救いを必要としていたがために、ヤーウェは天地創造を終わらせ、律法の時代の働きを始めたのである。そうして初めて、人類を経営する働きが始まったのだが、それはつまり人類を救う働きもそこで初めて始まったことを意味する。「人類を経営する」とは、新たに造られた地上の人類（つまり、まだ墮落さ

せられていない人類)の生活を導くという意味ではない。むしろそれは、サタンによって墮落させられた人類の救いであり、つまりは、この墮落した人類を変化させることである。これが人類を経営することの真意である。人類を救う働きが天地創造の働きを含まないのだから、人類を経営する働きも天地創造の働きを含まず、ただ天地創造とは別の三つの段階の働きだけが含まれる。人類を経営する働きを理解するには、三つの段階の働きの歴史を知ることが必要であるが、これは、救われるために、すべての人が知っていなければならないことである。被造物としてあなた方は、人は神によって造られたということを認識しなければならないし、人類の墮落の源、さらには人の救いの過程を認識しなければならない。あなた方がもし、神に喜ばれるために教理に従って行動することだけは知っているが、神がいかにして人類を救うかに関して、あるいは人類の墮落の源を少しも知らないのであれば、あなた方には被造物としてこの部分が欠けているのである。あなたは、神の経営する働きのより幅広い範囲を知らないままでいるのに、それらの実践できる真理を理解するだけで満足してはならないし、もしそうなら、あなたは教条的すぎるということになる。三つの段階の働きは、神による人の経営の内部事情であり、全宇宙の福音の到来であり、全人類における最大の奥義であり、また福音を述べ伝えることの基盤でもあるのだ。もしあなたが自分のいのちに関係する単純な真理を理解することだけに集中し、この最大の奥義とビジョンに関しては一切知らないとするれば、あなたのいのちは、ただ眺めること以外に役に立たない不良品と言えるのではないか。

もし人が実践することだけに集中し、神の働きと人の認識を二次的なものと見るならば、「一文惜しみの百失い」であることと同じではないのか。あなたは、認識すべきことは認識すべきであり、実践すべきことは実践しなければならない。そうして初めてあなたは真理をどのように追及すべきか知る人になるのだ。あなたが福音を述べ伝える日が来た時、「神は偉大な正義の神であり、神は最も優れた神であって、いかなる偉大な人も比較できる者がおらず、それ以上に高い者もない…」ということしか言えず、これらの見当違いで上辺だけの言葉しか言えず、非常に重要で中身のある言葉を全く話すことができず、神を認識すること、あるいは神の働きについて何も言うことができず、そしてさらには真理を説明すること、あるいは人間に欠けているものを提供することができないのであれば、あなたのような人は、立派にその本分を尽くすことはできない。神を証しし神の国の福音を述べ伝えることは、決して簡単な仕事ではない。あなたは、まず真理を身に付け、理解するべきビジョンを身に付けなければならない。神の働きの

様々な側面のビジョンと真理について明確に知っているとき、あなたは心の中で神の働きを認識することになり、神が何をするかに関わらず、例えばそれが正義の裁きでも人を精練することでも、あなたは自らの基盤として最大のビジョンを備え、実践すべき正しい真理を備えることになり、結果として、最後まで神に付き従うことができるようになるのである。あなたは、神の働きが何であれ、その働きの目的は変化せず、神の働きの核心は変化せず、そして神の人に対する心も変わらないことを知らなければならない。神の言葉がどれほど厳しいものであっても、環境がどれほど不利であっても、神の働きの原則は変わらないし、人を救うという神の意図も変わらないのである。それが人の終わり、あるいは人の終着点の啓示ではなく、最終段階の働き、あるいは神の経営（救いの）計画全体を終わりにする働きでもないならば、また神が人に対して働いている最中のことであるならば、神の働きの核心は変わらない。つまりそれは常に人類の救いなのである。これこそがあなた方の神への信仰の基盤であるべきだ。三つの段階の働きの目的は全人類の救いであり、すなわちそれは人をサタンの領域から完全に救い出すことを意味する。三つの段階の働きには、それぞれ異なる目標と意味があるが、そのいずれもが人類を救う働きの一部であり、人類が必要とするものに応じて実行される異なる救いの働きなのだ。いったんこの三つの段階の働きの目的を知れば、各段階の働きの意味をどのように正しく認識すれば良いかが分かるし、神の心を満たすためにはどのように行動すれば良いかが理解できる。この点に到達することができれば、最終的にこの最大のビジョンが神へのあなたの信仰の基盤になるだろう。あなたは実践のためのたやすい方法、あるいは奥深い真理を追い求めるだけでなく、実践とビジョンを組み合わせるべきだ。そうすれば、実践できる真理とビジョンに基づく知識の両方が在ることになる。そうして初めて、あなたは完全に真理を追求する者になれるのである。

三つの段階の働きは、神の経営（救い）全体の核心にあるもので、その三つの段階の中に、神の性質、そして神であるものが表されているのである。神の三段階の働きを知らない者は、神がどのようにしてその性質を表現するかを理解できないだけでなく、神の働きの英知も知らず、そして神が人類を救う様々なやり方や、人類全体に対する神の心を知らないままにいる。三つの段階の働きは、人類を救う働きの完全な表明といえる。三つの段階の働きを知らない人々は、聖霊の働きの様々な手段や原則を知らないままにいる。つまり、一つの段階の働きからそのまま残っている教義に厳格にこだわる人々は、神を教義に限定する人たちであり、神に対する彼らの信仰は曖昧で不確かである。そのような人たちは、決して神の救いを得ることがないだろう。神の三段階の働きだ

けが神の性質の全てを余すところなく表せるのであり、人類全体を救う神の意図、そして人類の救いの全過程を完全に示すことができるのである。これは、神がサタンを打ち負かし人類を取り戻したということの証拠であり、神の勝利の証拠であり、そして神の性質全体の表明でもある。神の働きの三段階の内一つの段階だけを理解する者は、神の性質の一部しか知らない。人の観念においては、このたった一つの段階の働きは教義になりやすく、人は神に関する規則を定めるようになり、神の性質のこの一部分だけを神の性質全体の代表として使うようになる。その上、人の想像が少なからずこの中に混入するので、神の働きの原則に加えて、神の性質、存在、英知を限られた範囲内に厳格に制限し、神がかつてこのようであれば永遠にこのようであり、絶対に変わることはないと思うようになる。三つの段階の働きを知り、正しく認識できる者だけが、完全にまた正確に神を知ることができる。少なくともその人たちは神をイスラエル人の神、あるいはユダヤ人の神とは定義しないし、人のために永久に十字架にくぎ付けにされる神とは見ないだろう。もしあなたが神の働きの一段階だけから神を認識するならば、あなたの認識はあまりにも少なすぎる。その認識は大海原の一滴に過ぎない。そうでなければ、なぜ多くの古い宗教家達が神を生きたまま十字架に磔にしたのか。それは人は神を限られた範囲に制限するからではないのか。多くの人が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、彼らが様々な、多岐にわたる神の働きを認識しないからであり、さらに、彼らがごく僅かな知識と教義しか持ち合わせておらず、それで聖霊の働きを判断するためではないのか。そのような人たちは、経験は上辺だけのものなのに、本性が放漫かつ甘やかされており、聖霊の働きを軽視し、聖霊の懲らしめを無視し、さらには自分の取るに足らない古い論拠を用いて聖霊の働きを「確認」する。また彼らはもったいぶって、自分たちの知識と博識を全面的に確信し、世界中を駆け回ることができると思い込んでいる。そのような人たちは聖霊に軽蔑されて拒絶されるのではないのか、そして新しい時代には排除されるのではないのか。神の前に来て公然と神に反抗する人々は、狭量で偏狭な人々で、単に自分たちがいかに賢いかを見せびらかそうとしているだけではないのか。彼らは、聖書についての僅かな知識だけで天下の「学界」にまたがり、人に教える上辺だけの教義でもって、聖霊の働きを覆し、自分たちの思考過程を中心に転回させようと試み、目先のことしか見えないのに、一目で6000年に及ぶ神の働きを見極めようとするのである。この人たちは理性と呼べるようなものをもちあわせていない。実際、神についてよく知っている人ほど、神の働きを評価するのに時間をかける。さらに、彼らは今日の神の働きについて知っていることを僅かしか語らないが、判断することは急がない。神に対して認識がない人ほど、傲慢で自信過剰で、気まぐれに神の存在そのものを

言いふらすが、彼らは理論を語っているだけで、実際の証拠は提供しない。このような人は少しも価値のない人である。聖霊の働きを冗談事と捉える人たちはあさはかである。聖霊の新たな働きに出会うとき、慎重にせずべらべら言いふらして、早まった判断を下し、本能にまかせて聖霊の働きの正しさを否定し、さらには聖霊の働きを侮辱し冒涇する人たち、つまりそんな無礼な人たちは聖霊の働きに対して無知であると言えるのではないか。さらに、そのような人たちは、傲慢で、生まれつき高慢で、そして手に負えない人間ではなかろうか。このような人はいつか聖霊の新しい働きを受け入れる日が来ても、神は彼らを寛容には扱わないだろう。そういう人たちは、神のために働く人たちを見下すだけでなく、神自身をも冒涇しているのである。そのような無謀な人たちは、この世でも後の世でも赦されることがないし、永久に地獄で滅びるだろう。このように無礼でいい加減な人たちは、神を信じているふりをしているだけで、そうすればするほど、行政命令に触れやすくなる。生まれつき放逸で、一度も誰かに従ったことがない、傲慢な人間はすべて、このような道を歩いているのではないか。彼らは、常に新しくて古くならない神に来る日も来る日も反抗しているのではないか。今日あなた方は、なぜ神の三つの段階の働きの重要性を知らなければならないのか理解すべきである。わたしが言う言葉はあなた方の有益になるものであり、無意味な言葉ではない。あなた方が、あたかも馬に乗って疾走しながら花を見物するかのようにならばそれらを読むなら、わたしの大変な努力は全て水の泡になるのではないか。あなた方一人ひとりが自らの本性を知るべきである。あなた方のほとんどが議論は得意であり、理論的な質問に対する答えはすらすらと出てくるが、実質的な問題になると何も言うことがないのである。今日でさえ、あなた方は未だに浅はかな会話に身をゆだね、自分の古い本性を変えることができずにいるし、あなた方のほとんどは、より高い真理を達成するために追求する方法を変えるつもりがなく、いいかげんに自分の人生を生きているだけである。このような人たちがどうして最後まで神に従うことができるだろう。たとえ道の最後まで辿り着けたとしても、あなた方にとってそれが何の得になるだろう。手遅れになる前に、真剣に追及するか、あるいは早く負けを認めて放棄して、考え方を改めた方が良い。時間がたつにつれ、あなた方は人にたかる寄生虫になる。そんな低くて卑しい役をあなた方は演じるつもりなのか。

三つの段階の働きは、神の働きすべての記録であり、神の人類の救いの記録であり、そしてそれは架空のものではない。もしあなた方が、神の性質全体を認識することを真剣に追い求めるのであれば、神によって為された働きの三段階を知らなければならず、

しかもどの段階も欠けてはならない。これは神を知ろうと努力する人たちが達成しなければならない最低限のことである。人は思いつきのように独自で本当に神を知ることはいできない。それは人が自分で想像できるものでもなければ、聖霊が特定の人に特別に恩恵を授けた結果でもない。むしろそれは、人が神の働きを経験した後に得る認識であり、神の働きの事実を経験した後にだけ訪れる神に対する認識なのである。そのような認識は、ふと思いついて得ることはできないし、教えられるものでもない。それは完全に個人的な体験に関係することなのだ。これらの三つの段階の働きの核心には、神の人に対する救いが在るが、この救いの働きの中には幾つかの働き方と、神の性質を表す手段が含まれている。これは、人がもっとも識別し難いことであり、また理解するのがむずかしいことである。時代の区分、神の働きの変化、働きの変化、この働きの受益者の変化等、これら全てが三つの段階の働きに含まれている。特に、聖霊の働き方の違い、神の性質、姿、名前、身分、その他の変化など、これら全てが三つの段階の働きの一部である。一つの働きの段階は、一部しか表すことはできず、特定の範囲に限られている。それは時代の区分や神の働きの変化には関連がなく、他の側面にはさらに関連性がない。これは完全に明らかな事実である。三つの段階の働きが人類を救う神の働きの全てなのだ。人は、人類を救う働きの中で、神の働き、そして神の性質を認識しなければならず、この事実なしには、あなた方の神に対する認識は、ただ無意味な言葉でしかなく、机上の空論にすぎない。そのような認識では、人を納得させることも征服することもできず、そのような認識は実情にそぐわないし、また真理でもない。その認識がたとえ十分で、聞こえの良いものであっても、神の元来の性質と合致しないのであれば、神はあなたを容認しない。神はあなたの認識を称賛しないだけでなく、神を冒瀆した罪びととしてあなたに天罰を下す。神を認識する言葉は軽々しく語られるものではない。たとえあなたが流暢で弁が立ち、あなたの言葉が死人を生き返らせ、生きている人を死なせることができるとしても、神に対する認識を語ることにしても素人同然である。神は、あなたが急いで判断を下したり、気軽に褒めたり、また無頓着に中傷したりできる対象ではない。あなたは誰でもどんな人でも褒めるが、それでもなお神の大徳と恩恵を描写する適切な言葉に悪戦苦闘し、これは全ての失敗者が体験することなのである。神を描写することのできる言語の専門家は大量にいるが、その描写の正確さは、神に属し、限られた語彙しか持たずとも豊かな経験を身に付けている人々によって語られる真理の百分の一にすぎない。よって神への認識は、巧みに言葉を使うことや豊富な語彙によるものではなく、正確さと現実性にかかっていること、また人の知識と神への認識は、全く関係がないことが見て取れる。神を認識するという学びは、人類のどの自然科学よ

りも高尚である。それは、神を認識することを探し求める非常に少数の人間によってのみ達成できる学びであって、才能があれば誰でも達成できるわけではない。よってあなた方は、神を認識することと真理を追求することを、ほんの子供でも達成できる、という見方をしてはならない。あなたは、家庭生活、仕事の経歴あるいは結婚生活においては完全に成功を収めているかもしれないが、真理および神を認識する学びに関しては、自分では見せられるものは何も持たないし、また何の成果も上げていない。真理を実践するとはあなた方にとって非常に難しいことであり、神を認識することは更に困難な問題であると言ってよい。これはあなた方にとって困難なことであり、同時に人類全体が直面している難事である。神を認識するために何らかの達成した人たちの中で、標準レベルに達する人はほとんどいない。人間は、神を認識することが何を意味するのか、あるいはどうして神を認識する必要があるのか、またはどの程度で神を認識していると見なせるのかを知らないのである。これは人類を非常に困惑させるものであり、ごく簡単に言うと人類が直面する最大の謎であり、誰もこの質問に答えることができないし、誰も進んで答えようとはしないのだが、その理由は、今日まで人類のうち誰一人としてこの働きの研究に成功したことがないからだ。おそらく、三つの段階の働きの謎が人類に明らかにされるときは、神を認識する才能集団を成す人たちが次々と現れるだろう。もちろん、そうなることをわたしは望むし、さらにわたしはこの仕事を実践中であり、近い将来そのような人材がもっとたくさん現われることを願う。彼らは、三つの段階の働きの事実を証しする者となり、そしてもちろん、三つの段階の働きを証しする最初の者となるだろう。神の働きが終わる日になって、もしそのような才能ある者がいなかったならば、あるいは一人か二人しかいなかったならば、そしてこの一人か二人は受肉した神によって完全にされることを自ら受け入れていたとしたら、これ以上悲しく、また悔やまれることはない。もちろんこれは最悪のシナリオにすぎないが。いずれの場合も、真剣に追及する者がこの祝福を得られることを願う。世の始まりの時から、このような働きはかつて一度も存在しなかったし、人類の発展の歴史の中で、かつてなかった仕事である。もしあなた方が本当に最初に神を認識する者達の一人になることができるならば、被造物全ての中で、最も名誉なことではないだろうか。人類のなかで神によってこれ以上に称賛される人がいるだろうか。このような仕事は簡単に達成できるものではないが、それでも最終的には成果を収める。性別や国籍に関わらず、神を認識することのできる人々は皆、最後に神から最高の名誉を受けるだろうし、また神の権威を備える唯一の者たちとなる。これが今日の仕事であり、未来の仕事でもあるが、要はこれが最終の、また過去6000年の働きの中で達成される最高の仕事ということであり、それによ

って人間の各区分を明らかにする仕事の一手段である。人に神を認識させるための働きを通して、人の異なるランクが明らかにされる。つまり、神を知る者は神の祝福を受け、神の約束を受け取る資格があるが、一方で、神に対する認識を持たない者は神の祝福を受ける資格、神の約束を受け取る資格がないことになる。神を知る者は、神の知己であり、神に対して認識を持たない者は神の知己とは呼ばれない。すなわち、神の知己は、神のあらゆる祝福を受けることができるが、神の知己でない者は、神の働きのどれにも値しない。苦難であれ、精錬あるいは裁きであれ、全ては人が最終的に神に対する認識を得られるようにするためであり、人が神に服従するようになるためである。これが最終的に達成される唯一の成果である。三つの段階の働きはどれも秘密ではなく、これは人が神を認識するのに役に立つことで、人が神についてもっと完全で徹底的な認識を得る手助けとなる。この働きは全て人のためである。

神自身の働きは、人が知らなければならないビジョンである。神の働きは人には達成できないし、人には備わっていないものだからである。三つの段階の働きが神の経営の全てであり、人が認識すべき最大のビジョンである。もし人がこの偉大なビジョンを知らないとすれば、神を認識することも神の心を理解するのも容易ではないし、さらに人が歩む道もますます困難になる。ビジョンがなければ、人はここまで来ることはできなかっただろう。人を今日まで守ってきたのはビジョンであり、人に最大の保護を提供してきたのはビジョンである。将来、あなた方の認識はより深くなるべきであり、あなた方は神の心の全て、そして三つの段階の働きにおける神の賢明な働きの本質を認識するようにならなければならない。これこそがあなた方の真の背丈なのだ。働きの最終段階は、独立した段階ではなく、それ以前の二つの段階と一緒に形成された全体の一部であるから、三つの段階の働きのうち一つだけを行うことで救いの働き全体を完成させることは不可能である。たとえ働きの最終段階が人を完全に救うことができたとしても、必要なのはこの単独の段階を実践することだけという意味にはならないし、人をサタンの影響力から救うために、その前の二つの段階の働きは必要ないということにはならない。救いの働き全体が三つの段階の働きであって、その中の一つの段階ではないため、三つの段階の働きのうちどの段階も単独に取り上げて全人類の唯一の認識すべきビジョンとすることはできない。救いの働きが完成されていない限り、神の経営（救い）も完全に終わることはできない。神の存在、性質、そして英知が救いの働き全体の中に表現されており、初めは人に対して明らかにされていなかったが、救いの働きの中で徐々に表されるようになった。救いの働きの各段階それぞれが神の性質と神の存在を部分的に表

しているが、働きの各段階が直接かつ完全に神の存在全体を表すことはできない。つまり、救いの働きは三つの段階の働きが完成した後全部終わるのだから、神のすべてに関する人の認識は三つの段階の働きから切り離すことはできない。人が一つの段階から得るものは、単に神の働きの一部で表される神の性質にすぎず、それは前後の段階で表される性質と存在を代表することはできない。なぜなら、人類を救う働きは一時期または一箇所ですぐ終わるものではなく、異なった時期、異なった場所で人類の発展の状況によって次第に深くなっていくものだからである。それはいくつかの段階で行われる働きであって、一つの段階で終わるものではない。だから神の英知の全ては、一つの個別の段階よりはむしろ、三つの段階において具体化されるのである。神の存在の全て、神の全ての英知が、これらの三つの段階の中に配置されていて、どの段階の働きの中にも神の存在があり、神の働きの英知が記されている。人は、これらの三つの段階の中に表現されている神の性質の全体を認識しなければならない。この神の存在の全てが人類全てにとって非常に重要であり、神を礼拝するときに、人がもしこの認識を持たないのであれば、彼らはブッダを崇拝する人々と何ら変わらないことになる。人の間で行う神の働きは人に隠されておらず、神を崇拝するすべての人に認識されるべきである。神は、人の間で人を救う三つの段階の働きを行ったのだから、人は、これらの三つの段階の働きの中で表現されている神が持つもの、また神であるものを認識すべきである。これは人がすべきことである。神が人から隠すことは、人が達成できないこと、また人が知るべきでないことであり、一方、神が人に見せることは、人が知るべきこと、そして人が身に付けるべきことなのである。三つの段階の働きの各段階は、それぞれの前の段階を基礎として実行されるもので、単独には働きは行われず、また救いの働きから切り離しては行われぬ。実行された働きの時代と種類には大きな違いがあるが、その核心はやはり人類の救いであり、救いの働きの各段階は、その前の段階のものより深くなる。各段階の働きは、そのひとつ前の段階を基礎として続くものであり、それは無効にならない。このようにして、神の働きは古くならず、常に新しく、その中で神は、今まで見せたことのない自らの性質の側面を人に対して絶えず表現し、そして常に神の新しい働きと存在を明らかにし、たとえ古くからの宗教家たちが最大限反抗し公然と反対するとしても、神は常に意図している新しい働きを実行する。神の働きは常に変化しているため、常に人の反対にあう。そこで、神の働きの時代とその対象と同様に、神の性質も常に変化している。その上、神は常にこれまでしたことのない働きを行い、人から見れば以前と矛盾あるいは相反する働きさえする。人は、一種類の働き、あるいは一つの実践方法だけしか受け入れることができない。人にとって、自分たちと相反する、あるいは自分

たちよりも高尚な働きや実践方法は受け入れがたい。しかし聖霊は常に新しい働きを行っていて、そのために神の新しい働きに反対する宗教専門家の団体が次から次へと出現する。こういう人たちが専門家になったのは、どうして神が常に新しくて古くならないのかを人が認識しておらず、また神の働きの原則についての認識も持たず、そしてさらに神が人を救う様々な方法についての認識も持っていないがためである。というわけで、人はその働きが聖霊から出たものであるかどうか、あるいは神自身の働きかどうかの区別がつかない。多くの人は、前に発せられた言葉と合致すれば受け入れるが、以前の働きと違う点があれば反対して拒絶するという態度にしがみついている。今でも、あなた方はみなそのような原則に縛られているのではないだろうか。救いの三つの段階の働きは、あなた方にはあまり効果を上げておらず、また前の二つの段階の働きは負担になるものだからまったく認識する必要がないとさえ信じる者もいる。彼らは、これらの段階は、大衆には発表すべきでなく、早々に撤回されるべきだと考えている。三つの段階の働きのうちの前の二段階によって人々が混乱しないようにである。多くの人は、前の二段階の働きを示すのは余計なことであり、神を認識するのに全然役に立たないと思っている—これがあなた方の考えである。今日、あなた方は皆、そのように行動することは正しいと考えているが、いつかわたしの働きの重大さに気づく時が必ず来る。わたしは意義のない働きは行わないことを知らなければならない。わたしがあなた方に三つの段階の働きを示している以上、それらはきっとあなた方のためになる。これら三つの段階の働きは神の経営全体の核心であるのだから、きっと全宇宙で全ての人の注目の的となる。いつかあなた方は皆この働きの重要性に気づくだろう。あなた方が神の働きに逆らう、あるいは自分の観念により今日の働きを判断するのは、あなた方が神の働く原則を知らないからであり、またあなた方が聖霊の働きを真剣に受け止めないからだということを認識しなさい。あなた方が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、あなた方自身の観念と生まれつきの尊大さのせいである。それは神の働きが間違っているからではなく、あなた方が元々あまりにも反抗的だからである。人によっては、神への信仰を持った後に、人がどこから来たのかということさえ確信をもって言えないのに、あえて聖霊の働きが正しいかそうでないかについて演説を行ったりする。彼らは、聖霊の新しい働きを持つ使徒たちに説教したり、意見したり、立場をわきまえないで余計な口を挟んだりさえする。彼らは人間性が非常に低俗で、思慮分別のかけらも持っていないのである。このような人が聖霊の働きによって拒絶され、地獄の火に焼かれる日が来るのではないか。彼らは、神の働きを認識しない代わりに、神の働きを批判し、しかも神に対して働き方の指図までする。このように理不尽な人たちがどうして神を知ることができる

だろう。人は、神を求め、経験する過程で、神に対する認識を得るようになる。つまり、気まぐれに神を批判する中で聖霊の啓発を受けて神を認識するのではない。神に対する認識が正しいほど、人は神に反発しなくなる。逆に、神への認識が少ないほど、人は神に逆らう。あなたの観念、古くからの本性、人間性、性格や道德観は、あなたが神に逆らう「資本」であり、あなたが墮落して下劣で低俗であるほど、あなたはますます神の敵対者になる。欲深い観念の持ち主や独りよがりな性質の者は、さらに受肉した神の憎しみを買い、そのような人たちは反キリストである。もしあなたの観念が正されなければ、常に神に敵対することになり、永久に神と融和することができず、そしていつも神から離れていることになる。

自分の古い観念を捨ててこそ、新しい認識を得ることが可能であるが、古い認識は古い観念であるとは限らない。「観念」とは、人が想像したことで、現実と反するもののことを言う。もし古い認識が古い時代にもう時代遅れとなり、それが新しい働きの中に入るのを阻んでいたら、そのような認識も観念である。もし人がそのような認識に対して正しく対処することができ、神をいくつか違った側面から認識し、古いものと新しいものを合わせることができれば、古い認識でも人の助けとなり、人が新しい時代に入る基盤となることができる。神を認識するという学びにおいては、例えば、どのようにして神を認識するための道へ入るのか、神を認識するためにはどの真理を理解すべきなのか、またいかにして自分の観念と古い性質を取り除き、神の新しい働きの計画すべてに従うようになるのか等、多くの原則を習得する必要がある。神を知るという学びに入るための基盤としてこれらの原則を用いれば、あなたの認識はますます深くなる。もしあなたが三つの段階の働き、つまり神の経営（救い）の全計画に対してはっきりした認識を持ち、前の二つの段階の働きと現在の働きとを完全に関連づけ、それが一つの神によってなされた働きであると捉えることができれば、あなたはこれ以上ないほど強固な基盤を持つことになる。三つの段階の働きは一人の神によってなされ、そしてこれは最も偉大なビジョンであり、神を認識するための唯一の道である。三つの段階の働きは、神自身にしかできなかったことであり、誰も神の代わりにできることではなく、要するに、初めから今日まで神自身の働きは神にしかできないのである。神の三つの段階の働きは、異なる時期に異なる場所で行われており、またその内容もそれぞれ異なるが、それらは全て唯一の神によってなされたものである。すべてのビジョンの中でも、これが人の認識すべき最も偉大なビジョンであり、もし人がこれを完全に理解するなら、自分の立場を貫くことができる。現在、様々な宗教や宗派が直面している最大の問題は、彼

らが聖霊の働きを認識していないということであり、聖霊の働きと聖霊のものでない働きを区別できず、そのために彼らは、先の二つの段階の働きと同様に、この段階の働きが神ヤーウェによるものかどうか解らないのである。神に従ってはいても、ほとんどの人がそれが正しい道なのかどうかを区別できない。人は、この道が神が自ら導いているものかどうか、神の受肉が事実であるのかどうかを気に病んでいるが、ほとんどの人は、このことに関し、どのように見分ければ良いのか一切手掛かりがないのである。神に従っている人たちは、取る道を決断できず、よって、発せられる言葉はこのような人たちの間では部分的な効果しか持っておらず、また完全な効果を発揮できないために、そのような人々がいのちに入ることに影響を及ぼしている。三つの段階の働きにおいて、それらが違う時期に、違う場所で、そして違う人々に対して神が為したことであり、人が見きわめることができ、たとえ働きが違っていても、それらは全て唯一の神によって為され、それは唯一の神によって為される働きである以上、正しく、間違いがあるはずはなく、またそれが人の観念とは合致せずとも、唯一の神の業であることは否定できないということ——もし人がそれは唯一の神の働きであると確信をもって言えるならば、人の観念はほんの些細な事となり、言及する価値もなくなるであろう。人のビジョンが明確でない上に、人はヤーウェが神でありイエスが主であることしか知らず、現在の受肉した神について決めかねているために、多くの人にはヤーウェとイエスの働きに専念することに留まり、今日の働きについての観念に悩まされ、ほとんどの人は常に疑いを抱き、今日の働きを真剣に受け止めていないのである。人は、見るができなかった先の二つの段階の働きに関しては、何の観念も持っていない。それは、人が先の二つの段階の働きの実情を理解せず、またそれらを自ら目撃しなかったからである。見えないからこそ、人は好きなように想像するが、どんなに想像しても証拠となる事実はないし、またその誤りを正す者もない。人は、本能のままに警戒心を捨てて想像力を逞しくさせているのだが、立証する事実がないので、証拠があるかどうかに関わらず、人の想像したことが「事実」となっている。従って、人は自分で想像した神を心の中で信じているわけで、実際の神を求めないのである。一人の人間が一種類の信仰を持つとすると、100人の人が居れば100通りの信仰があることになる。人は、神の働きを実際に見たことがないため、また耳で聞いたことがあるだけで、自分で目にしたことがないために、そのような信仰に取りつかれている。人は伝説や物語を聞いたことがあっても、神の働きという事実の認識についてはほとんど聞いたことがない。したがって、信者になってたった一年の人も、自らの観念をとおして神を信じているし、生涯信者である人も同様である。事実を見ることができない者は、神に対する観念がある信仰から抜け出すこ

とはできない。人は自らの古い観念の束縛から解放され、新しい境地に入ったと信じている。神の真の顔を見ることができない者の認識は、観念や言い伝え以外の何物でもないことを人は知らないのだろうか。人はみな自分の観念が正確で間違いないのだと思い、自分の観念は神から来るものだと思っている。今日、人は神の働きを目の当たりにすると、長年にわたって蓄積した観念を放つのである。だが、過去の想像と考え方がこの段階の働きの障害になったため、人がそのような観念を手放し、またそのような考え方に反論するのが困難になっている。今日まで神に従ってきた多くの人たちの持つ、この段階的な働きに対する観念は以前にも増して危機的なものになっており、これらの人たちは、徐々に受肉した神に対する頑固な敵意を形成しているが、この憎しみは人の観念と想像から出ているのである。事実は人に想像する自由を与えず、さらに人によって簡単に反論されることはない一方、人の観念と想像は事実の存在を許さず、その上に人は事実の正確さと信憑性には考慮せず、ただひたすら自分の観念を自由に働かせ、自分自身の想像力をたくましくするために、人の観念と想像は、人の観念とは相いれない今日の働きの敵となったのである。これは、もっぱら人の観念の誤りと言えるもので、神の働きの誤りではない。人が何を想像しようが自由だが、神の働きの事実は人が侵すことができないものだから、神の働きのどの段階でも、あるいは働きのごく一部でも、それについて軽々しく異議を唱えるべきではない。あなたは自由に想像しても構わないし、ヤーウェとイエスの働きについて、すばらしい話をまとめても構わないが、ヤーウェとイエスの働きの各段階の事実について反論してはならない。これは原則であって、行政命令でもあるが、あなた方はこれらの問題の重大さを理解しなければならない。人はこの段階の働きは人の観念と合致しないが、先の二つの段階の働きはその限りではないと信じている。人はその想像の中で、先の二つの段階の働きは今日の働きと同じでないことを確信しているが、神の働きの原則は全て同じであり、神の働きは常に実践的であること、時代に関係なく、いつも神の働きの事実逆天に反対する人が大量に現れることを考えたことがあるだろうか。今、この働きの段階逆天に、反対する人たちは、過去の時代においても間違いなく反対していただろう。そのような人々は常に神の敵だからだ。神の働きの事実を理解している人たちは、三つの段階の働きを、唯一の神の働きとして捉え、自分の観念は捨てるのである。このような人々が神を知る人々であり、真に神に従う人々である。神の経営（救い）の一切が終わりに近づくとき、神は万物を種類に応じて分類する。人は創造主の手で造られたのだから、最後には神が人を神の支配のもとに戻さなければならないのである。これが三つの段階の働きの終結である。終わりの日の働きの段階と、イスラエルとユダヤにおける前の二つの段階は、全宇宙における

神の経営（救いの）計画である。これは誰にも否定できないし、そしてこれが神の働きの事実である。人々はまだこの働きのほとんどを経験もしていなければ見てもいないが、事実は事実であり、人はだれもこれを否定できない。神を信じる全宇宙各地の人々はみなこの三つの段階の働きを受け入れるであろう。もしあなたが一つの特定の段階の働きだけを認識して、他の二段階の働きを理解せず過去の神の働きも理解しないならば、あなたは神の全経営（救いの）計画の真相を語ることはできないし、あなたの神の認識は偏ったものである。神への信仰においては、あなたは神を知らず、理解していないために、あなたには神を証しする資格がないのである。あなたの現時点でのこれらの事柄に関する認識が深かろうと浅かろうと、最後には、あなた方は認識を持ち完全に納得するようになるはずであり、あらゆる人が神のすべての働きを目にして、神の支配の下に服従するようになるのである。この働きの終わりには、全ての宗教が一つにまとまり、全ての神の被造物が創造主の支配の下に戻り、唯一の真の神を礼拝して、全ての邪悪な宗教は無に帰して、二度と現れることはない。

なぜこのように連続して三つの段階の働きに言及するのか。時代の移り変わり、社会の発展、自然の変貌はみなこの三段階の働きが変化するにつれて変わるのである。人類は神の働きに合わせて変化するのであって、人類が単独で発展しているのではない。神の三つの段階の働きに触れるのは、全ての被造物と、あらゆる宗教、あらゆる宗派の人々全てを、唯一の神の支配の下に集めるためである。あなたがどの宗教に属しようとして、最終的にあなたは皆神の支配の下に従うのである。神自身だけがこの働きを実行できるのであって、それはどの宗教の代表にも不可能である。世界には主要な宗教がいくつか存在し、各宗教がそれぞれ代表あるいは指導者を持っているが、その信徒も世界中の様々な国や地域に広がっている。大国であろうと小国であろうと、どの国にもいくつかの異なる宗教が存在する。しかしながら、世界中にどれほどの数の宗教が存在しようとも、宇宙の中の人々はみな、究極のところ唯一の神の導きの下に生存しているのであって、人々の存在は宗教の代表あるいは指導者に導かれているわけではない。要するに、人類は特定の宗教の代表や指導者ではなく、人類全体が、天地を造り、万物を造り、そして人類を造った創造主に導かれているということであり、またこれは事実である。世界にはいくつかの主要な宗教があるが、その大きさに関係なく、それらの全てが創造主の支配の下に存在しているのであって、いかなる宗教もこの支配の範囲を超えることはできない。人類の発展、社会の進化、そして自然科学の発達、これらはそれぞれ創造主の計画から切り離すことはできないし、この働きは特定の宗教の代表にできるもの

ではない。宗教を代表する人というのは、特定の宗教組織の指導者というだけで、神、つまり天地と万物の創造主の代理を務めることはできない。宗教の代表は、その宗教全体の内において人々を率いることはできても、天下のあらゆる被造物を統率することはできないし、これは世界中で認められている事実である。宗教の代表は単なる指導者であり、神（創造主）と対等の立場にはなれない。万物は創造主の支配下にあり、最後には創造主の手中に戻る。人類は元々神に造られ、宗教に関係なく、全ての人が神の支配下に帰するものであり、これは必然である。神だけが万物の中で最も高い地位に在り、すべての被造物の中の最高の支配者でも神の支配の下に帰らなければならない。人の地位がいくら高くても、人類を適切な終着点へと導くことはできないし、誰も万物をその種類に応じて分類することはできない。ヤーウェ自身が人類を造り、人々をそれぞれその種類に分類したのだから、終わりの時にもやはり神は自身でその働きを行い、万物をその種類に従い分類するが、これは全て神以外にはできないことである。初めるときから今まで、三つの段階の働きは全て神自身が行ったのであり、それは唯一の神がしたことである。三つの段階の働きの事実、人類全体に対する神の統率力の事実であり、誰も否定できない事実である。三つの段階の働きの終わりには、万物が種類に応じて分別されて神の支配の下に帰り、そしてそこには全宇宙を通してただ唯一の神だけが存在し、その他の宗教は存在しなくなる。世界を造ることができない者は、世界を終わらせることもできないが、世界を創造した神は、必ず終わらせることもできる。だから、もし誰かが一つの時代を終わらせることができず、単に人がその心を養うのを手助けできるだけなら、その人は断じて神ではないし、断じて人類の主でもない。そのような者にこのような偉大な働きは可能でなく、このような偉大な働きは唯一の存在によってのみ可能である。そしてこのような働きができない者はみなきっと神以外の敵である。全ての邪悪な宗教は神とは相いれない。そして、神と相いれないなら、それらは神の敵である。すべての働きはこの唯一の真の神が為すものであり、全宇宙がこの真の神の支配下にあるのだ。神の働く場所がイスラエルでも中国でも、またその働きが聖霊によるものでも肉体によるものでも、全ては神自らによって行われるもので、他の誰にもできないことである。神が全人類の神だからこそ、神はどんな条件にも制限されず自由に働き、これはすべてのビジョンの中で最大のものである。もしあなた方が、神の被造物の一人として被造物の本分を尽くし、神の心を理解したいのであれば、神の働きを理解し、神の被造物に対する心を理解しなければならず、また神の経営（救いの）計画、そして神の為す仕事の意義の全てを理解しなければならない。これらの事が理解できない者は、神の被造物としての資格がない。もしあなた方が、神の被造物として、自分がど

これから来たのかが分かっておらず、人類の歴史や神が行った働きの全てを知らず、さらには人類がいかにしてここまで発展してきたか、また全人類を支配するのは誰なのかを理解していないのであれば、あなた方には、その本分を尽くすことはできない。神は今日まで人類を導いてきた。そして神が人類をこの地上に造ってからこれまで、神は一度も人の傍を離れたことがない。聖霊は休むことなく働き続け、人類を導き続けて、一度も人から離れたことがない。それなのに、人は神の存在に気づかず、ましてや神を知らないが、神の全ての被造物にとって、これほど屈辱的なことがあるだろうか。神は自ら人を導いているのに、人は神の働きを理解していない。あなたは神の被造物であるのにも関わらず、自分たちの歴史も知らず、これまで自分の旅路の中で誰が自分を導いてくれたのかも分からずにいて、神による働きに気付かないから、神を認識できないのだ。あなたがもし今だに知らないとするれば、神を証しする資格はずっとないであろう。今日、創造主は、もう一度あらゆる人々を自ら導き、そしてあらゆる人々に神の英知、全能性、救い、そしてすばらしさを見せている。それでもあなたはまだ気付かず、あるいは理解できずにいるから、それであなたは救いを得られない者になっているのではないか。サタンに属する者たちは神の言葉を理解できず、神に属する者たちには神の声を聴くことができる。わたしの話す言葉に気付いて理解する全ての人々は、救われる者たちであり、また神を証しする者たちなのだ。わたしが言った言葉を理解しない全ての人々は神を証しすることができず、排除される者たちなのだ。神の心を理解できず、また神の働きに気付かない人々は、神の認識を達成することができず、そのような人々は神を証しすることはない。もしあなた方が神を証ししたいと願うなら、あなた方は神を知らなければならぬし、その神の認識は、神の働きを通して達成される。結局のところ、神を知りたいと望むならば、神の働きを知らなければならない。つまり、神の働きを知ることが最重要なのである。三つの段階の働きが終わるとき、神を証しする者たちの一集団、つまり神を知る者たちの一団が作られる。この人たちはみな神に対する認識があり、真理を実行することができる人たちである。彼らには人間性と理知があり、皆三つの段階の救いの仕事を認識している。これが最後になし遂げられる働きであり、この人たちは6000年にわたる経営（救い）の働きの結晶であり、最終的にサタンを打ち負かした最も有力な証しである。神を証しすることができる者は、神の約束と祝福を受けることができる上に、最後の時に残り、神の権威を持ち、神を証しする一団になるだろう。もしかすると、あなた方の全ての人がこの一団の一員になれるかもしれない、あるいは半分か数人だけがそうなるかもしれないが、それはあなた方の意思と追求にかかっている。

『言葉は肉において現れる』より

第4章 終わりの日の神の働きの真理

1. 神の言葉の働きの意義

関連する神の言葉

神の国の時代に神は言葉を使い、新たな時代の到来を知らせ、神の働きの方法を変え、その時代全体の働きを行なう。これが言葉の時代において神が働く原則である。神は異なる視点から語るために肉となり、肉に現れる言葉である神、神の知恵と驚くべき素晴らしさを人間が本当に見ることができるようにした。このような働きは、人間を征服し、人間を完全にし、人間を淘汰する目的をよりよく達成するために行なわれる。これが言葉の時代において働くために言葉を使うことの真の意味である。言葉をとおして、神の働き、神の性質、人間の本質、人間が何に入っていくべきかを人間は知ようになる。言葉をとおして、言葉の時代に神が行ないたい働きはその全体が結実される。言葉をとおして、人間は明らかにされ、淘汰され、試される。人間は言葉を見、言葉を聞き、言葉の存在に気づいた。その結果、人間は神の存在、神の全能性と知恵、また神の人間への愛と人間を救う願望を信じる。「言葉」という語句は単純でごく普通であるが、受肉した神の口から出る言葉は宇宙全体を揺るがせる。それは人間の心、観念、古い性質、世界全体が以前にはどのように表れていたかを変革する。時代をとおして、今日の神だけがこのような働き方をし、今日の神だけがそのように語り、そのように人間を救いに来る。それ以降は、人間は言葉の導きの下に生き、言葉により牧され、施しを受ける。全人類は言葉の世界に、神の言葉の呪いと祝福の内に生きようになった。そして言葉の裁きと刑罰の下に生きようになったさらに多くの人間がいる。これらの言葉とこの働きはすべて人間の救いのため、神の旨を成就するため、過去の創造における世界の元来の状況を変えるためである。神は言葉をもって世界を創造し、宇宙の人間を言葉をもって導き、言葉をもって征服し救う。ついに、神は言葉を使って古い世界全体を終わらせる。そのときはじめて、経営(救いの)計画がくまなく完了する。神の国の時代をとおして神は言葉を使って働きを行ない、働きの成果を達成する。神は不思議や奇跡は行なわない。神はただ言葉をとおして働きを行なうにすぎない。言葉ゆえに人間は養われ、施しを受ける。言葉ゆえに人間は認識と真の経験を得る。言葉の時代の人間は真に格別の祝福を受けた。肉体的苦痛に苦しまず、ただ神の言葉の豊かな施しを享受する。探し求めたり、旅をしたりするために出かけていく必要もなく、安穩の只中にあるま

まで人間は神の出現を見、神がその口で話すのを聞き、神の施しを受け、神が自らその働きを行なうのを見る。これは過去の時代の人間には享受できなかったことであり、彼らが決して受けることができなかった祝福である。

『言葉は肉において現れる』の「神の国の時代は言葉の時代である」より

当時、イエスは使徒たちにとっては不可解な働きをたくさん行い、人々には理解できないことを多く言った。これは当時イエスが説明しなかったからである。そのため、イエスが去ってから数年後にマタイがイエスの系図を作り、他の者も人間の意志による働きをたくさん行なった。イエスは人を完全にし、自分のものとするために来たのではなく、働きの一段階をするために来たのである。それは天の国の福音をもたらし、十字架の働きを完成させることであり、イエスが十字架につけられた時点でその働きは完了している。しかし、現在の段階、征服の働きの段階では、もっと多くの言葉が語られ、もっと多くの働きがなされ、そして多くの過程を踏まなければならない。イエスとヤーウエの働きの奥義も明らかにされ、すべての人が信仰において理解と明瞭を得られるようにされなければならない。というのは、これは終わりの日の働きで、終わりの日は神の働きの終わりであり、この働きが完了する時だからである。働きのこの段階はあなたのためにヤーウエの律法とイエスの贖いを明確にするであろう。この働きは主にあなたが神の六千年の経営（救いの）計画の全体像を理解し、六千年の経営計画のすべての意義と本質を理解し、イエスによってなされたすべての働きとイエスが語った言葉の目的、そしてあなたの聖書に対する盲目的信用と崇拜さえも理解するためである。この段階の働きはこれら全てをあなたがたに理解させるであろう。あなたはイエスによってなされた働きと今日の神の働きの両方を理解するようになるであろう。真理、いのち、そして道をすべて理解し見上げるであろう。イエスによってなされた働きの段階で、イエスはなぜ神の働きを終えることなく去ったのだろうか。それはイエスの働きの段階は、完了の働きではなかったからである。イエスが十字架に釘付けにされたとき、イエスの言葉もまた終わりを迎えた。十字架刑の後、イエスの働きは完全に終わりとなった。現段階は違っている。言葉が最後まで語られ、神の働きの全体が完了したあとではじめて、神の働きは終わる。イエスの働きの段階の期間、多くの言葉が語られずに終わったか、あるいは明確に語られなかった。しかしイエスの職分は言葉による職分ではなかったため、イエスは自分が何を語って何を語らなかったかは気にかけず、そのため、十字架につけられた後に去って行った。その段階の働きは主に十字架刑のためであり、今日の働きの段階とは異なる。この段階の働きは基本的には完了すること、明確化すること、そし

てすべての働きを終結することである。もし言葉が最後の最後まで語られないなら、この働きを終える方法はないであろう。この段階の働きで、すべての働きは、言葉を用いて終わり達成されるからである。当時イエスは人には理解できない多くの働きをした。イエスは静かに去り、今日依然としてイエスの言葉が理解できない人たちが多くいる。彼らの理解は間違っているが、それでも彼らは正しいと信じており、間違っていることを知らない。最後には、この現段階は神の働きを完全に終わらせ、その終結をもたらすだろう。すべての人たちが神の経営計画を理解し知るようになるであろう。人の中にある観念、意図、間違った理解、ヤーウェとイエスの働きに関する人の観念、異邦人についての見解、そして人の他の逸脱と間違いは正されるであろう。そして人は人生の正しい道、神によってなされたすべての働き、そしてすべての真理を理解するであろう。そうなった時、この段階の働きは終わりとなるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（２）」より

この最後の段階の働きにおいて、成果は言葉によって達成される。言葉を通して、人は多くの奥義や過去の世代にわたる神の働きを理解するようになる。言葉を通して、人は聖霊の啓きを受け、言葉を通して、人はかつての世代に決して解明されなかった奥義や、昔の預言者たちや使徒たちの働き、そして彼らの働きの原則などを理解するようになる。言葉によって、人は神の性質を知るようになると同時に、人の不従順さや反抗心を理解し、自分の本質を知るようになる。このような働きの段階と、語られた全ての言葉を通して、人は霊の働き、受肉した神の働きを知り、さらに彼の性質の全体を知るようになる。神の六千年以上にわたる経営（救いの）に働きについてのあなたの認識も言葉によって得られた。あなたが以前もっていた観念を知ったのも、それをわきに置くことができたことも、言葉を通して成されたのではなかったのか。前の段階で、イエスはしるしや不思議を行なったが、この段階ではしるしや不思議は行われない。なぜ神がしるしや不思議をしないのかという理解も言葉を通して得られたのではないのか。よって、この段階で語られる言葉はかつての世代の使徒たちや預言者たちによってなされた働きを越えている。預言者たちによる預言でさえもこのような成果を上げることはできなかった。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

世の終わりに神は言葉を発することを主な目的として来る。神は聖霊の観点から、人間の観点から、第三者の観点から話す。神は異なった話し方をする。ある期間は一つの話し方をし、人間の見方を変え、漠然の神の姿を人間の心から除くために、様々な話し

方をする。これが神のする主要な働きである。人間は神が病人を癒やし、悪霊を追い払い、奇跡を行い、人間に物質的な幸いをもたらしに来たと考えているため、神はこの段階の働きをする——刑罰と裁きの働きを——そうした観念を人間の思考から除くために。人間が神の現実性、神の正常を知るように。そして、イエスの姿が人間の心から消え、新たな姿に置き換えられるように。人間の心の中にある神の姿が古くなるとすぐに、それは偶像になる。イエスが来てその段階での働きをしたとき、神の全体を示しはしなかった。イエスはいくつかのしるしや不思議を示し、言葉を語り、最後に磔刑に処せられ、神の一部分を示した。イエスは神の全体像を示したわけではなく、一部の働きをして神を示したのだ。これは、神があまりに偉大で、驚くべきであり、計り知れないからであり、神がそれぞれの時代にその働きの一部だけをするからだ。神がこの時代に実行する働きは、主に、人間のいのちのための言葉を与えること、人間の本性の実質と、人間の墮落した性質を明らかにし、人間の知識と文化とともに、宗教的観念、封建的な考え方、時代遅れの考えを除くことである。これはすべて神の言葉によって露わにし、清めなければならない。世の終わりに、神はしるしや不思議ではなく、言葉を用いて人間を完全にする。神は言葉によって人間を露わにし、裁き、罰し、人間を完全にし、言葉の中に神の知恵と素晴らしさを見、神の性質を知り、言葉によって人間が神の働きを知るようにする。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知ること」より

終わりの日において、神は人を完全にするのに、主として言葉を用いる。神は、人に圧力をかけたり人を確信させたりするのに、しるしや不思議を用いない。それは、神の力を明らかにしない。もし神がしるしや不思議を示すだけならば、神の実在性を明らかにすることは不可能だろう。したがって、人を完全にすることも不可能だろう。神は、しるしや不思議によって人を完全にせず、人を潤し牧養するのに言葉を用いる。そしてその後で人は、完全な従順と神についての認識を達成することができる。これが、神が行う働きと神が話す言葉の目的である。神は、人を完全にするのにしるしや不思議を示すという方法を用いない。神は言葉を用い、多くの異なる働きの方法を用いて人を完全にする。それが精錬であろうと、取り扱い、刈り込み、あるいは言葉の施しであろうと、神は、人を完全にするために、人に神の働き、神の知恵や驚くべき力についてのより大きな認識を与えるために、多くの異なる観点から話す。

『言葉は肉において現れる』の「すべてが神の言葉によって達成される」より

終わりの日に、神が肉になるとき、神はすべてを成し遂げるために、すべてを明らか

にするために、主として言葉を用いる。神の言葉の中においてのみ、あなたは、神とは何かを知ることができる。神の言葉の中においてのみ、あなたは、神が神自身であることを知ることができる。肉となった神が地上に来るとき、神は言葉を話すこと以外のどのような他の働きもしない。したがって、事実が必要でない。言葉で十分である。神は主な役割として、この働きをするために、神の力と至高を人が自身の言葉の中に見られるように、神が身を低くして自身を隠すことを人が自身の言葉の中に見られるように、そして神の完全性を人が自身の言葉の中に知ることができるように、来たからである。神が所有するものおよび神が今あるところのものすべてが、神の言葉の中にあり、神の知恵や素晴らしさは神の言葉の中にある。この中にあなたは、神が自身の言葉を話す多くの方法を見ることができる。今までずっと、神の働きのほとんどは、人間への施しであり、暴きであり、取り扱いであった。神は軽々しく人を呪いはしないし、そうするときでさえ、言葉を通してそれを行う。したがって、この肉となった神の時代において、神が再び病人を癒やし、悪魔を追い出すのを見ようとすべきでない。いつもしるしを見ようとしていてはならない。無意味なことだからだ。そのようなしるしは、人を完全にしはしない。わかりやすく言えば、以下のようなことである。今日、肉となった実在する神自身は、話すことだけを行い、行動はしない。このことは真理である。神はあなたを完全にするために言葉を用い、あなたに食べ物を与え、あなたの渇きを癒すために言葉を用いる。神はまた、働きをするために言葉を用い、さらに神は自身の真実をあなたに知らせるために、事実の代わりに言葉を用いる。もしあなたが、このような神の働きを感じ取ることができるなら、受け身でいることは難しいだろう。否定的なことに集中する代わりに、肯定的な事柄にのみ、あなたがたは集中すべきである。つまり、神の言葉が成就されようとしまいと、あるいは事実の到来があろうとなかろうと、神は自身の言葉から人がいのちを得ることを可能にする。これはあらゆるしるしの中の最大のしるしである。そしてなお偉大であるのは、これが議論の余地のない事実であるということである。この事実こそ、神を知る論拠とするのにもっともふさわしい。そしてこのことこそ、しるしよりもさらに偉大なしるしである。このような言葉だけが、人を完全にする。

『言葉は肉において現れる』の「すべてが神の言葉によって達成される」より

わたしの言葉は厳しいかもしれないが、すべては人を救うために語られているのであり、わたしは言葉を語っているだけで、人の肉を罰しているのではない。これらの言葉は、人が光の中で生きるように促し、人に光が存在すること、また、その光は貴重であ

ることを知らしめる。さらにはこれらの言葉が人にとっていかに有益であるか、そして神は救いであることを知らしめる。わたしは刑罰と裁きの言葉を数多く語ったが、それらのことは実際あなたたちに対して行われていない。わたしはわたしの働きを行うために、わたしの言葉を話すために来た。わたしの言葉は厳しいかもしれないが、あなたたちの墮落と反抗を裁くために語られているのだ。わたしがこれを行う目的は依然として人をサタンの支配下から救うこと、人を救うためにわたしの言葉を使うことである。わたしの目的はわたしの言葉で人を傷つけることではない。わたしの言葉が厳しいのは、わたしの働きから成果が獲得されるためである。このように働くことを通してのみ、人は自分自身を知ることができ、反抗的性質を断つことができる。言葉の働きで一番大きな意義は、人々が真理を理解した後、真理を実践し、彼らの性質において変化を達成し、自分自身および神の業についての認識を獲得させることである。話すことを通して働くという手段のみが神と人の意思疎通を可能にでき、言葉のみが真理を説明することができるのである。このような方法で働くことは、人を征服する最善の手段である。言葉を発すること以外では、真理や神の業をより明確に人に理解させることのできる手段は他にない。そこで神は神の業の最終段階で人に話しかけ、人が理解しないすべての真理や奥義を明らかにして、彼らが神から真理の道といのちを得て、神の心を満足させることができるようにする。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである

」より

この時代に神はあなたがたのもとに、この現実をもたらす。つまり、一人ひとりが神の言葉を生き抜き、真理を実践することができ、誠実に神を愛し、すべての人が神の言葉を基盤として自分たちの現実として用い、神への畏敬の念に満ちた心を持ち、神の言葉の実践をとおして、人間は神と共に王としての力を振るう、という現実である。神が達成するのは、この働きである。あなたは神の言葉を読まずに生きていくことができるか。神の言葉を読まずには一日、二日さえも生きていけないと感じる人が今では多くいる。彼らは神の言葉を毎日読まなくてはならず、もし時間のせいでそれが許されないのであれば、神の言葉を聴くことで事足りる。これが聖霊が人間に与える感情であり、これが聖霊が人間を動かし始めるやり方である。つまり、神は言葉をとおして人間を統治し、それにより人間が神の言葉の現実に入れるようにするのである。もし、神の言葉を飲み食いすることなしに一日だけ経った後、闇と渇きとを感じ、それを受け入れられな

いと感じるならば、それはあなたが聖霊により動かされており、聖霊があなたから離れていないことを示している。そうであれば、あなたはこの流れの中にいる。しかし、神の言葉を飲み食いしないで一日か二日経った後、何も感じず、渇きもなく、まったく動かされていないのならば、それは聖霊があなたから離れたことを示している。そうであれば、これはあなたの内面状態の何かが間違っているということである。あなたは言葉の時代に入っておらず、遅れをとったのである。神は言葉を用いて人間を統治する。もし神の言葉を飲み食いするならば、あなたは良い気分になり、もしそうしないならば、あなたにはたどるべき道がない。神の言葉は人間の食物、人間を動かす力となる。聖書には「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とある。これが神が今日達成する働きである。神はあなたがたにおいてこの真実を達成する。どうして過去の人間が神の言葉を何日間も読まないで、それにもかかわらず食べて働くことができたのだろうか。そしてなぜ今ではそうではないのだろうか。この時代において、神はおもに言葉を使ってすべてを統治する。神の言葉をとおして、人間は裁かれ、完全にされ、そして最後には神の国に連れて行かれる。とりわけ神の国の時代においては、神の言葉だけが人間のいのちを供給することができ、神の言葉だけが人間に光と実践のための道を与えることができる。あなたが毎日神の言葉を飲み食いし、神の言葉の現実から離れない限り、神はあなたを完全にすることができるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の国の時代は言葉の時代である」より

2. 神の征服の働きの意義

関連する神の言葉

サタンによりあまりにもひどく墮落させられた人類は、神が存在することを知らず、神を礼拝することをやめてしまった。初めに、アダムとエバが創造された時、ヤーウェの栄光とヤーウェの証しが地に満ちていた。しかし、墮落させられた後、人間はその栄光と証しを失った。なぜなら、誰もが神に反抗し、神を畏れ敬うことをすっかりやめてしまったからだ。今日の征服の働きは、そのすべての証しとすべての栄光を取り戻し、すべての人間が神を崇めるようにし、それによって被造物の間に証しがあるようにするためである。これが、この段階の業において達成されねばならぬことである。厳密に言って人間はどのように征服されるのだろうか。それは、この言葉の働きを用いて、人間

を十分に確信させることによって行われる。それは暴露と、裁きと、刑罰と、情け容赦ない呪いを用いて人間を完全に服従させる。また、人間の反抗的性質を明らかにし、その反逆を裁くことによって人間は人類の不義と汚れを知るようになる。それによって神の義の性質がいっそう強調されるであろう。主に、こうした言葉を用いて人間を征服し、完全に確信させる。言葉は人類の究極的征服の手段であり、征服を受け入れる者はみな、言葉による鞭と裁きとを受け入れなければいけない。言葉を語ることによる現在の過程が人間を征服する過程である。人々は、具体的にどのように協力すべきだろうか。これらの言葉を飲食し、また理解することによってである。人々は自分の力によって征服されることができない。あなたはこれらの言葉を飲食することによって自分たちの墮落と汚れ、自分たちの反抗的性質と不義とを知り、神の前にひれ伏さなければいけない。もしあなたが神の心を理解し、それを実行に移し、そしてさらにビジョンを持ち、これらの言葉に完全に従い、自分勝手な選択をしないなら、あなたは征服されるであろう。そして、あなたを征服するのは、これらの言葉であろう。なぜ人類は証しを失ったのか。それは、誰一人神を信じず、もはや神を心にもつことが全くなくなってしまったからである。人類を征服するとは、人々にこの信仰を回復させるということだ。人々は常にこの世に迎合する傾向があり、あまりにも多くの望みを胸に抱き、将来にあまりにも多くの期待をかけ、あまりにも多くの途方もない贅沢を要求する。彼らはいつも自分の肉のことばかり思い、肉のために計画しているが、神を信じる道を求めることにはまったく興味をもたない。彼らの心はサタンの虜となり、彼らは神を畏れ敬う心を失ってしまった。そして、彼らはサタンに自分の心を捧げている。しかし、人間は神によって創られたのだ。こうして、人間は証しを失ってしまった。つまりそれは神の栄光を失ったということだ。人類を征服する目的は、人間の神への畏敬による栄光を取り戻すことだ。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（１）」より

現在の征服の働きとは、人間の結末がどのようなになるかを明らかにすることを意図するものである。なぜわたしは今日の刑罰と裁きとが、終わりの日の大きな白い座の前で裁きだと言うのか。あなたにはこれがわからないのか。なぜ征服の働きは最終段階であるのだろうか。これはまさしく、それぞれの種類の人間が最後にどうなるかを明らかにすることなのではないか。それは、すべての人が、刑罰と裁きとによる征服の働きの過程の中で、自分のありのままの姿をあらわし、その種類に応じて分類されるようになるためではないか。これはむしろ人間を征服するというよりも、各種の人間がどのよう

な最後を迎えるのかを示すことだと言った方がいいだろう。つまり、これは彼らの罪を裁き、それから様々な種類の人間を示し、そのことによって、彼らが悪であるか義であるかを判定するのだ。征服の働きの後に、善に報い悪を罰する働きが続く。完全に従う人々、つまり、完全に征服された人々は次の段階に移され、その業を全宇宙に広める。征服されなかった者は闇の中に置かれ、災厄に遭う。このように人間はその種類によって分類され、悪を行う者たちは悪として分類され、二度と陽の光を見ることがない。また、義人は善として分類され、光を受け、永遠に光の中で生きる。あらゆるものの終わりは近く、人間の終わりは目の前にはっきりと示された。そしてあらゆるものはその種類によって分けられる。それなら、どうして人間がこの分類をこうむることから逃れられようか。それぞれの種類の人間の結末は、あらゆるものの終わりが近づいた時に明らかにされる。それは全宇宙の征服の業（現在の働きを含むすべての征服の業）の間に行われる。この全人類の終わりの明示は、裁きの座の前で、刑罰と終わりの日の征服の業の過程の中で行われる。…征服の最終段階は、人々を救い、また、人々の結末を明らかにすることにある。それは、裁きによって人々の墮落を暴露し、それによって人々を悔い改めさせ、立ち上がらせ、いのちと人生の正しい道を追い求めるようにさせるためである。それは、鈍く頑なになった人々の心を目覚めさせ、裁きによって彼らの内にある反抗的性質を示すためである。しかしながら、もし人々がまだ悔い改めることができず、なおも人生の正しい道を追い求めることができず、これらの墮落を捨て去ることができないのなら、彼らは救いようのないものとなり、サタンにのみ込まれる。これが征服の意味だ——人々を救い、また人々の結末を見せるのだ。良い結末と悪い結末——すべては征服の働きにより明らかにされる。人々が救われるか呪われるかは、みな征服の働きの間に明らかにされる。

終わりの日とは、すべてのものが征服することを通して、その種類にしたがって分類される時のことである。征服することは終わりの日の業である。つまり、一人一人の罪を裁くことが終わりの日の業である。そうでなければ、どうやって人々进行分类できるのか。あなたたちの間で行われている分類の働きは、全宇宙におけるそうした働きの始まりである。この後、すべての国々のいたるところにいる人々も征服の働きの対象となる。これは、被造物であるすべての人々が種類によって分類され、裁きの座の前に進み出て裁かれるということだ。誰一人、何ものもこの刑罰と裁きの苦しみから逃れることはできない。また、誰も、何ものも、この種類による分類を避けることはできない。あらゆるものが種類ごとに分けられる。それは、万物の終わりが近く、天と地のすべ

てが終結に至るからだ。どうして人間が己の存在の終結を逃れられよう。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（１）」より

征服の働きで達成される成果は、主に人間の肉が反抗をやめることである。つまり、人間の知性が神について新たに理解できるようになり、人の心が完全に神に従うようになり、人が神のために存在することを決心することである。人の性格やその肉体がどのように変わるかによって、その人が征服されたか否かが決まるのではない。むしろ、考え、意識、理知が変化するとき、つまり、精神的態度全体が変わるとき、神に征服されたのである。従うことを決意し、新たな心的態度を自分のものとし、もはや神の言葉や働きに自分なりの観念や意図を持ち込まず、頭脳は普通に考えられ、つまり、神のために心から努力できるなら、このような人は完全に征服された人である。宗教の領域では、多くの人々は肉体を抑制したり、十字架を負ったりして生涯にわたって大いに苦しみ、最期の息を引き取るまで苦しみ忍耐することさえする。中には死ぬその朝まで断食を続けている者もいる。このような人々はよい食物やよい衣服を生涯自らに否定し、苦しみだけを重視する。彼らは肉体を抑制し、自らの肉を捨てられる。彼らの苦しみに耐える精神は賞賛に値する。しかし、彼らの考え方、観念、精神的態度、そしてまさに古い本性は、まったく取り扱いを受けていない。彼らは自らを真に理解していない。彼らが心に抱いている神の姿は、伝統的な抽象的で漠然としたものである。彼らの神のために苦しもうという決意は、熱意と積極的な性格から来ている。彼らは神を信じてはいるが、神を理解していないし、神の心を知りもしない。彼らは神のためにただ盲目的に働き、盲目的に苦しんでいる。彼らは識別することを一切重視しないし、自分たちの奉仕が実際に神の心を満たすようにするにはどうするかということもほとんど考慮していない。また、神を理解するためにはどうするかということもほとんど知らない。彼らの仕える神は本来の姿のものではなく、自分たちが作り上げた神、彼らが人から聞いた神、あるいは、書物にある伝説的な神である。そして、彼らは生き生きとした想像力と信仰心から神のために苦しみ、神が望む働きに取り組む。彼らの奉仕はあまりに不正確で、実際にはほんとうに神の心を満たすような奉仕をしている人は誰もいない。どんなに苦しむことを厭わないとしても、彼らの元来からの奉仕についての考え方と彼らの想像する神の姿は変わっていない。彼らは神の裁きと刑罰、精錬と完成を経験していないからであり、誰も彼らを真理で導いていないからである。たとえ救い主イエスを信じていても、彼らの誰一人として救い主を見たことがない。彼らはただ伝説と噂で神を知っているだけなのである。だから、彼らの奉仕は目の見えない人が父親に仕えているように、目

を閉じて行き当たりばったり仕えているにすぎない。このような奉仕で最終的に何を達成できるであろうか。そして、誰がそれを認めるのであろうか。最初から終わりまで、彼らの奉仕はまったく変わらない。彼らは人間の作り出した教えを受け、自分たちの性質と好みとに基づいた奉仕をする。それでどんな褒美を受けられるのであろうか。イエスを見たペテロでさえ神の心になう奉仕の仕方を知らなかった。彼が理解したのは最後、老年になってのことである。このことから、取り扱いも刈り込みも経験したことがなく、導いてくれる人がいたことがない、目の見えない人々について何が言えるであろうか。現在あなたがたのうちの多くの者の奉仕は、そうした目の見えない人たちのもののようではないのか。裁きを受けていない人々、刈り込みと取り扱いを受けず変わらずにいる人々——こうした人々はまったく征服されていないのではないか。そうした人々が何の役に立つだろうか。考え方、人生の理解、神についての理解が何の変化もなく、少しも実際に得たものがないのなら、けっして奉仕によって顕著な成果を得られない。ビジョンなしで、神の働きについての新しい理解なしでは、征服された者にはなれない。そうであるなら、あなたの神に従う方法は、あの苦しみ断食する人たちと同じである。——それは少しも役に立たない。彼らのすることには証しがないからこそ、その奉仕が無駄だとわたしは言うのである。彼らは生涯をとおして苦しみ、監獄で過ごし、あらゆる瞬間に耐え、愛と優しさを重視し、十字架を負う。彼らは世の中からけなされ、拒まれ、あらゆる苦難を経験してきた。彼らは最後まで従うが、それでも征服されておらず、征服されたことについて何の証しもできない。彼らは少なからぬ苦しみを経ているが、心の中ではまったく神を知らずにいる。彼らの古い考え方、古い観念、宗教的実践、人間がつくった理解、人間の考えは取り扱いを受けていない。そこには新しい理解がまるでない。彼らの神についての理解は、少しも真実でも正確でもない。彼らは神の心を誤解している。それが神に仕えるということでありえるであろうか。あなたが過去にどのように神を理解していたとしても、あなたは今日も同じ理解をもち続けており、神が何をしようと、自分なりの観念や考えに基づいた神に関する理解をもち続けているとしよう。つまり、神について新しい本物の理解を何ももっておらず、神の真の姿や性質を知ることができないでいるとしよう。あなたの神についての理解がまだ封建的な迷信的な考え方に基づいていて、人間の想像や観念に導かれているとしよう。もしそうなら、あなたはまだ征服されていないのである。わたしがこうしたことを今述べているのは、あなたに理解させ、この認識によって正しく新たな理解へと導くためである。また、あなたのもっている古い考えや古い認識を捨てて、新たな理解をもてるようにするためでもある。もしほんとうにわたしの言葉を飲み食いするなら、理解は大きく変わるで

あろう。神の言葉を飲み食いするときに従順な心を持ち続けるなら、考え方は変わるであらう。繰り返し刑罰を受け入れられる限り、古い考え方は徐々に変化するのであろう。古い考え方が新たなものに置き換えられるなら、実践もまたそれに伴って変わっていくであらう。このようにして、奉仕はますます適切なもの、ますます神の心にかなうものになっていくであらう。もし自分の生活、人生の理解、神についての多くの観念を変えられるなら、持って生まれた性質は徐々に減じるであらう。これが、そしてこれこそが、神が人間を征服した結果なのである。これが人間に見られる変化である。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（３）」より

ヤーウェの働きは世界の創造で、始まりであった。この段階の働きは働きの終わりで、終結である。最初に、神の働きはイスラエルの選民のあいだで実行され、最も聖なる地における新しい時代の夜明けであった。最後の段階の働きは、世界を裁き、時代を終わらせるために最も汚れた国で実行される。最初の段階では、神の働きは最も明るい地で行われ、最後の段階は最も暗い場所で実行され、この暗やみは追い払われ、光がもたらされ、すべての人々は征服されるであらう。この最も汚れた、最も暗い場所にいる人々が征服され、すべての人々が神の存在と誰が真の神であることを認め、すべての人々がすっかり確信したとき、この事実は全宇宙におよんで征服の働きを行なうのに用いられるであらう。この段階の働きは象徴的である。一旦この時代の働きが終わると、六千年の経営の働きは完全に終わりを迎えるであらう。一旦最も暗いこの場所にいる人々が征服されると、他の場所も同じようになることは言うまでもない。そのように、中国での征服の働きのみが、象徴としての意味を持つ。中国は暗闇のすべての勢力を具現化しており、中国の人々は肉なる者、サタンのもの、そして血肉による者を表している。赤い大きな竜によって最も墮落させられ、神に最も反抗して、人間性が最も卑しく汚れているのは中国人である。だから彼らは墮落した全人類の典型なのである。これは、他の国々にはまったく問題がないということではない。人間の考えることはどれも同じである。他国の人々は優秀であるかもしれないが、神を知らなければその人々は神に逆らっていることになる。なぜユダヤ人は神に逆らい、神を拒んだのか。なぜパリサイ派の人々も神に逆らったのか。なぜユダはイエスを裏切ったのか。当時、弟子の多くはイエスのことを知らなかった。なぜ人々は、イエスが十字架にかけられ、そして復活した後でさえもイエスを信じなかったのか。人間の不服従はどれも同じではないのか。中国の人々は単にひとつの例にされたというだけである。征服されたときには中国人は模範、見本となり、他国の人々の規準の役目を果たすであらう。なぜわたしはあなたがたはわたし

の経営計画の補助であるといつも言ってきたのか。それは墮落、汚れ、不義、敵対、そして反抗が最も完全にあらゆる形で現れているのは中国の人たちの中においてだからである。一方で中国人の能力は乏しく、他方で中国人の生活と考え方は遅れており、習慣、社会環境、家族――すべてが劣っており、最も遅れている。地位もまた低い。この場所での働きは象徴的で、この試験的な働きが全て実行された後、神の次の働きはもっと順調に進むだろう。もしこの段階の働きが完成され得るなら、次の働きも勿論完成される。この段階の働きが達成されたなら、大いなる成功がおさめられ、全宇宙におよぶ征服は完全に終わりとなるであろう。実際、あなたがたのあいだで働きが成功したなら、これは全宇宙におよんで成功したと同じことである。これがわたしがあなたがたを模範、見本とする意義である。反抗、敵対、汚れ、不義…、すべてがこの人たちに見られ、彼らの中には人類の反抗心がすべて表されている。まったく大した人たちである。このように、彼らは征服の縮図として掲げられ、一旦彼らが征服されると、彼らは自然に他の人たちの見本となり模範となるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（２）」より

人が気に掛けることといえば、将来の行く末、終着点、そして自分が何か良いことを望めるかどうかだけである。もし征服の働きの間、人に素晴らしい望みが与えられ、人の征服に先立って人が追い求めるに適した終着点を与えられるとしたら、人の征服はその効果を達成しないばかりか、征服の働きに影響を及ぼすだろう。すなわち、征服の働きは、人から運命や前途を奪い取り、人の反抗的な性質を裁き、罰することによってその効果を達成するのである。それは、人との取引、つまり人に祝福や恵みを与えることによって達成されるものではなく、人の「自由」を剥奪し、人の前途を絶つことにより、人の忠誠心を明らかにすることで達成される。これが征服の働きの本質である。もし最初から素晴らしい望みが与えられ、刑罰や裁きがそのあとで行われるなら、人は自分の前途が開けることを基にしてこの刑罰や裁きを受け入れるだろう。そして、最終的には、すべての被造物による造り主への無条件の服従と崇拝が達成されることはないだろう。そこには盲目的で無知な従順さしかないか、人が神に盲目的に何かを要求するだけで、人の心を完全に征服することはあり得ないだろう。その結果、このような征服の働きによって人を獲得するのは不可能であり、神を証しすることなどなおさらできない。そのような被造物はその本分を果たすことができず、ただ神と取引するだけである。これでは征服ではなく、憐れみと祝福である。人の最も大きな問題は、人が自分の運命と前途のことしか考えず、それらを偶像としていることである。人は自分の運命と前途の

ために神を追い求めるだけで、神への愛から神を礼拝することはない。そのため、人を征服するには、人の身勝手さや貪欲、そして神を崇拜する妨げとなるものは、すべて排除しなければならない。そうすることによって、人の征服の効果が達成されるだろう。その結果、人を征服するもっとも最初の段階で、まず人の野心や最も致命的な弱点を一掃し、これを通して人の神への愛を現わし、人生についての認識を変え、また神に対する見方、自身の生存の意味などを変える必要がある。このようにして人の神への愛は清められる。つまり、人の心が征服されるのだ。しかし、全ての被造物に対する神の姿勢は、征服することだけを目的として征服するというものではない。そうではなく、彼は、人を獲得するため、自らの栄光のため、そして人の一番最初の本来の姿を回復するために、人を征服するのである。彼が征服することだけを目的として征服するなら、征服の働きの意義が失われてしまうだろう。つまり、もし人を征服した後、神が人に見切りをつけ、人の生死に気を留めないなら、これは人類に対する経営（救い）にも、人の救いのための征服にもならないであろう。人が神により征服されたあとに神のものとされることと、素晴らしい終着点へ到達することのみが全ての救いの働きの中核であり、これによってのみ人の救いの目的が達成されるのである。すなわち、人が素晴らしい終着点に到着し、安息に入ることのみが、全ての被造物が持つべき前途であり、造り主によってなされるべき働きである。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」
より

人が征服される終わりの日の段階は、サタンとの戦いの最終段階であり、また、人をサタンの領域から完全に救う働きでもある。人の征服の秘められた意味は、サタンの化身、つまりサタンに墮落させられた人間が征服に引き続いて造り主に戻ることであり、これにより人はサタンを見捨て、完全に神に戻る。このようにして、人は完全に救われるだろう。したがって、征服の働きはサタンとの戦いにおける最後の働きであり、サタンを打ち負かすための、神の経営（救い）における最終段階である。この働きがなくては、人の完全な救いは最終的には不可能で、サタンの完全敗北もまた不可能になるであろう。そして、人類は決して素晴らしい終着点に入ることができず、サタンの影響から自由になることもできないだろう。従って、人の救いの働きを、サタンとの戦いが終結する前に完了することはできない。というのは神の経営（救い）の働きの核心は人類の救いであるからである。最初的人类は神の手の中にあったが、サタンによる誘惑と墮落によって、人はサタンに縛られ、悪しき者の手中に落ちてしまった。こうしてサタンは

、神の経営（救い）の働きにおいて、打ち負かす対象となった。サタンは人間を自分の所有物としたが、人は神の全経営の資本であるので、人が救われるには、サタンの手から取り戻されなければならない。すなわち、人間はサタンの虜となった後に連れ戻されなければならないのである。かくして、サタンは、人間の古い性質の変化、人間の本来の理知を回復する変化によって打ち負かされなければならない、こうして、虜となっていた人間をサタンの手から取り戻すことができる。もし人がサタンの影響や束縛から自由になると、サタンは辱められ、人は最終的に取り戻され、サタンは打ち負かされるであろう。そして人はサタンの暗闇の影響から解放されたので、人はこのすべての戦いの戦利品となり、この戦いが終わるとサタンは懲罰の対象となるそのとき、人類を救う働きのすべてが完了するのである。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

あなたたち人々に行われる征服の働きには、もっとも深い意義がある。一つには、この働きの目的は、一群の人々を完全にすることである。つまり、完全にされた最初の一群、言わば、初穂として、彼らを勝利者の会衆に仕上げることである。第二には、それは、被造物に神の愛を享受させ、神の最も偉大な救いを受けさせ、神の完全な救いを受けさせ、人間が憐れみと慈愛を享受するだけではなく、さらに重要なことだが、刑罰と裁きをも享受させることなのである。創世の時から今日に至るまで、神がその働きの中で行ったことは、みな愛であり、人間への憎しみは欠片ほどもない。あなたの見た刑罰と裁きでさえ愛なのだ。それはもっと真実で、さらに現実的な愛であり、その愛は人を人生の正しい道へと導く。第三に、これはサタンの前で証しすることである。そして第四に、それは、将来の福音の働きを広めるための基礎を築くためである。神が行ったすべての働きは、人々を人生の正しい道へと導くことがその目的であり、人間として正常な生き方ができるようにするためである。何故なら、人間はどのように人生を歩むべきか知らないからだ。このような導きがなければ、あなたは虚しい人生しか送れないだろう。価値のない無意味な人生しか送られず、どうすれば正常な人間でいられるのか、まったく分からないだろう。これが人間を征服することの最も深い意味である。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（４）」より

3. 神の裁きと刑罰の働きの意義

関連する神の言葉

終わりの日の働きとは、すべての人をその性質に応じて区分し、神の経営（救いの）計画を締めくくることである。時が近づき、神の日が来たからである。神の国に入る人すべて、すなわち神に最後の最後まで忠実な人すべてを、神は神自身の時代に連れて行く。しかし、神自身の時代が来る前は、神の働きは人間の行いを観察したり、人間の生活について調べたりすることではなく、人間の不服従を裁くことである。神の玉座の前に来る人すべてを、神は清めなければならないからである。今日まで神の足跡に従ってきた人はすべて神の玉座の前に来る人であり、これゆえに、最終段階の神の働きを受け入れる人の一人ひとは神の清めの対象である。言い換えれば、最終段階における神の働きを受け入れる人は誰もが、神の裁きの対象なのである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは、真理を以て裁きの働きを行う」より

終わりの日には、キリストはさまざまな真理を用いて人間を教え、人間の本質を明らかにし、人間の言動を解剖する。そのような言葉は、人の本分や、人はいかに神に従うべきか、人はいかに神に忠実であるべきか、いかに正常な人間性を生きるべきかや、また神の知恵と性質など、さまざまな真理を含んでいる。これらの言葉はすべて人間の本質とその堕落した性質に向けられている。とくに、人間がいかに神をはねつけるかを明らかにする言葉は、人間がいかにサタンの化身であり、神に敵対する力であるかに関して語られる。裁きの働きを行うにあたって、神は少ない言葉で人間の本性を明らかにするだけではない。神は長い期間にわたり、それをさらけ出し、取り扱い、刈り込む。このようなさらけ出し、取り扱い、刈り込みの方法は通常言葉が取って代わることはできず、人間が完全に失った真理でなければ取って代われない。このような方法のみが裁きと呼ばれることができる。このような裁きを通してのみ人間は制圧され、神への服従に向かうように徹底的に説得され、さらに神についての真の認識を得ることができる。裁きの働きがもたらすのは、人による神の真の顔の認識と、人間自らの反抗的性質についての真理である。裁きの働きにより、人は神の心、神の働きの目的、人には理解することのできない奥義についてかなり理解できるようになる。また、それにより人は自分の堕落した本質と堕落の根源を認識し、人間の醜さを発見する。これらの効果はすべて、裁きの働きによりもたらされる。それは、実際に、この働きの本質は神を信じる人すべてに神の真理、道、いのちを開く働きだからである。この働きが神による裁きの働きである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは、真理を以て裁きの働きを行う」より

刑罰や裁きという神の働きの実質は、人類を清めることであり、それは、最終的な安息の日のためである。さもないと、全人類は、それぞれ自身と同類のものに属することができないか、あるいは安息の中に入ることができない。この働きは、人類が安息の中に入るための唯一の道なのである。清めの働きこそが人類の不義を清め、刑罰と裁きの働きこそが人類の中のそれらの不従順なものを全部さらけ出すのである。それによって、救うことのできる人と救うことのできない人とが識別され、生き残ることのできる人と生き残ることのできない人とが区別されるようになる。神の働きが終わる時、生き残ることのできる人は、清められ、人類のより高い領域の中に入って、地上でのよりすばらしい第2の人生を享受する。すなわち、彼らは人類の安息の日に入って神と共に生活する。生き残ることのできない人が刑罰や裁きを受けた後、彼らの正体が全て露呈される。それから彼らはみな滅ぼされ、サタンと同じように、もう地上で生きることができなくなる。未来の人類はもうこのような人々を含まない。このような人々は究極の安息の地に入る資格がなく、神と人が共有する安息の日に入る資格もない。なぜなら、彼らは懲らしめの対象であり、悪者、義なる人ではないからである。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

時代を終わらせる神の最後の働きでは、神の性質は刑罰と裁きであり、それが不義なるもの全てを現わし、すべての人々を公に裁き、神を真に愛する人たちを完全にする。このような性質のみが時代を終わらせることができる。終わりの日はすでに来ている。あらゆるものは種類によって区分され、性質に従って種類分けされる。この時に神は人の最後と終着点を明かにする。もし人が刑罰と裁きを受けなければ、人の不従順と不義を明かす方法はないであろう。刑罰と裁きを通してのみ、あらゆるものの終局を明かすことができる。人は罰せられ裁かれて初めて本当の姿を示す。悪は悪に、善は善に、人は種類によって区分される。刑罰と裁きを通して、すべてのものの最後が明かされ、悪人は罰せられ、善人は褒美を得るであろう。そして、すべての人たちは神の支配の下に従属することになるであろう。すべての働きは義なる刑罰と裁きを通して達成されなければならない。人の墮落は頂点に達し、人の不従順はあまりにも深刻になってしまったので、おもに刑罰と裁きであり、終わりの日に明らかにされる神の義なる性質のみが人を完全に变えて全き者としてすることができる。この性質のみが悪を暴露し、よってすべての不義なる人々を厳しく罰することができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（3）」より

今日、神はあなたたちを裁き、あなたたちを罰し、あなたたちを罪に定めるが、あな

たを罪に定めるのはあなたが自分を知るためであることを知りなさい。罪に定めること、のろい、裁き、刑罰——これらはみなあなたが自分を知るため、あなたの性質が変わるためである。そしてさらに、あなたが自分の価値を知り、神の行動はすべて義であり、それは神の性質と神の働きの必要性に適っていること、神は人を救うための計画に従って働くこと、神は人を愛し、人を救い、人を裁き、罰する義なる神であることを理解するためである。もしあなたが、自分は低い地位の者で、墮落して、不従順であることだけを知り、神が今日あなたに行う裁きや刑罰を通してあなたに救いを明らかにしようと望んでいることを知らないならば、あなたは経験するすべがないし、ましてや前に進み続けることはできない。神は人を殺したり、滅ぼしたりするためにではなく、裁き、のろい、罰し、そして救うために来たのだ。神の六千年の経営（救いの）計画が終了する以前——つまり神が各範疇の人間の結末を明らかにする以前においては——地上における神の働きは人の救いのためであり、すべては神を愛する者たちを真に完全にし、神の統治に服従させるためである。神がどのように人々を救おうとも、そのすべては人々を古いサタンによる性質から脱却させることによってなされる。すなわち、神は人々にいのちを求めさせることによって彼らを救う。彼らがいのちを求めなければ、神の救いを受け入れることはできない。救いは神自身の働きであり、いのちを求めることは救いを受け入れるために人が所有しなければならないものである。人の目から見れば、救いは神の愛であり、神の愛は刑罰、裁き、呪いであるはずがない。救いは慈愛、憐れみ、さらには、慰めの言葉を含んでいなければならない、神によって授けられる無限の祝福を含んでいなければならない。神が人を救う時は、神は彼らに触れ、神の祝福と恵みを通して彼らの心を神に委ねさせることによって救うのだと人々は信じている。すなわち、神は人に触れる時人を救うのだ。このような救いは取引によって行われる救いである。神が彼らに百倍ものもを授ける時のみ、人は神の名の下に来て、神のために尽くそうと努力し、神に栄光をもたらす。これは人類のための神の心ではない。神は墮落した人類を救うために地上で働きに来た——このことにうそはない。そうでなければ、神は直接その業を行うために来ることは絶対にないだろう。昔、神の救いの手段は最大限の慈愛と憐れみを見せることだった。神は全人類と交換するために自らのすべてをサタンに与えたほどであった。今日は昔とはまったく違っている。今日、あなたたちの救いは終わりの日に、各人を種類によって分類する期間に生じる。あなたたちの救いの手段は慈愛や憐れみではなく、人がより完全に救われるための刑罰と裁きである。従って、あなたたちが受けるすべては刑罰、裁き、容赦のない鞭であるが、この無情な鞭打ちの中に罰はほんの少しもないことを知りなさい。わたしの言葉がどんなに辛辣であっても、あな

たたちに降りかかるのはあなたたちにはまったく無情だと思われるほんの数語だけであり、わたしの怒りがどんなに大きくても、あなたたちに注がれるのは教える言葉であることを知りなさい。わたしはあなたたちに危害を加えるつもりはないし、あなたたちを殺すつもりもない。これはすべて事実ではないのか？今日、義の裁きであろうと、無情な鍛錬や刑罰であろうと、すべては救いのためであることを知りなさい。今日種類に応じた各人の分類があらうと、人を分類する範疇が露わにされようと、神の発する言葉と業のすべては本当に神を愛する者たちを救うためである。義の裁きは人を清めるためであり、無情な鍛錬は人を清めるため、厳しい言葉、あるいは懲らしめはすべて人を純化するため、救うためである。従って、今日の救いの方法は過去のものとは違う。今日、義の裁きはあなたたちを救い、種類に応じてあなたたち各々を分類するためのよい道具であり、無情な刑罰はあなたたちに最高の救いをもたらす——この刑罰と裁きに直面する時あなたたちは何と言わなければならないだろうか。あなたたちは初めから終わりまで救いを享受しなかっただろうか。あなたたちは受肉の神を見たし、神の全能と知恵も悟った。そのうえ、あなたたちは繰り返し鞭打たれ、訓練も経験した。しかし、あなたたちは最高の恵みも受けたのではないか。あなたたちの祝福は他の誰のものより大きいのではないか。あなたたちの恵みはソロモンが享受した栄光や富よりも遥かに豊富である。考えてもみなさい。もしわたしがやってきた意図があなたたちを罪に定め、罰するためであり、あなたたちを救うためでなかったなら、あなたたちの日々はこのように長く続いていただろうか。この罪深い肉と血から成る存在であるあなたたちは今日まで生き残れただろうか。もしそれがただあなたたちを罰するためだけなら、なぜわたしは肉となり、そのような大きな業に着手したのだろうか。ただの人間にすぎないあなたたちを罰するには、わずか一言発する時間で済むのではないか。わたしはあなたたちを罪に定めた後でもなお滅ぼす気なのだろうか。あなたたちはわたしのこうした言葉をまだ信じないのだろうか。わたしは慈愛と憐れみだけで人を救うことができるのだろうか。それともわたしは人を救うためにただ十字架だけしか使えないのだろうか。わたしの義の性質は人が完全に従順になることを一層促進するのではないだろうか。それは人をもっと完全に救うことができるのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである」より

実際、今なされている働きは人々にサタンを捨てさせ、先祖を捨てさせることである。言葉による裁きのすべては人間の墮落した性質を暴露し、人々に人生の本質を理解さ

せることを目的としている。繰り返されるこれらの裁きは全て、人々の心を刺し通す。ひとつひとつの裁きは人々の運命に直接影響を与え、人々の心を傷つけるためのものだ。その結果、彼らがこれらすべてのものを手離し、それによって、人生を知り、この汚れた世界を知り、また神の知恵と全能を知り、このサタンが墮落させた人類を知ることができるからである。この種の刑罰や裁きがあればあるほど、人の心は傷つき、人の霊はもっと目覚めることができる。これらの極端に墮落し、その欺きが最も深い人々の霊を目覚めさせることが、この種のさばきの目標である。人には霊がなく、つまり人の霊はとうの昔に死んでしまっている。そして、人は天が存在し、神が存在するということを知らないし、確かに人は死の奥底で葛藤していることも知らない。人は地球上でこの邪悪な地獄に生きているということをどのようにして知ることが可能だろうか。彼は自分の腐った死体が、サタンの墮落を通して、死のハデスに落ちたのをどのように知ることができるだろうか。彼は地上にあるものはすべて人類によって修復ができないほど長い間墮落されてしまったことをどのように知ることができるだろうか。そして今日、創造主が地に来て墮落した人々の集まりを救おうと探していることを、どのように知ることができるだろうか。人はあり得る限りの精錬と裁きを体験した後でさえ、彼の鈍った良心はほとんど奮い立つこともなく、事実上反応しない。人間は本当に墮落している！この種の裁きは空から降って来る残酷なひょうのようだけれど、それは人にとって多大な利益がある。もしこのように人々をさばかないなら、何の結果もなく、苦悩の地獄から人々を救うのは全く不可能であろう。もしこの働きのためでないなら、人々がハデスから出てくるのは非常に難しいだろう。なぜなら、彼らの心はずいぶん前に死んでおり、彼らの霊はずいぶん前にサタンによって踏みにじられたからである。墮落の深淵に沈んでしまったあなたがたを救うには、熱心にあなたがたを呼んだり、裁いたりすることが必要で、その時初めて氷のように冷たいあなたがたの心が呼び起こされるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされた者だけが意義ある人生を送ることができる」より

あなたたちはみな、罪と放蕩の場所で生活している。あなたたちは皆みだらで罪深い人々だ。今日、あなたたちは神を見ることができるだけでなく、もっと重要なことは、刑罰と裁きとを受け、こんなにも深い救い、つまり、神の最大の愛を受けているのだ。神のすることはすべて、あなたたちへの真の愛である。神に悪意はまったくない。神があなたたちを裁くのは、あなたたちの罪の故である。それは、あなたたちが自分自身をよく吟味し、このすばらしい救いを受けられるようにするためである。これはみな、人間を形成するために行われる。始めから終わりまで、神は人間を救うために全力を尽

くしている。そして、確かなことは、神には、自らの手で創造した人間を完全に破壊するつもりはない。今、神は働くためにあなたたちの間に來た。これは、より以上の救いではないか。もし神があなたたちを憎んでいるのなら、あなたたちを直接導くためにそれ程大きな働きをするだろうか。なぜ神がそのように苦しむ必要があるのか。神はあなたたちを憎まないし、あなたたちに何の悪意ももたない。あなたたちは、神の愛が最も真実な愛であることを知らなければいけない。神が裁きを通して人々を救わなければならぬのは、唯一、彼らの不服従の故である。そうでなければ、彼らは救われぬだろう。あなたたちは、どうやって生活し、どのように生きていくのかを知らず、また、あなたたちは、このみだらで罪深い場所に住み、みだらで汚れた悪魔であるが、神は、あなたたちがいっそう墮落してゆくのを望まない。また神は、あなたたちがこのような汚れた場所で生活し、サタンの思うままに踏みつけられるのは見るにしのびない。あるいは、あなたたちがハデスに落ちてゆくままにすることなど望まない。神はただあなたたちの群れを獲得し、完全に救いたいと願っている。これが、あなたたちに征服の働きを行う主要目的である――これは正に救いのためなのだ。もしあなたが、あなたの上に為されていることは、すべて愛であるということがわからないのなら、また、これが単なる一つの手段、人間を苦しめ苛む方法であり、信用できないものであると考えるのなら、自分の世界に戻り、苦痛と苦難を受けなさい。もしあなたが、喜んでこの流れの中に留まり、この裁きとこの大いなる救いを楽しみ、人間世界のどこにも見いだせない、この祝福のすべてと、この愛を享受したいなら、従順にこの流れの中に留まり、完全になれるように征服の働きを受け入れなさい。今、あなたは裁きのために苦痛と鍛錬を体験しているが、この苦痛は価値があり意味あることなのだ。人間にとって刑罰と裁きとは、罪を罰し、肉を罰するための鍛錬であり、容赦のない暴露であるけれども、この業のどれ一つとして、肉を罪に定めて滅ぼすことを目的としてはいない。言葉による厳しい暴露は、すべてあなたを正しい道に導くことを目的としているのだ。あなたたちは、この業の実に多くを個人的に体験した。そして、明らかに、それはあなたたちを悪の道へと導かなかった。そのすべては、あなたたちが普通の人間性を実際に生きることができるようにするためだ。これはみな、あなたたちの普通の人間性が達成できるものだ。その業の一つひとつの段階は、あなたの必要、あなたの弱点、そして、あなたの実際の背丈に基づいて為され、あなたたちが荷えないような重荷は一つとしてあなたたちの肩に置かれていない。あなたは今、このことを明らかにすることができず、わたしがあなたに厳し過ぎるように感じているかもしれない。わたしが毎日あなたを罰し、裁き、責めるのは、わたしがあなたを憎んでいるからだと思うかもしれない。また、あなたの受

けているのは刑罰と裁きだが、実際は、すべてあなたへの愛であり、あなたを守るためのものなのだ。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（４）」より

神がその聖く義なる性質の全てを現すことができるのは、最も遅れていて、最も不浄な地において神が受肉することによるほかない。神の義なる性質は、何をとおして現されるであろうか。それは、人間の罪に対する裁きと、サタンに対する裁き、罪に対する憎しみ、神に反抗し反逆する神の敵に対する憎しみによってである。今日わたしが話しているのは、人々の罪と不義を裁くためである。それは人々の反逆性を呪うためである。人間の不正さと虚偽、言動など、神の心に則していない物事すべてが裁きを受け、人間の反逆性は罪であると咎められる。神は裁きの原則に従って語り、人間の不義を裁き、反逆性を呪い、醜悪な顔を全て晒すことにより神の義なる性質を現す。聖さは神の義なる性質を表す。神の聖さは、実は神の義なる性質である。本日のわたしの言葉の背景は、発言、裁き、そしてあなたがたの墮落した性質に鑑みて征服の働きを実施することである。真の働きはこれだけであり、神の聖さを完全に際立たせるのは、これだけである。あなたに墮落した性質が全くなかったとしたら、神はあなたを裁くことも、あなたが神の義なる性質を見ることができることもないであろう。あなたには墮落した性質があるため、神はあなたを見逃さない。それにより神の聖さが明らかにされる。人間の不浄さと反逆性が過度であり、かつ神がそれを見て何も言わず、あなたを不義ゆえに裁くことも罰することもなかったとしたら、それは神は罪を憎まず、人間同様に不浄ということになり、神が全く神ではないことを示すことになるであろう。現在のあなたに対するわたしの裁きは、あなたの不浄に起因し、わたしの刑罰はあなたの墮落と反逆性に起因する。あなたがたの間でわたしが権力や威信を表すためでも、故意にあなたがたを虐めるためでもなく、不浄の地に生まれたあなたがたは、あまりに多くの不浄に汚されているからである。あなたがたは、誠実さと人間性をすっかり失い、最も不浄な所で生まれた豚同然なのである。あなたがたが裁かれ、神の怒りがあなたがたに降りかかるのは、これらのためである。神が義なる神であり、聖なる神であることをあなたがたが理解することができたのは、こうした裁きのおかげである。神があなたがたを裁き、あなたがたに怒りを下したのは、神の聖さと義のためである。神が人間の反逆性を見た時にその義なる性質を現すことができ、人間の汚れを見た時に神の聖さを現すことができるのであるから、これだけで神が聖く汚れがなく、しかし同時に不浄の地で暮らしていることを十分に示している。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの第二段階の効果はどのように得られるか」より

神は裁きと刑罰の働きを行うが、それは人が神についての認識を得られるようにであり、また神の証しのためである。人の墮落した性質を神が裁くことなしには、犯すことを許さない神の義なる性質を人は知ることはできず、神についての古い認識を新しいものに変えることもできない。神の証しのため、そして神の経営（救い）のため、神はそのすべてを公けにし、そうすることで、神の公的な出現を通して、人は神についての認識に到達することができ、その性質において変えられ、神のはっきりとした証しを立てられるようになる。人の性質の変化は、さまざまな種類の神の働きを通して成し遂げられる。このような性質の変化なしには、人は神の証しを立てることはできず、神の心になうこともできない。人の性質の変化とは、人がサタンの束縛と闇の影響から解放され、真に神の働きの見本であり標本、神の証人、神の心になう者になったことを意味する。今日、受肉した神がその働きを地上で行なうために来たが、神は人が神を認識し、神に服従し、神の証しとなること、すなわち、神の実際的で正常な働きを知り、人の観念とは合致しない神の言葉と働きのすべてに従い、神が人間を救うために行なうあらゆる働きと、また神が人間を征服するために成し遂げるあらゆる業の証しをたてること、を要求している。神を証す人々は神の認識をもたなければならない。この種の証しのみが正確であり現実的であり、この種の証しだけがサタンを恥じ入りらせることができる。神の裁きと刑罰、取り扱いと刈り込みを経験することで神を知るようになった人々を、神はその証人として用いる。神はサタンにより墮落させられた人々をその証人として用い、また性質が変わり、それにより神の祝福を得た人々をその証人として用いる。神は口先で賞賛するための人を必要とせず、神に救われていないサタンの種類の称賛や証しも必要としない。

『言葉は肉において現れる』の「神を知る者だけが神に証しを立てることができる」より

4. 神の試練と精錬の働きの意義

関連する神の言葉

これらの試練は、人々の心の中のどのような状態に狙いを定めているのだろう。それらは、神に満足してもらうことのできない人間の反抗的性質を対象としている。人々の心の中には汚れたものや偽善的なものがたくさんある。だから神はそれらを清めるために試みに遭わせるのである。…

神の性質を知らなければ、あなたは試練の最中に必ず倒れるだろう。なぜならあなたは神がどのように人々を完全にするか気づいていないし、どのような手段で神が人々を完全にするか、いつ神の試練があなたに降りかかり、それらがあなたの観念に合わないかを気付かないので、しっかり立っていることができないからである。神の本当の愛は神の全性質であり、神の全性質があなたに示される時、これはあなたの肉体に何をもたらすだろう。神の義である性質があなたに示される時、あなたの肉体は必然的に多くの痛みを苦しむだろう。あなたがこの痛みを苦しまなければ、あなたは神によって全き者とされないし、本当の愛を神に捧げることもできないだろう。神があなたを全き者とすれば、神は必ずその全性質をあなたに示すだろう。天地創造の時から今日まで、神が人にその全ての性質を見せたことはなかった――しかし、終わりの日のさなか、神は自ら運命づけて選んだこの人々の一群に神の性質を明らかにし、人々を全き者とさせることによって神の性質をさらけ出し、それによって人々の一群を完全にする。それが人々に対する神の本当の愛である。人々に対する神の本当の愛を経験するには、激しい痛みを耐え、高い代償を払うことが要求される。この後ようやく人々は神のものとされ、彼らの本当の愛を神に還元することができ、そうして初めて神の心は満ち足りる。人々が神により全き者とされることを望むなら、また、神の意志を行い、彼らの本当の愛を十分に神に捧げることを望むなら、彼らは多くの苦しみとたくさんの苦痛を周囲の状況から経験しなければならず、死よりもひどい痛みを苦しむためには、結局彼らは本当の心を神に還元することを強いられる。本当に神を愛しているかどうかは困難と純化の期間に明らかにされる。神は人々の愛を清めるが、これも困難と純化の真ただ中でしか達成されない。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

人間の状態と神に対する態度に直面し、神は新しい働きを行い、神に対する認識と服従を人に得させ、愛と証しの両方をも得させた。従って、人は神による精錬、神の裁き、取り扱いや刈り込みを経験しなければならず、それなしでは人は神を知ることも決してなく、神を真に愛し、神への証を立てることもできない。神による人間の精錬は一方的な効果のためだけでなく多面的な効果のためである。決意と愛を完璧にするため、このような方法でのみ、真理を求めようとする人々の中で神が精錬の働きを行う。真理を求めようとする人々、そして神を慕う人々には、このような精錬より意味のあるもの、大きな援助となるものはない。つまりところ神は神であり、神の性質はそれほど容易に人により知られ理解されるものではない。一日の終わりに神が人と同じ性質を持つよう

なことはなく、したがって人が神の性質を知ることは容易ではない。真理は人が本質的に持っているものではなく、サタンによって墮落した人々が容易に理解するものではない。人には真理がなく、真理を実践する決意がなく、苦しみを受け、精錬されあるいは裁かれなければ、人の決意は決して完璧にならないだろう。すべての人々にとって精錬は耐えがたく、受け入れ難いものであるが、神が義なる性質を人に明らかにし、人に対する要求を公にし、より多くの啓きとより現実的な刈り込みと取り扱いを与えるのは精錬の間である。事実と真理の比較により、神は人自らについてのより大きな認識と真理を人に与え、神の心をより深く理解させ、そうしてより真理に近く純粋な神への愛を人に得させる。それらは精錬を実行する神の諸目的である。人の中で神が行う働きのすべてには固有の目的と意義がある。神は無意味な働きをせず、人に恩恵がない働きもしない。精錬は人々を神の前から取り除くことを意味するものではなく、地獄で人々を滅ぼすことも意味しない。それは精錬の間に人の性質を変え、動機や従来の見方を変え、神に対する人の愛を変え、人の一生を変えることを意味する。精錬は人の真の試練のひとつであり、真の鍛錬の一形態であり、精錬の間のみ人の愛はその本質的な機能を果たすことができる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることのみ、人は真の愛をもつことができる」より

神の精錬が大きいほど人々は神をさらに愛することができる。人々の心の苦しみは人々のいのちに有益であり、神の前でより平穏になり、神との関係がより近くなり、神の至高の愛と救いをよりよく理解できる。ペテロは何百回も精錬を経験し、ヨブはいくつかの試練を受けた。あなた方が神によって全き者になることを望むのであれば、あなた方も同じく何百回も精錬を経験しなければならない。この過程を通過してのみ、この過程に依拠することによってのみ、あなたは神の心を満たすことができ、神によって全き者になるのである。精錬は、神が人を完全にする最も良い手段である。精錬と厳しい試練だけが神への真の愛を人々の心にもたらす。苦難がなければ人々は神への真の愛に欠ける。もし人々が試練により試されず、真に精錬されなければ、人々の心は常に外側を漂い続けるだろう。ある程度まで精錬された後、あなたは自分の弱みと困難を理解し、どれほど欠けるところがあるか、遭遇する多くの問題をどれほど克服できないか、あなたの不従順がいかに大きなものかを知るようになるだろう。試練の間のみ人々は現実の状態を正しく知ることができるだろう。そして試練によって人々が全きものとなることがより可能になる。

その生涯を通じ、ペテロは数百の精錬を経験し多くの苦難を受けた。この精錬は神に

対するペテロの至高な愛の基礎となり、ペテロの一生で最も重要な経験となった。ペテロが神への至高の愛を持つことができたのは、ある意味では、神を愛する決意ゆえであった。しかし、より重要なのは、それはペテロが経験した精錬と苦しみゆえであった。この苦しみは神を愛する行路の指針となり、ペテロにとって最も記憶に残ったものとなった。神を愛する際に人々が精錬の苦しみを受けなければ、人々の愛は自然さと嗜好に満ちたものである。そのような愛はサタンの考えに満ちており、神の心を満たすことはまったくできない。神を愛する決心を持つことは真に神を愛することと同じではない。人々の思考には人間的な発想がないかのように、人々の思考はすべて神のためであるかのように、心の中で考えることがすべて神を愛するためであり、神の意を満たすためであるとしても、その人々の思考が神の前に出された時、そのような思考は神により賞賛も祝福もされない。人々が真理をすべて十分に知り、すべての真理を完全に理解しても、それが神を愛することの印であるとは言えず、すべての真理を十分に理解した人々が実際に神を愛しているとは言えない。多くの真理を理解したにもかかわらず、精錬を経験していない人々は、これらの真理を実践することができない。精錬の間においてのみ人々はこれらの真理の本当の意味を理解し、そうして初めてそのような真理の内的な意味を純粹に認識できる。その時、人々が再び試みると、真理を適切に実践することができ、神の心と調和することができる。その時、人々の人間的な考えは少なくなっており、人間としての自然性の程度は下がり、人間的な感情は消え去る。そのようになってのみ人々の実践は神への愛の真の表明となる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

神が人間を精錬する業を行う時、人間は苦しむ。精錬が大きいほど人間の神への愛は深まり、人間の内に神の力がさらに現される。人間の精錬が少なければ少ないほど、人間の神への愛も少なくなり、人間の中に現される神の力も少なくなる。人間の精錬と苦痛、苦悶が多ければ多いほど、人間の神に対する真の愛が深まり、神への信仰も更に純粹なものとなり、神に関する人間の認識も深まる。多くの精錬と苦痛、多くの取り扱いと懲らしめを受ける者は、神への深い愛を持ち、神に関して、もっと深遠で鋭い認識を持つようになることを、あなたは経験の中で知るであろう。取り扱いを体験しなかった者には、表面的な認識しか無く、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を楽しめるように、彼らに恵みを授けられる。」と言うことしか出来ない。取り扱いと訓練を体験した場合、人間は神に関する真の認識を話すことができるようになるのだ。したがって、神による人間の内なる業が驚異的であればあるほど、それは一層貴重であり、有意義な

ものである。あなたにとって、それが測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの見解と相容れないものであればあるほど、神の業は、さらにあなたを征服し、あなたを獲得し完全にすることができる。神の業の意義とは、かくも甚大である。もし神がこのように人間を精錬しなかったら、もし神がこのような方法によって働かなかったら、神の業は効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。これが、神が終わりの日に一群の人々を選んだ特別な意義の背後にある理由である。神がこの会衆を選び獲得するであろうことは、以前に語られていた。神によってあなたがたの内に遂行される業が大きければ大きいほど、あなたがたの神に対する愛は一層深く純粋なものとなる。神の業が大きければ大きいほど、人は神の知恵を一層味わうことが出来るようになり、神に関する認識もより深くなる。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

神は肯定的側面と消極的側面の両面で人間を完全にすることが出来る。それはあなたが経験出来るか、また神により完全化されることを追求するか否かにより異なる。あなたが神により完全にされることを真に求めるならば、消極的側面により損失を被ることはなく、消極的側面はあなたに一層現実的なものをもたらし、あなたが自分に欠如しているものをもっと知ること、自分の真の状態をもっと把握すること、人間は何も持っておらず何でもないことを知ることが出来るようにする。試練を経験しないならば、あなたは知らないままであり、常に自分が他人よりも上で、優れていると感じるであろう。こうしたことをとおして、あなたはこれまで遭遇したことは全て神が行ったことであり、神により保護されていたことを知るであろう。試練に入ることにより、あなたは愛も信仰もなく、祈りが欠如し、讃美歌を歌うことが出来ない状態に陥る。そして気付かぬうちに、この真最中にあなたは自分自身を知る。神には人間を完全にする手段が多数ある。神はありとあらゆる環境を用いて人間の墮落した性質を取り扱い、様々な物事を用いて人間を暴き出す。神は、ある点に関しては人間を取り扱い、別の点に関しては人間を暴き、また別の点に関しては人間を明らかにし、人間の心の奥にある「秘密」を掘り出して明示し、人間にその数々の状態を明らかにすることにより本性を示す。神が実践的であることを人間が知ることが出来るように、神は暴く、取り扱い、精錬、刑罰など、様々な手段で人間を完全にする。

『言葉は肉において現れる』の「実践を重視する者だけが完全にされる事ができる」より

人が神への信仰において求めるのは、将来のための祝福を得ることです。それが人の

信仰における目的なのです。誰もがこの意図と望みを持っていますが、人間の本性にある堕落は試練を通じて解決されなければなりません。あなたが清められていない側面はどれも、あなたが精錬されなければならない側面です。これが神の采配です。神はあなたのためにある環境を作り、そこで強制的に精錬されるようにすることで、自らの堕落を知ることができるようにさせます。最終的に、あなたはむしろ死んで自分の企みや欲望を捨て、神の主権と采配に服従したいと思うまでになります。それゆえ、数年間の精錬を受けておらず、ある程度の苦難を経していない人は誰も、自身の考えや心における肉の堕落の束縛を捨て去ることが出来ないでしょう。あなたはどの側面においてもいまだサタンに束縛され、自分の欲望と要求を抱いていますが、それらの側面において試練を受けなければなりません。人は試練を通じることでのみ教訓を学び、真理を得て、神の意図を理解することができます。実際、多くの真理はつらい試練を経験することで理解されます。楽な環境にいるときや状況が好都合なとき、神の考えを理解したり、神の全能性と知恵を認識したり、神の義なる性質を正しく理解したりすることは誰にもできません。そのようなことはありえないでしょう。

『キリストの言葉の記録』の「試練のさなかに神を満足させるには」より

5. 救われ完全になるために、どのように神を信じなければならないか

関連する神の言葉

神を信じる中でペテロの道を歩むことを簡単に言うならば、それは真理を追い求める道に行くことであり、その道はまた真に自分自身を知って自らの性質を変える道でもあります。ペテロの道を歩むことでのみ、人は神によって完全にされる道を進むのです。ペテロの道を具体的にどのように歩むか、それをどのように実践に移すかをはっきり知らなければなりません。第一に、自分自身の意図や不適切な追求だけでなく、自分の家族や肉体にかかわるすべてのことさえも脇へのける必要があります。心から献身的であらねばならず、神の言葉に自分自身を完全に捧げ、神の言葉を飲み食いすること、真理を探求すること、そして神の言葉の中にある神の意図を探し求めることに集中し、すべてにおいて神の心を把握しようと努めなければなりません。それが最も根本的にして決定的な実践の方法です。ペテロが主イエスを見たあとに行なったのもそれであり、そのように実践することでのみ、人は最高の結果を得られます。神の言葉に対する真心から

の献身が主に意味するのは、真理を探し求めること、神の言葉の中にある神の心を探し求めること、神の心を把握することに集中すること、神の言葉からさらなる真理を理解し獲得することです。神の言葉を読むとき、ペテロは教義を理解することはおろか、神学的な知識を得ることにさえ集中してはいませんでした。その代わりに真理を理解すること、神の心を把握すること、そして神の性質と愛らしさの理解を得ることに心を砕いたのです。また、人間の様々な堕落した状態を神の言葉から理解し、その堕落した本性や真の欠点を認識しようと努め、神が人間に課す要求のすべての側面を満たし、神を満足させました。ペテロは神の言葉において数多くの正しい実践を自分のものとしていましたが、それは神の心にもっともかなっており、また神の働きを経験しつつ人が行なうもっとも優れた協力です。神による数百もの試練を経験するとき、ペテロは人間に対する神の裁き、暴露、および要求の言葉の一つひとつを鏡として自分自身を厳しく吟味し、これらの言葉の意味を理解しようと努めました。また主イエスが彼に言ったあらゆる言葉を真摯に考え、心にとどめようとし、極めて優れた成果を残しました。このような実践の方法を通じて、ペテロはこれらの言葉から自分自身を理解することを成し遂げ、人間の様々な堕落した状態だけでなく、人間の本質、本性、様々な欠点をも認識するようになったのです。これが本当に自己を認識するということの意味です。ペテロは神の言葉から、自身を本当に認識しただけでなく、神の発した言葉において表現されるもの、すなわち神の義なる性質、神が所有するものと神そのもの、働きに関する神の心、神の人間への要求といったことの言葉から、神を完全に知るようになりました。ペテロは神の性質と本質を知り、神が所有するものと神そのものに加え、神の素晴らしさ、そして神の人間への要求を知り理解するようになったのです。当時、神は今日ほど多くを話していませんでしたが、これらの側面においてペテロの中で果実が実を結んだのです。これは希にして貴重なことです。ペテロは数百の試練を経ましたが、無駄に苦しんだわけではありません。神の言葉と働きから自己を認識するようになっただけでなく、神を知るようにもなったのです。加えて、神の発した言葉の中でも、ペテロは特に、神の言葉の中にある人類への要求を重視しました。人間が神を満足させてその心意に一致すべきであるいかなる側面においても、ペテロはそれらの側面に大きな努力を払い、完全にはつきりさせることができました。これは彼自身の入りにとって極めて有益なことでした。神が何を語ろうと、それらの言葉が自分のいのちになり得る限り、ペテロはそれを心に刻み、常にじっくり考え、正しく認識することができたのです。主イエスの言葉を聞いたあと、ペテロはそれを心に抱くことができましたが、そのことは、彼がとりわけ神の言葉に集中し、最後は本当に成果を挙げたことを示しています。つまり、ペテロは神の

言葉を自由自在に実践すること、真理を正確に実践すること、神の心意と一致すること、完全に神の意図に従って行動すること、自分の個人的な意見や想像を捨てることのできたのです。このようにして、ペテロは神の言葉の現実に入りました。ペテロの奉仕が神の心意に一致していたのは、それを行なったことがおもな理由です。

『キリストの言葉の記録』の「ペテロの道を歩むには」より

神により完全にされることを求めるには、まず神により完全にされることの意味、完全にされるために満たすべき条件は何かを知る必要があります、そうした物事を把握した後、実践の道を追求する必要があります。神により完全にされるためには、人間は特定の力量を備えている必要があります。あなたがたのうち多くの者が、その必要とされる能力を備えておらず、その能力は、あなたが特定の代償と主体的な努力が必要とされる。あなたの能力が乏しければ乏しいほど、あなたは一層主体的に努力しなければならない。神の言葉に関するあなたの知識が多ければ多いほど、そして神の言葉を多く実践すればするほど、あなたは神により完全にされる道を歩む時期も一層早まる。あなたは祈ることにより、祈りの最中に完全にされることが可能となる。神の言葉の飲食、その本質の把握、その実際性を行動で示すことにより、あなたは完全にされることが可能となる。神の言葉を毎日経験することにより、あなたは自分に欠如している物事を知り、またそれ以上に、自分の急所となっている物事や弱点を知り、そして神に祈りを捧げることにより、あなたは徐々に完全にされるであろう。完全にされる道、それは祈りを捧げること、神の言葉を飲食すること、神の言葉の本質を把握すること、神の言葉の経験において成長すること、自分に欠如している物事を知ること、神の業に従うこと、神の重荷に配慮し、愛する心で肉を捨てること、あなたの経験を豊かにする兄弟姉妹との交わりを頻繁に持つことである。社会生活であるか、個人生活であるかを問わず、また大規模な集会か、小規模な集会かを問わず、そうした物事は、すべてあなたが自分の心を神の前で静められ、神へと還ることが出来るようにするための経験と訓練を受けることを可能とする。こうした物事は、すべて完全にされることの過程である。語られている神の言葉を経験することは、あなたが神に対する一層大きな信仰と愛を備えられるように、神の言葉を実際に味わい、それをあなたが行動で示すことを可能とする。このようにして、あなたは次第にサタンのような墮落した性質を払拭し、不適切な動機から脱し、正常な人間像を行動で示すであろう。神に対するあなたの愛が大きければ大きいほど、つまりあなたの中で神により完全にされている部分が多ければ多いほど、あなたがサタンにより腐敗させられる程度が低くなる。あなたの実際の経験により、あなたは次第に完全にされ

る道を進むようになるであろう。ゆえに、あなたが完全にされることを願うならば、神の旨に配慮することと、神の言葉を経験することは、特に重要である。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされるべく、神の旨に配慮せよ」より

神の支配を信じるなら、毎日起きる物事はよいことであれ悪いことであれ、偶然の出来事ではないことを信じなければなりません。誰かがわざとあなたにつらく当たったり、あなたを標的にしたりしているのではなく、実はすべて神が采配し、編成しているのです。神は何のためにこれらの物事を編成するのですか。あなたの短所を暴くためでも、あなたを露わにするためでもありません。あなたを露わにすることは最終目標ではないのです。最終目標はあなたを完全にして救うことです。神はどのようにそれを行ないますか。まず、神はあなたの墮落した性質、本性と本質、短所、そして欠けているものをあなたに気づかせます。これらのことを心の中で理解して初めて、真理を追い求めて墮落した性質を徐々に捨て去ることができます。これは神が機会を与えているのです。あなたはこの機会をどのように掴むべきかを知らなければならず、神と角突き合わせてはいけません。とりわけ、神があなたの周りに配した人や出来事や物事に向き合うとき、自分の望み通りでないと考えたり、逃れようと思ったり、神を責めて誤解したりするばかりではいけません。それは神の働きを経験することではなく、真理の現実に入るのを非常に難しくします。完全には理解できない物事が何であっても、困難を抱えたときは服従することを学ばなければなりません。まずは神の前に出向いてもっと祈るべきです。そうすれば、知らないうちに自分の内なる状態が変わり、真理を求めて問題を解決できます。あなたは神の働きを体験できるのです。その間にあなたの中で真理の現実が生じ、そのようにしてあなたは前進し、いのちの状態が変化します。いったんこの変化を経験して、そのような真理の現実を得たならば、あなたは霊的背丈を有するようになり、霊的背丈とともにいのちが生じます。いつも墮落したサタンの性質を基に生きるなら、熱意や活力がどれほどあっても、その人は霊的背丈やいのちを有しているとはやはり考えられません。神は一人ひとりの中で働きを行ないますが、その方法が何であれ、どのような人や物事を使って力を尽くすのであれ、言葉の調子がどういったものであれ、神の最終目標は一つしかありません。それはあなたを救うことです。あなたを救うとは、あなたを変えることを意味しますが、どうして少しばかりの苦しみを受けないでいられるでしょうか。あなたは苦しまなければなりません。この苦しみには多くのことが含まれます。ときに神はあなたの周囲に人や物事を配し、あなたを露わにし、あなたが自分自身を知るようにすることがあります。さもないと直接あなたを取り扱い、刈

り込み、露わにします。手術台の上の人と同じに、よい結末を迎えるにはいくらかの苦しみを経験しなければならないのです。神があなたを刈り込んだり取り扱ったりするたびに、人や物事を配するたびに、あなたの感情がかき立てられ、士気が高められるなら、そのような経験は正しく、あなたは霊的背丈を得て真理の現実に入ってゆきます。

『キリストの言葉の記録』の「真理を得るには、周囲の人や物事から学ばなければならない」より

ペテロは、神を信じる中で、全てにおいて神を満足させること、そして神から来るものの全てに従うことを追い求めた。そしてペテロは不平一つ言わず、刑罰や裁きと同様に、精錬、苦難と生活上の欠乏も受け入れ、そのいずれも彼の神への愛を変えることはなかった。これこそ神への究極の愛ではないだろうか。これこそ被造物の本分を尽くすということではないだろうか。刑罰、裁き、試練——これらの中にあっても、死に至るまで従順であることができ、そしてこれこそが、被造物が達成すべきことであり、純粋な神への愛である。仮に人がここまで達成できたのなら、その人は被造物として相応しいということであり、これ以上創造主の満足を得られることはないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている」より

もし、人々が生きている存在になり、神への証しを立て、神に認められることを望むならば、神の救いを受け入れ、神の裁きと刑罰に喜んで服従し、神による刈り込みや取り扱いを喜んで受け入れなければならない。そうして初めて神が要求する真理のすべてを実践することができ、そうして初めて神の救いを得て、本当に生きた存在になることができる。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは生き返った人か」より

神への従順の片鱗さえ見られない者、ただ神の名を認め、神に親愛や愛情の念を多少は持っているが、聖霊の歩みに歩調を合わせず、聖霊の現在の働きや言葉に従わない人々——このような人々は神の恩恵のただ中で生きているのにもかかわらず、神のものはされないし、神によって完全にされることもない。神は人々を、その従順さを通して、神の言葉を飲食し、享受することを通して、生活における苦しみや純化鍛錬を通して完全にする。このような信仰を通してのみ、人々の性質は変化し、そうして初めて人々は神を本当に知ることができる。神の恩恵に囲まれて生きることだけに満足せず、積極的に真理を渴望し、真理を探求し、神のものとされることを求めること——これこそが意識して神に従うことの意味である。これこそが正に神が望んでいる信仰である。

『言葉は肉において現れる』の「神を信じているなら神に従うべきだ」より

第5章 神の受肉についての真理

1. 受肉とは何か、受肉の本質とは何か

関連する神の言葉

受肉というのは、神が肉の体で現れることで、神が自分の創った人間のもとで働くために人間の姿で来るのである。さて、神が受肉するというのは、まず肉の体、普通の人間性を備えた肉体でなくてはならず、それが最も基本的な前提条件である。実際、神が受肉するということは、神が肉体において生き働くということ、その本質において肉となり、ひとりの人になるということを意味する。神の受肉した生活と働きは二つの段階に分けられる。第一は職分を始める前の生活。神は普通の人間の家族として暮らし、ごく普通の人間性をもち、人間生活の通常の道徳や法に従い、普通の人間の必要（食物、衣服、住まい、睡眠）をもち、普通の人間の弱さ、普通の人間の感情をもって暮らす。つまり、この最初の段階で、神は神ではなく完全に普通の人間として、あらゆる普通の人間的な活動を行いながら生きる。第二の段階は、職分を果たし始めた後の生活である。神はまだ普通の人間の外形で通常の人間性において暮らし、表向きには超自然的なしるしは何も現さない。しかし、神は純粹にその職分のために生き、この期間の普通の人間性は、ひたすら神として普通の働きのために存在する。そのころには、普通の人間性は職分を果たせるほどに成熟していたのだから。そこで、第二の段階では普通の人間性において職分を果たすこととなり、それは通常の人間性と完全な神性を兼ね合わせる生活である。前半生で神がまったく普通の人間的な生活をする理由は、まだその人間性が神性の働きの全体と同等でないから、まだ成熟していないからである。人間性が成熟して、その職分を背負えるようになってはじめて、職分を果たし始めることができるのである。肉体をもつ者として神は成長し、成熟する必要があるので、その生涯の最初の段階は普通の人間のものである。第二段階に入ると、その人間性が働きに着手し、職分を果たせるようになっているので、職分を果たす間の受肉した神の生活は、人間性と完全な神性の二つを併せもつものである。もし受肉した神が生まれた瞬間から本格的に職分を果たし、超自然のしるしや不思議を示し始めたなら、その肉体の本質は何もないであろう。だから、受肉した神の人間性は、肉体的な本質のために存在するのである。人間性なくして肉は存在しない。また、人間性のない人は人間ではない。このように、神の肉の人間性は、受肉した肉のなくてはならない性質である。「神が人間になった時、神は

完全な神で、まったく人間ではない」と言うのは瀆神行為である。なぜなら、このような発言はまったく存在せず、受肉の原理に反しているからである。神はその職分を始めた後も、働きを行なうときは人間の外皮をまといつつ、依然として神性のうちに宿っている。ただその時、神の人間性は神性が通常の肉の体で働きを行えるようにするという目的だけを果たすのである。だから、働きをする者は、人間性に宿る神性である。働いているのは神の人間性ではなく神性だが、それは人間性の中に隠れた神性である。神の働きは、つまるところ、完全な神性が行うのであって、人間性によるのではない。しかし、働きを実践するのは神の肉である。このような神は、人間でありかつ神であると言えるだろう。神は肉の体で生きる神となり、人間の姿と人間の本質をもつが、また神の本質をも備えているからである。神の本質を備えた人間だから、被造物であるどの人間、神の働きを行うことのできるどの人間よりも上位に位置する。そこで、このような人間の姿をした者たちの中で、人間性をもつすべての者の中で、神だけが受肉した神そのものである。他はみな、被造物である人間である。受肉した神と人間の双方に人間性があるが、被造物である人間には人間性以外には何もない。ところが、受肉した神は違う。受肉した神は、その肉体において人間性だけではなく、さらに重要なことに神性をも備えている。神の人間性は肉の体の外見や毎日の生活に見られる。しかしその神性は感知しにくい。神の神性は人間性があってはじめて現れるのだから、また、人々が想像するほど超自然なものではないから、人々がそれを見るのは極めて難しい。今日でも受肉した神の本質を理解するのは極めて難しい。実際、わたしがこれほど長い間話してきても、あなたがたの大半にとってはいまだに謎であることであろう。これはとても単純なことなのである。神が人間になると、その本質は人間性と神性の合わさったものである。この組み合わせが神そのものと呼ばれる、地上における神そのものなのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

イエスが地上で生きた生活は、肉体をもつ人間の通常の生活であった。イエスはその肉体の正常な人間性において生きた。イエスの権威——彼の働きをし、彼の言葉を話し、病者を癒やし、悪霊を祓うといった、驚くべきことを行うためのもの——は、大方、職分を果たし始めるまでは示されなかった。二十九歳までの生活、教えを説く前は、イエスがただ普通の肉体をもった人間であったことの十分な証拠であった。そのため、そして、イエスがまだ職分を果たし始めていなかったため、人々はイエスに何の神性も見出さなかった。普通の人間、平凡な人間しか見なかった——ちょうど当時の人々がイエスはヨセフの息子だと信じていたように。人々は、イエスは普通の人間の息子だと思い

、神の受肉したものであるとは知りようもなかった。職分を果たしながら、多くの奇跡を行ったときでさえも、たいていの人々はあれはヨセフの息子だと言った。イエスは普通の人間の外形をしたキリストだったからである。イエスの普通の人間性とその働きは、神が完全に受肉し、全く普通の人間になるという、最初の受肉の意味を満たすために存在した。働きを始める前のイエスが普通の人間性をもっていたことは、イエスが普通の肉体をもつ人間であった証拠である。そして、その後、イエスが働きをしたことも、通常の人間であることを示していた。イエスは普通の人間性をもつ肉体において、しるしや不思議を行い、病む者を癒やし、悪霊を祓ったのだから。イエスが奇跡を行うことができたのは、その肉に神の権威を帯びており、神の霊が人間の姿をしていたものだからである。イエスにこの権威があったのは、神の霊のためであり、イエスが人間ではなかったということではない。病む者を癒やし、悪霊を祓うことは、イエスはその職分において行う必要のある働きであり、人間性に隠された神性の表明であった。どのようなしるしを示そうと、どのようにその権威を示そうと、イエスはやはり普通の人間性において生き、普通の肉体をもつ人間であった。十字架上で死んで蘇るまで、イエスは普通の肉の中に宿っていた。恵みを与え、病人を癒し、悪霊を祓うことは、その働きの一部であり、すべて普通の人間の体で行われた働きである。イエスは十字架に行く前には、何をしているときであっても、けっして普通の人間の体を離れなかった。イエスは神そのものであり、神の働きをしたが、受肉した神であったため、食物を食べ、衣服を着、普通の人間と同じものを必要とし、普通の人間の理性と普通の人間の心をもっていた。これはみな、イエスが普通の人間であったことの証拠であり、受肉した神の体は普通の人間性をもつ肉体であって、超自然のものではないということを示している。イエスの務めは神の最初の受肉の働きを完了すること、最初の受肉の職分を果たすことであった。受肉の意義は、平凡な普通の人間が神そのものの働きをするということであり、つまり、神が人間性の内に神としての働きを行い、それによってサタンを打ち破るということである。受肉とは、神の霊が肉となる、つまり、神が肉となるということである。神が肉において行う働きは、肉において実現し、肉において表される霊の働きである。神の肉体以外には誰も、受肉した神の働きを成就できない。つまり、受肉した神の肉だけが、他の誰でもなくこの普通の人間だけが、神の働きを示せるのだ。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

受肉した神の人間性は、肉において普通の神性の働きを維持するためにある。神の普通の人間としての考え方が、その普通の人間性とあらゆる普通の身体的活動を維持する

。神が普通の人間的思考をするのは、神が肉においてする働きをすべて支えるためなのだと言えるだろう。この肉が普通の人間の心をもたないのなら、神は肉における働きができず、肉においてするべきことを成就できない。受肉した神は普通の人間の心をもつが、その働きは人間の思考によって劣化しない。神は普通の心をもつ人間として働きを行うが、心をもった人間性はその前提条件であり、通常の人間の考えを行使することによりその働きを行うのではない。神の肉の体がどれほど崇高な考えをもとうと、神の働きは論理や思考の産物ではない。つまり、神の働きは肉の体から生まれるのではなく、人間性の内における神性の働きの直接的な現れなのである。その働きはみな、成就すべき職分であり、そのどれも人間の頭脳の産物ではない。たとえば、病人の癒し、悪霊祓い、磔刑はイエスの人間としての心の産物ではなく、人間の心をもった人間がなし得ることはなかったであろう。同様に、今日の征服の働きも受肉した神が行うべき務めであるが、人間の意図による働きではない。これは、キリストの神性が行うべき働きであって、肉の体をもつ人間に可能な働きではない。だから、受肉した神は普通の人間の心をもたなければいけない。普通の人間性をもたなければいけない。なぜなら、普通の心をもった人間性の内にあって働かなければいけないからである。これが受肉した神の働きの本質、受肉した神の本質そのものである。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

イエスがその働きをする以前、イエスはただ普通の人間として生きた。誰一人、イエスが神であるとはわからなかったし、誰一人、イエスが受肉した神であることを気付かなかった。人々はただ、どこから見ても普通の人間としてイエスを知っていた。イエスのまったく平凡な普通の人間性は、神が受肉して人間の肉の形になっていたことと、恵みの時代は受肉した神の働きの時代であり、霊の働きの時代ではないことの証拠であった。これは、神の霊が完全に肉において現れたこと、神が受肉した時代には、肉の体が霊の働きをすべて行うことの証拠であった。普通の人間性をもつキリストは、霊が顕現した肉体であり、普通の人間性、普通の理知、人間的思考をもっている。「顕現」とは神が人間となること、霊が肉となることである。わかりやすく言えば、神自身が普通の人間性をもつ肉に宿るということで、それによって神性の働きを表す——これが顕現、または受肉の意味である。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

主イエスが業を行っている間、人々は、神が多くの人間的な表現を持っていることを知った。たとえば、神は踊ったり、婚礼に列席したり、人間と親交したり、人間と会話

し、様々な事柄を話し合ったりすることが可能であった。さらに、主イエスは神の神性を示す多くの業を遂行し、当然ながらそうした業はすべて神の性質を表出し、啓示するものであった。この時期においては、神の神性が、人間が見たり触れたりできる通常の身体により具現化された時、人間は神が出現と消滅を繰り返されている存在、人間の近づくことが出来ない存在であるとは感じなくなった。これに対し、人間は、人の子のあらゆる動作や言葉、業により、神の旨や神の神性を理解しようと試みることが出来るようになった。受肉した人の子は、神の人性により神の神性を表現し、神の旨を人間に伝えた。また、神は、旨と性質を表出することにより、霊的領域では見ることも触れることもできない神を人間に啓示した。人々が見たのは、肉と骨を持ち、姿形のある神自身であった。そうして受肉した人の子により、神の正体、地位、像、性質、神の中にある物事や神の存在が、具体的かつ人間的なものとされた。人の子の外観は、神の像に関してある程度の制約があったものの、人の子の真髄と人の子の中にある物事や人の子の存在は、神自身の正体と地位を完全に示すことが可能であり、表出の仕方に僅かな相違があるのみであった。それが人の子の人性であるか、人の子の神性であるかを問わず、人の子が神自身の正体と地位を示していたことを否定することはできない。しかし、この時期、神は肉により業を行い、肉の見地から言葉を述べ、人の子という正体と地位により人間の前に姿を見せたので、それによって人間の中にある神の真の言葉と業に遭遇し、体験する機会が人々に与えられた。また、それにより神の神性と、謙遜の中にある神の偉大さについて、人間が知見を得ることが可能となり、また神の真正さと実在に関する暫定的な知識と定義を得ることも可能となった。主イエスにより遂行された業や、イエスが業を行う方法、言葉を述べる観点は、霊的領域にある神の真の姿とは異なるものであったが、それでもなお主に関する全てが、それまで人間が見たことの無い神自身を真に示しており、またその事実は決して否定できない。すなわち、神がどのような姿であるかによらず、また神がどの観点から言葉を述べるかによらず、あるいは神の人間に対する像がどのようなものであるかによらず、神は他ならぬ神自身を示す。神が人間を示すこと、腐敗した人間を示すことは不可能である。神は神自身であり、それを否定することはできない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

受肉した神の外観は人間と全く同じであり、人間の知識を学び、人間の言葉で話し、時には人間と同じ方法や表現で考えを表現されるものの、人間に対する見方や物事の本質に対する考え方は、受肉した神と腐敗した人間では、決して同じということはない。

受肉した神の視点と、その立場の高さは、腐敗した人間が得ることの出来ないものである。なぜなら、神は真理であり、肉となった身体にも神の本質が存在し、その考えや、その人間性で表出されるものもまた真理であるからである。腐敗した人間にとって、彼が肉にあって表出する事柄は、真理といのちの提供である。これらのものは、ひとりだけではなく、人間全体に与えられているものである。腐敗した人間にとって、心の中で自分に関連する人々の数は僅かであり、心にかけて気遣う他の人の数は僅かである。大災害が発生したとき、人間が最初に心配するのは自分の子供、配偶者、両親のことであり、比較的博愛的な者でも、せいぜい親戚や親友だけであり、それ以外の者のことは決して心配しない。人間は、つまるところ人間であって、人間の目線の高さからしか物を見ることが出来ない。しかし、受肉した神は、腐敗した人間とは全く異なる。受肉した神の身体がいかに普通で慎み深いものだったとしても、あるいはいかに多くの人間に見下されたとしても、人間に対する受肉した神の旨と態度は人間が抱くことの出来ないものであり、だれも真似することの出来ないものである。受肉した神は、常に神性の視点で、創造主の立場から人間を見る。受肉した神は神の本質と心によって人間を見る。通常の人間の立場で、腐敗した人間の目線で人間を見ることは決して出来ない。人間が人類について考える時、人間は人間の視点で見て、人間の知恵や規則、理論を基準として用いる。これは人間が人間の目で見ることが出来る物事の範囲内であり、腐敗した人間が成し得る範囲内である。神が人類について考える時、神は神の視点で見、神の本質と神の持っているものとその存在を用いて人間を見る。この範囲には、人々が見ることの出来ないものも含まれているという点が、受肉した神と腐敗した人間では全く異なる。この相違は人間と神の異なる本質により決定され、人間と神の身分や立場、そして物を見る視点を決定するのは、この本質の相違である。あなたがたには、主イエスの中に、神の表出と顕現が見えるであろうか。主イエスが行なった業と言葉はイエスの職分と神の経営の業に関連するものであり、それはすべて神の本質の表出と顕現であると言えるであろう。イエスには人間性の発現があったが、イエスの神性の本質と神性の顕現を否定することは出来ない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

神の霊が纏った肉は、神自身の肉である。神の霊は至高のものであり、神の霊は全能であり、聖であり、義である。それと同様に、神の肉も至高のものであり、全能であり、聖であり、義である。このような肉は、義であり人間に有益な物事、聖なるものであって栄光ある物事、力ある物事しか行うことが出来ず、真理や道義に反する物事を行う

ことが出来ず、ましてや神の霊を裏切る物事を行うことなど出来ない。神の霊は聖なるものであり、したがって神の肉は、サタンが腐敗させることの出来ないものであり、人間の肉の本質と異なる。なぜなら、サタンにより腐敗させられているのは、人間であって神では無いからである。サタンは神の肉を腐敗させることはできない。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り（２）」より

神は肉となりキリストと呼ばれ、真理を人に与えることのできるキリストは神と呼ばれる。ここには何の誇張もない。なぜなら、彼は神の本質を持っており、神の性質を持っており、その働きには知恵があり、これらはどれも人間の手の届かないものだからだ。自らキリストを称するが、神の働きを行えない者は、詐欺師である。キリストは、単なる地上における神の顕現ではなく、神が人の間で業を行い完成させるため神が宿った特有の肉体でもある。この肉体は、誰でも代われるものではなく、地上における神の業を適切に引き受け、神の性質を表し、神を十分に象徴し、人にいのちを与えるものである。遅かれ早かれ、キリストになりすましている者たちはみな倒れる。彼らはキリストと自称しながら、キリストの本質は全く持っていないからだ。だから、キリストの真偽は人が定めることのできるものではなく、神自身が答え定めるものだと言わしは言うのだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

（一篇の御言葉）

キリストの本質は父なる神の心への従順

受肉した神をキリストと呼ぶ。キリストは神の霊が肉をまとった姿である。この肉はいかなる肉ある人間とも異なる。キリストは肉と血でできているのではなく、神の霊が受肉したものだからである。キリストは普通の人間性と完全なる神性の両方を持っている。キリストの神性はいかなる人も持っていないものである。キリストの普通の人間性は肉的な活動のすべてを支え、キリストの神性は神自身の働きを遂行する。キリストの人間性も、神性も父なる神の心に従うものである。キリストの本質は霊、すなわち神性である。ゆえに、その本質は神自身のものである。この本質は神自身の働きを妨げることではなく、キリストが神自身の働きを破壊するようなことは決してありえず、神の心に逆らう言葉を語ることも決してない。ゆえに、受肉した神は神自身の経営（救い）を妨げるような働きは絶対に行わない。このことをすべての人が理解すべきである。聖霊の働きの本質は人を救うことであり、また神自身の経営のためである。同様に、キリスト

の働きは人を救い、神の心を行うためのものである。神が肉となったため、キリストは自身の肉において神の本質を実現し、よってキリストの肉は神の働きを引き受けるに充分になる。神の霊の働きはすべて受肉の期間にキリストがなす働きに取って代わられる。受肉の期間を通してすべての働きの核心となるのがキリストの働きである。そこにほかのどの時代の働きが混ざり合うこともない。そして神が肉となるのであるから、神は肉としての働きをする。神は肉の形をとって来るので、自身のなすべき働きを肉となった姿で成し遂げる。神の霊も、キリストも神自身であり、神はしかるべき働きをし、しかるべき職分を果たす。

神の本質そのものが権威を行使するが、キリストは神から来る権威に完全に服従することができる。霊の働きも、肉の働きも、互いに相反することはない。すべての被造物におよぶ権威となるのは神の霊である。神の本質のある肉も権威を有すが、肉となった神は父なる神の心に沿った働きをすべて行える。こうしたことは人には実現も想像もできない。神自身が権威であるが、神の肉は神の権威に服従することができる。これが「キリストは父なる神の心に服従する」という言葉に秘められた意味である。神は霊であり、救いの働きができるように、受肉した神も救いの働きをなすことができる。いずれにしても、神自身が神自身の働きをする。神は阻止することも、干渉することもせず、まして互いに対立する働きをすることはない。霊と肉は働きの本質が似ているからである。霊も肉も一つの心を行い、同じ働きを管理するために働くからである。両者は性質が異なるが、本質は同じである。どちらも神自身の本質と、神自身の身分を持っている。神自身は不従順の要素を持たない。神の本質は良きものである。神はあらゆる美と善と、すべての愛の現れである。肉の姿であっても、神は父なる神に逆らうようなことは行わない。自身の命を犠牲にしてでも、神は心底から父なる神に従い、他の選択はしない。神には独善や尊大さといった要素も、うぬぼれや横柄さといった要素もない。神は不正な要素を持たない。神に逆らうものはすべてサタンから発生する。サタンはすべての醜悪さと邪惡の根源である。人がサタンに似た性質を持っている理由は、サタンが人に影響を与え墮落させたからである。キリストはサタンによって墮落させられていないため、神の特性のみを持っており、サタンの性質は全く持たない。どんなに働きが困難で、肉が弱くても、キリストは肉のうちに生きながら、神自身の働きを阻止するようなことは決してせず、ましてや不従順な行いで父なる神の心を見無視するようなことない。キリストは父なる神の心に逆らうくらいなら肉の痛みを受けることを選ぶだろう。イエスが「父よ、もしできることならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください

。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」 と祈ったようにである。人は選択をするが、キリストはそうしない。彼は神自身の身分を持っているが、肉ある神として、なお父なる神の心を求め、父なる神から委ねられた任務を果たす。これは人には不可能なことである。サタンから発生するものが持ち得る本質は神に逆らい、抵抗するものでしかなく、神の本質ではない。その本質は完全に神に服従することができず、ましてや神の心に進んで従うことなどできない。キリスト以外の人間はみな神に反する行いをするのができ、神に委ねられた働きを直接引き受けられる者はひとりもおらず、神の経営を自分自身がなすべき本分と考えられる者もひとりもない。父なる神の心に服従することはキリストの本質である。そして神への不従順はサタンの特性である。この二つの性質は相いれないものであり、サタンの特質を持つ者はキリストと呼ばれ得ない。人がキリストに代わって神の働きを行えないのは、神の本質がまったく備わっていないからである。人は自己の利益と将来の前途のために神に尽くすが、キリストは父なる神の心を行うために働く。

キリストの人間性はキリストの神性によって支配されている。キリストは肉の姿をしているが、その人間性は肉を持った人間とまったく同じものではない。キリストは特有の性格を持っており、これもキリストの神性によって支配されている。キリストの神性は弱さを持たない。キリストの弱さはキリストの人間性に起因する。この弱さはある程度キリストの神性を制限するが、そのような制限は一定の範囲と時間内のものであり、無限大ではない。キリストが神性による働きをする時が来ると、それはキリストの人間性とは関係なく行われる。キリストの人間性は完全にその神性の指示を受ける。キリストの人間性による普通の生活の他に、人間性によるほかの行動もすべて、キリストの神性の影響、働きかけ、指示を受ける。キリストは人間性を持っているが、それは神性による働きを邪魔するものではない。キリストの人間性がキリストの神性の指示を受けているからこそである。キリストの人間性は、ほかの人々の前ではその行いにおいて成熟していないが、それはキリストの神性のなす普通の働きに影響を与えることはない。キリストの人間性は堕落していないとわたしが言うのは、キリストの人間性はその神性に直接指示され、普通の人のもそれよりも理知が高度であるということである。彼の人間性は働きにおいて神性によって指示されることに最も適している。キリストの人間性は神性による働きを現し、神性による働きに服従する能力が何よりも高い。神が肉の姿で働きをなす時、神は肉を持つ人が果たすべき本分を決して見失わない。彼は天にいる神を真心で礼拝することができる。彼は神の本質を持ち、その身分は神自身のそれと同じで

ある。それは、彼がこの地上に来て、人の外観を持つ被造物となり、かつては持っていなかった人間性を持つようになったことにほかならない。天にいる神を崇拝することができるということだ。これはキリストが神自身であるということで、人にはまねのできないことである。彼の身分は神自身である。彼キリストが神を崇拝するのは、肉の観点からである。ゆえに、「キリストは天にある神を崇拝する」という言葉は間違いではない。彼が人に要求するものはまさに神自身の存在である。彼が人間に要求する事柄は、自身も既に成し遂げている。彼は人間に要求しておきながら自らはそれらから免れるようなことはしない。そのことがすべて彼の存在を成しているからである。彼はどのように働いても、神に敵対するような行為はしない。人に何を要求しても、人がなしえる以上の要求はしない。彼のすることはひたすら神の心を行うことであり、神の経営（救い）のためである。キリストの神性はすべての人を超越するもので、ゆえに彼はあらゆる被造物の最高の権威である。この権威はキリストの神性、すなわち神自身の性質と存在そのものであり、それは彼の身分を決定する。よって彼の人間性がいかに普通であっても、神自身の身分を持っていることは否定できない。彼がどのような観点から語り、どのように神の心に従っても、神自身ではないと言うことはできない。愚かで無知な者はしばしばキリストの普通の人間性を欠陥と見なす。人はどれほど自身の神性を現して明らかにしたキリストをも、キリストと認めることができない。そしてキリストが服従と謙遜を示せば示すほど、愚かな人間は益々キリストを軽くあしらう。キリストに対して排他的、侮蔑的な態度をとり、一方で尊大な姿の「偉人たち」を高い地位に置いて崇拝する者たちさえいる。人の神に対する抵抗と不従順は、肉となった神の本質が神の心に従うという事実と、キリストの普通の人間性とから来る。ここに人の神に対する抵抗と不従順の根源がある。もしキリストが人間としての外観を持たず、被造物としての観点から父なる神の心を求めることもせず、超人間性を持っていたならば、不従順になる人間はおそらくいないだろう。人が常に天にいる目に見えない神の存在を信じようとする理由は、天にいる神は人間性を持たず、被造物としての性質を一つも持たないからである。そのため人は常に天にいる神には最大の畏敬を抱き、キリストには侮蔑的な態度をとる。

キリストは地上で神自身の代わりに働くが、肉となった姿を人々に見せようと来るのではない。すべての人が彼を見るために来るのではない。自身の手によって人が導かれ、新たな時代へ入ることができるように来るのである。キリストの肉の役割は、神自身、つまり肉における神の働きを果たすことであり、人にキリストの肉の本質を十分理解

させることではない。キリストがいかに働いても、それは肉に実現可能なことを超えるものではない。キリストがいかに働いても、普通の人間性を持つ肉において働くのであり、神の真の姿を人に全て明らかにしてはいない。それに加えて、キリストの働きは、人間が思うような超自然的なものでも、計り知れないものでもない。キリストは肉において神自身を現わし、神自身のすべき働きを自ら遂行するけれども、天の神の存在を否定したり、自身の業を大々的に公表したりしない。むしろ、謙虚に自身の肉のうちに隠れたままである。キリスト自身以外でキリストを偽って名乗る者はみな、キリストの性質を持ってはいない。そのような偽キリストの高慢で自画自賛的な性質をキリストの性質と比べたならば、キリストの肉がどのようなものであるかは明白である。偽りの多い偽キリストであればあるほど自分自身を誇示し、人を欺くしるしや不思議を多く行うことができる。偽キリストたちは神の属性を持っていない。キリストは偽キリストの要素で汚されてはいない。神は肉の働きを全うするためだけに肉となるのであり、単に人間が神を見ることができるようになるのではない。むしろ、彼は働きを通して彼の身分を明確にし、彼の現すものによって彼の本質を証明する。彼の本質は根拠のないものではない。彼の身分は自身の手によって握られてはいなかった。それは彼の働きと本質によって決定される。彼は神自身の本質を持っており、神自身の働きをすることができるが、やはり彼は霊とは違って、肉である。キリストは霊の属性を持つ神ではない。肉の外殻を持った神である。したがって、いかに普通で弱くとも、どのように父なる神の心を求めても、彼の神性は否定できない。肉となった神のうちにあるものは、普通の人間性とその弱さだけではない。そこにはキリストの肉における行いとともに、その神性の素晴らしさと不可思議性も存在する。ゆえに人間性と神性の両方が実際に、具体的にキリストのうちに存在する。これは無意味でも超自然的でも全くない。彼は働きを遂行するという第一の目的を持って地上に来る。地上での働きを遂行するためには普通の人間性を持っていることは必須である。そうでなければ、いかにキリストの神性の力が大きくても、その本来の機能を有効に使うことができない。キリストの人間性は非常に重要であるが、それは彼の本質ではない。キリストの本質は神性である。ゆえに、彼が地上で職分を始める瞬間は彼がその神性の存在を現し始める瞬間である。彼の人間性はその肉の普通の生活を維持するためだけにあり、それにより、キリストの神性が肉において普通に働きを行うことができるのである。キリストの働き全体を指示するのはキリストの神性なのである。彼が働きを完了する時は、彼の職分の働きを全うした時である。人が知るべきことは彼の働き全体であり、キリストはその働きを通して人が彼を知ることを可能にする。働きを行う過程で、彼は自身の神性の存在を十分に現す。それは人

間性によって汚された性質でもなければ、人間の考えや振る舞いで汚された存在でもない。彼の職分が終わりを迎えるまでには、彼は現すべきその性質を全て現すであろう。彼の働きは人によって指示されない。彼キリストの性質の現れもいたって自由であり、知性で支配されることも、思考で処理されることもなく、自然に明らかになる。これは人には成し遂げることができない。環境が厳しかったり、条件が合わなかったりしても、彼は適切な時にその性質を現すことができる。キリストである者がキリストの存在を現し、一方キリストでない者たちはキリストの性質を持たない。ゆえに、たとえすべての人たちが彼に抵抗したり、彼に対する観念を持ったりしたとしても、キリストによって現わされた性質が神の性質であるということを、人間の観念に基づいて否定できる者はいない。真心でキリストを求め、意志を持って神を求めるすべての者は、キリストの神性の現れに基づいて彼はキリストであると認めるであろう。キリストに人の観念と一致しない側面があっても、彼らがそれに基づいてキリストを否定することはない。人はとても愚かであるが、すべての人は、何が人の意志によるもので、何が神から出たものかをはっきりと知っている。多くの人々は自分の目的に基づいて、意図的にキリストに反抗しているだけなのである。そうでなければ、キリストの存在を否定する理由など誰にもない。というのはキリストによって現わされた神性は確かに存在し、彼の働きはすべての人が肉眼で確認できるものだからである。

キリストの働きと現れはキリストの本質を決定する。キリストは託された働きを真心を持って完成することができる。キリストは天の神を心から崇拝し、真心を持って父なる神の心を求めることができる。これはすべてキリストの本質によって決定されている。そしてキリストの自然な現れもキリストの本質によって決定されている。キリストの「自然な現れ」と呼ばれるのは、キリストの現れが模倣でも、人による教育の結果でも、人による長年の育成の結果でもないからである。キリストはそれを学んだのでも、それでわが身を飾ったのでもない。むしろ、それはキリストのうちに本来備わっているものである。人はキリストの働き、現れ、人間性、そして普通の人間性を持った生活を否定するかもしれないが、キリストが真心で天の神を崇拝することを否定できるものは一人もいない。キリストが父なる神の心を果たすために来たことを否定できる者はおらず、キリストが父なる神を求める心の切実さを否定できる者もない。キリストの姿は感覚にとって快いわけでも、その話に特別な重みがあるわけでもなく、その働きに人が想像するような地を揺るがし、天を揺さぶるものでもないが、彼は確かにキリストであり、真心で天の父の心を全うし、天の父に完全に服従し、死ぬまで従う者である。これは

彼の本質がキリストの本質だからである。この事実は人には信じがたいものだが、確かに存在する。キリストの職分が全うされた時、キリストの働きを通して、キリストの性質と存在は天の神の性質と存在を現すことを、人は知るであろう。その時、キリストの全ての働きの総和から、この者はまことにことばが肉となった者であり、血と肉による人間とは異なることが分かるであろう。キリストの地上での働きの各段階はそれぞれ代表的な意味を持つが、それぞれの段階における実際の働きを経験する人間は、彼の働きの意味を把握することができない。第二の受肉した神による数段階での働きに関してはとりわけそうである。キリストの言葉を見聞きしただけで、キリストに出会ったことのない者たちのほとんどは、キリストの働きについていかなる観念も持っていない。キリストに出会い、言葉を聞き、働きを経験した者たちにとっては、働きを受け入れることが難しい。これはキリストの外見と普通の人間性が人の好みに合わないせいではないのか。キリストが去ってからその働きを受け入れる者たちはそのような困難に出遭うことはないだろう。彼らはキリストの働きを単に受け入れ、キリストの普通の人間性に接することがないからだ。人は神に対する己の観念を捨てることができず、キリストをあれこれと入念に調べる。これは人がキリストの外見だけに注目し、キリストの働きと言葉に基づいた本質を認識できないことが原因だ。もし人がキリストの外見に目を向けず、キリストの人間性を論じるのを避け、その神性、——人には成しえない働きと言葉の主である神性——についてのみ語るのなら、人の観念は半分に減り、人の困難がすべて解決することさえあり得るだろう。肉となった神が働きをする間、人はキリストを許容できず、キリストについてさまざまな観念を抱き、しばしば抵抗し、不従順になる。人は神の存在を許容できず、キリストの謙遜と隠れた性質に寛容を示すことができず、父なる神に従うキリストの本質を赦すことができない。したがって、キリストは働きを終えた後、永遠に人と共に留まることができない。人はキリストが人と共に暮らすことを許そうとしないからである。キリストが働きをする間、人が寛容を示すことができないければ、キリストが職分を全うした後、彼らと共に暮らし続け、彼らがキリストの言葉を徐々に経験していくのを見るなど、許容できるだろうか。そうなれば、多くの者がキリストのために躓くのではないだろうか。人はキリストが地上で働くことだけを許す。これが人の寛容の限界である。キリストの働きがなければ、人はとっくにキリストを地上から追放しているだろう。ということは、働きが終わればどれだけ人は寛容を示さなくなるだろうか。人はキリストを処刑し、死に至るまで拷問するのではないだろうか。もし彼はキリストと呼ばれなければ、人間の中で働きをすることは出来なかった。もしキリストが神自身の身分を持って働きをせず、普通の人間としてのみ働いたなら、人はキリ

ストが発する言葉をひとつも許容せず、ましてや働きなど少しも許容しなかっただろう。そのため、キリストは働きにおいてはこの身分しか持てない。このようにして、キリストの働きは、そうしなかった場合よりも強力である。それは、人はみな立派な身分や地位のある者に従おうとするからである。キリストが神自身の身分を持って働かず、神自身として現れなかったなら、キリストが働く機会は全くなかったであろう。キリストが神の本質とキリストの存在を持っているのにもかかわらず、人は態度を和らげてキリストが人間の中で容易に働けるようにはしない。キリストは神自身の身分を持って働く。そのような働きは、身分を持たずになされる働きよりも何十倍も強力だが、それでも人はキリストに完全に従順ではない。人はキリストの地位にのみ従い、キリストの本質には従わないからである。そうであれば、キリストがその地位から身を引く時がくるならば、人は一日たりともキリストが生き長らえることを許せるだろうか。神は人と共に地上に生き、自身の手による働きが後年もたらす効果を見たいと考える。しかしながら、人はキリストがたった一日でも留まることを許容できないため、キリストは諦めるしかなかった。神が人間の中ですべき働きをなし、職分を全うすることを許すのが人の寛容と寛大さの限界である。キリストに直接征服された者たちはそのような寛大さを示すが、彼らでもキリストが働きを終えるまで留まることを許すだけで、その後はたった一瞬でも留まることを許さない。そうであれば、キリストに征服されていない者たちはどうだろう。人が肉となった神をこのように扱うのは、彼が普通の人間性の外殻を持ったキリストであるからなのではないのだろうか。もし彼が神性だけを持ち、普通の人間性を持たなかったならば、人にとっての困難はいとも容易に解決されるのではないのだろうか。彼の本質はまさに天の父の心に従うキリストの本質であるにもかかわらず、人は彼の神性をしぶしぶ認めるだけで、普通の人としての彼の外殻には興味を示さない。そのようなわけで、キリストは人間の中で喜びも悲しみも分かち合うために人の間に住まうという働きを取り消すしかなかった。人はもはやキリストの存在を許容できなかったからである。

『言葉は肉において現れる』より

2. 肉となった神の重要性

関連する神の言葉

この肉の体が人類にとって極めて重要なのは、それは人間である、かつそれ以上に神

であるからだ。それは通常の人間には不可能な働きが可能だからであり、神には地上で共に暮らす墮落した人間を救うことが可能なためである。神は人間と同じ外見をもつが、受肉した神はどんな重要人物よりも人間にとって重要である。それは神の霊には不可能な働きが可能だからであり、神自身について霊よりも優れた証しができ、神の霊よりも完全に人間を得ることができるからだ。その結果、この肉は普通で平凡であっても、その人類への貢献と人類存在にとっての意義により、この肉体は極めて尊いものとなる。そしてこの肉の真の価値と意味は誰にとってもはかりしれないものがある。この肉は直接サタンを滅ぼすことはできないが、神はその働きによって、人間を征服し、サタンを打ち負かせる。サタンを完全に支配下に下せる。これは、神が受肉したから、サタンに勝利して人類を救うことができるのだ。神は直接サタンを滅ぼしはしないが、サタンによって墮落させられた人類を征服する働きをするため受肉する。このようにして、神は被造物のもとで自分を証しでき、墮落した人間をよりよく救える。受肉した神がサタンを打ち負かすことは、神の霊が直接サタンを滅ぼすよりも偉大な証しであり、より説得力がある。受肉した神は、人間が創造主を知る手助けをよりよく行うことができ、被造物のもとでよりよく神自身を証しできる。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

受肉した神の働きで最もよい点は、神に従う人々に正確な言葉と勧告、人類への正確な心を残せるため、受肉した神の働きと全人類に向けられた心とを、後に信者たちがこの道を受け入れる人々により正確に、具体的に伝えられる点にある。受肉した神の人間の間での働きだけが、神が人間と共に存在し、生きている事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きに立会い、神の直接的な言葉を聞きたいという人間の欲求を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人間に示された時代を終わらせ、また、漠然とした神への人間の信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な快い時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけでなく、もっと重要なことに、現実的で正常で、義であり聖なる神、経営（救いの）計画を明らかにし奥義と人類の運命を示す神、人間を創り、救いの働きを完了し、数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにするのだ。神は漠然の時代を完全に終わらせ、全人類が神の顔を求めても見つけられなかった時代を終わらせる。神は、すべての人間がサタンに仕えた時代を終わらせ、すべての人間をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな神の霊ではなく、受肉した神の働きの結果なのだ。神が受肉して働くと、神に従う者たちは、もはや漠然とした不可解な

ものを手探りで求める事をせず、漠然の神の心を推測することをやめる。神が肉における働きを広めると、神に従う人々は、神が受肉して行った働きをすべての宗教、すべての宗派に伝え、その言葉全部をすべての人間の耳に伝えるだろう。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実で、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、事実であって、噂ではない。こうした事実は神がその働きを広める証拠であり、また、その働きを広めるために用いる道具である。事実がなければ、神の福音はすべての国々、あらゆる場所に伝わらない。事実なしで人間の想像だけであれば、神はけっして全宇宙を征服する働きを行うことはできない。霊は人間には理解のできないもので、人間には不可視で、霊の働きは神の働きのそれ以上の証拠も事実も人間に残せない。人間はけっして神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じているだろう。人間はけっして神の顔を見ないし、また、直接神が語る言葉を聞くこともない。人間の想像するものは、結局のところ、むなしく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質は、神自身の働きは、人間がまねる事ができない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が自ら人間の間で働いて、はじめて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法により人間は神を見て、神の真の顔を知る。そして、これは受肉しない神では不可能なことだ。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

今回は、神は霊体ではなく、まったく普通の体で働きを行うために来る。それは神の二度目の受肉の体というだけではなく、神がそれをまとして戻ってくる体でもある。それはごく普通の肉体である。この体の中に、他の人々と異なるものは何も見受けられないが、あなたは、今までに聞いたこともない真理をこの人から受け取ることができる。この取るに足らない肉体は、神から来る真理の言葉のすべてを具現化したものであり、終わりの日の神の働きを引き受けるもの、また人が知ようになる神の全性質の表現である。あなたは天の神を見ることを大いに望んでいたではないか。あなたは天の神を理解することを切に願ったではないか。あなたは人類の終着点を見ることを大いに欲していたではないか。この人は、今まで誰ひとりとしてあなたに語ることはできなかった秘密の全てをあなたに語るだろう。また、あなたが理解していない真理についてさえ語るだろう。この人は、あなたにとっての神の国への入り口の門であり、新しい時代への導き手である。このような普通の肉が多く計り知れない奥義を握っているのである。この人の行いはあなたには測り知れないかもしれないが、その人が行うすべての働きの目標は、この人が人々が思うような単なる肉ではないことを理解するのに充分である。な

ぜならこの人は、終わりの日に人類に神が示す配慮及び神の意志を表しているからである。あなたは天地を揺るがすような神の語る言葉を聞くことはできず、燃え上がる炎のようなその目を見ることもできず、また、鉄の杖のような神の懲らしめを感じることもできないが、その言葉から神の怒りを聞き、神が人類に示す憐れみを知ることができる。あなたは神の義なる性質と神の知恵を見ることができ、更に神が全人類に対して持つ配慮をはっきり理解することができる。終わりの日の神の働きは、天の神が地上で人々の間で生きていることを人に見せることであり、また人が神を知り、神に従い、神を畏敬し、神を愛することができるようにすることである。これが神が再び肉に戻った理由である。今日人が見るものは人と同じ姿の神、一つの鼻と二つの目を持つ神、目立たない神であるが、最終的には神はあなた方に次のことを示すだろう。この人の存在がなければ、天と地は膨大な変化にさらされ、この人の存在がなければ、天は薄暗くなり、地上は混沌に陥り、全人類は飢饉と疫病の中で暮らすことになるということを。終わりの日における受肉の神による救いがなければ、神はずっと前に全人類を地獄で滅ぼし尽くしていたはずであるということを、神はあなた方に示すであろう。またこの肉の存在がなければ、あなた方は永遠にずっと罪人のかしらと死体のままであるということを神は示すであろう。この肉の存在がなければ全人類は避けることのできない災難に直面し、終わりの日の神の人類への一層厳しい懲罰から逃れることはできないことをあなた方は知るべきである。この普通の肉の誕生がなければ、どのように求めようとも、あなた方にはみな生も死も到来しない状態に陥るだろう。この肉の存在がなければ、今日、あなた方は真理を受け取り神の玉座の前に来ることもできないだろう。それどころか、あなた方の深い罪ゆえに罰せられるだろう。あなた方は知っているか。神の肉への再来がなければ、誰にも救いの機会はないのである。また、この肉が来なければ、神はずっと以前に古い時代を終わらせていたはずである。それでも、あなた方は神の二度目の受肉をなおも拒むことができるのか。あなた方は、この普通の人から大いに利益を得ることができるのに、なぜすぐにこの人を受け入れないのか。

神の働きはあなたには理解できないことである。あなたの決定が正しいかどうか理解することも、神の働きが成功するかどうか知ることもしないのなら、この普通の人があなたにとって大いに助けとなるかどうか、また、神が偉大な働きを行ったかどうかを運をためしてでもいいから見てみようとししないのか。しかし、わたしはあなたに告げなければならない。ノアの時代、人々は神が見るに堪えないほど飲んだり、食べたり、勝手気ままに結婚したり結婚させたりしていたので、神は大洪水を引き起こして人類を滅

ばし、ただノアの家族八人とあらゆる種類の鳥と獣だけを残した。しかしながら、終わりの日に神に守られるのは、最後まで神に忠誠を尽くしたすべての人々である。どちらも神が見るに耐えないほどのひどい墮落の時代であり、どちらの時代の人類も主である神を否定するほどひどく墮落していたが、ノアの時代の人々はすべて神に滅ぼされた。どちらの時代の人類も神をひどく悲しませたが、神は終わりの日の人々には今日に至るまで忍耐深い。それは何故なのか。あなた方はこのことを一度も考えたことがなかったのか。本当にそれを知らないなら、わたしがあなた方に話そう。終わりの日に神が人々を恵み深く取り扱うことができる理由は、彼らがノアの時代の人々ほど墮落していないからでも、彼らが神に悔い改めを示したからでもない。まして、テクノロジーが進歩した終わりの日に人間を滅ぼすことに神が耐えられないからでもない。むしろ、神には終わりの日に一群の人々に対して行う働きがあり、これは受肉の神自身によってなされるからである。その上、神はこの一群の一部を救いの対象、神の経営（救いの）計画の実として選び、そのような人々とともに次の時代へと連れてゆくのである。従って、何があっても、神によって支払われたこの全ての代価は、終わりの日における神の受肉の働きのための準備であったのだ。今日あなた方が持っているすべてはこの肉のおかげである。神が肉の中で生きている故に、あなた方にも生きる機会がある。このすべての恩恵はこの普通の人の故に獲得されたのである。それだけではない。最後にはすべての国々はこの普通の人を礼拝し、この取るに足りない人に感謝し、従うだろう。全ての人類を救い、神と人の間の対立を和らげ、神と人を近づけ、神と人の考えをつなげるための真理、いのち、道をもたらしたのは、この人だからである。一層大きな栄光を神にもたらしたのもこの人である。このような普通の人は、あなたの信頼や敬愛を受けるに値しないだろうか。このような普通の肉はキリストと呼ばれるに相応しくはないだろうか。このような普通の人々が人々の間で神の表出となれないことなどあろうか。人類が災難を免れる手助けをするこのような人は、あなた方に愛され、あなた方が抱きしめる価値がないなどということがあろうか。あなた方がこの人の口から発せられる真理を拒み、あなた方の間に彼が存在することを忌み嫌うならば、あなた方の運命はどうなるであろうか。

終わりの日の神の働きのすべてはこの普通の人を通して行われる。この人はすべてのものをあなたに授け、その上、あなたに関わるすべてのことを決定することができる。このような人が、あなた方が思っているように、言及する価値もないほどとるに足りないということがあろうか。この人の真理はあなた方を完全に納得させるのに十分ではな

いのか。その行いによる証しは、あなた方を完全に確信させるには充分でないというのか。あるいは、この人があなた方を導き入れる道は、あなた方がついて行く価値がないということか。あなた方がこの人に反感を抱き、見捨て、避ける理由は何であろうか。真理を表すのはこの人であり、真理を供給するのはこの人であり、あなた方に進むべき道があるようにするのもこの人である。あなた方はまだ、これらの真理の内に神の働きの足跡を見つけることができないなどということがあり得ようか。イエスの働きがなければ、人類は十字架から降りることはできなかったであろうが、今日の受肉がなければ、十字架から降りる人々は神に称賛されることは決してないし、新しい時代に入ることもできない。この普通の人の到来がなければ、あなた方には神のほんとうの顔を見る機会も資格も全くない。何故ならあなた方は皆ずっと前に滅ぼされているはずの人々だからである。神の二度目の受肉の到来の故に、神はあなた方を赦し、あなた方に憐れみを示した。いずれにしても、最後にわたしがあなた方に言い残さなければならない言葉はやはりこうである。神の受肉であるこの普通の人は、あなた方にとって極めて重要である。これこそが、神が人々の間で成し遂げた偉大なることである。

『言葉は肉において現れる』の「神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを知っているか」より

キリストが語る真理に依り頼むことなくいのちを得ることを望む者は、地上で最も愚か者であり、キリストがもたらすいのちの道を受け入れない者は幻想の世界で迷子になった者だ。だから、終わりの日のキリストを受け入れない者は神から永遠に嫌われるとわたしは言う。キリストは、終わりの日に神の国への門となる存在であり、誰も迂回することはできない。キリストを通してでなければ、誰も神に完全にしてもらうことはできない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を受け入れ、神の道に従わなければならない。真理を受け取ることも、いのちの供給を受け入れることもなく、祝福だけを得ようと考えてはならない。キリストは、彼を真に信じる者にいのちを与えるために終わりの日にくる。その働きは、古い時代を終わらせ新しい時代に入るためのもので、新しい時代に入る人が必ず進まなければならない道だ。あなたが彼を認めず、彼を非難したり、冒涇したり、さらに迫害したりするなら、あなたは永遠に火で焼かれなければならない。神の国には決して入れない。このキリストこそ、聖霊の現れであり、神の顕現であり、神が地上での業を託した者だからだ。だから、あなたが終わりの日のキリストがする全てのことを受け入れられないなら、あなたは聖霊を冒涇しているとわたしは言うのだ。聖霊を冒涇する者が受けなければならない報いは、誰の目にも明らかだ。そし

て、あなたが終わりの日のキリストに敵対し、拒むなら、誰もその結末をあなたに代わって引き受けることはできないともわたしは言おう。さらに、これから先、あなたが神に認めてもらう機会はない。たとえあなたが自らの罪を償おうとしても、あなたが神の顔を拝することは二度とない。なぜなら、あなたが敵対したのは人ではなく、あなたが拒んだのは卑小な存在ではなく、他でもないキリストだからだ。あなたはこの結末に気づいているのか。あなたが犯したのは小さな過ちではなく、重罪だ。だから、全ての人に忠告する。真理の前に牙をむき出したり、軽率に批判したりすることのないように。あなたにいのちを与えるのは真理以外にはなく、あなたを生まれ変わらせ、神の顔を仰ぐことができるようにしてくれるものは、真理以外にはないからだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

3. 受肉した神の働きと霊の働きの違い

関連する神の言葉

神が人を救うとき、霊の手段を用いたり霊として直接行なわない。というのは、神の霊は人が触れることも見ることもできず、人が近づくこともできないからである。もし神が霊の立場で直接人を救おうとするなら、人は神の救いを受け入れることはできないであろう。そして、もし神が造られた人の外形をまとうなら、人はこの救いを受け入れることはできないであろう。というのは、ちょうど誰もヤーウェの雲の近くに行くことができなかったように、人は決して神に接近することができないからである。被造物である人となることによってのみ、すなわち、言葉を神がまとう肉体に入れることによってのみ、神は従ってくるすべての人たちに直接言葉を働かせることができる。その時初めて、人は自分自身で神の言葉を見聞きし、さらに言葉を自分のものとし、これによって、完全に救われることができる。もし神が肉とならなければ、肉なる人はそのような大きな救いを受けることもできないし、誰一人救われることもないであろう。もし神の霊が人の間で直接働いたなら、人は打ち倒されてしまうか、神と係わる方法がないまま、サタンにすっかり連れ去られ囚われるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

神は終わりの日における新しい働きを行なっている。神はその性質をさらに明らかにするが、それはイエスの時代の憐れみと愛ではない。神は新しい働きを担っているのだ、それは新しい性質を伴う。もしもこの働きが霊により行なわれたならば、つまり神は

受肉せず、代わりに霊が雷鳴を通して直接語りかけ、人間には神と直接接触する方法がないようにしたならば、人間は神の性質を知ることができたであろうか。もしも霊のみがこの働きを行なったならば、人間には神の性質を知ることがなかったであろう。人々が神の性質を自らの目で見ることができるのは、神が肉となると、言が肉に現れるとき、神がその全性質を肉体をもって表現するときだけである。神は本当に人間のもとで暮らしている。神は触れることができる。人間は本当に神の性質、神のもつもの、神であるものと関わりをもつことができる。この方法においてのみ、人間は本当に神を知ることができるのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

肉の体の働きは多くの困難を伴う。肉体は霊のような偉大な身分をもたないし、霊のような超自然的な業は行えない。まして、霊と同じ権威をもたない。しかし、この平凡な肉の行う働きの本質は、霊が直接行う働きの本質をはるかに上回る。この神の肉体は、すべての人間の必要に応えるものなのだ。救われるべき者たちにとって、霊の使用価値は、肉にはるかに劣る。霊の働きは、全宇宙、すべての山々、川、湖、大海に及ぶ。しかし、肉の働きで神は、触れるすべての人と効果的に交流できる。そのうえ、触れることのできる形をもつ神の体は、人間には理解しやすく、信頼しやすく、神についての人間の認識を深めることができ、神の実際の業の深い印象を植え付けられる。霊の働きは神秘に包まれていて、死すべき人間には理解し難く、見ることはそれ以上に難しい。だから、無意味な想像に頼るしかない。しかしながら、肉の働きは正常で、現実に基づいており、豊かな知恵を含み、人間の肉眼で見ることのできる事実である。人間はその身で神の働きの知恵を経験できるから、豊かな想像力を働かせる必要もない。これが受肉した神の働きの正確さ、本物の価値である。霊には、人間の目に見えず、想像しにくいことしかできない。たとえば、霊による啓示、霊による感動、それに霊の導きなど。しかし、知性のある人間には、こうしたものは何ら明瞭な意味をもたない。こうしたものは感動あるいは漠然とした意味しか提供せず、言葉による指示を与えられない。しかしながら、受肉した神の働きは、大いに異なる。言葉を用いて正確な導きができるし、明確な意図、そして、目指すべきはっきりとした目標がある。だから、人間は手探りして歩きまわる必要がないし、想像力を働かせる必要も、まして、推測する必要もない。これが肉における働きの明瞭さであって、霊の働きとの大きな違いである。霊の働きは限られた範囲においてのみ適しており、肉の働きと置き換えることができない。肉の働きは、霊の働きよりはるかに正確で、必要な目標とずっと現実的で価値ある認識とを

人間に与える。墮落した人間にとって最も価値ある働きは、正確な言葉と目指すべき明確な目標を与え、そして見て触ることのできるものである。実際の働きと時宜に合った導きだけが人間の嗜好に合う。そして、現実の働きだけが人間をその墮落した邪悪な性質から救える。これを成し遂げられるのは受肉した神だけである。受肉した神だけが、人間をかつて墮落した邪悪な性質から救えるのだ。霊は神に備わった本質であるが、こうした働きは受肉した神にしかできない。もし霊だけで働いたなら、神の働きは効果的なものではないだろう——これは明確な事実である。大方の人は、肉のために神の敵になっているが、神がその働きを完了するとき、神に敵対する者たちは敵であることをやめるだけではなく、それどころか神の証人になるだろう。そうした人たちは神に征服された証人、神の心にかない、神と分かちがたい証人になる。神はその肉体における働きの重要性を人間に知らせる。そして人間は、人間存在の意味についてのこの肉体がどれほど重要であるかを知り、人間のいのちの成長のために神の肉体がどれほど価値あるものであるを知り、そのうえ、この肉体が、離れることが到底できない、生きるいのちの泉となることを知るだろう。受肉した神は、本来の神の身分と地位には遠く及ばないし、人間からすると神の本来の地位と相容れないものと思われるだろうが、この肉体、すなわち神の真の姿や身分をもたないこの存在は、神の霊には直接できない働きができるのである。それが神の受肉の真の意味と価値であり、そしてこの意味と価値を人間は理解し、受け入れることができない。すべての人間は神の霊を仰ぎ、受肉した神を見下すが、彼らがどう判断し、どう考えるかに関わりなく、この肉体の真の意味と価値とは霊にはるかに優る。もちろん、これは墮落した人間との関連においてのみ言えることだ。真理を求め、神の現れを待ち望む者すべてにとって、霊の働きは感動と啓示、理解不能で想像もできない不思議な感覚、偉大で超越的で崇めるべきものであるが誰にも達成できず手に入れることのできないものという感覚だけを与える。人間と神の霊とは、遠くから互いを見ることしかできない。まるで両者の間に遠い隔たりがあるように。そして、けっして似ることがない。まるで、目に見えない境界で隔てられているかのよう。実は、これは霊が人間に与えた幻影である。なぜならば、霊と人間とは種類を異にするものであり、霊と人間はけっして同じ世界で共存できず、霊には人間的な要素は何もないからである。だから、人間には霊は必要ではない。霊には、人間に最も必要な働きを直接することができないからである。肉の働きは求めるべき真の目標、明確な言葉、そして、神が現実的かつ正常で謙虚で普通であるという感覚を人間に与える。人間は神を恐れはするだろうが、たいていの人は神と心安く付き合える。人間は神の顔を見、神の声を聞くことができるし、遠くから見る必要はない。この肉体は人間にとって近づき

やすいように思われる。遠くの不可思議な存在ではなく、目に見え、触れられるのだ。この肉体は人間と同じ世界にあるのだから。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

受肉した神の働きが途方もなく素晴らしいことを人は今では理解でき、そこには人には達成できないことがたくさんある。それらは奥義と不思議である。だから、多くの人たちは服従して来た。誕生してから一度も誰にも従ったことのない人たちも、今日、神の言葉に触れると、彼らはそうと気付かないまま完全に従うのである。彼らはあえて綿密に調べることも、何か他のことを言うこともない。人類は言葉の下に倒れ、言葉による裁きの下に平伏している。もし神の霊が直接人に話しかけたら、人はみなその声に従い、啓示の言葉がなくても倒れ、ちょうどパウロがダマスコへの途上で光の中で地にひれ伏したようになる。もし神がこのように働き続けたなら、人は言葉による裁きを通して自分の墮落を知り、救いを得ることもできないであろう。肉になることによって初めて、神は言葉を直接すべての人の耳元に届け、その結果聞く耳のある人はすべて言葉を聞き、言葉による裁きの働きを受けることができる。これだけが神の言葉による成果であり、霊が出現して人を脅かし、服従させるというようなものではない。このような実践的でしかも並はずれた働きを通してのみ、長い間奥深く潜んだ人の古い性質を完全に明らかにし、人がそれを認め、性質を変えることができる。これらはすべて受肉した神の実践的働きである。この働きにおいては、神は実践的に語り裁くことで、言葉によって人に裁きの結果を達成する。これは受肉した神の権威であり、神の受肉の意義である。それは受肉の神の権威を知らせ、言葉の働きが達成した結果を知らせ、霊が肉となったことを知らせるためになされ、また言葉による人間への裁きを通して神の権威を実証するためになされる。神の肉体は平凡で普通の人間の外形であるが、神が権威に満ちており、その「人」が神自身であり、その言葉は神自身の表現であることを人に示すのは言葉が成し遂げる結果である。これはすべての人間にこの「人」は神であり、肉となった神自身であり、誰も犯すことはできないことを示している。誰も言葉による神の裁きを超えることはできず、暗闇のどんな勢力も神の権威に打ち勝つことはできない。人間は彼に完全に服従するのは、彼の言（ことば）が肉となった故、彼の権威の故、言葉による彼の裁きの故である。肉となったこの人がもたらす働きは、彼のもつ権威である。肉となったのは、肉は権威を持つこともでき、人に見え実体のある実践的な方法で、人の間で働きをなすことができるからである。そのような働きは、すべての権威を所有する神の霊によって直接なされる働きよりも現実的で、その結果も明らかである。これ

は受肉した神の肉体は実践的な方法で語り、働くことができるからである。肉体の外形は権威を持たず、人が近づくことができる。一方、彼の本質は権威を伴うが、その権威は誰にも見えない。彼が話し働くとき、人は彼の権威の存在を感じることはできない。これは彼の実際の働きにとっても好都合である。そして、そのような実際の働きはすべて成果を上げることができる。たとえ誰も彼の権威を持つことに気付かず、誰にも犯されることがないことや神の怒りを知らなくても、彼の覆われた権威と隠れた怒り、そして公に語られた言葉を通して、彼はその言葉により意図した成果を達成する。すなわち、口調や断固とした話し方、そして言葉の知恵のすべてを通して、人は完全に確信する。この様にして、人は一見何の権威も持っていないような受肉した神の言葉に服従し、それによって人の救いという神の目的を達成するのである。これは受肉のもう一つの意義である。つまり、より現実的に語り、彼の言葉の現実性が人に働き、その結果、人は神の言葉の力の証人となる。だから、もし受肉によらないなら、この働きは少しも成果を得られず、完全に罪人たちを救うことはできないであろう。もし神が肉とならないなら、神は人の目に見えず、触れることの出来ない霊のままである。人は肉の被造物で、人と神は二つの違った世界に属し、性質も異なっている。神の霊は肉からなる人とは相いれず、それらの間には何の関係も作ることはできない。さらに、人は霊になることはできない。それだから、神の霊は被造物の一つになって、神の本来の働きをしなければならぬ。神は最高の場所に昇ることもできれば、へりくだって、被造物である人になって人々のもとで働き、生きることもできる。しかし人は高みに昇り、霊になることもできなければ、ましてや最も低い場所に降りることなどできない。よって、神はその働きを実行するために人とならなければならぬ。最初の受肉のときのように、受肉した神の肉体のみが十字架にかけられることによって人を贖うことができたが、神の霊が人のために罪のためのいけにえとして十字架にかけられることはできなかったであろう。神は人のための罪のためのいけにえとして直接人となることができたが、人は神が人のために用意した罪のためのいけにえを受け取るために直接天に昇ることはできなかった。そういうわけで、この救いを受け取るために人を天に昇らせるのではなく、神に天と地のあいだを数回行ったり来たりすることをたのむことだけが可能なことなのである。というのは、人は墮落したので天に上ることはできず、ましてや罪のためのいけにえを手にすることはできないからである。よって、イエスは人のもとに来て、人がどうしても達成することができない働きを自ら行なう必要があった。神が肉となるときは必ず、どうしてもそうする必要があるからである。もしいずれかの段階が神の霊が直接行なうことができたなら、神は受肉という屈辱に耐えることはなかったであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

裁かれるのは人間、肉の体をもち墮落した人間であり、直接裁かれるのはサタンの霊ではなく、裁きの働きは霊的世界ではなく、人間の間で行われる。人間の肉体の墮落を裁くするには、受肉した神以上にふさわしいものはいない。もし神の霊が直接裁いたならば、それはすべてを含むものではないであろう。そのうえ、そうした働きは人間には受け入れがたいものだったろう。なぜなら、霊は人間と直接会うことができず、そのため効果は即座に見られるものでもない。まして、人間が神の侵しがたい性質をより明確に目にすることはできないであろう。もし受肉した神が人間の墮落を裁くなら、はじめてサタンを完全に打ち負かせる。受肉して普通の人間性をもった神は、直接人間の不義を裁くことができる。これが神本来の聖さ、すばらしさである。神だけが人間を裁く資格があり、その地位にいる。神には真理と義があるから、人間を裁くことができる。真理と義のない者には他人を裁くことができない。この働きが神の霊によって行われたなら、それはサタンに勝利したことにはならないだろう。霊は本来、死すべき者たちよりも高い地位にあり、神の霊は本質的に聖く、肉に優る。もしこの働きを霊が直接行ったらば、神は人間の不服従のすべてを裁くことができず、人間の不義をすべて露わにすることもできないだろう。裁きの働きもまた人間の神についての観念を通して行われるからである。人間は霊について何の観念も抱いたことがない。そのため霊には、人間の不義をよりよく露わにすることができないし、まして、そうした不義を完全に明らかにすることもできない。受肉した神は、神を知らない者すべての敵である。人間の観念と神への敵対を裁くことで、神は人間のあらゆる不服従を明らかにする。受肉した神の働きの成果は、霊の働きよりも明らかである。そのため、すべての人間の裁きは霊が直接するのではなく、受肉した神の働きなのである。人間の体をもつ神は、人間が目で見、触れることができる。また、受肉した神は完全に人間を征服できる。この受肉した神と人間との関係において、人間は敵対から従順、迫害から受容、観念から認識、そして、拒否から愛へと変わっていく。これが受肉した神の働きの成果である。人間は神の裁きを受け入れることによってのみ救われ、神の口から出ることばによって徐々に神を知るようになり、神に敵対している間に神に征服され、神の罰を受けている間にいのちの糧を受ける。この働きはみな受肉した神の働きであって、霊としての神の働きではない。受肉した神の働きは最も偉大で、最も深い働きであり、神の働きの三段階のうちの最も大事な部分は、受肉による働きの二つの段階である。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

受肉した神の働きで最もよい点は、神に従う人々に正確な言葉と勧告、人類への正確な心を残せるため、受肉した神の働きと全人類に向けられた心とを、後に信者たちがこの道を受け入れる人々により正確に、具体的に伝えられる点にある。受肉した神の人間の間での働きだけが、神が人間と共に存在し、生きている事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きに立会い、神の直接的な言葉を聞きたいという人間の欲求を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人間に示された時代を終わらせ、また、漠然とした神への人間の信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な快い時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけではなく、もっと重要なことに、現実的で正常で、義であり聖なる神、経営（救いの）計画を明らかにし奥義と人類の運命を示す神、人間を創り、救いの働きを完了し、数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにするのだ。神は漠然の時代を完全に終わらせ、全人類が神の顔を求めても見つけられなかった時代を終わらせる。神は、すべての人間がサタンに仕えた時代を終わらせ、すべての人間をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな神の霊ではなく、受肉した神の働きの結果なのだ。神が受肉して働くと、神に従う者たちは、もはや漠然とした不可解なものを手探りで求める事をせず、漠然の神の心を推測することをやめる。神が肉における働きを広めると、神に従う人々は、神が受肉して行った働きをすべての宗教、すべての宗派に伝え、その言葉全部をすべての人間の耳に伝えるだろう。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実で、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、事実であって、噂ではない。こうした事実は神がその働きを広める証拠であり、また、その働きを広めるために用いる道具である。事実がなければ、神の福音はすべての国々、あらゆる場所に伝わらない。事実なしで人間の想像だけであれば、神はけっして全宇宙を征服する働きを行うことはできない。霊は人間には理解のできないもので、人間には不可視で、霊の働きは神の働きのそれ以上の証拠も事実も人間に残せない。人間はけっして神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じているだろう。人間はけっして神の顔を見ないし、また、直接神が語る言葉を聞くこともない。人間の想像するものは、結局のところ、むなしく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質は、神自身の働きは、人間がまねる事ができない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が自ら人間の間で働いて、はじめて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法により人間は神を見て、神の真の顔を知る。そして、これは受肉しない神では不可能なことだ。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

4. 墮落した人類は受肉した神の救いがさらに必要である

関連する神の言葉

神が人を救うとき、霊の手段を用いたり霊として直接行なわない。というのは、神の霊は人が触れることも見ることもできず、人が近づくこともできないからである。もし神が霊の立場で直接人を救おうとするなら、人は神の救いを受け入れることはできないであろう。そして、もし神が造られた人の外形をまとうなら、人はこの救いを受け入れることはできないであろう。というのは、ちょうど誰もヤーウェの雲の近くに行くことができなかったように、人は決して神に接近することができないからである。被造物である人となることによってのみ、すなわち、言葉を神がまとう肉体に入れることによってのみ、神は従ってくるすべての人たちに直接言葉を働かせることができる。その時初めて、人は自分自身で神の言葉を見聞きし、さらに言葉を自分のものとし、これによって、完全に救われることができる。もし神が肉とならなければ、肉なる人はそのような大きな救いを受けることもできないし、誰一人救われることもないであろう。もし神の霊が人の間で直接働いたなら、人は打ち倒されてしまうか、神と係わる方法がないまま、サタンにすっかり連れ去られ囚われるであろう。最初の受肉は人を罪から贖う、つまりイエスの肉体を通して人を罪から贖うためであった。つまり、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質は依然として人の中に留まった。二番目の受肉はもはや罪のためのいけにえとしての役割ではなく、罪から贖われた人たちを完全に救うことであった。それにより、赦されたものが罪から解放され、完全に清められ、性質が変えられ、それによりサタンの暗闇の影響を打ち破り、神の玉座の前に戻ってくるためである。このようにしてのみ、人は完全に清められる。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

（一篇の御言葉）

墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である

神が受肉したのは、その働きの対象がサタンの霊や肉体を持たない何かではなく、人間、つまり肉体をもち、サタンに墮落させられた存在だからである。人間の肉体が墮落しているからこそ、神は肉体をもつ人間を働きの対象とした。さらに、人間は墮落の対象であるため、神は救いの働きの全段階で、人間をその働きの唯一の対象としている。人間は死すべき存在で、生身の体をもっているが、人間を救える唯一の存在は神なので

ある。そこで、その働きでよりよい成果が得られるよう、神は働きを行うために人間と同じ属性をもつ肉体をもたなければならない。神がその働きを行うために受肉しなければならないのは、人間が肉体をもっていて、罪を克服することも、肉体を捨て去ることもできないためだ。受肉した神の本質と存在は人間の本質や存在とは全く異なるものなのだが、神の外見は人間と変わらず、通常の間と同じように見える。神は普通の人間のように生活し、神を見る者は、普通の人間との違いを見いだせない。この普通の外見と普通の人間性とは、普通の人間として神がその神性の働きをするには十分である。神の受肉は普通の人間として働くことを可能にし、人々の間での働きを容易にし、さらに、その普通の人間性は人々の間で救いの働きを進めることの役に立つ。神の普通の人間性は人間の中に多くの混乱を招いたが、そうした混乱は神の働きの成果に影響を与えていない。つまり、神の普通の肉体の働きは人間に素晴らしく有益なのである。たいていの人は神が普通の人間であることを受け入れないが、それでも神の働きは効果的であることができ、そうした効果は神が普通の人間であることで達成される。この点に疑問の余地はない。神の肉体における働きから、人間は、神の普通の人間性について人間の中に存在する観念から受けるよりも十倍、数十倍のものを得る。そして、そうした観念はいずれ、すべて神の働きに飲み込まれることだろう。また、神の働きが達成した成果、つまり、人間がもつ神についての認識は、人間が神についてもっている観念をはるかに超える。神の肉体における働きは想像もできないし、測りようもない。神の体はどの人間の肉体とも異なっているからだ。外見は同じでも、本質は異なっている。神の肉体は、神について、人間の中に多くの観念を生み出す。しかし、神の肉体はまた、人間が多くの認識を得ることを可能にする。そして、似たような外見をもつどの人間をも征服できる。神は単なる人間ではなく、人間の外見をもつ神であり、誰も神を完全に理解することはできないからである。目に見えず、触れることもできない神を誰もが愛し、歓迎する。もし神が人間の目には見えない、ただの霊であるならば、人間が神を信じることは容易である。人間は自分の想像力を自由に働かせることができる。神の姿として、どんな姿でも好きなものを選び、それで喜んで満足していられる。このように、人間は自分の神が最も好むこと、この神が人に望むとおりのことなら何でも、何のともがめもなく行うことができる。さらに、人間は、自分よりも神に忠実で信心深い者は誰もいない、他の人はみな異邦の犬で、神に背いていると信じている。これが、神について漠然と教義に基づいた信仰をもつ人々が求めているものであると言える。彼らの求めているのは、どれも同じようなもので、ほとんど違いがない。これは単に、人々の想像している神の姿が異なっているというだけで、その本質は、実際のところ、同じなのだ。

人間は自分の信仰がいかげんなものであっても氣にとめない。そして、好きなように神を信じている。これは誰も妨げることのできない「人間の権利と自由」の一つなのだ。なぜなら人間は他の誰のものでもない、自分の独自の神を信じているからである。これは私有財産であって、ほとんど誰でも、こうした私有財産をもっている。人間はこれを自分の貴い宝だとみなしているが、神にとっては、これ以上卑しく無価値なものはない。この人間の私有財産以上にはっきりと神に敵対するものはないからである。なぜなら、神が受肉してその働きを行うため、神は触れることのできる形を持ち、人が見、触れることのできる肉体になるからである。神は形のない霊ではなく、人間がさわり、見ることのできる肉体である。しかしながら、人々の信じる神々のほとんどは、生身の体をもたず、形がなく、不定形である。このように、受肉した神は、神を信じる者ほとんどの敵となり、同様に、受肉した神という事実を受け入れることのできない人々も、神の敵となった。人間は考え方や反抗心からではなく、この私有財産のために観念にとらわれているのだ。この私有財産のせいで、たいていの人は死に、この漠然とした、触れることができず、目にも見えない、実際に存在しない神のために、人間のいのちは損なわれている。人間のいのちが失われるのは、受肉した神のためではなく、まして、天の神のせいでもなく、人間が思い描いている神のせいなのである。神が受肉した唯一の理由は、墮落した人間が必要としているからである。人間が必要としているのであって、神が必要としているのではない。神のすべての犠牲と苦しみは人間のためであって、神自身のためではない。神には賛否も報奨もない。神はもともと自分のものであるもの以外、将来何らかの収穫を得るわけではない。神が人間のためにすること、犠牲とすることはすべて、何か大きな報酬を得るためではなく、純粹に人間のためである。受肉した神の働きには想像を超える困難が数多く伴うのだが、それが最終的に達成するものは、霊による直接の働きの成果をはるかに超える。肉の体の働きは多くの困難を伴う。肉体は霊のような偉大な身分をもたないし、霊のような超自然的な業は行えない。まして、霊と同じ権威をももたない。しかし、この平凡な肉の行う働きの本質は、霊が直接行う働きの本質をはるかに上回る。この神の肉体は、すべての人間の必要に応えるものなのだ。救われるべき者たちにとって、霊の使用価値は、肉にはるかに劣る。霊の働きは、全宇宙、すべての山々、川、湖、大海に及ぶ。しかし、肉の働きで神は、触れるすべての人と効果的に交流できる。そのうえ、触れることのできる形をもつ神の体は、人間には理解しやすく、信賴しやすく、神についての人間の認識を深めることができ、神の実際の業の深い印象を植え付けられる。霊の働きは神秘に包まれていて、死すべき人間には理解し難く、見ることはそれ以上に難しい。だから、無意味な想像に頼るしかない

。しかしながら、肉の働きは正常で、現実に基づいており、豊かな知恵を含み、人間の肉眼で見ることでできる事実である。人間はその身で神の働きの知恵を経験できるから、豊かな想像力を働かせる必要もない。これが受肉した神の働きの正確さ、本物の価値である。霊には、人間の目に見えず、想像しにくいことしかできない。たとえば、霊による啓示、霊による感動、それに霊の導きなど。しかし、知性のある人間には、こうしたものは何ら明瞭な意味をもたない。こうしたものは感動あるいは漠然とした意味しか提供せず、言葉による指示を与えられない。しかしながら、受肉した神の働きは、大いに異なる。言葉を用いて正確な導きができるし、明確な意図、そして、目指すべきはっきりとした目標がある。だから、人間は手探りして歩きまわる必要がないし、想像力を働かせる必要も、まして、推測する必要もない。これが肉における働きの明瞭さであって、霊の働きとの大きな違いである。霊の働きは限られた範囲においてのみ適しており、肉の働きと置き換えることができない。肉の働きは、霊の働きよりはるかに正確で、必要な目標とずっと現実的で価値ある認識とを人間に与える。墮落した人間にとって最も価値ある働きは、正確な言葉と目指すべき明確な目標を与え、そして見て触ることのできるものである。実際の働きと時宜にかなった導きだけが人間の嗜好に合う。そして、現実の働きだけが人間をその墮落した邪悪な性質から救える。これを成し遂げられるのは受肉した神だけである。受肉した神だけが、人間をかつて墮落した邪悪な性質から救えるのだ。霊は神に備わった本質であるが、こうした働きは受肉した神にしかできない。もし霊だけで働いたなら、神の働きは効果的なものではないだろう——これは明確な事実である。大方の人は、肉のために神の敵になっているが、神がその働きを完了するとき、神に敵対する者たちは敵であることをやめるだけではなく、それどころか神の証人になるだろう。そうした人たちは神に征服された証人、神の心にかない、神と分かちがたい証人になる。神はその肉体における働きの重要性を人間に知らせる。そして人間は、人間存在の意味にとってのこの肉体がどれほど重要であるかを知り、人間のいのちの成長のために神の肉体がどれほど価値あるものであるを知り、そのうえ、この肉体が、離れることが到底できない、生きるいのちの泉となることを知るだろう。受肉した神は、本来の神の身分と地位には遠く及ばないし、人間からすると神の本来の地位と相容れないものと思われるだろうが、この肉体、すなわち神の真の姿や身分をもたないこの存在は、神の霊には直接できない働きができるのである。それが神の受肉の真の意味と価値であり、そしてこの意味と価値を人間は理解し、受け入れることができない。すべての人間は神の霊を仰ぎ、受肉した神を見下すが、彼らがどう判断し、どう考えるかに関わりなく、この肉体の真の意味と価値とは霊にはるかに優る。もちろん、これは墮

落した人間との関連においてのみ言えることだ。真理を求め、神の現れを待ち望む者すべてにとって、霊の働きは感動と啓示、理解不能で想像もできない不思議な感覚、偉大で超越的で崇めるべきものであるが誰にも達成できず手に入れることのできないものという感覚だけを与える。人間と神の霊とは、遠くから互いを見ることしかできない。まるで両者の間に遠い隔たりがあるように。そして、けっして似ることがない。まるで、目に見えない境界で隔てられているかのように。実は、これは霊が人間に与えた幻影である。なぜならば、霊と人間とは種類を異にするものであり、霊と人間はけっして同じ世界で共存できず、霊には人間的な要素は何もないからである。だから、人間には霊は必要ではない。霊には、人間に最も必要な働きを直接することができないからである。肉の働きは求めるべき真の目標、明確な言葉、そして、神が現実的かつ正常で謙虚で普通であるという感覚を人間に与える。人間は神を恐れはするだろうが、たいていの人には神と心安く付き合える。人間は神の顔を見、神の声を聞くことができるし、遠くから見る必要はない。この肉体は人間にとって近づきやすいように思われる。遠くの不可思議な存在ではなく、目に見え、触れられるのだ。この肉体は人間と同じ世界にあるのだから。

肉体において生きるすべての者にとって、性質を変えるには目指すべき目標が必要だ。そして、神を知るには、神の本当の業を見、神の本当の顔を見る必要がある。この二つは神の受肉した体でのみ可能なことだ。そして、いずれも普通の現実の体でのみ成し遂げられる。だから受肉が必要なのであり、すべての墮落した人間はこれを必要としているだ。人々は神を知る必要があるので、漠然とした超自然的な神の表象を心から消し去らなければならない。そして、墮落した性質を捨て去る必要があるのだから、まずその墮落した性質を知らなければならない。人間の力だけで漠然とした神の表象を心から消し去ろうとしても、望ましい成果は得られないだろう。人々の心にある漠然とした神の表象は、言葉だけではさらけ出したり、消し去ったり、完全に除いたりすることはできない。そうしてみても、人間の中に深く根付いているものを消し去るのは不可能だろう。実践の神と神の真の姿だけが、そうした漠然とした超自然的なものと入れ替わり、徐々に人々に教え、そうした方法によってのみ、目指すべき結果が得られるのだ。人間は、過去に求めていた神が漠然とした超自然なものであったことに気づく。これを成し遂げるのは、霊による直接の導きではなく、まして、特定の個人の教えでもなく、受肉した神なのである。受肉した神が本格的にその働きを行うとき、人間の固定観念が露わになる。なぜなら、受肉した神の正常さと現実性は、人間の想像の中にある漠然とした

超自然な神とは正反対なものだからだ。人間の元来からの固定観念は、受肉した神との対照によってのみ明らかになる。受肉した神と比較することなしには、人間の固定観念は明らかにならない。言い換えれば、現にそこにあるものと比較しなければ、漠然とした物事は明らかにならない。言葉によってこの働きのできる者は誰もいない。また、言葉によってこの働きを明確に表現できる者は誰もいない。ただ神自身がその働きができるのであって、ほかの誰も神に代わってその働きをすることはできない。人間の言語がどんなに豊かであろうと、神の現実性と正常性を言い表すことはできない。神が人間のもとで自ら働き、自分の姿と実在とをすっかり示してはじめて、人間はもっと实际的に神を知ることができ、もっとはっきり神を見られるのだ。肉体をもつ人間には、この成果を成し遂げられない。もちろん、神の霊もまた、これを成し遂げることはできない。神は墮落した人間をサタンの影響から救うことができるが、この働きは、神の霊には直接できないことだ。そうではなく、神の霊のまとう人間の体だけが、受肉した神の肉体だけができることだ。この生身の体は人間であると同時に神であり、正常な人間性を備えている一人の人間であるが、また、完全な神性を備えた神でもあるのだ。だから、この肉体は神の霊でなく、霊とは大きく異なっているのだが、それでも、人間を救う受肉した神自身であって、霊であると同時に肉体でもある。どのような名で呼ばれようと、つまるところ、それは人間を救う神そのものだ。神の霊は肉体から切り離すことはできず、肉の働きはまた、神の霊の働きでもあるからだ。これはただ、この働きが霊として行われるのではなく、人間として行われるということである。霊が直接行う必要のある働きは、受肉を必要としない。また、生身の体を必要とする働きは霊には直接できないもので、受肉した神だけが可能なのだ。これがこの働きに必要なものであり、また、墮落した人間に必要なものなのだ。神の働きの三つの段階では、一つの段階だけが霊によって直接行われた。そして残りの二つの段階は受肉した神が実行し、霊が直接働くことはない。霊が行った律法の時代の働きは、墮落した人間の性質を変えることを伴わず、神について人間が知ることと何の関わりもないものだった。しかしながら、恵みの時代と神の国の時代の受肉した神の働きは、人間の墮落した性質と神についての認識に関わるもので、救いの働きにおける重要かつ不可欠な部分である。だから、墮落した人間は受肉した神による救いを、受肉した神の直接的な働きをさらに必要とする。人間には、受肉した神が導き、支え、水をやり、養い、裁き、罰する必要がある。そして、受肉した神からのさらなる恵みと贖いが必要だ。受肉した神だけが人間の親友となり、牧者となり、現実存在する助けとなることができる。これらすべてが現在と過去において受肉が必要とされる所以である。

人間はサタンのせいで墮落したが、神の被造物のうちで最高のものだ。そこで、人間には神による救いが必要だ。神の救いの対象はサタンではなく人間であり、救われるべきものは人間の肉、人間の魂であり、悪魔ではない。サタンは神が滅ぼす対象であり、人間は神に救われる者である。人間の肉はサタンによって墮落させられた。だから、まず人間の肉が救われなければならない。人間の肉は極めて深く墮落しており、神に敵対するものになっている。そして、公然と神に敵対し、神の存在を否定しさえする。この墮落した肉は、まったく手に負えない。墮落した肉の性質以上に扱いにくく、変えにくいものはない。サタンは人間の体に入って混乱させ、人間の体を使って神の働きを妨害し、神の計画を妨げる。それゆえ人間はサタンとなり、神の敵になった。人間が救われるには、まず征服されなければならない。このため、神は挑戦に立ち上がり受肉した。働きを行い、サタンと戦うためである。神の目的は墮落した人類の救いと、自分に抵抗するサタンを打ち破り、滅ぼすことである。神は人間を征服する働きによってサタンを破り、同時に墮落した人間を救う。そうして、神は二つの問題を一度で解決する。神は肉において働き、肉において語り、すべての働きを肉において行う。人間とよりよく交わり、よりよく征服するためである。この神の最後の受肉において、世の終わりの神の働きは肉において完了する。神は受肉したままですべての人間を種類によって分け、すべての経営(救い)の働きを終え、また、肉における働きをもみな終える。地上での働きがすべて終わると、神は完全な勝利者となる。受肉して働いた神は完全に人間を征服し、人間をすべて自分のものとしている。これは、神による救いの計画がすべて終わることではないか。神が肉における働きを終えるとき、サタンを完全に打ち破り、勝利するので、サタンには、もはや人間を墮落させる機会がない。神が最初に受肉したときの働きは、人間の罪の贖いと赦しであった。次の働きでは、人間を征服し、完全に自分のものとし、サタンがもはや働けないようになって完全に敗れ、神が完全な勝利者となる。これが肉の働きであり、神自身が行う働きのものだ。神の三段階の働きの最初のは、霊が直接行ったもので、肉によるものではなかった。しかしながら、神の三段階の働きの最後のは受肉した神が行うもので、霊が直接行うものではない。中間段階の贖いの働きもまた、神が受肉して行った。全経営(救い)の計画を通して、最も重要な働きは人間をサタンの影響から救う働きである。重要な働きは墮落した人間を完全に征服することで、それによって、征服された人間の心に本来あった神への崇敬の念を回復し、正常な生き方ができるようにする、つまり、神の被造物として正常な生き方ができるようにするのだ。この働きは最も重要なもので、経営(救い)の働きの核心である。救いの三段階の働きのうち、最初の段階の律法の時代の働きは、救いの働きの核心か

ら遠いものだった。ただ救いの働きをわずかに現したにすぎないし、人間をサタンの領域から救う働きの始まりではなかった。最初の段階の働きは、霊が直接行ったが、それは、律法の下で人間は律法を守ることだけしか知らず、それ以上の真理を知らなかったからであり、律法の時代の働きは、人間の性質の変化はほとんど伴っておらず、どのようにして人間をサタンの領域から救うかという働きとは、さらに関わりがなかったからだ。そのため、神の霊は極めて単純な、人間の墮落した性質とは関わらない段階の働きを終えた。この段階の働きは、経営（救い）の核心にほとんど関係がなく、人間の救いという正式の働きとはあまり関係がなかった。だから、神が自ら受肉して働く必要がなかった。霊の行った働きは隠された、測り難いものであり、人間には恐ろしくて近寄りがたいものであった。霊は直接救いの働きをするには適していないし、直接人間にいのちを与えるにも適していない。人間に最も適しているのは、霊の働きを人間に近い形に変えることで、それはつまり、最も人間に適しているのは、神が普通の正常な人間になって働きをするということである。これには、神が受肉して霊の代わりに働くことが必要であり、人間のために神が働くのに、これ以上ふさわしい方法はない。こうした三段階の働きの中で、二つの段階は、肉体によって行われたが、その二つの段階は経営（救いの）計画の中の肝要な部分である。二回の受肉はそれぞれ補い合うもので、補完的である。神が最初に受肉した段階は、第二の段階の基礎を敷いたのだが、これは、神の二回の受肉が一つの全体をなし、互いに相容れないものではないと言える。この二つの段階は全経営（救い）の計画の中でまことに重要なものであるため、神が受肉してこの二つの段階を実行する。こう言ってもいいだろう——神の二回の受肉の働きがなければ、経営（救い）の計画全体は停止し、人類の救いの働きは空虚な言葉でしかなかっただろう。この働きが重要であるかどうかは、人間の必要、人間の墮落の現実の状態、サタンの甚だしい不服従、それが働きを妨げている程度による。誰が任務にふさわしいかは、その働きの性質と重要性とによって決まる。この働きの重要性という点では、どんな方法を用いるか、すなわち神の霊が直接働きを行うか、それとも神が受肉して働くのか、あるいは人間を通じて行うかという意味においては、選択肢から最初に除かれるべきは、人間を通じて行う方法である。働きの性質という点では、霊の働きの性質対肉の働きという観点からは、最終的に、肉によって行う働きが、霊が直接行うより人間にとって有益で、効果的であるということになった。霊と肉とどちらの働きをするかの決定の際の、これが神の判断であった。各段階の働きには意味と根拠がある。それらは根拠のない想像ではなく、また、恣意的に行われたことでもない。そこにはある種の知恵が働いている。それが神の働きの背後にある真実である。とりわけ、神自らが受肉して人間の

間で働くような偉大な働きにおいては、さらなる神の計画がある。そこで、神の知恵と神の存在すべてがあらゆる行為、考え、働きの構想に反映されている。これは神のより確固として体系的なありかたである。こうした緻密な考えや構想は人間には想像しにくく、信じ難いし、そのうえ、知ることも困難だ。人間の行う働きは一般的な原則によるもので、それは人間には極めて満足のいくものだ。しかし、神の働きと比べると、あまりに大きな隔たりがある。神の業は偉大で、神の働きは規模が壮大であるが、その陰には人間には想像もできないような多くの綿密な計画や工夫がある。神の働きの各段階までもが原則に則っているだけではなく、人間の言語では表現できないようなことが数多く含まれている。そして、そうしたものは、人間には見えないものなのだ。霊の働きであろうと、受肉した神の働きであろうと、いずれも神の働きの計画を含んでいる。神は無意味に働きをせず、取るに足りない働きもしない。霊が直接働く時、神の目的を伴っている。神が働きのために人間になるとき（つまり外形を変える時）は、それ以上に目的があつてのことである。そうでなければ、どうして進んで身分を変えるだろう。そうでなくて、どうして進んで卑しくみなされ迫害される人になるのか。

受肉した神の働きは最も意義深い。それは働きについての語りであり、最終的に働きを終えるのは受肉した神であつて、霊ではない。神はいつか地上に来て、人間に姿を見せ、誰一人も逃さず人を一人一人試みつつ、全人類を自ら裁くと信じている人々がいる。このように考える者は、この受肉の働きの段階を知らない。神は人間を一人一人裁きはしないし、一人ずつ試みもしない。それは裁きの働きではない。堕落はすべての人間に共通しているのではないか。人間の本質は、みな同じなのではないか。裁かれるのは人間の堕落した本質、サタンのせいで堕落した人間の本質、そして人間の罪全部である。神は人間の些細で無意味な過ちを裁かない。裁きの働きは代表によるもので、特に誰かのために行うものではない。そうではなくて、この働きでは、一群の人々が人類を代表して裁きを受けるのである。受肉した神が自ら一群の人々に働きかけ、全人類に施す働きを代理的に行うと、その後、それが徐々に広まる。裁きの働きも、そのように行われる。神は特定の人や特定の人を裁くのではなく、全人類の不義を裁く——例えば、神への敵対、神に対する不遜、神の働きの妨害等。裁かれるのは人間の神への敵対の本質であつて、この働きは終わりの日の征服の働きである。人間が目撃する受肉した神の働きと言葉は、終わりの日に大きな白い玉座の前での裁きの働きであり、これは過去に人間が考えたものである。今、受肉した神が行っている働きは、まさに、大きな白い玉座の前での裁きである。今日の受肉した神は、終わりの日にすべての人間を裁く神

である。この肉体と神の働き、言葉、そしてすべての性質が神の総体である。神の肉の働きの規模は限られているし、直接全宇宙に関わるものではないが、裁きの働きの本質は、全人類への直接の裁きである。これは、中国に対してのみ行われるものではなく、少数の人々にだけ下るものでもない。受肉した神の働きの間、この働きの範囲は全宇宙に及びはしないが、全宇宙への働きを代表し、受肉した体の作業範囲の働きを終えた後、神は直ちにこの働きを全宇宙に広める。イエスの福音がそのよみがえりと昇天の後で全宇宙に広まったように。それが霊の働きであろうと、肉の働きであろうと、限られた範囲だけにおいて実行される働きであるが、全宇宙への働きを代表するものなのである。終わりの日、神は受肉した体で働くために出現する。そして、受肉した神は、大きな白い玉座の前で人間を裁く神なのである。霊でも肉体でも、裁きの働きを行うのは、終わりの日に人間を裁く神である。これは、神の働きによって規定されたものであって、神の外見やその他の要素によって決まるものではない。人間はこうしたことばについての観念をもっているが、受肉した神がすべての人間を裁き、征服することは誰も否定できない。人間がそれをどう評価するかに関わらず、事実上、結局のところ、事実である。誰ひとり、「働きは神によるが、その肉体は神ではない」とは言えない。これは戯言だ。この働きは、受肉した神以外にはできないものだからだ。この業はすでに完了しているのだから、この働きの後で神が再び人間を裁く働きをすることはあり得ない。二度目の受肉した神はその経営（救いの）計画全体のすべての働きをすでに完成したのでから、神の働きの第四段階というものはない。裁かれるのは人間、肉の体をもち墮落した人間であり、直接裁かれるのはサタンの霊ではなく、裁きの働きは霊的世界ではなく、人間の間で行われる。人間の肉体の墮落を裁くのに、受肉した神以上に相応しいものはおらず、受肉した神以上に資格のあるものもない。もし神の霊が直接裁いたならば、それはすべてを含むものではないであろう。そのうえ、そうした働きは人間には受け入れがたいものだったろう。なぜなら、霊は人間と直接会うことができず、そのため効果は即座に見られるものでもない。まして、人間が神の侵しがたい性質をより明確に目にするにはできないであろう。もし受肉した神が人間の墮落を裁くなら、はじめてサタンを完全に打ち負かせる。受肉して普通の人間性をもった神は、直接人間の不義を裁くことができる。これが神本来の聖さ、すばらしさである。神だけが人間を裁く資格があり、その地位にいる。神には真理と義があるから、人間を裁くことができる。真理と義のない者には他人を裁くことができない。この働きが神の霊によって行われたなら、それはサタンに勝利したことにはならないだろう。霊は本来、死すべき者たちよりも高い地位にあり、神の霊は本質的に聖く、肉に優る。もしこの働きを霊が直接行ったなら

ば、神は人間の不服従のすべてを裁くことができず、人間の不義をすべて露わにすることもできないだろう。裁きの働きもまた人間の神についての観念を通して行われるからである。人間は霊について何の観念も抱いたことがない。そのため霊には、人間の不義をよりよく露わにすることができないし、まして、そうした不義を完全に明らかにすることもできない。受肉した神は、神を知らない者すべての敵である。人間の観念と神への敵対を裁くことで、神は人間のあらゆる不服従を明らかにする。受肉した神の働きの成果は、霊の働きよりも明らかである。そのため、すべての人間の裁きは霊が直接するのではなく、受肉した神の働きなのである。人間の体をもつ神は、人間が目で見、触れることができる。また、受肉した神は完全に人間を征服できる。この受肉した神と人間との関係において、人間は敵対から従順、迫害から受容、観念から認識、そして、拒否から愛へと変わっていく。これが受肉した神の働きの成果である。人間は神の裁きを受け入れることによってのみ救われ、神の口から出ることばによって徐々に神を知るようになり、神に敵対している間に神に征服され、神の刑罰を受けている間にいのちの糧を受ける。この働きはみな受肉した神の働きであって、霊としての神の働きではない。受肉した神の働きは最も偉大で、最も深い働きであり、神の働きの三段階のうちの最も大事な部分は、受肉による働きの二つの段階である。人間の甚だしい堕落は、受肉した神にとって大きな障害である。とりわけ、世の終わりの人々に対する働きは極めて困難で、敵意に満ちた環境で、どの種類の人々の素質もまことに乏しい。しかし、この働きの終わりには、とどこおりなく望ましい結果を得る。これが肉の働きの成果であり、この成果は霊の働きの成果よりも説得力がある。神の働きの三つの段階は、肉において終結するだろう。そしてそれは受肉した神によって完結しなければならないのだ。最も重要かつ肝要な働きは肉において為され、人間の救いは神が受肉して自ら行わなければならない。人間はみな、受肉した神が人間と関わりがないと感じるだろうが、実際は、この肉体が、全人類の運命と存在に関わっているのだ。

神の働きのどの段階も、人間のために行われるもので、それはすべての人間のためなのだ。それは受肉した神の働きであるが、それでもすべての人間を対象とする。神はすべての人間の神であり、すべての被造物とそうでないものの神である。受肉した神の働きは限られた範囲のものであるし、この働きの目的もまた限られているが、神が働きのために受肉するたびに、神は、その働きの対象として究極的な代表を選ぶ。神は単純で平凡な集団を働きの対象とはせず、肉の働きの代表となるだけの能力ある集団を選ぶ。この集団が選ばれるのは、神が受肉して行う働きの範囲が限られているためで、受肉し

た神のために特に用意され、受肉した神の働きのために特に選ばれるのである。神が働きの対象を選ぶのは、根拠のないことなく、原則による。働きの対象は、受肉した神の働きに有益なものでなければならず、また、すべての人間を代表する者でなければならない。たとえば、ユダヤ人はイエス自らによる贖罪を受け容れることで全人類を代表することができた。また、中国人は受肉した神自身による征服を受け容れることで全人類を代表できる。ユダヤ人が全人類を代表したことには根拠がある。また中国人が、神自らによる征服を受け容れることで全人類を代表することにも根拠がある。ユダヤ人の間で行われた贖いの働き以上に贖いの意義を示すものはない。また、中国人の間での征服以上に征服の働きの完全性と成功を明らかにするものもない。受肉した神の働きと言葉は、少数の集団にだけ向けられているもののように見えるが、実際は、この小集団のもとでの神の働きは全宇宙の働きであって、その言葉は全人類に向けられたものなのだ。受肉しての神の働きが終わった後、神に従う人々は、自分たちの間で神が行った働きを広めることとなる。受肉した神の働きで最もよい点は、神に従う人々に正確な言葉と勧告、人類への正確な心を残せるため、受肉した神の働きと全人類に向けられた心とを、後に信者たちがこの道を受け入れる人々により正確に、具体的に伝えられる点にある。受肉した神の人間の間での働きだけが、神が人間と共に存在し、生きている事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きに立会い、神の直接的な言葉を聞きたいという人間の欲求を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人間に示された時代を終わらせ、また、漠然とした神への人間の信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な快い時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけではなく、もっと重要なことに、現実的で正常で、義であり聖なる神、経営（救いの）計画を明らかにし奥義と人類の運命を示す神、人間を創り、救いの働きを完了し、数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにするのだ。神は漠然の時代を完全に終わらせ、全人類が神の顔を求めも見つけられなかった時代を終わらせる。神は、すべての人間がサタンに仕えた時代を終わらせ、すべての人間をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな神の霊ではなく、受肉した神の働きの結果なのだ。神が受肉して働くと、神に従う者たちは、もはや漠然とした不可解なものを手探りで求める事をせず、漠然の神の心を推測することをやめる。神が肉における働きを広めると、神に従う人々は、神が受肉して行った働きをすべての宗教、すべての宗派に伝え、その言葉全部をすべての人間の耳に伝えるだろう。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実で、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、事実であって、噂ではない。こうした事実は神がその働きを広める証拠

であり、また、その働きを広めるために用いる道具である。事実がなければ、神の福音はすべての国々、あらゆる場所に伝わらない。事実なしで人間の想像だけであれば、神はけっして全宇宙を征服する働きを行うことはできない。霊は人間には触れることのできないもので、人間には不可視で、霊の働きは神の働きのそれ以上の証拠も事実も人間に残せない。人間はけっして神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じているだろう。人間はけっして神の顔を見ないし、また、直接神が語る言葉を聞くこともない。人間の想像するものは、結局のところ、むなしく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質、神自身の働きは、人間がまねる事ができない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が自ら人間の間で働いて、はじめて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法により人間は神を見て、神の真の顔を知る。そして、これは受肉しない神では不可能なことだ。神はこの段階まで働きを実行しているので、その働きはすでに最高の結果を生み出しており、完全な成功である。神が受肉して直接行った働きは、すでに彼の経営（救い）全体の働きの90%を完了している。この肉体は神の働きすべての良き始まりと神の働き全部のまとめを提供してきたのであり、神の働きすべてを広め、この働き全体に最終的かつ周到な付け足しをした。だから、もう神の働きには、また神が受肉して行う第四の段階はなく、三度目に受肉した神が驚くべき働きを行うこともない。

肉となった神の働きの各段階は、その時代全体の働きを代表するもので、人間の働きのように特定の期間を代表するものではない。だから、神の最後の受肉の働きの終わりは、神の働きが完了したということではない。受肉しての神の働きは、時代全体を代表するもので、神が人間として働いた期間だけを代表するものではないからだ。これは、神は受肉している期間に、その時代のすべての働きを終えるというだけで、そのあとは、その働きはあらゆるところに広まる。受肉した神はその任務を終えた後、将来の働きを神に従う人々に託す。このようにして、その時代全体の神の働きが途絶えることなく続けられる。受肉した時代全体の働きは、それが全宇宙に広まってはじめて完了したとみなされる。受肉した神の働きは新たな時代を開き、神の働きを続ける人々は、神に用いられる者たちだ。人間による働きはみな、受肉した神の職分の範囲内で、その範囲を出るものではない。もし受肉した神が働きを行うために来なければ、人間は古い時代を終わらせることができず、新たな時代を開くこともできない。人間による働きは、単に人間に可能な範囲の任務であり、神の働きの代わりにはならない。受肉した神だけが、すべき働きを完了するべく来ることができるのであり、神においては誰一人代わって

その働きをすることができない。もちろん、わたしの言っているのは、受肉しての働きのことである。この受肉した神は、人間の観念に合致しない段階の働きを行い、その後、神はさらに別の、人間の観念に合致しない働きをする。働きの目的は人間を征服することである。ある意味で、神の受肉は人間の観念に合致しない。さらに、神は人間の観念に合致しない働きをするので、人間は神についてますます批判的な意見をもつようになる。神はただ、神についてさまざまな観念を持っている人間の間で、人間を征服する仕事をする。人間がどのように神を扱おうと、神はその務めを果たし、人間はみな、神の支配下に入っていることだろう。この働きの事実、中国人の間に反映されるだけではなく、すべての人間がいかに征服されるかをも表している。こうした人々になされた成果は、すべての人間になされる働きの成果を予め告げるものであり、神が将来行う働きの成果は、こうした人々に対する成果を上回るだろう。受肉した神の働きは鳴り物入りで宣伝されるようなものではないし、神秘の霧に包まれているものでもない。それは具体的な事実であって、一足す一が二である働きなのである。それはすべての人から隠されているものではなく、また、誰をも欺くものではない。人々が見るのは事実であり、現実的なものであって、人間が得るものは、本当の真理と認識である。働きが終わると、人間は神について新たな認識を得、真に神を求める者は、もはや神に関して何の観念ももたない。これは、神の働きの中国人に対する影響だけではなくて、人類全体を征服する神の働きの効果を表すものだ。人類全体を征服する働きにとって、この肉体、この肉体の働き、肉体のすべて以上役立つものはない。それらは今日の神の働きに有益で、将来の神の働きにも役立つ。この肉体はすべての人々を征服し、すべての人々を自分のものとする。人類全体が神を見、神に従い、神を知るためにこれより優れた働きはない。人間のする働きは単に限られた範囲のものであるが、神がその働きを行うときは、特定の人にだけ語りかけるのではなく、全人類、神の言葉を受け入れる者すべてに語りかけるのである。神の告げる終わりはすべての人間の終わりであって、特定の人だけの終わりではない。神は誰かを特別扱いしないし、誰かを不当に罰することもない。そして、神は人類全体のために働き、話しかける。だから、この受肉した神は、すでに全人類をその種類によって分け、すでにすべての人々を裁き、全人類に相応の終着点を定めている。神はその働きを中国でだけ行っているが、実際は、すでに全宇宙の働きを定めている。神は、言葉を発して計画を一步一步進める前に、自分の働きがすべての人間に広まるのを待つわけにはいかない。それでは遅すぎるのではないか。今、神は将来の働きを予め終えることが完全に可能だ。働いているのは受肉した神なのだから、無限の働きを限られた範囲で行い、その後で、人間がすべき務めを人間が果たすようする。こ

れが、神の働きの方針である。神は一時的に人間とともに生活できるだけで、時代全部の働きが完了するまで人間と共にいることはできない。それは、神が予め自分の働きを予言する神だからである。後に、神は言葉によってすべての人類をその種類にしたがって分け、人類は言葉にしたがって、神の順を追った働きに入る。誰一人免れない。誰もがその通りに行わなければいけない。だから、将来、時代は言葉によって導かれるのであって、霊によって導かれるのではない。

受肉した神の働きは、肉において行われなければいけない。もし霊が直接行ったとしても、それは何の成果も得られないだろう。たとえ霊が行ったとしても、その働きはこれといった意味をもたず、結局は説得力を欠くであろう。被造物はみな、創造主の働きが有意義なものであるかどうか、それは何を示すのか、それは何が目的なのか、神の働きは権威と知恵に満ちたものなのかどうか、また、それが最高の価値と意義のあるものなのかを知りたいと願う。神が行う働きはすべての人間の救いのためであり、サタンを打ち破るためであり、そして万物のもとで自身の証をするためである。だから、神の行う働きにはまことに重要な意味があるはずだ。人間の肉はサタンによって墮落し、最も深く盲い、まことに深く損なわれた。神自らが受肉して働く最も根本的な理由は、救いの対象が肉の体をもつ人間であり、サタンもまた人間の肉を用いて神の働きを妨げているためである。サタンとの戦いは、実は人間を征服する働きであり、同時に、人間はまた、神による救いの対象でもある。このように、受肉した神の働きは不可欠なのだ。サタンは人間の肉を墮落させ、人間はサタンの体現者となり、神に打ち負かされるべき存在となった。このように、サタンと戦って人類を救う働きは地上で行われ、神はサタンと戦うために人間にならなければいけない。この働きは極めて実際的なものだ。神が受肉して働いている時、神は実際はサタンと肉において戦っている。神が肉において働くとき、神は霊的領域の働きをしており、霊的領域での働きのすべてを地上で現実的なものにする。征服される者は神に逆らう人間であり、打ち負かされる者はサタンの体現者（もちろん、これもまた人間）、神に敵対する者であり、最終的に救われる者もまた人間である。このように、神が被造物の外形をもつ人間になることがますます必要なのは、神がサタンと真の戦いを行えるようにであり、それにより神に対して不服従で神と同じ姿をもつ人間を征服し、神と同じ姿をもちサタンによって損なわれた人間を救うためである。神の敵は人間、その征服の対象は人間、救いの対象も神の被造物である人間だ。そこで、神は人間とならなければいけない。そのほうが、ずっと働きをしやすくなるのだ。神はサタンに勝利し、人間を征服し、そのうえ、人間を救うことができる。この

肉は普通で現実のものであるが、神はありふれた肉体ではない。神は単に人間である肉体なのではなく、人間と神の両方ある肉体なのだ。これは神と人間との違いであり、これが神の身分のしるしなのだ。このような肉体にだけ、神の意図する働きができ、肉における神の務めを果たし、人間たちの間での働きを完了できる。そうでなければ、神の人間たちの間での働きは、いつも空虚で不完全なものとなる。神がサタンの霊と戦って勝利者となることができても、それでは墮落した人間の古い本性はけっして直せないし、神に不服従で敵対する者たちは、けっして真に神の支配に服従することもできない。つまり、神はけっして人類を征服することができず、けっして人類全体を得られないということだ。神の地上での働きが完了しなければ、神の経営（救い）はけっして終わらず、全人類は安息に入ることができない。もし神がすべての被造物と共に安息に入れないければ、このような経営（救い）の成果はなく、神の栄光はその結果消える。神の肉体には何の権威もないが、神の行う働きは成果を達成していることだろう。これが神の働きの明確な方向である。神の肉体に権威があるかどうかにかかわらず、神としての働きを遂行できるならば、それは神そのものだ。この肉体がどれほど普通で平凡なものであっても、神がすべき働きができるのは、この肉が単なる人間ではなく、神だからだ。この肉が人間にはできない働きができるのは、その内なる性質が人間のそれと異なっているため、それが人間を救えるのは、その身分が人間とは異なるからだ。この肉の体が人類にとって極めて重要なのは、それは人間である、かつそれ以上に神であるからだ。それは通常の間には不可能な働きが可能だからであり、神には地上で共に暮らす墮落した人間を救うことが可能なためである。神は人間と同じ外見をもつが、受肉した神はどんな重要人物よりも人間にとって重要である。それは神の霊には不可能な働きが可能だからであり、神自身について霊よりも優れた証しができ、神の霊よりも完全に人間を得ることができからだ。その結果、この肉は普通で平凡であっても、その人類への貢献と人類存在にとっての意義により、この肉体は極めて尊いものとなる。そしてこの肉の真の価値と意味は誰にとってもはかりしれないものがある。この肉は直接サタンを滅ぼすことはできないが、神はその働きによって、人間を征服し、サタンを打ち負かせる。サタンを完全に支配下に下せる。これは、神が受肉したから、サタンに勝利して人類を救うことができるのだ。神は直接サタンを滅ぼしはしないが、サタンによって墮落させられた人類を征服する働きをするため受肉する。このようにして、神は被造物のもとで自分を証しでき、墮落した人間をよりよく救える。受肉した神がサタンを打ち負かすことは、神の霊が直接サタンを滅ぼすよりも偉大な証しであり、より説得力がある。受肉した神は、人間が創造主を知る手助けをよりよく行うことができ、被造物のもとで

よりよく神自身を証しできる。

『言葉は肉において現れる』より

5. 二度の受肉が受肉の意義を完成させる

関連する神の言葉

最初の受肉は人を罪から贖う、つまりイエスの肉体を通して人を罪から贖うためであった。つまり、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質は依然として人の中に留まった。二番目の受肉はもはや罪のためのいけにえとしての役割ではなく、罪から贖われた人たちを完全に救うことであった。それにより、赦されたものが罪から解放され、完全に清められ、性質が変えられ、それによりサタンの暗闇の影響を打ち破り、神の玉座の前に戻ってくるためである。このようにしてのみ、人は完全に清められる。神は律法の時代が終わってから、恵みの時代に救いの働きを開始した。これは神が人間の不従順に対する裁きと刑罰の働きを終えて人類を全く清める終わりの日まで続く。その時が来てはじめて、神は救いの働きを終え、安息に入る。よって、三段階の働きの中で、神は二度のみ人の間で働きを実行するために肉となった。それは働きの三段階のうち一段階だけが、人を生活において導く働きであり、他の二段階は救いの働きだからである。神が肉となる場合のみ、神は人と共に生き、世の中の苦しみを経験し、普通の肉体で生きることができるのである。このようにしてのみ、神はその被造物である人に必要な実践的言葉を与えることができる。人が神から完全な救いを受けるのは、受肉した神ゆえであり、人が捧げる祈りへの回答として天から直接に受けるのではない。というのは、人は肉的であり、人は神の霊を見ることができず、ましてや神の霊に近づくことなどできないからである。人が接触することができるのは神の受肉した肉体でしかなく、人はこの手段を通してのみ、すべての言葉とすべての真理を理解し、完全なる救いを受けることができる。第二の受肉は人の罪を取り除き、人を清めるには十分である。よって、第二の受肉は肉体での神の働きのすべてに終止符を打ち、神の受肉の意義を完成する。その後は、神の肉体での働きは完全に終わりとなる。第二の受肉の後、神はその働きのために三度目に肉となることはない。神の経営（救い）全体が終わっているからである。終わりの日に、神の受肉は神の選ばれた民を全て自身のものとし、終わりの日の人たちはすべて、それぞれの種類に応じて区分されている。神はもはや救いの働きをすることも、どのような働きを行なうためにも肉に戻ることはない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

イエスがその働きを行っていたとき、イエスに関する人の認識は依然として漠然として不明瞭だった。人は昔からイエスをダビデの子と信じ、偉大な預言者で人の罪を贖う情け深い主であると宣言した。信仰によって、イエスの衣の端を触っただけで癒された人々もいれば、盲人たちが見えるようになり、死人さえ生き返った。しかし、人は墮落したサタンの性質が人に深く根づいているのが発見できず、それを捨て去る方法も知らなかった。人は肉による平安や幸福、一人の信仰による家族全体の祝福、病人の癒しなど多くの恵みを受けた。残りは人による良い行いや外見上の信心深さであった。そのようなものを基に生きることができるなら、その人はますます良い信者と思われたのである。そのような信者だけが死後、天国に入ることができるとされた。それは彼らが救われたことを意味する。しかし、彼らはその生涯において、いのちの道を全く理解していなかった。彼らはただ罪を犯しては告白し、それを常に繰り返すのみで、性質が変えられる道へ進んでいる訳ではなかった。これが恵みの時代の人間の状態であった。人は完全な救いを得たのであろうか。いや、得なかった。だから、その段階の働きが終わってからも、依然として裁きと刑罰の働きが残っている。この段階は人に従う道を与えるように、言葉を通して人を清くする。もし悪霊を追い出すことを続けるなら、この段階は有益でも意義深くもないだろう。というのは、人の罪深い本性が捨てられることもないだろうし、人は罪が赦されるというところで行き詰まるだろうからである。罪のためのいけにえを通して、人は罪を赦されてきた。というのは十字架の働きがすでに終わり、神はサタンに勝利したからである。しかし、人の墮落した性質は依然として人の中に留まっており、人は依然として罪を犯し、神を拒むことができ、よって神はまだ人類を得ていない。だからこの段階の働きで神は言葉を用いて人の墮落した性質を示し、人に正しい道に沿って実践させるのである。この段階は前の段階よりもっと意味があり、もっと有益である。というのは、今、人に直接いのちを提供し、人の性質を完全に新しくできるのは言葉だからである。それはもっと徹底的な働きの段階である。だから、終わりの日の受肉は神の受肉の意義を完成し、人の救いのための神の経営計画を完全に終了したのである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

最初の受肉では、神は受肉の働きを完了しなかった。神が肉においてすべき働きの最初の段階を完了しただけである。だから、受肉の働きを完了するために、神は再び肉の体に戻り、肉体のもつすべての正常性と現実を生きている。つまり、神のことが完

全に普通の平凡な肉の体として現れ、それにより、肉においてやり残した働きを完了しようというのである。二度目に受肉をした体は、本質的には最初と変わらないが、もっと現実的で、最初よりもさらに普通なものだ。その結果、第二の受肉の苦しみは最初のそれよりも重いのだが、この苦しみは肉における働きの結果であって、墮落した人間の苦しみとは異なる。これはまた、神の肉の体の普通さと現実から生じている。神が完全に普通かつ現実の肉体で職分を行うため、肉の体は多くの困難に耐えなければいけない。この肉の体が普通で現実のものであればあるほど、神はその職分を果たすために苦しむ。神の働きはごく普通の体、まったく超自然的でない体において表される。神の肉は普通で、人間を救う働きをも担わなければいけないので、その苦しみは超自然の肉よりもはるかに大きい——この苦しみはみな、神の体の現実と正常さから来ている。受肉した二つの体が職分を果たしていたときに受けた苦しみから、受肉した肉の本質がわかる。肉体が普通であればあるほど、働きを行う間、それだけ大きな苦難を神は耐えなければならない。働きをする肉体が現実的であればあるほど、人々の見方は厳しくなり、それだけ多くの危険が神にふりかかることになりがちである。それでも、肉が現実的であればあるほど、肉が普通の人間の必要と完全な理知をもっているほど、肉における働きを神はみごとに取り組むことができる。十字架につけられたのはイエスの肉、罪のための捧げ物としてイエスが捧げた肉体である。普通の人間性をもつ肉体という手段によってイエスはサタンに勝利し、人間を完全に十字架から救った。そして、神の二度目の受肉では、征服の働きを行いサタンを打ち負かすのは完全な肉の体なのである。完全に普通で現実的な肉だけが征服の働きをその全体におよんで行い、力強い証しを示すことができる。つまり、人間の征服は、受肉した神の現実性と正常さによって効果的になるのであって、超常的な奇跡や啓示によるのではない。この受肉した神の職分は、話すことであり、それによって人間を征服し、完全にすることにある。つまり、肉として現れた霊の働き、肉の務めは、話すことで、それによって人間を征服し、顕示し、完全にし、淘汰することである。だから、肉における神の働きが完全に達成されるのは、征服する働きにおいてである。最初の贖いの働きは、受肉の働きの始まりに過ぎなかった。征服の働きをする肉は、受肉しての働きを完了させるであろう。性別では、一度目は男、二度目は女。これにより神の受肉の意味が完了する。これは人間の神についての誤解を取り除く。神は男にも女にもなれる。受肉した神には本質的に性別はない。彼は男と女を創ったが、神にとって性の区別はない。この段階の働きでは、言葉という手段によって働きの成果があらわれるように、神はしるしや不思議を行わない。さらに、その理由は、受肉した神の今回の働きは病人を癒し、悪霊を祓うためではなく、話すことによって

人間を征服するためであり、これは、受肉した神の肉体が本来備えている能力が、言葉を話して人間を征服するというものであって、病人を癒やし、悪霊を祓うためのものではないということである。普通の人間性における神の働きは奇跡を行うことではなく、病人を癒し、悪霊を祓うことはなく、話すことである。だから、第二の受肉をした体は、最初の時よりずっと普通のものに見える。人々は神の受肉が嘘ではないとわかっているが、この受肉した神はイエスの受肉とは異なっている。どちらも神の受肉ではあるが、完全に同じではない。イエスは普通の人間性、平凡な人間性をもっていたが、多くのしるしや不思議を伴っていた。この受肉した神においては、人間の目には、しるしや不思議は何も見えず、病者を癒すことも、悪霊を祓うことも、海の上を歩くことも、四十日間の断食もない。神はイエスがしたのと同じ働きは行わない。それは神の肉が本質的にイエスのものとどこか異なるからではなく、病者を癒したり悪霊を祓うことは、神の職分ではないからである。神は自分の働きを取り壊すこともなければ、自分の働きを妨げたりはしない。神はその実際の言葉で人間を征服するのだから、奇跡で屈服させる必要はない。そして、この段階は受肉の働きを完了するためにある。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

なぜわたしは、受肉の意味がイエスの働きで完了しなかったと言うのであろうか。それは、ことばが完全に肉の体にならなかったからである。イエスがしたことは、神の肉の体での働きの一部分だけであった。イエスは贖いの働きだけを行い、完全に人間を得る働きはしなかった。そのため、神は終わりの日に再度受肉したのである。この段階の働きはまた、普通の人間の体で、すっかり通常の人間によって、その人間性が少しも超越的でない存在によって行われる。つまり、神は完全な人間になったのであり、身分は神である人、完全な人間、完全な肉の体が働きをする。人間の目には、神はまったく超越的ではない、ただの人間に見える。ごく普通の人物で天の言葉を話すことができ、奇跡的なしるしは何も見せず、何の奇跡も行わず、まして、大きな集会場で宗教についての内的な真理を明らかにしたりはしない。第二の受肉の働きは、人々には最初のものとはまるで違って見える。あまりに違うので、二つには何の共通点もないように見える。最初の働きのようなことは、今回は何も見られない。第二の受肉の働きは最初のものとは異なっているが、それは両者の源が同一ではないということではない。同じかどうかは、肉の体で行われる働きの性質によるのであって、外形によるのではない。三段階の働きの間に神は二度受肉し、いずれのときも受肉した神は新たな時代を開き、新しい働きをもたらした。二度の受肉は相補うのである。人間の目では、二つの肉の体が同じ源

から来ていると見極めることは不可能である。言うまでもなく、これは人間の目や心の能力を超えている。しかし、両者の本質は同じである。二人の働きは同じ霊に発しているからである。受肉した二つの体が同じ源から発しているかどうかを判断できるのは、二人の生まれた時代と場所やそのような他の要素によるのではなく、二人の表す神性の働きによるのである。第二の受肉による体はイエスの行った働きは何も行わない。神の働きに慣習的な決まりはなく、それぞれが新たな道を開くからである。第二の受肉は最初の肉に関する人々の心にある印象を深めも固めもしないが、それを補い、完成させ、神についての人間の認識を深め、人々の心にある、あらゆる規則を破り、人々の心にある神についての誤った姿を消し去る。神自身の働きのどの段階も個別には、人間に神についての完全な認識を与えることはできないと言える。各段階は、全部ではなく、一部分だけを与えるのである。神はその性質を完全に示したが、人間の理解力が限られているため、神についての認識はまだ不完全なままである。人間の言語で神の性質を完全に言い表すのは不可能である。まして、神の働きの一段階だけで、どれほど完全に神を表せるだろうか。神は普通の人間性の陰に隠れて肉において働く。そして、その神性が現れてはじめて、人間は神を知ることができるのであり、その外見を見てのことではない。神はさまざまな働きを通して人間が神を知ることができるように受肉するのだが、働きの二段階は同じではない。このようにしてはじめて、人間は肉における神の働きについて、一つの面だけでなく、完全な認識をもてる。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

イエスは、「言は神と共にあった。」の実体のみを満たす業の段階を行った。神の真理は神と共にあり、神の霊は肉と共にあり、神と不可分であった。つまり、受肉した神の肉は神の霊と共にあったのであり、それは受肉したイエスが最初の受肉した神であったことの大きい証拠である。この段階の業は「言葉が受肉した」の内面的意味を満たし、「言は神と共にあった。言は神であった。」に一層深い意味を加え、「初めに言があった。」という言葉、あなたが強く信じることを可能とした。つまり、神は創造の時に言葉を備え、神の言葉は神と共にあって神と不可分であった。そして、最後の時代には、神の言葉の力と権威は一層明瞭となり、人間は神の言葉すべてを理解できるようになり、言葉全てを聞くことができるようになった。それが最後の時代の業である。あなたは、こうした事柄を完全に知り尽くす必要がある。それは肉を知る問題ではなく、肉と言葉を知る問題である。これは、あなたが証に立つ必要があり、全ての人が知る必要がある物事である。これは2度目の受肉、そして神の最後の受肉の業であるため、こ

の業は受肉の意味を完全なものとし、肉における神の全ての業が完全に遂行され、実施され、肉にある神の時代の幕を閉じる。

『言葉は肉において現れる』の「実践（４）」より

この段階で受肉した神が困難を経験していようが、職分を果たしていようが、神は受肉の意味を完了するためにそうしているのである。これが神の最後の受肉だからである。神は二回だけ受肉することができる。三度目はありえない。最初の受肉は男性で、二度目は女性であり、そこで神の受肉した姿は人間の心の中で完全になる。さらに、二回の受肉により、すでに肉における神の働きは終わっている。一度目、受肉した神は、受肉の意味を完了するために普通の人間性を備えていた。今回も神は普通の人間性を備えているが、この受肉の意味は異なっている。もっと深く、その働きにはより深い意義がある。神が再び受肉した理由は、受肉の意味を完了するためである。神がこの段階の働きを完全に終わると、受肉の意味のすべて、つまり、肉における神の働きは完了し、もはや肉において行う働きはない。つまり、これ以後は、神が働きをするために受肉することは二度とないのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

（一篇の御言葉）

二度の受肉が受肉の意義を完成させる

神による各段階の働きには実質的な意義がある。イエスが来た時男性であったが、今回は女性である。このことから、神はその働きのために男と女の両方を造ったが、神には性の区別がないことがわかる。神の霊が来るとき、それは意のままにいかなる肉体でも持つことができ、その肉体が神を表す。男性であろうと女性であろうと、それが受肉した神である限り、どちらも神を表す。イエスが女として現れたとしても、つまり、男ではなく女の赤子が聖霊によって受胎されたとしても、その働きの段階はまったく同じように完成されたことであろう。もしそうになっていたならば、今回の働きの段階は女性ではなく男性によって完成されなければならない、それでも結局、働きはまったく同じように完成されることになる。両方の段階でなされる働きには意義がある。働きは繰り返されることはなく、お互いに矛盾することもない。その働きの際、イエスは神のひとり息子と呼ばれたが、それは男性であることを示している。それではなぜこの段階でひとり息子のことは言及されていないのか。それは、働きの必要性から、イエスの性とは異なる性へと変更せざるを得なかったためである。神に関しては性の区別はない。神の働

きは神の望むようになされ、いかなる制限にも左右されることはなく、非常に自由であるが、各段階には実質的な意義がある。神は二度肉となったが、終わりの日の神の受肉が最後であることは言うまでもない。神はすべての業を明示するために来た。人が目撃できるように、今の段階で神が受肉して自ら働きを行わなければ、人は神は男性にだけなりえるが女性ではないという観念を永久に持ち続けているだろう。これまで、神は男性にだけなりえ、女性は神と呼ばれることはないとするすべての人が信じていた。すべての人は男は女に対して権威を持つものとみなしていたからである。権威を持てるのは男だけで、女は誰も持つことはできないと人々は信じており、男は女のかしらであり、女は男に従わねばならず、男を超えることはできないとさえ言った。男は女のかしらであると過去に語られた時、それは蛇にだまされたアダムとエバに関して言われたことであって、初めにヤーウェによって造られた男と女に関してではなかった。男が家族を養えるようにならなければならないのと同様、女は夫に従い、愛さなければならないのはもちろんのことである。これらはヤーウェが示した律法と命令であり、人類は地上の生活において順守しなければならない。ヤーウェは女に「あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」と言った。こう言ったのは、人類が（すなわち男も女も）ヤーウェの支配下で正常に暮らすことができ、人類の生活が構造を持ち、秩序を失わないようにするためにだけである。従って、ヤーウェは男と女がどう行動するべきかに関する適切な規則を作ったが、この規則は地上に住むすべての創造物にのみ言及するもので、受肉した神に関するものではなかった。どうして神が自分の創造物と同じであり得ようか。神の言葉は創造物である人類にのみ向けられた。それらは人類が正常に暮らせるようにと男と女に対して示された規則であった。最初、ヤーウェが人類を創造したとき、男と女の両方を造った。従って、受肉した神の肉体にも男女の区別があった。神はアダムとエバに語った言葉に基づいて働きを決定したのではなかった。神が受肉した二回は、完全に神が人類を最初に造った時の考えに沿って決定された。すなわち、神はまだ墮落していなかった男性と女性に基づいて二回の神の受肉の働きを完成させた。蛇にだまされたアダムとエバにヤーウェが語った言葉を人が神の受肉の働きに適用したら、イエスも果たすべきこととして妻を愛さなければならなかったのではないだろうか。それでもやはり神は神なのだろうか。もしそうなら、神は働きを完成させることができるだろうか。受肉した神が女性であることが間違いならば、神が女を造った時も大きな間違いだったのではないだろうか。神が女性として受肉することが間違いだと人がまだ信じているなら、結婚をせず、したがって妻を愛することができなかったイエスの受肉も現在の受肉と同じように誤りではないだろうか。ヤーウェがエバに語った言葉を使って今日の神の受

肉の事実を判定するのなら、恵みの時代に受肉した主イエスを評価するのに、ヤーウェがアダムに語った言葉を使わなければならない。これら二つは同じではないのか。蛇にだまされなかった男に基づいて主イエスを評価するのなら、今日の受肉の事実を蛇にだまされた女に基づいて判断することはできない。それは公正さに欠ける。そのような判断を下すならば、あなたは理性に欠けていることは明らかだ。ヤーウェが二度受肉した時、肉体の性は蛇にだまされなかった男と女に関連していた。神は蛇にだまされなかったそのような男と女に従って二度受肉した。イエスの雄性は蛇にだまされたアダムの雄性と同じだと考えてはいけない。イエスはアダムとはまったく関係がなく、彼らは本質の異なる二人の男性である。確かに、イエスが雄性を持っているからといって、イエスがすべての女だけのかしらであり、すべての男のかしらではないと証明することにはならないのではないのか。イエスは全ユダヤ人（男も女も含む）の王ではないのか。イエスは神自身であり、女だけのかしらでなく、男のかしらでもある。イエスはすべての被造物の主であり、すべての被造物のかしらである。どうしてイエスの雄性が女のかしらであることの象徴だと決めることができようか。これは神への冒涇ではないだろうか。イエスは墮落しなかった男性である。イエスは神であり、キリストである。イエスは主である。どうしてイエスが墮落したアダムのような男性でありえようか。イエスはもっとも聖なる神の霊が身に着けた肉体である。どうしてイエスはアダムの雄性を持つ神であるなどと言えようか。それではこれまでの神の働きはすべて間違っていたことになるのではないのか。ヤーウェはだまされたアダムの雄性をイエスの中に組みこむことができたのだろうか。現在の受肉は、性はイエスと異なっている、本質は同様な受肉した神の別の働きなのではないのか。それでもまだ受肉した神は女性ではありえない、なぜなら蛇に最初にだまされたのは女だからだとあえて言うのか。女は最も不潔で、人類の墮落の発端なのだから、神が女性として受肉することなど到底ないとまだあえて言うのか。

「女はいつも男に従うべきで、決して神を明らかにしたり、直接象徴したりしてはならない」とまだあえて言うのか。あなたは過去に理解しなかった。今でもなお神の働き、とりわけ受肉した神を冒涇できるのか。このことをはっきり理解できないならば、自分の愚かさや無知が明らかにされ、醜さが暴露されないよう、発言にはせいぜい気をつけなさい。自分がすべてを理解していると考えてはいけない。あなたがこれまで目にし、経験してきたことは、すべてわたしの経営計画の千分の一を理解するのにさえ十分ではないとわたしは言う。ではなぜそんなに傲慢なのか。あなたの持っているほんのわずかな才能と最小限の認識では、イエスの働きの一秒に使用するのにさえ不十分である。あなたは実際どれほどの経験を持っているのか。あなたが生涯で見てきたもの、耳にして

きたすべて、想像してきたことは、わたしが一瞬で行う働きより少ない。あら探しをしたり、欠点をみつけたりしないほうがよい。どんなに傲慢でも、あなたはまだアリ以下の被造物なのだ。あなたの腹の中にあるすべては、アリの腹の中にあるすべてよりも少ない。自分が多くを経験し、先輩になったので、思うがままの横柄さで語り、行動してもよいと考えてはならない。あなたの経験があり、先輩であるのは、わたしが発した言葉の結果ではないのか。自分の労働や苦勞と引き換えにそれらを獲得したと信じているのか。今日、あなたはわたしの受肉を見て、その結果、たっぴりと観念を持ち、そこから数え切れないほどの勝手な考えが出て来る。わたしの受肉がなかったら、あなたの才能がどんなに並外れたものであっても、これほどの観念を持つことはないだろう。勝手な考えが生まれるのはここからではないのか。イエスの初めて受肉がなければ、あなたは受肉について何を知っているだろうか。あなたが二度目の受肉を厚かましくも大胆に批判するのは一度目の受肉を知っているからではないのか。いったいなぜ素直に従う代わりに細かく調べなければならないのか。あなたはこの流れに入り、受肉した神の前に来た。どうしてあなたに研究することが許されようか。あなたが自分の家族史を研究するのは結構なことだが、神の「家族史」を研究するなら、今日の神はあなたがそうすることをどうして許せようか。あなたは盲目ではないのか。あなたは自ら屈辱を受けようとしているのではないのか。

イエスの働きが終わりの日のこの段階の補完なしに行われていたら、人は永久にイエスだけが神のひとり子である、すなわち、神は一人の息子しか持たず、別の名前でもその後に出て来る者はだれも神のひとり子ではなく、いわんや神自身でもないという観念を持ち続けるだろう。罪の贖いの捧げものとしての役割を果たす者、あるいは神のために権力を担う者、また、全人類を罪から救う者は神のひとり子であるという観念を人は持っている。現れる者が男性である限り、その人は神のひとり子、神の代理と見なすことができる信じている人々もいる。そして、イエスはヤーウェの息子、ひとり子であるという人々さえいる。これは人の作った深刻な観念ではないだろうか。今の段階の働きが最後の時代になされなかったならば、全人類は、神について陰に包まれてしまうだろう。もしそうなら、男は自分を女より高い地位にあるものと考え、女は堂々としていることが決してできないだろう。そうなれば、女性はだれも救いを受けないだろう。人々はいつも、神は男で、女を常にひどく嫌い、女には救いを与えないと信じている。もしそうなら、ヤーウェによって造られ、そして墮落したすべての女は決して救いを受ける機会が得られないというのは本当なのではないか。それなら、ヤーウェが女を造ったこ

と、すなわち、エバを造ったのは無意味だったのではないのか。そして女は永久に消滅するのではないだろうか。従って、終わりの日のこの段階の働きは全人類、女だけでなく全人類を救うことである。この働きは女のためだけでなく、すべての人類のためである。そうでないと考える者は、なおさら愚か者である。

現在なされている働きは恵みの時代の働きを推し進めた。すなわち、六千年経営（救いの）計画全体における働きは前進した。恵みの時代は終わったが、神の働きはさらに前進している。なぜわたしは今の段階の働きは恵みの時代と律法の時代を基礎にしていると繰り返し言うのだろうか。これは、今日の働きは恵みの時代に行われた働きの延長であり、律法の時代に行われた働きを向上させたものであることを意味する。三つの段階は密接に相互関連しており、一つはその次の段階に繋がっている。なぜわたしは今の段階の働きはイエスによってなされた働きの上に築き上げられるとも言うのだろうか。この段階がイエスによってなされた働きの上に築き上げられなければ、キリストの磔刑、つまり過去に行われた贖いの働きはこの段階でなお実行されなければならない。だが、これは無意味なことであろう。従って、働きは完全に終わったのではなく、時代が前進し、働きは以前に比べていっそう高まったということである。今の段階の働きは律法の時代、および、イエスの働きの堅固な支えを基礎に置いて築かれるということが出来るだろう。働きは段階ごとに築かれ、今の段階は新しい始まりではない。三つの働きの段階の組み合わせのみを六千年にわたる経営(救いの)計画とみなすことができる。今の段階は恵みの時代の働きを基礎にして行われる。これら二つの働きの段階に関連がなければ、なぜ今の段階には磔刑がないのか。なぜわたしは人の罪を背負わないのか。わたしは聖霊による受胎により来るのではないし、人の罪を背負うために磔刑にされることもないだろう。むしろ、わたしは人を直接罰するためにここにいる。磔刑のあとわたしが人を罰しなければ、そして今わたしが聖霊による受胎を通して来るのでないならば、わたしは人を罰する資格がないだろう。わたしがイエスと一つなのであるからこそ、わたしは人を罰し、裁くために直接来るのだ。今の段階の働きは完全に過去の段階を基礎にしている。だからそのような働きだけが段階を追って人を救済に導くことができる。イエスとわたしは同じ霊から来ている。わたしたちの肉体には何の関連性もないが、わたしたちの霊は一つである。わたしたちがすることやわたしたちが担う働きは同じではないが、わたしたちは本質的に同じである。わたしたちの肉体の形は異なるが、これは時代の変化ならびにわたしたちの働きの必要性のためである。わたしたちの職分は同じではないので、わたしたちが作り出す働きや、わたしたちが人に明らかにする性質も異

なっている。そういうわけで、今日人が見るものや受け取るものは過去のものと同じではない。それは時代の変化のためである。彼らの肉体の性や形は異なっているが、そして彼らは同じ家族から生まれたのではなく、ましてや同じ期間に生まれたのではないが、彼らの霊は一つである。彼らの肉体は血縁関係も物理的關係も決して共有していないが、それによって彼らが二つの異なる時期において受肉した神であることを否定することにはならない。彼らは同じ血統ではなく、共通する人間の言語を持っていないが（一人はユダヤ人の言語を話す男性であったし、もう一人は中国語しか話さない女性である）、彼らが受肉した神であることは否定できない真実である。これらの理由から、彼らは異なる国で、異なる期間になすべき働きを行う。彼らの霊は同じで、同じ本質を持っているという事実にも関わらず、彼らの肉体の外見には完全な類似性はまったくない。彼らは同じ人間性を共有しているだけで、彼らの肉体の外見と誕生は似ていない。これらのことはそれぞれの働きや、人が彼らに関して持つ認識に何の影響も与えない。なぜなら結局彼らは同じ霊であり、誰も彼らを分けることはできないからである。彼らには血縁関係はないが、存在全体は彼らの霊によって指示されているので、肉体は血統を共有しないままに、彼らは異なる期間に異なる働きを引き受けている。ヤーウェの霊はイエスの霊の父ではなく、イエスの霊もヤーウェの霊の子ではない。彼らは同じ霊である。今日の受肉した神とイエスと同様である。彼らに血縁関係はないが、彼らは一つである。これは彼らの霊が一つだからである。彼は慈愛と憐れみの働きを行うことができ、同様に義である裁きの働きや人を罰する働き、人にのろいをもたらす働きも行うことができる。結局、彼は世界を破壊し、不道德な人々を罰する働きを行うことができる。彼はこのすべてを自分自身で行うのではないのだろうか。これは神の全能性ではないのだろうか。神は人のための律法を示し、戒律を発令することができ、また古代のイスラエル人が地上で暮らせるように導き、神殿や祭壇を建造して、イスラエル人すべてを統治するよう指導することができた。その権威のため、神は地上で二千年イスラエル人とともに生きた。イスラエル人はあえて反抗しなかった。すべての人がヤーウェを崇拜し、戒律を守った。この働きはすべて神の権威と全能性によって行われた。恵みの時代、イエスはすべての墮落した人類（イスラエル人だけではない）を罪から救うために現れた。イエスは人に慈愛と憐れみを示した。恵みの時代に人が見たイエスは憐れみに満ちており、いつも愛情にあふれていた。というのは、イエスは人を罪から救い出すために来たからである。イエスは磔刑を受け、本当に人類を罪から救い出すまで人の罪を許すことができた。その間、神は人の前に慈愛と憐れみを持って現れた。すなわち、イエスは人のために罪の生け贄になり、人が永久に許されるように人の罪のため磔刑にされた。

イエスは慈悲深く、憐れみ深く、我慢強く、愛情があった。恵みの時代にイエスに従ったすべての人々も、あらゆることにおいて我慢強く、愛情深くあろうとした。彼らはすべての苦しみに耐え、たとえ叩かれても、罵られても、石を投げつけられても、決して反撃しなかった。しかし、この最終段階でそうはならないのは、霊は一つであったにもかかわらず、イエスとヤーウェの働きが異なっていたのと同様のことであった。ヤーウェの働きは時代を終わらせることではなく、時代を導き、地上における人類の生活を先導することであった。しかし今の働きは、異邦人の諸国のひどく墮落した人々を征服し、中国の家族だけでなく全宇宙を導くことである。今、この働きが中国で行われているのをあなたは知っているが、実はすでに海外に広がり始めている。なぜ外国人は何度も真理の道を探し求めるのだろうか。それは霊がすでに働きを開始しており、言葉は今や全宇宙の人々に向けられているからである。これはすでに働きの半分に当たる。神の霊は世界が創造されて以来極めて偉大な働きをなしてきた。神は異なる時代にわたって、異なる国々で異なる働きを行ってきた。各時代の人々は、神の異なる性質を見ているが、それは神が行う異なる働きを通して自然に明らかにされる。それは神であり、慈愛と憐れみに満ちている。神は人の罪の生け贄であり、人の羊飼いであるが、人を裁き、刑罰を与え、のろいをかけることもある。神は人が二千年地上で生活するよう導くことができ、墮落した人類を罪から救い出すこともできる。そして今日、神は神のことを知らない人類を征服し、彼らを神の支配下に置き、すべての人が完全に神に服従するようにすることもできる。最後には、神は全宇宙の人々の中の不潔なもの、不義なものをすべて焼き払い、彼らに神が慈愛、憐れみ、英知、不思議、高潔の神というだけでなく、さらには人を裁く神でもあることを示す。全人類の中にある悪い者に対して、神は激しい炎、裁き、懲罰そのものである。完全にされるべき人々に対して、神は試練、精錬、苦難であり、同時に慰め、滋養、言葉の供給、取り扱い、刈り込みである。取り除かれる人々にとって、神は懲罰であり、報いである。教えてくれ。神は全能ではないのか。神はあなたが想像した磔刑だけではなく、すべての働きができる。あなたは神のことをあまりに低く考えている。磔刑による全人類の贖罪後、すべては終ると信じているのか。しかも、その後、神に従って天に行き、いのちの木から果実を食べ、いのちの川から水を飲むのか。そんなに単純なことであろうか。教えてくれ。あなたは何を成し遂げたのか。あなたはイエスのいのちを持っているのか。あなたは確かにイエスによって罪から救われたが、磔刑はイエス自身の働きであった。人としてあなたはどのような義務を果たしたのか。あなたは表面的に神を敬っているだけで、神の道を理解していない。それが神を明らかにするあなたの方法なのか。神のいのちを受け取っていないければ、あるいは

神の義なる性質のすべてを見ていなければ、いのちを持っている者であると主張することはできず、天の国の門を通過するに値しない。

神は霊であるだけでなく、肉体になることもできる。そのうえ、神は栄光のからだである。あなたたちは見ていないが、イエスはイスラエル人によって、すなわち、当時のユダヤ人に目撃された。彼は最初肉体であったが、はりつけにされた後、栄光のからだになった。神はすべてを包みこむ霊であり、あらゆる場所で働きを行うことができる。彼はヤーウェ、イエス、メシアになれる。最後には全能の神になることができる。それは義であり、裁き、刑罰であり、のろい、怒りであるが、慈愛と憐れみでもある。神の働きはすべてが神を表すことができる。神とはどのようなものかと言うのか。あなたはまったく説明することができないで、「神とはどのようなお方なのか私には説明することはできない」と言えるだけである。ある段階で神が贖いの働きをしたと言うだけで、神は永久に慈愛と憐れみの神であると結論づけてはいけない。あなたは、神はそのようなだけの神であると確信できるのか。もし神が慈悲深く、愛情あふれる神ならば、なぜ終わりの日に時代を終わらせるのだろうか。なぜ神はこれほどたくさんの災難を送り出すのだろうか。あなたが考えるように神が最後まで、最後の時代まで、人に対して慈悲深く、愛情があるならば、なぜ神は災難を天から地上に落とすのだろうか。神が自身のよう、また神のひとり子のように人を愛するならば、なぜ疫病やあられを天から地上に落とすのだろうか。なぜ神は人が飢饉や疫病に苦しむのを許すのか。なぜ神は人がこれらの災難に苦しむのを許すのか。あなたたちのだれも神がどのようなものであるのかあえて言わないし、誰も説明できない。神は霊であると確信できるか。神はイエスの肉体だとあえて言うのか。そして、神は人のために永久に磔刑にされる神であるとあえて言うのか。

『言葉は肉において現れる』より

第6章 神への信仰において備えるべきいくつかの識別

1. 神の働きと人の働きの識別

関連する神の言葉

神自身の働きは全人類に対する働きを含み、時代全体に対する働きも表す。すなわち、神自身の働きは聖霊の働きすべての活動と動向を表し、一方使徒の働きは神自身の働

きに従うことであり、時代を導くことはないし、時代全体において聖霊が働く動向を表すこともない。彼らは人がなすべき働きをするだけで、経営の働きは全く含まれない。神自身の働きは、経営する働きの範囲内の計画である。人の働きは用いられる人々の本分だけであり、経営の働きとは何の関係もない。働きのアイデンティティや表すものが異なるため、どちらも聖霊の働きであるという事実にもかかわらず、神自身の働きと人の働きの間には明確で、実質的な違いがある。さらに、異なるアイデンティティをもつ対象に作用する聖霊の働きの程度もさまざまである。これらが聖霊の働きの原則と範囲である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

神自身が行なう働きはすべて、神の経営（救いの）計画の中で神が行なおうとする働きであり、偉大な経営（救い）に関係している。人（聖霊に用いられる人）によってなされる働きは、その人の個人的体験を提供することである。それは以前の人たちが歩いた道を越えて新しい体験の道を見つけ、兄弟姉妹を聖霊の指導の下で導くことである。この人たちが提供するの、彼ら個人の体験や霊的な人たちの霊的書物である。彼らは聖霊によって用いられているが、その働きは六千年計画の偉大な経営（救い）の働きとは関係していない。彼らはただ自分たちが果たしている役目が終わるか、自分たちの生涯が終わるまでの間、聖霊の流れの中で人々を導くために、様々な時代に聖霊によって立てられている人たちにすぎない。彼らが行なう働きはただ神のために適切な道を用意するか、あるいは地上における神自身による経営（救い）のある側面を続けていくことだけである。そのような人たちは、神の経営（救い）の中で偉大な働きをすることはできず、新しい道を開拓することもできず、ましてや前の時代からの神のすべての働きを終わらせることなどできない。よって、彼らがする働きはただ被造物が己の役目を果たすことを表しているだけで、神自身が行なう職分を表すことはできない。これは、彼らがする働きは神自身の行なうものとは同じではないからである。新しい時代を招き入れる働きは神に代わって人がすることはできない。神以外の誰によってもなされることはない。人がする働きのすべては被造物の一人としての本分を果たすことだけで、聖霊によって動かされ、啓かれたときに果たされる。そのような人たちが与える指導は、人が日常生活でどのように実践し、神の心に一致してどのように行動すべきかということを示すことである。人の働きは神の経営（救い）に関わることも霊の働きを表すこともない。たとえば、ウィットネス・リー（李常受）やウオッチマン・ニー（倪柝聲）の働きは道を先導することであった。道が新しいものであろうと古いものであろうと、働

きの前提は聖書の原則を超えないということであった。地方教会の復興であれ設立であれ、彼らの働きは教会を築くことであった。彼らの働きは、イエスや弟子たちが恵みの時代にやり終えなかった働き、或いはさらに展開しなかった働きを引き継いでいた。彼らがその働きにおいて行なったのは、頭を覆うこと、バプテスマを受けること、パンをさくこと、ぶどう酒を飲むことなど、イエスがその初期の働きにおいて自分以降の世代の人々に行なうように命じたことを復活させることであった。彼らの働きは単に聖書を守り、聖書の中に道を求めることであったとすることができる。彼らは新しい進歩を一切遂げなかった。したがって、彼らの働きには聖書内における新しい道の発見と、以前よりは良い現実的な実践しか見受けられない。彼らの働きには、神の現在の意図を見受けることはできず、ましてや終わりの日に神が行なうである新しい働きに関しては何もない。これは、彼らが歩んだ道はやはり古い道であったので、刷新や進歩はなかったからである。彼らはイエスの磔刑の事実にとだわり、人々に悔い改め罪を告白させるという実践や、最後まで耐えるものが救われるということわざや「男は女の頭である」「妻は夫に従え」といった聖句、さらに女性信者は説教できず、従うことのみできるという伝統的な観念を維持した。もしもこのような指導が継続していたなら、聖霊が新しい働きを行ない人々を教義から解放し、自由と美の領域へと導くことはできなかったであろう。そういうわけで、時代が変わるこの段階の働きは、神自身が行ない語らなくてはならないのである。そうしなければ、神の代わりにこれらの働きを行なえる人はいない。今までは、この流れの外側では聖霊のあらゆる働きは行き詰まり、聖霊に使われていた人々は道に迷ってしまった。よって、聖霊に用いられた人の働きは神自身による働きと同じではないので、その身分や誰に代わって行動しているかもまた異なっている。これは聖霊が意図する働きが異なるため、働くすべての人たちに異なった身分や地位が与えられるためである。聖霊によって用いられる人たちはまた新しい働きをするかもしれないし、また昔なされた働きを排除するかもしれないが、彼らの働きは新しい時代の神の性質や心を表現することはできない。彼らはただ前代の働きを取り除くためだけに働き、神の性質を直接表すために新しい働きをするわけではない。このように、彼らがどれだけ多くの時代遅れの実践を廃止し、新しい実践を導入しようとも、彼らは依然として人や被造物を代表しているのである。しかし、神自身が働くとき、神は公然と古い時代の実践の撤廃を宣言したり、新しい時代の始まりを直接宣言することはない。神はその働きにおいて直接的で率直である。神は意図する働きを遂行する上で率直である。すなわち、神は自身がもたらした働きを直接表現し、本来意図したように自身の働きを遂行し、神であることと神の性質を表現する。人の見方では、神の性質、また神の働きはか

つての時代とは異なっている。しかし、神の見地からは、これは神の働きの継続でありさらなる展開に過ぎない。神自身が働くとき、神はその言葉を表現し、直接新しい働きをもたらす。それとは対照的に、人が働くときは、熟考と研究によってなされるか、あるいは他人の働きに基づいて築かれた知識の発展と実践の体系化である。すなわち、人によってなされる働きの本質は設立された秩序に従い「新しい靴で古い道を歩く」ことである。これは聖霊に用いられる人が歩く道でさえ神自身によって開かれたものに基づいているという意味である。所詮人は人であり、神は神である。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（1）」より

恵みの時代、イエスもまた多くを語り、多くの働きを為した。イエスはイザヤとはどう違っていたか。イエスはダニエルとどう違っていたのか。イエスは預言者だったのか？何故彼はキリストだと言われるのか。彼らの間の違いとは何であろうか。彼らは皆言葉を語ったが、彼らの言葉は、人間にはだいたい同じもののように思われた。彼らは皆語り、働きを行った。旧約聖書の預言者は預言し、同様にイエスもそれができた。なぜそうなのか。ここでの違いは、働きの性質による。このことを識別するには、肉の性質を考慮することはできない。また、語られた言葉の深さ浅さを考察すべきではない。イエスの働きと、その働きが人間の内にもたらした成果をいつも第一に考えなければいけない。当時預言者たちによって告げられた預言は、人間にいのちを与えなかった。また、イザヤやダニエルのような人々の受け取った言葉は単なる預言であって、いのちの道ではなかった。ヤーウェの直接の啓示がなければ、誰一人その仕事ができなかっただろう。それはただの人間には不可能である。イエスもまた、多くを語ったが、その言葉はいのちの道で、そこから人間は実践の道を見出すことができた。つまり、第一に、イエスは人間にいのちを与えることができた。何故ならイエスはいのちだからである。第二に、イエスは人間の逸脱を正常に戻すことができた。第三に、イエスの働きはヤーウェの働きをひき継ぎ、その時代を進めるものだった。第四に、イエスは人間の内なる必要を把握し、何が人間に欠けているのかを理解できた。第五に、イエスは古い時代を終わらせて、新しい時代を招き入れることができた。だから、彼は神、そしてキリストと呼ばれたのである。イエスはイザヤだけではなく、他のすべての預言者とも異なっていた。比較のため、イザヤを例に預言者たちの働きをみてみよう。第一に、イザヤは人間にいのちを与えることができなかった。第二に、彼には新たな時代の先駆けとなることができなかった。イザヤはヤーウェに導かれて働いたのであって、新たな時代の到来を告げるためではなかった。第三に、彼の語ったことは、彼自身にも理解できないことだっ

た。彼は神の霊から直接啓示を受けていたのだが、他の人々はそれを聞いても理解できなかった。これらの点だけでも、イザヤの言葉は預言にすぎなかったこと、ヤーウエの代わりに行った働きの一面でしかなかったことが十分に証明される。しかしながら、イザヤは完全にヤーウエの代理となることはできなかった。彼はヤーウエのしもべで、ヤーウエの働きの道具であった。イザヤはただ律法の時代にヤーウエの働きの範囲内で働いていただけである。イザヤは律法の時代を超えて働かなかった。それに対して、イエスの働きは異なっていた。イエスはヤーウエの働きの範囲を超えていた。イエスは受肉した神として働き、全人類を贖うために十字架につけられた。つまり、イエスはヤーウエの行った働きの範囲外で新たな働きを行った。それが新たな時代を招き入れたということである。もう一つの点は、イエスは人間には達成することが不可能なことについて語ることができた。イエスの働きは神の経営（救い）のうちにあり、全人類に関わるものだった。イエスはほんの数人に働きかけたのではないし、その働きは限られた数の人間を導くものでもなかった。神がどのように受肉して人間になったか、聖霊が当時どのように啓示を与え、聖霊が働きを為すためにどのように人間の上に降臨したのかということに関しては、こうしたことは人間には見ることも触れることもできないことである。これらの真理が、イエスが受肉した神であるという証拠になることは、まったくありえない。だから、人間に触知できる神の言葉と働きにおいてのみ、区別できるのである。これだけが現実的である。何故なら、霊のことはあなたの目には見えず、神自身にだけはっきり知られているものだからであり、受肉した神でさえ、すべてを知っているわけではないからである。[a]その働きによって確かめられるだけである。その働きを見ると、まず、イエスは新たな時代を開くことができたことがわかる。第二に、イエスは人間にいのちを与え、行くべき道を示すことができた。イエスが神そのものであることを証拠立てるにはこれで充分である。少なくとも、イエスの行う働きは神の霊を完全に表すことができ、そうした働きから、神の霊がイエスの内にいることがわかる。受肉した神の行った働きは、おもに新たな時代の到来を告げ、新たな働きを先導し、新たな状況を展開することであったが、これらのいくつかの条件だけでも、イエスが神そのものであることを実証するのに充分である。つまり、これがイエスがイザヤやダニエル、他の偉大な預言者たちとの違いである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神の職分と人間の本分の違い」より

あなた方は神の働きと人の働きの区別の仕方を知らなければならない。あなたは人の働きから何を見ることができるか。人の働きの中には人の経験による要素がたくさんあ

る。人が表すものはその人そのものである。神自身の働きも神そのものを表すが、神そのものは人そのものとは異なる。人そのものは人の経験や人生を表し（人生やその人が持つ人生哲学において人が経験したり、遭遇したりするもの）、異なる環境に住む人々は異なる存在を表す。あなたに社会的経験があるか否か、あなたが家族の中で実際どのように生活し、経験しているかはあなたが表すものの中に見ることができるが、あなたは肉となった神の働きから神に社会的経験があるか否か見ることはできない。神は人の本質を十分承知しており、あらゆる種類の人々に関連するあらゆる種類の行為を明らかにすることができる。神は人間の墮落した性質や反抗的行動を明らかにするのはなおさら得意である。神は世俗的な人々の中には住まわれないが、人間の本性や世俗的な人々の墮落のすべてを承知している。これこそが神である。神は世間を取り扱わないが、世間を取り扱う規則は知っている。なぜなら人間の本性を十分に理解しているからである。神は人の目では見ることはできず、人の耳では聞くことのできない聖霊の働きについて、現在のものも、過去のものも知っている。これには、人生哲学ではない知恵や、人々が推測するのは難しいと思う奇跡も含まれている。これが、人々に明らかにされており、また隠されてもいる神そのものである。神が表すものは、特別な人のことではなく、聖霊に本来備わっている特質と存在である。神は世界中を巡回しないが世界のすべてを知っている。神は知識も洞察力もない「類人猿」と接触するが、知識よりも高く、偉人を超えた言葉を述べる。神は、人間性を持たず、人間の慣習や生活を理解しない鈍感で頭の鈍い人々の集団の中で暮らす、人類に通常の人間性のままに生きよう要求し、同時に人類の卑劣で粗野な人間性を明らかにする。このすべてが、どの生身の人間そのものよりも高い神そのものである。神は、なさなければならない仕事をし、墮落した人間の本質を完全に明らかにするために、複雑で、扱いにくく、浅ましい社会生活を経験する必要はない。浅ましい社会生活は、神の肉を啓発しない。神の働きと言葉は人の不従順を明らかにするだけで、人に世界と取り組むための経験や教訓を与えはしない。神が人にいのちを与えると、社会や人の家族を調べる必要はない。人を暴き、裁くことは神の肉の経験の表現ではない。それは人の不従順を長いこと知り、人類の墮落を忌み嫌ったあと、人の不義を明らかにすることである。神が行う働きはすべて、神の性質を人に明らかにし、神であることを表すことである。この働きができるのは神のみであり、生身の人が達成できることではない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

神の働きは、神の肉の経験を表すのではない。人が行う働きは人の経験を表す。誰も

が自分の個人的経験について話す。神は直接真理を表し、一方人は真理を経験したあと、付随する経験を表せるだけである。神の働きに規則はなく、時間や地理的制約に支配されない。神はいつでも、どこでも自分が何かを表すことができる。神は好きなように働く。人の働きには条件と事情がある。そうでなければ、人は働くことはできず、神に関する認識や真理の経験を表すことができない。あなたは、神自身の働きか、人の働きか伝えるためには両方の違いを比較するしかない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

神が肉となるのは、時代を導き新しい働きを始めるためだけである。あなたがたはこの点を理解しなければならない。これは人の役割とは大きく異なり、このふたつを同じ次元で話すことはできない。人が働きを行なうために用いられるようになるまでには、長期にわたる教育と完全にされることが必要で、それには特別に高位の人間性が必要とされている。人間は普通の人間としての理知を維持できなければならないだけでなく、他人との関係における行動をつかさどる原則や規則を多く理解し、その上、人の知恵や道徳についてさらに多くを学ばなければならない。これが人が備えていなければならないものである。しかし、受肉した神に関してはそうではない。というのは、神の働きは人を表すのでもなければ、人の働きでもないからだ。むしろ、それは神自身の直接的表現であり、神が行なわなければならない働きの直接的遂行である。（当然、神の働きは行なわれるべき時に行なわれ、気軽に無作為に行なわれるのではない。むしろ、神の働きはその職分を全うするべき時に始まる）。神は人の生活や人の働きに関与しない。つまり、神の人間性はこれらのどれも備えていない（しかし、これは神の働きに影響しない）。神はその職分を全うするべき時に、するだけである。神の地位が何であっても、神はすべき働きをただ進めるだけである。人が神について何を知っていようと、あるいは神についての意見が何であろうと、神の働きは影響されない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義 (3)」より

人の働きには範囲と限界がある。一人では一定の段階の働きしかできず、時代全体の働きをすることはできない——さもなければ、その人は人々を規則に導くだらう。人の働きは特定の時間または段階にしか適用できない。人の経験には範囲があるからである。人の働きを神の働きと比較することはできない。人の実践方法と真理の認識はすべて特定の範囲に適用される。人が歩む道は完全に聖霊の意志であるということはない。人は聖霊によって啓発されるだけで、聖霊で完全に満たされることはできないからである。人が経験できることはすべて通常の人間の範囲内のもので、通常の人間の心の中

の考えの範囲を越えることはできない。実践的表現をする人々はすべてこの範囲内で経験する。彼らが真理を経験するとき、それはいつも聖霊の啓発を受けた通常の間生活の経験であり、通常の間生活から逸脱した方法による経験ではない。彼らは間生活に基づいて聖霊に啓発された真理を経験する。そのうえ、この真理は人によって異なり、その深さは人の状態に関連している。彼らが歩む道は真理を追及する人の通常の間生活であり、その道は聖霊によって啓発された通常の間が歩む道であると言えるだけである。彼らが歩む道は聖霊が取る道であると言うことはできない。通常の間経験では、追求する人々が異なるので、聖霊の働きも異なっている。さらに、彼らが経験する環境や経験の範囲は同じではなく、彼らの精神や考えが混ざり合うため、その経験の混ざり合う程度もさまざまになる。各人は個々の異なる条件に従って真理を理解する。真理の本当の意味を完全に理解することはなく、ほんの一部にすぎない。人が真理を経験する範囲はいつも個人の異なる条件に基づいているため、同じにはならない。こうして、同じ真理を表した認識でも人が異なれば同じにはならない。つまり、人の経験にはいつも限界があり、聖霊の意志を完全に表すことはできず、たとえ人の表すものが神の心になんかなり一致していても、たとえ人の経験が聖霊の実行する人を完全にする働きに非常に近くても、人の働きを神の働きとして把握することはできない。人は神の僕にすぎず、神に任せられた働きしかできない。人は聖霊の啓発を受けた認識や自分の個人的経験から得た真理しか表すことはできない。人は無資格で、聖霊の流出口となる条件を持たない。人の働きは神の働きであると言う資格は与えられていない。人には人の働く原則があり、すべての人は異なる経験を持ち、さまざまな条件を所有している。人の働きには聖霊の啓発を受けたその人の経験のすべてが含まれる。これらの経験は人の存在を表すだけで神の存在、あるいは聖霊の意志は表さない。したがって、人が歩む道は聖霊が歩む道ということとはできない。なぜなら人の働きは神の働きを表すことはできず、人の働きと人の経験は聖霊の完全な意志ではないからである。人の働きは規則に陥りがちであり、その方法はすぐに限られた範囲に限定されてしまい、人々を自由な道に導くことはできない。ほとんどの信奉者は限られた範囲内に住んでいて、彼らの経験する道もその範囲内に限られている。人の経験はいつも限られている。働く方法もいくつかに限られており、聖霊の働きや神自身の働きと比較することはできない——これは、人の経験が結局は限られているからである。神がどのように働きを行おうと、それには規則がない。どのようになされようと、神の働きは一方向に限られはしない。神の働きに規則はまったくなく、働きはすべて自由に解放される。どんなに多くの時間をかけて神に従おうとも、人々は神が働く方法のいかなる規範も総括することはできない。神の働きは

原則に基づいているが、いつも新しい方法で行われ、いつも新しい進展があり、人の手の届く範囲のものではない。一期間の間に、神はいくつかの異なる種類の働き、異なる導き方を示すことがあり、人々がいつも新たな成長や新たな変化を持てるようにする。神の働きの規範を見つけ出すことができないのは、神がいつも新しい方法で働いているからである。このようにしてのみ、神の信奉者は規則に陥らないで済む。神自身の働きはいつも人々の見解を避け、彼らの見解に反論する。本当の心で神に従い、神を追い求める人々だけが自分の性質を変えることができ、いかなる規則にも支配されず、いかなる宗教の見解にも拘束されず、自由に生きることができる。人の働きが人々に要求することはその人自身の経験および自分自身が達成できることに基づいている。これらの要求の基準は一定の範囲内に限られており、実践方法も非常に限られている。したがって信奉者は無意識のうちにこの限られた範囲内で生きることになる。時が経つにつれてそれらは規則と儀式になる。一期間の働きが神の個人的完成を経験しておらず、裁きを受けていない人に導かれると、信奉者はみな宗教家、神に抵抗する専門家になるだろう。したがって、資格のある導き手ならば、その人物は裁きを経験しており、完全にされることを受け入れた人である。裁きを経験していない人々は、聖霊の働きを持っているとしても、曖昧で非現実的なことしか表すことはできない。時が経つにつれて、彼らは人々を曖昧で超自然的規則に導くだろう。神が行う働きは人の肉と一致しない。人の考えとも一致せず、人々の見解に反論する。曖昧な宗教色とはまじりあわない。神の働きの結果は、神によって完成されていない人には達成不可能であり、人の考えの及ばないものである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

脚注

a. 原文には「イエスが神であるかどうかは、」という言葉は含まれていない。

2. 聖霊の働きと悪霊の働きの識別

関連する神の言葉

神は同じ業を繰り返しはしない。現実的でない働きは行なわない。神は人間に過分な要求をしない。また、神は人間の理知の外にある業は行なわない。神が為す業はみな、人間の正常の理知の範囲内で行われ、本来の人間の理知の外には及ばない。また、神の働きは人間の正常な必要に沿ったものである。もしそれが聖霊による働きであるなら、

人間はずっと正常になり、その人間性はさらに正常になる。人間はサタンのような墮落した自分の性質、人間の本質についての認識を増し、真理への渴望は更に大きくなる。これはつまり、人間のいのちがどんどん成長し、人間の墮落した性質においては、より一層の変化が可能となる。これら全てが神が人間のいのちになるということの意味である。もし、ある道が、人間の本質であるこれらのものを明らかにすることができないのなら、また人間の性質を変えることができないのなら、さらにまた、人間を神の前へ導き、神についての真の理解を与えることができないのなら、あるいは、人間性をさらに卑しめ、その理知をますます異常なものにするのなら、その道は真の道ではあり得ず、悪霊の業、あるいは、古い道なのだ。要するに、それは聖霊が現在為している働きではないということだ。

『言葉は肉において現れる』の「神とその働きを知る者だけが神の心にかなう」より

神から出るものは何で、サタンから出るものは何かを理解しなくてはならない。神から出るものはあなたのビジョンをさらに明確にし、神にますます近づかせ、兄弟姉妹と心から愛を分かち合うようにさせる。そして神の重荷に対して配慮を示すことができ、神を愛する心は止むことがなく、目の前には進む道がある。サタンから出るものはあなたのビジョンも、それまで持っていたもの全てをも失わせる。神から離れ、兄弟姉妹に対する愛も失せ、憎しみの心を持つようになる。絶望し、もはや教会生活を望まなくなり、神を愛する心が失せる。それがサタンの働きであり、邪悪な霊の働きがもたらす結末である。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第二十二章」より

聖霊の働きとは積極的な導きと前向きな啓示の一種だ。それは人々が受け身でいることを許さない。それは慰めをもたらし、信仰と決心を与え、人々が神によって完全な者となれるようにする。聖霊が働く時、人々は盛んに成長することができる。受け身でもなく、強制されることもなく、積極的に成長する。聖霊が働く時、人々は喜んで、自ら進んで従おうとし、謙虚になることを喜び、内側では痛みや弱さがあっても、協力しようとし、喜んで苦しみ、従うことができる。そして人間の意志によって汚されず、人の考えによって汚されず、間違いなく人間的な欲望や動機に汚されないのである。人々が聖霊の働きを経験する時、彼らの内面は特に清い。聖霊の働きを所有する人々は神の愛、兄弟姉妹への愛を体現し、神を喜ばせることを喜びとし、神の嫌うことを嫌う。聖霊の働きによって触れられた人々は正常な人間性を持ち、人間らしさをもって常に真理を追い求めている。聖霊が人々の内側で働く時、彼らの状態はより良くなっていき、

その人間性はより正常になっていく。そして彼らの協力は愚かなものの時もあるかもしれないが、彼らの動機は正しいものであり、彼らの成長は肯定的で、邪魔をしようとしたりはせず、心には悪意がないのだ。聖霊の働きとは正常で現実的なものであり、聖霊は、人の通常の生活における規則にしがたって働き、正常な人々の求めに応じて啓き、導く。聖霊が人々の内に働く時、聖霊は人々を通常の人々が持つ必要に応じて導き啓示し、人々の必要に基づいて施す。そして聖霊は人々が欠いているもの、欠乏しているものに基づき前向きに導き、啓示する。聖霊が働く時、この働きは人の通常の生活での規則に調和して行われるものであり、人々が聖霊の働きを見ることができるのは現実の生活の中でのみである。もし、日常生活の中で、人々が前向きな状態であり、通常の霊的生活を送っているのなら、彼らは聖霊の働きを持っている。そういった状態の中では、神の言葉を飲食するなら信仰を得、祈るなら霊的に励まされ、彼らに何か起きたなら彼らは受け身にはならず、それが起きている最中に神が彼らに学ばせようと課している教訓が何なのか見ることができ、受け身でも脆弱な状態でもなく、現実の困難の中にあっても、神のすべての采配に自ら従おうとするのだ。

聖霊の働きによって成し遂げられる効果とは何か。あなたは愚かかもしれないし、あなたの内には識別力がないかもしれないが、聖霊はあなたの内に信仰が生まれ、あなたがいつもどれほど神を愛しても愛しきれないと感じ、先にどのような大きな困難があろうとも自ら協力したいと思えるように働いただけなのだ。問題が起こり、それらが神から来ているのかサタンから来ているのかははっきりとはわからないのだが、あなたは待つことができ、受け身にも怠惰にもならない。これは聖霊の通常の働きである。聖霊が人々の内に働く際にも彼らは現実の困難に向き合い、時には涙し、乗り越えられない問題に直面することもあるが、これらはすべて聖霊の普通の働きの一段階だ。たとえ人々がそういったことを乗り越えることができなくても、またその時には弱く不平を言ったとしても、のちになって神を絶対的な信仰をもって愛することができるようになるのだ。受け身であったとしても、それが人々の普通の経験から遠ざけることはなく、他の人々がなんと言おうと、あるいはどう攻撃しようとも、彼らは神を愛することができるのだ。祈りの中では常に、かつて神に借りがあったと感じ、そして神を満足させよう、再びそういったことに遭遇したなら肉を放棄しようと思心するのである。この力は聖霊の働きが彼らの内にあることを示すものであるし、これこそが聖霊の働きの正常な状態なのである。

サタンから来る働きとは何か。サタンから来る働きにおいては、人々のビジョンは曖

昧で抽象的であり、正常な人間性を持たず、彼らの行動の背後にある動機は間違っている。そして神を愛したいと願いはしても、常に心に自責の念があり、そういった自責の念や思いが内で互いに干渉し、彼らのいのちの成長を制約し、神の前に正常な状態を持ってないようにする。つまり、人々の内にサタンの働きが始まるやいなや、彼らの心は神の前に平安を失い、自分でもどうしたら良いかわからず、兄弟姉妹の集まりが目に入れば逃げたくなり、他の人が祈る時に目を閉じることができない。悪霊の働きは人と神との正常な関係を壊し、人々がそれまで持っていたビジョンや、以前のいのちの入りへの道を混乱させる。心の中で彼らは神に近くことが決してできず、いつも彼らに分裂を引き起こし、足かせとなるような事が起こり、心は平安を見つけられず、神への愛の力はなくなり、霊が沈んでいく。こういったことがサタンの働きの顕現なのだ。サタンの働きは次のような事柄に現れる。堅く立っていることができずに証しとなることができず、それがあなたを神の前に落ち度のある者、神への忠実さを全く持たない者とさせる。サタンからの干渉により、あなたは自らの内に神への愛や忠実さを失う。あなたは神との正常な関係を剥ぎ取られ、真理や自らを改善することを求めず、後戻りし、受け身となり、自分を甘やかし、罪が広がるのをなすがままにし、罪を憎まなくなる。さらに、サタンからの干渉はあなたをふしだらにし、神があなたの中で触れたものは消えてしまう。そしてあなたは、神について不平を言って神に対抗し、そして神を疑うようになり、そこにはさらにあなたが神を離れる危険性もある。このすべてはサタンの働きである。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

神は、優しく、愛に溢れ、繊細で、思いやりのある方法で、特別に配慮された適切な方法で働きます。神の方法は、「神は私にこれをさせてくれるべきだ」とか、「神は私にそれをさせてくれるべきだ」のような強い感情をあなたに抱かせることはありません。神は物事が耐えがたくなるような強い考え方や強い感情をあなたに与えることは決してありません。そうではありませんか。たとえ神の裁きと刑罰の言葉を受け入れるときでさえ、あなたはどう感じますか。神の権威と力を感じるとき、あなたはどう感じますか。神は神聖で害することができないと感じますか。（はい。）そのようなときに、あなたは神から遠ざけられたと感じますか。神に対する恐怖を感じますか。感じません。そのかわりに、あなたは神に対する畏敬の念を感じます。人は神の働きのおかげで、これらすべてのことを感じるのではないですか。

…神は人間に働きかけ、人間は神の態度と心の両方において大切にされています。一

方、サタンは人間を大切にしますか。サタンは人間を大切にしません。サタンは人間をどうしたいのですか。サタンは人間を傷つけたいのであり、そのことしか考えていません。そうではありませんか。サタンが人間を傷つけることを考えているとき、サタンは喫緊の精神状態でそうしますか。（はい。）人間に対するサタンの業に関しては、サタンの悪意のある邪悪な本性を十分に言い表し、あなたがたがサタンの憎らしさを知ることができる二つの語句があります。サタンが人間に接近する際に、サタンは常に強制的に一人ひとりの人間を占有し、一人ひとりの人間に取り憑き、害を及ぼすところまで到達し、サタンの目的を果たし、無謀な野望を実現させようとしします。「強制的に占有する」とはどういう意味ですか。それはあなたの同意の上で、それとも同意なしで起こりますか。あなたが知っていて、それとも知らないうち起こりますか。それはまったく知らないうちに起こります。あなたが意識していない状況において、おそらくサタンがまだ何も言っていないとき、おそらくまだ何も行っておらず、何の前提も脈絡もないとき、サタンはあなたを取り囲んでそこにいるのです。サタンは利用する機会を探しており、次にあなたを強制的に占有し、あなたに取り憑き、あなたを完全に支配し危害を加えるという目的を果たします。これが、サタンの人類を手に入れるための神との戦いにおける典型的な意図と振る舞いです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一の神自身 4」より

聖霊は自分の中で常に業を行っている、という者も居る。それは不可能である。仮に、そうした者が、聖霊は常に自分と共にあると言うのであれば、それは現実的であろう。仮に、そうした者が、自分の思考や理知は常に正常である、と言うのであれば、それもまた現実的であり、それは、聖霊がそうした者と共にあることを示すであろう。だが、聖霊は常に自分の中で業を行っている、どの瞬間も、自分は神により啓かれ、聖霊に触れられ、常に新たな認識を得ている、とあなたが言う場合、それは正常ではない。それは極めて超自然的である。そうした人々が悪霊であることに何の疑いも無い。神の霊が受肉した時でさえ、時には休息し、また食事をする必要があったのだから、あなたにそのようなことが必要なことは言うまでもない。悪霊に取り憑かれた者は、肉の弱さが無いように思われる。そうした者はあらゆる物事に背いて捨て去ることが可能であり、冷淡であり、苦悩に耐えることが可能であり、肉体を超越したかのように、全く疲労を感じない。これは極めて超自然的ではないだろうか。悪霊の業は超自然的であり、人間には出来ない業である。区別がつけられない人々は、そうした者を見ると羨み、そうした者の神への信仰は極めて強く、優れており、そうした者は弱いことが決してないと言

う。実のところ、これは悪霊の業の表れである。なぜなら、正常な人間には必然的に人間の弱みがあり、それが聖霊の存在が有る者の正常な状態だからである。

『言葉は肉において現れる』の「実践（４）」より

説教と交わりの参考箇所

聖霊の主な働きは啓きと照らしであり、人に神の御言葉を理解させ、それに入らせることです。すなわち、人が真理を理解し、真理に入るように導き、ありとあらゆる試練と環境の中で人を啓いて照らし、神の御心を理解させることです。もちろん、人を救いに導くという目的で、聖霊は様々な人や物事を通して、人を暴露し、刈り込み、鍛え、罰します。聖霊はすべてを支配し、ありとあらゆる状況を采配して人を変え、完全にします。神の救いの働きにおいて、聖霊の働きは多岐にわたりますが、それは例外なく救いに関わるものです。聖霊の働きは隠れており、表面的にはまったく超自然的に見えませんが、経験がある人は心の中ではっきりと理解しています。それに対し、悪霊の働きはとてつもなく浮世離れしており、目に見え、感じられ、とても異常です。悪霊の所業から、悪霊は自己顕示を特に好み、真理のかけらもなく、非常に邪悪であることがわかります。たとえ悪霊が人に何年働きかけても、人の墮落した性質は少しも変わりません。むしろますます正常でなくなり、正常な人の理知を失いさえします。これが悪霊の働きの結果です。サタンとありとあらゆる悪霊はこのようにして人を墮落させ、人を縛り、人を惑わすのです。ついには、人は幽霊となり、悪霊に惑わされた人はサタンに奪われ、呑み込まれます。聖霊の働きはすべて人類の救いに関わるものであり、聖霊の働きがあればあるほど、人は真理を理解できるようになり、ますます正常な人間性を有し、ますます人間らしくなります。最後には神の救いを得て、真理と完全な人間性をもつ人になります。聖霊の働きと悪霊の働きとの主な違いは次のとおりです。悪霊は人を墮落させ、人を縛り、結局は幽霊にすることしかできません。聖霊の働きは、墮落した人を救いにおいて清め、真理と完全な人間性を与えます。聖霊の働きは、サタンによって墮落して汚れた霊の部類に属した人を、真に聖い人にすることができます。単純に言えば、サタンによって墮落して悪魔となった人を人間に戻すのです。これが聖霊の働きと悪霊の働きの違いです

「兄弟の交わり」より

さまざまな悪霊の働きと聖霊の働きの明確な違いは具体的に次の側面に現れます。聖霊は、真理を追い求め、良心と理知をもつ正直な人を選びます。聖霊が働きかけるのは

このような人です。悪霊は、狡猾で馬鹿げた人、真理への愛がない人、良心も理知もない人を選びます。悪霊が働きかけるのはこのような人です。聖霊の働きのために選ばれた人と、悪霊の働きのために選ばれた人を比べて分かるのは、神が聖く義であること、神に選ばれた者は真理を追い求め、良心と理知をもち、比較的正直で、正義を愛していることです。悪霊に選ばれた者は狡猾で、利己的で下劣で、真理への愛がなく、良心も理知もなく、真理を追い求めることもなく、真の人類ではありません。悪霊は負の物事しか選びません。そのことから分かるのは、悪霊が邪悪さと暗闇を愛し、真理を追い求める者からは避けるように離れ、歪んだ狡猾な者、不義なことに心を奪われた魅せられやすい者にはすぐに取り憑くということです。悪霊がその中で働こうと選んだ人は救いを得られず、神によって淘汰されます。いつ、そしてどのような背景において悪霊は働きかけるのでしょうか。悪霊は人が神から遠く離れ、神に反抗している時に働きかけます。悪霊の働きは人を惑わすことです。人が罪を犯す時、最も弱っている時、特に心にひどく苦しんでいる時、混乱して途方にくれている時、悪霊はそうした機に乗じて人を惑わし、墮落させ、人と神の間に不和の種をまきます。人が神の名を呼ぶ時、人の心が神の方に向く時、人が神を必要とする時、人が神の前で悔い改める時、あるいは人が真理を求める時、聖霊は彼らに働きかけ始めます。聖霊が働くのはすべて人を救うためであり、聖霊は人を救う機会を探していますが、それに対して悪霊は人を墮落させ、欺く好機を狙っています。悪霊は下劣で邪悪、陰険で悪意があります。悪霊のなすことはすべて、人を呑み込み、墮落させるためであり、聖霊のなすことはすべて愛のため、人の救いのためです。聖霊の働きの効果とは、人が清められ、墮落から救われ、自分自身とサタンのことが分かるようになり、サタンに逆らえるようになり、真理を追い求め、最終的には人間らしく生きられるようになることです。悪霊は人を墮落させ、汚し、束縛します。悪霊は人をますます深く罪に陥れ、人の暮らしにますます大きな痛みをもたらします。そのため、悪霊が人に働きかけると、人は一巻の終わりです。ついにはサタンに呑み込まれてしまいます。それが悪霊の働きによる結果です。聖霊の働きの効果とは、人が最後には救われ、本当のいのちを生きるようになり、完全に解放されて自由になり、神から祝福を受けることです。悪霊は人を暗闇にいざない、奈落の底へと連れていきます。聖霊は人を暗闇から連れ出し、光の方へ、そして自由へといざなうのです。聖霊の働きは人を啓いて導き、人に機会を与え、人が弱っていて過ちを犯している時、慰めをもたらします。聖霊により人は自分自身を知ることができ、真理を追い求めることができます。また、聖霊は人にこうせよと強要するのではなく、自分の進む道を自分自身で決めさせて、最終的には光へと導くのです。悪霊は人にこうせよと強要し、あれこ

れと命令します。悪霊の言うことはすべて偽りであり、人を惑わし、欺き、束縛します。悪霊は人に自由を与えず、選ばせることもなく、破滅への道に押しやり、ついにはますます罪へと深く陥れ、死へと導きます。

『いのちの入りについての説教と交わり (II)』の「聖霊の働きを知ることは、人間の救いにとって最も重要である」より

悪霊の働きの最も顕著な特徴は、それが超自然的であること、悪霊が話す言葉や人々に行うよう求めることは異常で、非論理的であり、正常な人性と人間関係における基本的道徳に反することさえあり、それらはただ人々を欺き、混乱させ、墮落させることのみを目的としているということです。悪霊が取り憑くと、大きな恐怖を感じる人もいれば、異常になる人もおり、また、放心状態に陥ったり、ものすごい不安に襲われて、じっと座っていられなくなる人もいます。いずれにせよ、悪霊が人間に取り憑くと、人は変わり、人間でも悪魔でもないものになり、正常な人性を失ってしまいます。これは悪霊の本質が邪悪で醜悪であることを証明するに十分であり、まさにそれはサタンの本質なのです。悪霊は人々に嫌悪感と軽蔑感を与え、絶対に人々の益になることも助けになることもありません。サタンとあらゆる種類の悪霊どもが唯一できることといえば、人々を墮落させ、害し、食い尽くすことだけです。

悪霊が働いている者たち（悪魔に憑かれている人々）の主な兆候は次のとおりです。

第一の特徴として、悪霊はこうしろ、ああしろと人々に命じたり、誰かに何かを告げたり、人々を誘導して偽りの預言をさせたりします。

第二の特徴として、人々はしばしば祈りの中で誰にも理解することのできない、いわゆる「異言」を話すことがあり、話している本人ですらそれを理解できないのです。異言を話す者たちの中には、いわゆる「異言の解釈をする」ことができる人さえいます。

第三の特徴として、非常に頻繁に啓示を受け、ある時はこのように、次の瞬間にはあのように、といった具合に悪霊によって振り回され、絶え間なく続く不安状態に陥る人がいます。

第四の特徴として、悪霊が働いている人々は、急にこれをやりたい、あれをやりたいと、居ても立ってもおられなくなり、状況の良し悪しも考慮することなく、真夜中に外へとび出すことさえあり、その行動は極めて異常です。

第五の特徴として、悪霊が働いている人々は、ものすごく傲慢で、理性に欠け、何を話しても人を見下すような態度をとり、他人に指図する立場でしかものを言うことがで

きません。彼らは人々を途方にくれさせ、悪魔と同じように人々に物事を強制します。

第六の特徴として、悪霊が働いている人々は、真理について交わることができず、ましてや神の働きに注意を払うことなく、神に対して反抗的な態度をとり、勝手気ままに行動し、あらゆる種類の暴挙を働いて教会の通常の秩序を乱します。

第七の特徴として、悪霊が働いている人は、何の理由もなく自分を誰か他の者として押し通し、あるいは、自分は誰かに遣わされて来たのだから、自分の言うことに耳を傾けるべきだと主張します。彼がどこから来たのか、つきとめることのできる人はいません。

第八の特徴として、悪霊が働いている人々は、たいてい正常な理性を持っておらず、どんな真理も理解することがありません。彼らは何かを受け取る能力を持ちあわせておらず、聖霊によって啓示を受けることもありません。また、誰の目にも明らかなのは、これらの人々は、何かを受けたとしても、余りにもでたらめで、正しいことが一切ないということです。

第九の特徴として、悪霊が働いている人々は、働きの最中、他の人に講義することに特に重点を置きます。彼らはいつも乱暴にふるまい、常に妨害と混乱を引き起こします。彼らは何をやっても何を言っても、他の人たちを攻撃し、束縛し、墮落させることしかせず、人々の決意をくじいて否定的にならせ、再び立ち上がることができないようにします。彼らは正真正銘の悪魔であり、他の人に危害を加え、他人を弄び、食い尽くします。そして彼らは、事が自分の思い通りにいくと、ひそかに喜んでいるのです。これが悪霊の働きの主な目的です。

第十の特徴として、悪霊が働いている人々は、極めて異常な生活をしています。彼らの目は人殺しのようにぎらつき、彼らが話す言葉は、あたかも悪魔が世界に舞い降りたかのように、非常に残酷です。このような人の生活にはまったく秩序がなく、彼らは非常に不安定で、飼い慣らされていない野獣のように気まぐれです。他の人々にとって、彼らは極めておぞましく、鼻持ちならないのです。まさしくこれが悪魔によって縛られた人間の特徴です。

上に挙げた十の特徴は、悪霊の働きの主な表象です。これらの表象の一つでも顕れている人には、必ず悪霊が働いています。もっと正確に言えば、上記の悪霊の働きの表象を示している者は皆、それがどのような表象であれ、悪霊の働いている人々なのです。

悪霊の働きのある人は、聖霊が働いている人、真理について交われる人をしばしば憎

み、その人から遠ざかります。多くの場合、相手が優れているほど攻撃と断罪の対象にしたいと思います。相手が愚かなほど媚びへつらおうとし、特に接触しようと思います。悪霊は働くとき、常に真理を偽りと混同し、正を負、負を正と言います。これがまさに悪霊の所業です。

『全能神教会内の働きに関する取り決め記録選集』の「各教会が解決を急ぐべき十二の問題」より

働きが明らかに超自然的である霊は悪霊であり、霊が人において行う超自然的な働きと発言はどれも悪霊の働きです。悪霊の働き方はすべて異常で超自然的であり、主に次の六つの形で現れます。

- 1.人の発話を直接操る。その人自身が正常に語っているのではなく、悪霊が語っている明らかな証拠です。
- 2.悪霊が人に指示を出し、あれこれ命令しているのではないかという感覚。
- 3.部屋にいるとき、誰かが入って来るのがわかる。
- 4.他人には聞こえない声が自分に語りかけているのが頻繁に聞こえる。
- 5.他人が見聞きできないものを見聞きできる。
- 6.常に落ち着きがなく、独り言を言い、人と正常な会話ややり取りができない。

悪霊が働いているすべての人には必然的にこれらの六つの兆候があります。そのような人は理知がなく、そわそわしており、他人と正常な付き合いができません。まるで理知が通用しないかのようで、どこか超然として現世離れしたところがあります。そのような人は悪霊に取り憑かれているか、悪霊が働きかけているのであり、悪霊の働きはすべて目に見え、超自然的です。これは悪霊の最も顕著な働きです。悪霊は取り憑いた相手をもてあそび、すっかり蝕みます。その人はゾンビのように理知を失います。このことは、悪霊が本質的に人を墮落させて呑みこむ悪しき霊である証拠です。悪霊の発言は容易に見極められます。それは悪霊の悪しき本質を見事に表しており、よどんだ水のようで、濁っており、臭いがひどく、死臭も発します。優れた素質の持ち主にとって、悪霊の言葉は空虚で面白みも啓発性もなく、うそと駄弁に過ぎず、混乱していて難解で、戯言だらけように感じられます。これは悪霊の戯言の最も顕著な特徴の一部です。高等な悪霊の中には、人を魅するために、神やキリストのふりをして語るものや、天使や有名人のふりをするものもあります。このような悪霊は神のある特定の御言葉や言い回し、語調を真似て語ることに長けており、真理を理解していない人はそのような高等な悪霊

に騙されがちです。神の選民は、悪霊とは本質的に邪悪で厚かましく、たとえ高等な悪霊であっても、真理がまったく欠けていることを理解しなければなりません。悪霊は結局のところ、悪霊であり、悪霊の本質は邪悪であり、サタンと同類なのです。

『全能神教会内の働きに関する取り決め記録選集』の「悪魔の戯言と悪霊の邪説、偽キリスト、反キリストをいかに見抜くか」より

3. 真のキリストと偽キリストたちの識別

関連する神の言葉

神は肉となりキリストと呼ばれ、真理を人に与えることのできるキリストは神と呼ばれる。ここには何の誇張もない。なぜなら、彼は神の本質を持っており、神の性質を持っており、その働きには知恵があり、これらはどれも人間の手の届かないものだからだ。自らキリストを称するが、神の働きを行えない者は、詐欺師である。キリストは、単なる地上における神の顕現ではなく、神が人の間で業を行い完成させるため神が宿った特有の肉体でもある。この肉体は、誰でも代われるものではなく、地上における神の業を適切に引き受け、神の性質を表し、神を十分に象徴し、人にいのちを与えるものである。遅かれ早かれ、キリストになりすましている者たちはみな倒れる。彼らはキリストと自称しながら、キリストの本質は全く持っていないからだ。だから、キリストの真偽は人が定めることのできるものではなく、神自身が答え定めるものだと言わしは言うのだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

このようなことを考察するのは難しいことではないが、わたしたちそれぞれにこの真理を知ることが要求される。受肉した神は神の本質を有し、受肉した神は神による表現を有する。神は人間の姿になるので、なすべき働きを打ち出し、神は人間の姿になるので、自分が何であるかを表して、人に真理をもたらし、人にいのちを与え、人に進むべき道を示すことができる。神の本質を含んでいない肉体が受肉した神ではないことは間違いなく、これについて疑う余地はない。受肉した神かどうか調べるためには、その人が表す性質や話す言葉からそれを決めなければならない。つまり、人間の姿になった神かどうか、それが真の道かどうかは、その人の本質から判断しなければならない。そこで、人間の姿になった神かどうかを決定するとき[a]、鍵となるのは、外見よりもむしろその人の本質（働き、言葉、性質、その他いろいろ）に注意を払うことである。外見

だけを見て本質を見落とす者は、自分の無知、単純さをさらけ出すことになる。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

キリストは地上で神自身の代わりに働くが、肉となった姿を人々に見せようと来るのではない。すべての人が彼を見るために来るのではない。自身の手によって人が導かれ、新たな時代へ入ることができるように来るのである。キリストの肉の役割は、神自身、つまり肉における神の働きを果たすことであり、人にキリストの肉の本質を十分理解させることではない。キリストがいかに働いても、それは肉に実現可能なことを超えるものではない。キリストがいかに働いても、普通の人間性を持つ肉において働くのであり、神の真の姿を人に全て明らかにしてはいない。それに加えて、キリストの働きは、人間が思うような超自然的なものでも、計り知れないものでもない。キリストは肉において神自身を現わし、神自身のすべき働きを自ら遂行するけれども、天の神の存在を否定したり、自身の業を大々的に公表したりしない。むしろ、謙虚に自身の肉のうちに隠れたままではいる。キリスト自身以外でキリストを偽って名乗る者はみな、キリストの性質を持ってはいない。そのような偽キリストの高慢で自画自賛的な性質をキリストの性質と比べたならば、キリストの肉がどのようなものであるかは明白である。偽りの多い偽キリストであればあるほど自分自身を誇示し、人を欺くしるしや不思議を多く行うことができる。偽キリストたちは神の属性を持っていない。キリストは偽キリストの要素で汚されてはいない。神は肉の働きを全うするためだけに肉となるのであり、単に人間が神を見ることができるようになるのではない。むしろ、彼は働きを通して彼の身分を明確にし、彼の現すものによって彼の本質を証明する。彼の本質は根拠のないものではない。彼の身分は自身の手によって握られてはいなかった。それは彼の働きと本質によって決定される。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

この時代に、しるしや不思議を起こし、悪霊を追い払い、病人を癒やし、多くの奇跡を起こせる人が現れて、またその人が再来したイエスであると主張したなら、それは悪霊が偽ってイエスのまねをしているのである。これを覚えておきなさい。神は同じ働きを繰り返さない。イエスの段階の働きはすでに完了し、神は二度と再びその段階の働きをしない。神の働きは人間の観念とは相容れない。たとえば、旧約はメシアの到来を預言した。それでイエスが来たのだ。だから、別のメシアがまた来るというのは、間違っている。イエスはすでに一度来た。だから、イエスがこの時代に再び来るというのは、間違いだ。すべての時代は一つの名をもち、その名は各時代を表している。人間の観念

では、神は常にしるしや不思議を見せ、病人を癒やし、悪霊を追い払い、いつでもイエスのようであればならないのだが、神は今回決してそのようなことはしない。もし終わりの日に神がしるしや奇跡を示し、まだ悪霊を追い払ったり病人を癒やしたりしていたら——それならば、神はイエスの働きと同じ働きを繰り返していることになり、イエスの働きは無意味で無価値ということになる。だから、神は、時代ごとにひとつの段階の働きをするのだ。ひとたびその段階の働きが完了すれば、すぐさまそれを悪霊がまねをし、サタンが神のすぐ後ろからついていく。神は方法を変更する。一度神がその段階の働きを完了すると、悪霊がまねをする。それを理解しておきなさい。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知ること」より

悪霊に取りつかれ「私が神だ!」としつこく叫んでいる人たちがいる。しかし、最後まで彼らは立ち続けていることはできない。というのは、彼らは自分が何を表しているかに関して誤っているからである。彼らはサタンを表し、聖霊は彼らに何の注意も払わない。自分をどれほど高く褒めたてても、どれほど力強く叫んでも、あなたは依然として被造物であり、サタンに属する者である。わたしは決して、「わたしは神である、わたしは神の愛するひとり子である」と叫ぶことはない。しかし、わたしがする働きは神の働きである。わたしは叫ぶ必要があるだろうか。褒めたてる必要はない。神はその働きを自分で行なうのであり、人に地位や敬称を与えてもらう必要はない。神の働きは神の身分と地位を表すのに十分である。バプテスマの前、イエスは神そのものではなかったのか。イエスは受肉した神の肉体ではなかったのか。イエスは証をされて初めて神のひとり子となったのだ、などと言うことは到底できない。イエスという名の人がイエスが働きを開始する前には存在しなかったのだろうか。あなたは新しい道を作ること、霊を表すこともできない。霊の働きや、霊が話す言葉を表現することもできない。神自身の働きや霊の働きを遂行することもできない。神の知恵、不思議、計り難さを表現することも、神が人を罰する性質の全てを表現することもできない。だから、あなたが神であると主張しようとするのは意味がない。あなたは名前があるだけで、実体が全く伴っていない。神自身が来たが、誰もその人を神と認識しない。しかし神はその働きを続け、霊を表すことで働く。あなたがその人を人と呼ぼうと神と呼ぼうと、あるいは主と呼ぼうとキリストと呼ぼうと、あるいは姉妹と呼ぼうと、それは構わない。しかしその人がする働きは霊の働きで、神自身の働きを表している。その人は人々がどのような名前と呼ぶかには関心を持っていない。名前が神の働きを決定することができるだろうか。あなたがその人をどのような名で呼んでも、神に関する限り、その人は神の霊の受

肉した肉体である。この人は霊を表し、霊によって承認されている。新しい時代のために道をつけることができない、あるいは古い時代を終わらせたり、新しい時代の到来を告げたり、新しい働きをすることはできないのであれば、あなたは神と呼ばれることはできない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（１）」より

説教と交わりの参考箇所

もし誰かが神の選びの民を混乱させ、自分は受肉の神、キリストであると言うなら、私たちはその人がキリストであるかどうかを確認するために、その人の本質と表現、働きと言葉、それにその人が現す性質を見極めなければなりません。これらの主要な側面からその人の本質を見ることによって、彼が受肉の神であるかどうかを確かめることができます。まず最初に、私たちは働きの側面から、その人の働きが神の働きであるかどうか、彼が神の御言葉と、神が所有されるものと、神の存在と、神の義なる性質を表現することができるかどうかを見極めるべきです。もしそれが人間の働きであれば、その人は人間が持っているものすべてと人間の存在のすべてと、人間の経験と理解についてしか話すことができないでしょう。彼は、神の経営（救いの）計画と奥義のことはおろか、神が所有されているすべてのものと神の存在のすべて、神の働きと要求と性質について語ることはできません。第二に、言葉の側面から見れば、神の御言葉と人間の言葉の間には本質的な違いがあります。神の言葉は、神が所有されるものすべてと神の全存在を代表しており、人間の言葉は、人間が持っているものすべてと人間の存在のすべてを代表しています。神の言葉は神の性質を表しています。人間の言葉は人間の人性を表しています。神の言葉は真理です。人間の言葉は真理ではありません。それは真理に属していません。第三に、性質の側面から見ると、神の働きは神の性質を表すことができます。人間の働きは神の性質を表現することができず、その人の性格しか表現できません。人間の性格にはどのようなものがありますか。義、威厳、怒り、真理などがあるでしょうか。人間の性格には、神が所有されているものと神の存在がまったくありません。だから人間の働きには神の性質の片鱗すらありません。これらの側面から、それが神の言葉であるのか人間の言葉であるのか、神の働きであるのか人間の働きであるのかをたいへん容易に判断できます。これらの側面からその違いを判別できないなら、人は偽キリストや反キリストによって簡単に混乱させられてしまいます。これら三つの側面によって違いを判別できれば、あなたは誰が受肉の神で、誰がそうでないのかを断定することができるでしょう。働きと言葉と性質——外見によって判断するのではなく、これ

らの三つの側面から違いを判断するのが最も正確です。

『いのちの入りについての説教と交わり (II)』の「偽キリストと反キリストの惑わしをいかに見抜くか」より

脚注

a. 原文では「～かどうかに関しては」と書かれている。

4. 真の道と偽りの道、真の教会と偽の教会の識別

関連する神の言葉

真の道を探求する上での最も基本的な原則は何だろう。あなたは、この道に聖霊の働きがあるかどうか、それらの言葉が真理を述べているかどうか、誰について証しされているのか、それが何をもたらすか、といったことを調べなければならない。真の道と偽りの道とを判別するには、いくつかの基本的な知識が必要だ。最も基本的なことは、そこに聖霊の働きがあるかどうか、ということである。人間の神への信仰の真髄は神の霊を信じることであるからだ。そして、受肉した神への信仰でさえ、その肉が神の霊の体現であることに基づいている。だから、そうした信仰はなおも聖霊への信仰であるということになる。霊と肉の間には違いがある。しかし、この肉体は霊から来たものであり、肉となった言葉であるのだから、人間が信じるのは、なおも神に内在する実質なのだ。そこで、それが真の道であるかどうかを区別するには、何よりもまず、そこに聖霊の働きがあるかどうかを見て、その後で、その道に真理があるかどうかを見るのだ。この真理は正常の人間性のいのちの性質である。つまり、神がはじめに人間を創造した時に人間に要求したこと、すなわち、（人間の理知、見識、知恵そして、人間であることの基本的な知識を含む）正常の人間性すべてである。即ち、この道が人間を正常な人間性の生活に導けるのかどうかを見極めなければならない。述べられている真理が正常の人間性の現実において必要なものかどうか、この真理が実用的で現実的であるかどうか、また、それは最も時宜にかなったものであるかどうか、といったことを見極めなければならない。もし真理があるのなら、それは人間を普通の現実的経験へと導くことができるはずだ。更に、人間はいっそう正常になり、人間としての理知はより完全になる。人間の肉体における生活と霊的生活とはさらに秩序あるものとなり、喜怒哀楽はより正常なものとなる。これが第二の原則である。もうひとつの原則がある。それは、人間は神についてより多くの認識をもっているかどうか、そのような業と真理を経験することは神への愛を呼び起こすかどうか、その人をより親密に神のもとへ近づけるかどうかとい

うことだ。このことによって、それが真の道であるかどうか見定めることができる。最も基本的なことは、この道が超自然的なものではなく、現実的なものであるかどうか、また、それが人間にいのちを与えるものであるかどうかということだ。もしそうした原則にかなうものであれば、この道が真の道であると結論づけられる。わたしがこれらのことを述べるのは、あなた方の将来の経験において別の道を受け入れさせるためではなく、また、もうひとつ別の新時代の業が将来現れると予言するためでもない。わたしがこれらのことを述べるのは、あなた方が、今ある道が真の道であると確信でき、今日の業をただ半信半疑で信じ、その業について不確かで見通すことができないようなことのないようにするためである。自分では確信を持ってはいても、まだ惑いの道を辿っている人々さえいる。そのような確信は信条に基づいたものではないから、彼らは遅かれ早かれ、除かれなければならない。とりわけ熱心に従っている者たちでさえ三割は確かだが、五割は不確かである。このことは、その人たちには基礎がないことを示している。あなた方の能力はあまりに貧弱であなた方の基礎が浅すぎるために、区別することがわかっていないのだ。神は同じ業を繰り返しはしない。現実的でない働きは行なわない。神は人間に過大な要求をしない。また、神は人間の理知の外にある業は行なわない。神が為す業はみな、人間の正常の理知の範囲内で行われ、本来の人間の理知の外には及ばない。また、神の働きは人間の正常な必要に沿ったものである。もしそれが聖霊による働きであるなら、人間はずっと正常になり、その人間性はさらに正常になる。人間はサタンのような堕落した自分の性質、人間の本質についての認識を増し、真理への渴望は更に大きくなる。これはつまり、人間のいのちがどんどん成長し、人間の堕落した性質においては、より一層の変化が可能となる。これら全てが神が人間のいのちになるということの意味である。もし、ある道が、人間の本質であるこれらのものを明らかにすることができないのなら、また人間の性質を変えることができないのなら、さらにまた、人間を神の前へ導き、神についての真の理解を与えることができないのなら、あるいは、人間性をさらに卑しめ、その理知をますます異常なものにするのなら、その道は真の道ではあり得ず、悪霊の業、あるいは、古い道なのだ。要するに、それは聖霊が現在為している働きではないということだ。

『言葉は肉において現れる』の「神とその働きを知る者だけが神の心にかなう」より

神の働きの各段階において、それに対応する人間への要求がある。聖霊の流れの中にいる者たちは皆、聖霊の臨在と鍛錬を備えており、聖霊の流れの中にいない者たちはサタンの支配下にあり、そうした者には聖霊の働きがまったくない。聖霊の流れの中にい

る人々は、神の新たな働きを受け入れ、神の新たな働きの中で協力する者である。現在において、その流れの中にいる者たちが協力できず、神に要求された通りに真理を實踐できないとすれば、そうした者は鍛錬を受け、最悪の場合は聖霊に見捨てられるであろう。聖霊の新たな働きを受け入れる者は聖霊の流れの中で生き、聖霊の配慮と守りを授かるであろう。真理を實踐することを望む者は、聖霊により啓かれ、真理を實踐することを望まない者は、聖霊から鍛錬を受け、罰を受けることさえあるだろう。そうした者がどのような人間であれ、そうした者が聖霊の流れの中にいる限り、新たな働きを神の名において受け入れる者全てについて、神は責任を負うであろう。神の名を讃美し、神の言葉を実践することを望む者は、神の祝福を得るであろう。神に反抗し、神の言葉を実践しない者は、神の罰を受けるであろう。聖霊の流れの中にいる人々は、新たな働きを受け入れる者であり、新たな働きを受け入れたのであれば、神との適切な協力を行うべきであり、自らの本分を尽くさない反逆者となってはならない。神の人間に対する要求は、これだけである。しかし、新たな働きを受け入れない人々には、この限りでは無い。そうした者は聖霊の流れの外にいたので、聖霊の鍛錬や咎めは、そうした者に適用されない。そうした者は終日肉の中で生活し、自分の心の中で生活し、そうした者の行動は、全て自分の脳による分析と研究により生み出された教義に従っている。それは聖霊の新たな働きにおける要求ではなく、ましてや神との協力などではない。神の新たな働きを受け入れない者には神の臨在がなく、その上、神の祝福と守りが欠如している。そうした者の言動は、殆どが聖霊の働きの過去における要求に固執している。それらは教義であり、真理ではない。そうした教義や規則は、そうした者が集う理由が宗教だけであることを十分に示している。そうした者は選ばれた者たちでも神の働きの対象でもない。そうした者の会合は、宗教の総会としか言いようがなく、教会とは呼べない。これは変えようのない事実である。そうした者には聖霊の新たな働きが無い。そうした者の為すことには宗教の匂いがあり、そうした者が行動で示している事は、宗教で満ちている。そうした者には聖霊の臨在と働きが無く、ましてや聖霊から鍛錬や啓きを受ける資格など無い。これらの人々は、全員いのちの無い屍であり、霊の無い蛆虫のようなものである。そうした者には人間の反逆性や反抗性、人間による様々な邪悪な行いに関する認識が全く無く、ましてやそうした者は神の働きや神の現在における心など知らない。彼らはみな無知で下劣な人間であり、信者と呼ばれるに相応しくない人間のくずである。彼らの為すことには神の経営に関連する事は一切なく、ましてや神の計画を損なうことはできない。彼らの言動は過度に不快であり、たいへん惨めであり、まったく語るにも値しない。聖霊の流れの中にいない者の為すことは、一切が聖霊の新たな働きと

無関係である。そのため、そうした者がどう行動するかを問わず、彼らは聖霊の懲らしめを欠いている上、聖霊の啓きにも欠けている。何故なら、彼らはみな真理への愛を持たない人々であり、聖霊から忌み嫌われ、見捨てられたからである。彼らは悪を行う者と呼ばれる。何故なら、彼らは肉にあって歩み、神の看板の下に、自分が満足するあらゆる物事を行うからである。神が働きを行う間、そうした者は神に対して故意に敵意を抱き、神と反対方向に向かって走る。人間が神と協力しないことは、それ自体が最も反逆的であるので、故意に神に逆らうそうした人々は特に然るべき罰を受けるのではないだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

説教と交わりの参考箇所

宗教界全体がそれに敵意をもって反対していなければ、それは真の道ではありません。真の道なら確実に大多数の人々が、更に言えば、世界が反対するはずだということを覚えておいてください。主イエスが働き、説教するために初めて出現された時、ユダヤ教全体が主に反抗しなかったでしょうか。神が新たな働きを始められる時、それは常に墮落した人類には到底受け入れがたいのです。神の働きが人々の観念と合致せず、否定するものだからです。人々は理解力に欠けており、霊の領域を見極めることができません。聖霊の働きがなければ、人々は真の道を受け入れることができません。それが神の働きであると信じられていても、宗教界から反対されず、世界からの反抗と敵意もなければ、この神の働きは偽りであるという証拠になります。人類はどうして真理を受け入れられないのでしょうか。第一に、人は肉のものであり、物質的な存在だからです。物質的なものは霊の領域を見極めることができません。「霊の領域を見極められない」とはどういうことでしょうか。それは霊そのものも、霊とその領域の活動も見えない、神のなさることも仰ることに気付けないということです。霊の領域での出来事が見えないということです。物質世界では人には物質的なものしか見えません。どの霊が人にどの働きをするかも、神の霊が何をしに、何を語りに来たのかも見せません神の声が聞こえることもあります、どこから来たのかわかりません。書物から神の御言葉を読むことはできても、神がこの御言葉をどのように、いつ語られたのかも、それが何を意味するのかも分かりません人には霊の領域を見極めることも、神の御言葉の出所を把握することもできません。そのため、真理を理解するには、聖霊の啓きと照らし、聖霊の働きを必要とするのです。第二に、人類はあまりに根深く墮落しており、その内面はサタンの無数の毒と無数の知識で満たされています。サタンの様々な哲学と知識ですべてを評

価するならば、人は真理が何であることを確立させることは決してできません。聖霊の啓きと照らしなくして、真理を理解することはできないのです。そのため、真の道は必然的に人による迫害と拒絶の対象になります。人はなぜ、サタンの知識と哲学を容易に受け入れてしまうのでしょうか。第一に、それが人の肉にまつわる観念や利益と合致しており、人の肉にとって有益だからです。「こういった知識を受け入れたら自分のためになる。これで昇格できる。成功できるし、物事を達成できる。こうした知識があれば、人に尊敬してもらえる」と人は自分に言い聞かせます。自分にとって有益なものであれば、自分の観念と合致するのです……これ程までに墮落して、霊の領域を見極められない人は、神に反抗することしかできず、そのため神の働きは人による拒絶、反抗、断罪に遭ってしまうのです。これは当然のことです。もし神の働きが世界と人類の断罪と反抗に遭わなければ、それは真理でないという証拠です。もし神の語られたことがすべて人の観念と合致していれば、人はそれを断罪するのでしょうか。反抗するのでしょうか。もちろんしないでしょう。

「兄弟の交わり」より

教会は、神によって真に予定され、選ばれた人々から成り立ちます。教会を構成するのは真理を愛し、真理を追い求め、聖霊の働きを得た人々なのです。これらの人々が集まって神の御言葉を飲み食いし、教会生活を送り、神の働きを体験し、それぞれが神の被造物としての本分を尽くした時に初めて、その場は教会でありえるのです。仮にある烏合の衆が、自分たちは本当に神を信じていると言って祈り、神の御言葉を読んでも、真理を愛さず、追い求めることもなく、聖霊の働きなしに宗教儀式を行なうならば、それは教会ではありません。より正確に言えば、聖霊の働きのない教会は教会ではありません。単なる宗教施設であり、宗教儀式を行う人々に過ぎないのです。神に真に従い、神の働きを体験する人々ではありません。

.....

…教会は神を真に信仰して真理を追い求める人々の集まりであり、そこには悪しき者は決して含まれません。そのような者は教会には属さないのです。真理を追い求めず、真理の実践になることを何もしない人々が集まっても、それは教会とは言えません。それは単なる宗教施設、もしくは烏合の衆に過ぎません。教会を構成するのは、神を真に信仰し、真理を追い求め、神の御言葉を飲み食いし、神を崇拝し、本分を尽くし、神の働きを体験し、聖霊の働きを得た人々でなければなりません。これのみが教会なのです。したがって、本当の教会であるか評価する時、まずそこにどのような人がいるかを見

る必要があります。第二に、その人たちが聖霊の働きを得ているかどうかを見なければなりません。その人たちの集会に聖霊の働きがなければ、それは教会ではありません。真理を追い求める人々の集まりでなければ、教会ではありません。もし真理を真に求める人が一人もいないなら、その教会には聖霊の働きがまったくありません。もしそのような教会に真理を求める意志のある人がいて、そこに留まるとしたら、その人は救われません。その人はなるべく早くその烏合の衆を離れ、教会を探すべきです。もし、教会の中に、真理を追い求める人が3人もしくは5人いて、単なる烏合の衆が30人もしくは50人いるとしたら、神を真に信仰し、真理を追い求めているこの3人もしくは5人が集まるべきです。その人たちが集まれば、その集まりは教会なのです。信者の数が最小であっても純粋な教会です。

『いのちの入りについての説教と交わり（VII）』の「教会の働きにおける五つの原則に従って働くことが重要である」より

宗教界の指導者や牧師たちは、神の働きを経験したことも、聖霊によって完全にされて育て上げられたこともないのに、神学校を卒業して卒業証書を受け取った後、宗教界の指導者や牧師になっています。彼らは聖霊の働きと承認を受けていないだけでなく、神に関する真の認識をまったく持っておらず、神学的な知識と理論しか語ることができないのです。彼らは実際に何も経験していません。このような人たちは神に用いられる資格がまったくありません。どうして彼らが人を神の前に導けるのでしょうか。彼らは神学校卒業を自分たちの特権の根拠とし、できる限りのことをして聖書の知識を誇示しようとします。耐え難い程に傲慢なのです。このため、彼らは神に断罪され、忌み嫌われ、聖霊の働きを失っています。これは疑う余地がありません。なぜ宗教界がキリストの不倶戴天の敵となったのかはとても示唆に富む疑問です。恵みの時代にユダヤ教が主イエス・キリストを十字架に磔にしたことは何を示しているのでしょうか。世の終わりにおける神の国の時代に、宗教界は団結し、全力を尽くして世の終わりにおける神の働きに反抗し、断罪してきました。世の終わりに肉となったキリストを否定し、拒絶しています。肉となった神と神の教会に対して様々なうわさを捏造し、攻撃し、中傷し、冒瀆してきました。そして戻られたイエス、世の終わりのキリストを、はるか以前から十字架に磔にしてきたのです。これは、宗教界がとうの昔から、神に敵対し逆らうサタンの勢力に成り下がっていたことを証明しています。宗教界は神が支配するものではなく、まして真理が支配するものでもありません。それは墮落した人、更に言えば、反キリストによって完全に支配されています。

人はこのような宗教施設、すなわちサタンに属し、悪魔と反キリストに支配され、管理されている施設で神を信仰していても、宗教的教義を理解することしかできず、宗教儀式と規制に従うことしかできません。決して真理を理解することも、神の働きを体験することもなく、救われることなどありえません。宗教施設には聖霊の働きがまったくないからです。このような場所は神に厭われ、忌み嫌われ、断罪され、呪われます。神は宗教をお認めになったことはなく、ましてや称賛されたことなどありません。宗教界は主イエスの時代から神に断罪されてきました。そのため、神を信仰するならば、聖霊の働きのある場所を探さなくてはなりません。その場所のみが真の教会であり、人は真の教会でのみ神の声を耳にすることができ、神の働きの足跡を見出だすことができます。これこそが、神を求める方法です。

「兄弟の交わり」より

5. 神に従うことと人に従うことの違い

関連する神の言葉

神に従う中で最も重要なのは、すべては神の現在の言葉に拠らねばならないということである。いのちに入ることを求めているのであれ、神の心にかなうことを求めているのであれ、すべては神の現在の言葉を中心にしなければならないということである。親しく交わり求めるものが神の現在の言葉を中心にしていなければ、あなたは神の言葉を知らない人であり、聖霊の働きを完全に失っている。神が求めるのは神の歩みに従う人々である。あなたが前に理解したことがどれほど素晴らしく純粋であっても、神はそれを求めておらず、そうしたことを脇へやることができないなら、それは将来あなたが真理に入るときの大きな障害になるだろう。聖霊の現在の光に従うことができる人々はみな祝福されている。過去の人々も神の歩みに従ったが、今日まで来ることはできなかった。これは終わりの日の人々の祝福である。聖霊の現在の働きに従うことができ、神の歩みに従える人々は、神が導くところがどこであろうと神に従うのだが、神に祝福されている。聖霊の現在の働きに従わない人々は神の言葉の働きに入っておらず、どれほど働こうとも、苦しみがどれほど大きくとも、どれほど右往左往しようとも、そのどれも神には意味がなく、神はそんな人々を賞賛しないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の最新の働きを知り、神の歩みに従え」より

一部の人々は真理を喜ばず、裁きとなればもっと喜ばない。むしろ、人々は権力と富

に喜びを見出すのであり、そのような人々は俗物と呼ばれる。彼らはもっぱら、影響力を持つ世界中の宗派や、神学校出身の牧師や教師を探し求める。真理の道を受け入れたにもかかわらず、彼らはどこまでも懐疑的で、自分自身を完全に献げることができない。彼らは神のために犠牲を捧げることについて話しはするものの、その目は偉大な牧師や教師に注がれ、キリストは無視されている。彼らの心は名声、富、栄誉にばかり向けられている。彼らは、そのような取るに足りない人がそれほど多くの者を征服することができ、そのような平凡な人が人を完全にすることができるなどと全く信じない。塵と糞の中にいるこれらのとるに足りない人々が神に選ばれているとは信じないのである。もしそのような人々が神の救いの対象であれば、天と地がひっくり返し、すべての人間が大笑いするだろうと彼らは信じている。彼らは、もし神がそのような取るに足りない人々を完全にするために選んだのであれば、先に挙げたような偉大な人たちは神そのものになると信じている。彼らの考え方は不信仰によって汚れている。実際のところ、不信仰どころか、彼らは、ばかげたけだものである。なぜなら、彼らは地位、名声、権力だけに価値を置き、重要視するものは大組織や宗派であるからである。彼らはキリストに導かれる者のことを全く考慮しない。キリストに、真理に、そしていのちに背をむけた裏切り者でしかないのである。

あなたが敬慕するのはキリストのへりくだりではなく、目立った地位にある偽の牧者たちである。あなたはキリストの素晴らしさや知恵を愛さないが、邪悪な世と交わりを持つ奔放な者たちを愛している。あなたは、枕するところもないキリストの苦しみを笑うが、捧げものを奪い取り放蕩な生活を送る屍たちを賞賛するのである。あなたはキリストのそばで苦しむ覚悟はないが、あなたに肉、言葉、支配しか与えない無謀な反キリスト者たちの腕の中に喜んで飛び込む。今でもあなたの心は、彼らに、彼らの評判に、彼らの地位に、そして彼らの影響力に向いている。それなのに、あなたはキリストの働きを飲み込みがたいものにする態度をとり続け、進んでそれを受け入れようとしない。だから、あなたにはキリストを認める信仰がないとわたしは言うのである。あなたが今日に至るまでキリストに従ってきたのは、あなたが強いられていたからに過ぎない。一連の気高いイメージが、あなたの心にいつまでもそびえている。彼らの言葉や行いのひとつひとつが忘れられず、彼らの影響力ある言葉や手も忘れられない。あなたの心の中では、彼らは永遠に至高で、永遠に英雄なのである。しかし、これは今日のキリストにはあてはまらない。彼はあなたの心の中で永遠に取るに足りない存在であり、永遠に畏敬に値しない。なぜなら、彼はあまりにも普通すぎ、あまりにも影響力がなさ過ぎ、高

遠さからははるかにかけ離れているからである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より

説教と交わりの参考箇所

神に従うとは、万事において神に耳を傾け、神のすべての采配に服従し、神の御言葉どおりに行動し、神から来るものをすべて受け入れることです。神を信じる者は、神に従わねばなりません。しかし、ほとんどの人は知らず知らずのうちに人に従っています。それは馬鹿げたことであり、嘆かわしいことでもあります。厳密に言えば、人は従う相手は誰でも信じるのです。名目上は神を信じていても、心に神がない人もいます。その人の心が崇拝するのは、その人を指導している人です。指導者にしか従わず、神の采配を拒絶するまでになるのは、まさに神を信じながら人に従うことの現れです。真理を得る以前は、人はこうした混乱した形で信仰しており、神に従うのが何たるかもまったくわかりません。神に従うことと人に従うことの区別もできません。最も口がうまく、最も高尚なことを語る者であれば誰であれ父、母と呼んでいます。人にとって、乳がある者なら母親で、力がある者なら父親なのです。それほどまでに人とは哀れなものです。程度の差こそあれ、ほとんどの人がこのような状態だと言えるでしょう。

神に従うとはどういうことでしょうか。そして、それはどのように実践すべきでしょうか。神に従うとは単に神に祈ったり、神を賛美したりすることではありません。最も重要なことは神の御言葉を飲み食いし、神の御言葉どおりに暮らし、真理に従って行動し、神の御言葉の中にいのちの経験の道を見出し、神からの使命を受け入れ、すべての本分を正しく尽くし、聖霊の導きのもとに目の前の道を歩むことです。特に、大きな問題が降りかかる重要な岐路に立った時、一層神の御旨を求め、人の教義に騙されないよう注意し、誰の手にも落ちないようにする必要があります。「神から来るものなら私は従い、服従します。人の意志によるものは断固として拒否します。指導者や働き手の説くことが神の采配と相反する時、私は絶対に神に従い、人を拒絶します。神の采配及び御旨と完全に合致していれば、耳を傾けることができます」このように実践する者が神に従う者です。

人に従うとはどういうことでしょうか。それは、自分が崇拝する人に従うことです。そのような人の心の中で神にはたいした地位がありません。神の信仰者の看板を掲げているに過ぎません。人の真似をして、人を手本にするだけです。特に重大な事柄においては、人に決めさせ、自分の運命を人の指図に委ねてしまいます。自分で神の望みを探

ろうとはせず、人の言うことに分別を適用しません。人の話が合理的に思えれば、真理と合致しようがしまいが、すべて受け入れ、従います。これが人に従う者のふるまいです。このような人は神への信仰に原則がなく、物事の対処の仕方に真理がありません。合理的な話をする者なら誰にでも従います。たとえ崇拜対象が道を誤っても、最後までついて行ってしまいます。もし神が崇拜対象を断罪なされば、神に対して観念を抱き、崇拜対象に強く執着します。その理由は、「私を監督する人には誰でも従うべきだ。高官も現場の管理者には勝てないものだ」というものです。これは単に愚か者の言い分です。人に従う者は実にこれほど混乱しています。人に従う者は、心に神の居場所がなく、真理がなく、偶像を崇拜しており、人に惑わされており、神を真に信じる者ではありません。神に従う者だけが神を真に信じているのです。

「兄弟の交わり」より

多くの人が神を信じていますが、神に従うことの意味を知らず、万事において指導者の話を聞くことが神に従うのと同じことだと思っています。そのような考え方はまったく馬鹿げています。彼らの従う源が間違っているからです。彼らは指導者の話を聞くことが神に従うことだと考えています。このような考えで神を信じることは、神を名目上しか信じていないことになり、実際には人を信じているのです……

私たちが神を信じる時、神が私たちの心で中心的な位置を占めるべきであり、私たちは万事において神に支配を任せ、すべての物事に神の御旨を求め、神の御言葉と聖霊の導きに沿って行動し、神から来るものにはすべて従うべきです。あなたが人の意見に耳を貸しているならば、それは心に神の居場所がなく、人の居場所しかないことを示しています。真理を追い求め、神の御心を理解することほど、人にとって大切なことはありません。神の御旨を求め、神の御心を理解することに専念しなければ、あなたの従順は本物ではないのです。人の言葉がどれほど正しく聞こえても、そればかり聞いていれば、本質的には人に従っており、それは神に従うこととはまったく異なります。実際のところ、神を信じる者が、神の御言葉から神の御旨を直接理解することができ、自分なりに神の御言葉を実践する道を見つけ、神の御言葉にある真理を伝え、理解し、実行し、重要な時節になるともっと祈り、聖霊の導きを求め、聖霊の意図に従うことができるならば、それは真に神に服従することなのです。神に従う者は神の御言葉の中に道を求め、神の御言葉に問題の解決策を見出し、聖霊の導きに沿って行動します。これが真に神に服従することです。万事において指導者の話を聞く者は心が間違いなく神から遠く離れてしまっています。さらに、神の前で心穏やかでなく、神の前に生きて真理を求める

者ではなく、神とは一切関係を持っていません。その人の行動の裏にある原則は、正しいことを言う人であれば誰にでも耳を傾けるといえるものです。指導者が何かを言う限り、その人は従うのです。このような実践は馬鹿げています。そうする者には、真理もなければ、物事を識別する能力もなく、自分の観念や頭脳のみに従って物事の是非を判断しています。その判断が真理に準拠しているかどうか、どうしてわかるのでしょうか。そのような観点で神を信じているならば、一生真理を理解することも、神を知ることもできません。そのような信仰は自分の知力を信じ、我流の道を歩んでいると言えるのであって、実際の神とは何ら関わりがありません。

「兄弟の交わり」より

6. 真の指導者たちと偽の指導者たち、真の羊飼いと偽の羊飼いの識別

関連する神の言葉

資格のある働き手の働きは人々を正しい道に連れてくることができ、真理にさらに深く入ることを許す。彼の行う働きは人々を神の前に連れてくることができる。そのうえ、彼の行う働きは個々の人によって変わることができ、規則にとらわれず、人々に解放と自由を認める。さらに、人々は徐々にそのいのちにおいて成長し、真理に向けて深く着実に進むことができる。資格のない働き手の働きははるかに不十分で、ばかげている。彼は人々を規則にはめ込むだけで、人々に要求することは個々の人によって変化しない。彼の働きは人々の実際のニーズに従っていない。この種の働きには規則や教義があまりにも多く、人々をいのちにおける現実や正常な成長の実践に至らせることができない。人々はわずかな価値のない規則を守ることができるようになるだけであり、この種の指導は人々を迷わせるだけである。彼はあなたを自分に似たものになるよう導く。あなたを彼が持っているものや彼そのもののものに引き込むことができる。導き手に資格があるかどうかを信奉者が見定める秘訣は、彼らが導く道と彼らの働きの結果を見ること、および信奉者が真理に従った原則を受け取るかどうか、自分たちが変わるのにふさわしい実践方法を受け取るかどうかを見ることである。あなたは異なる種類の人々の異なる働きの違いを識別しなければならない。愚かな信奉者になってはならない。これはあなたの成長の問題に影響を及ぼす。どの人の指導には道筋があり、どの人の指導にはないかを見極めることができなければ、あなたは簡単にだまされるだろう。これらすべて

はあなた自身のいのちに直接関連している。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

あなたは、聖霊が人々に働きかける時に人々が置かれる多くの状況を理解しなければならない。特に、協調して神に仕える者たちは、聖霊が人々に働きかけることによってもたらされる様々な状況をよりしっかりと把握していなければならない。あなたが語るのが、単に多くの経験と成長する手段についてであるならば、その経験はあまりにも一方的である。自分の真の状態を知らず、あるいは真理の原則を把握していないならば、性質の変化を成し遂げることはできない。聖霊の働きの原則を知らず、あるいはそこから生まれる果実を理解していないならば、悪霊の業を見分けることは難しい。あなたは悪霊の業と人々の観念を明らかにし、単刀直入に問題の核心に触れなければならない。あなたは神を信じる上での、人々の実践における様々な逸脱や問題を指摘し、彼らがそれを認識できるようにしなければならない。少なくともあなたは、彼らに否定的で消極的な感情を持たせてはならない。しかし、あなたは大半の人々に客観的に存在する困難を理解する必要があるし、あなたは不合理になってはならないし、「豚に歌を教えよう」としてはならない。それは愚かな行為である。人々の様々な困難を解決するには、あなたは聖霊の働きの原動力を理解し、聖霊が様々な人にどのように働きかけるのかを理解し、人々の困難や欠点を理解し、その問題の重要課題を見抜き、問題の原因に触れなければならない。このような人間こそ、神に仕えるための調整役となる資格がある。

『言葉は肉において現れる』の「適切な牧者が備えておくべきもの」より

神に仕える者は、神と心をつににする者でなければならず、神を喜ばせ、神に最大限の忠誠を示すことができなければならない。人々の後ろで行動しようと、前で行動しようと、あなたは神の前で神を喜ばすことができ、神の前ではしっかり立つことができる。また、他の人々があなたをどのように扱おうとも、あなたはいつも自分の道を歩み、神の重荷に一心に注意を払う。こういう者だけが神と心をつににする者なのだ。神に親しい者が直接神に仕えることができるのは、彼らが神から重大な任務や重荷を与えられているからである。彼らは神の心を自分の心とし、神の重荷を自分の重荷とすることができ、将来の展望を得るか、失うかなど一切考慮しない。将来の展望が何もなく、何も得るものがない時でさえ、彼らは常に愛に溢れる心で神を信じるだろう。そこでこのような人は神と心をつとする者なのである。神と心をつにする者は神の腹心でもある。神の腹心だけが、神の絶え間ない憂慮や神の願いを共有することができる。彼らの肉

体は弱く、苦痛を味わうが、彼らは痛みに耐え、神を満足させるために、自分の愛するものを断念することができる。神はそのような人々にさらなる重荷を与え、神がしようとすることはこれらの人々を通して表現される。従って、これらの人々は神を喜ばせ、神自身の心に適った神の僕である。そして、このような人々だけが神と共に統治することができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の心にかなう奉仕とは」より

そのような者は常に神の新しい働きに対して敵対する態度をとり、従う意志など微塵も示さず、喜んで服従を示すことや謙虚になることなど一度たりともないのである。他の人たちの前で得意になり、誰に対しても従うことをしない。神の前では、自分が説教者として最も長けており、他の人に働きかけることに自分が一番熟練していると考え。自分が獲得した宝を決して手放そうとせず、家宝として拝み、説教の題材にし、自分を崇拝するような愚か者への訓戒に用いる。このような人が、教会内に確かに数名存在する。このような人々は、「不屈の英雄」と呼ぶことができ、世代を超えて神の家に留まるのである。彼らは神の言葉（教義）を語ることを自分の最高位の本分と解釈する。何年も、何世代も、彼らは精力的に自らの「神聖で犯すべからざる」本分を続ける。彼らに触れる者は誰ひとりおらず、公然と非難する者もひとりもない。神の家で「王」となり、何代にも亘ってはびこり、他の者を圧制する。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

人の心の中の働きは人によってあまりにも容易に達成される。たとえば、宗教界の牧師や指導者は自分の才能や立場を信賴して働きを行なう。長い間彼らに従う人々は、彼らの才能に感化され、彼らの人格からいくらか影響を受けるだろう。彼らは人々の才能、能力、知識に重点を置き、多少の超自然的なものや多くの深遠で非現実的教義に注目する（もちろん、これらの深遠な教義は達成不可能である）。彼らは人々の性質の変化に注目せず、むしろ人々の説教する能力、働く能力の訓練、人々の知識や豊かな宗教的教義の改善に注目する。人々の性質がどのくらい変えられたか、あるいは人々はどのくらい真理を理解しているかには注目しない。彼らは人々の本質には関心を持たず、ましてや人々の通常の状態、異常な状態を知ろうとはしない。彼らは人々の見解に反論せず、明らかにもしない。ましてや人々の欠点や墮落を修正したりはしない。彼らに従うほとんどの人々は生来の才能によって仕え、彼らが表すのは知識と曖昧な宗教的真理であり、それらは現実とは離れており、人々にいのちを与えることは全くできない。実際、彼らの働きの本質は才能を育むこと、何もない人物を後になって仕事に就き、指導する

有能な神学校卒業生に育てることである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

神に仕えることは単純な作業ではない。墮落した性質が変わらないままの人は決して神に仕えることはできない。もしあなたの性質が神の言葉により裁かれ、罰されていないのならば、その性質はいまだにサタンを表している。これは、あなたの奉仕があなた自身の善意から出ていることの十分な証明である。それはサタンの性質にもとづく奉仕である。あなたは自分の元来の性格のまま、また個人的好みに従って神に仕えている。さらに、自分が行いたいことが何であれ、神はそれを喜び、行ないたくないことが何であれ、神はそれを嫌うとあなたは思い続けている。そして働きにおいては、自分の好みに完全に左右されている。これを神への奉仕と呼ぶことができるであろうか。あなたのいのちの性質は、究極的には少しも変えられることはない。それどころか、自分は神に仕えているのだからと、ますます頑固になり、そのため、墮落した性質はさらに深く根付いたものとなる。このようにして、おもに自分の性格にもとづいた神への奉仕に関する規則と、自分自身の性質に従った奉仕から派生する経験をあなたは内面的に作り上げるようになる。これは人間の経験から来る教訓である。人間の人生哲学である。このような人々はパリサイ人と宗教官僚に属する。このような人々は目を覚まし悔い改めないならば、最後には終わりの日に出現する偽キリストとなり、人間を騙す者となるであろう。話しにでる偽キリストと詐欺師は、この種の人から現れる。もし神に仕える人々が自分たちの性格に従い、自分たちの意思のままに行動したならば、彼らはいつでも追放される危険にある。他人の心を獲得し、見下すような態度で他人に訓戒し人々を制限するために自分の長年の経験を神への奉仕に応用する人、そして決して悔い改めず、自分の罪を告白せず、地位からくる恩恵を諦めない人は、神の前に倒れるであろう。このような人はパウロと同類の人間であり、自分の経歴の長さゆえに大胆に振る舞ったり、資格を見せびらかしたりする。神がこのような人々を完全にすることはしない。このような奉仕は神の働きのじゃまをする。人は古いものに固執することを好む。過去の観念、過去からの物事に固執する。これは奉仕への大きな障害である。それらを捨て去ることができなければ、それらがあなたの全生涯を圧迫するであろう。たとえ脚を折るほど走り回ったり、大変な労苦を背負っても、また神への奉仕において殉教したとしても、神は少しもあなたを褒めることはない。それどころか逆であり、神はあなたを邪惡な行いをする者だと言うであろう。

『言葉は肉において現れる』の「宗教的な奉仕の仕方は禁止されなければならない」より

あなたは、認識を得ることが真理を備えることに繋がっているだろうか。それは勘違いした見方ではなかろうか。あなたは、砂浜の砂ほど大量の認識を語ることが出来るが、そのうち実際の道が含まれている認識は皆無である。その点において、あなたは人々を欺いているのではなかろうか。あなたは有言不実行ではなかろうか。このような行動は人々に有害である。理論が高尚であればあるほど、現実性が一層欠如し、人々を現実性に導くことが一層不可能となり、またあなたはそのために一層神に背き反抗するようになる。最も高尚な理論を貴重な宝のように扱ってはならない。それは悪質であり、一切無益である。最も高尚な理論を語ることが出来る者も居るであろうが、そうした理論には現実性が一切含まれていない。なぜなら、そうした者は自分でそれを経験しておらず、したがって実践の道を一切知らないからである。そうした者は人間を正しい道に導くことが出来ず、人々を惑わせるだけであろう。それは人々にとって有害ではなかろうか。最低限度として、あなたは現在の問題を解決し、人々が成長出来るようにすべきである。そうした状態のみが献身として認められ、そうして初めて、あなたは神のために働く資格を得るであろう。常に尊大で非現実的な言葉ばかりを語ったり、不適切な実践を数多く用い、人々を拘束して自分に従わせたりしてはならない。そのような行動は全く効果が無く、益々人々を困惑させることしか出来ない。そのようにして人々を導くことにより、数多くの規則が生み出され、そうした規則が原因で人々はあなたを嫌悪するであろう。それは人間の欠点であり、極めて癢に障るものである。

『言葉は肉において現れる』の「現実性に一層重点を置くこと」より

神の働きの目的を理解しない者は誰でも神に敵対する人々であり、神の働きの目的が分かっているのに神を満足させようとししない人々はなおさら敵対する。荘厳な教会で聖書を読む者たちは毎日聖書を暗唱するが、一人として神の働きの目的を理解しない。一人として神を知ることができない。さらに、一人として神の心と一致していない。彼らは皆価値のない、卑劣な人々だが、それぞれ神を教えるために高い地位に就いている。彼らは神の名をこれ見よがしに振りかざすが、故意に神に反抗している。彼らは自分たちを神を信じる者と呼びはするが、人の肉を食し、その血を飲んでいる者たちである。そのような人々は皆人の魂を貪り食う悪魔、正しい道に一步踏み出そうとする人々を故意に混乱させる悪霊のかしら、神を探し求める人々の道を妨げる躓きの石である。彼らは「健全な肉体」の者たちであるが、彼らの信者たちはどうしたら彼らが人を神に敵対する方向へ導く反キリストであると知ることができるだろうか。どうしたら彼らが魂を好んで求めては貪り食う悪魔の権化であることを知ることができるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神を知らない人はすべて神に反対する」より

7. 外的な善行と性質の変化の違い

関連する神の言葉

性質の変化とは、主に人の本性の変化を指します。人の本性に関する物事は、外面上の行いに見られるものではありません。本性は、人の生存の意義や価値とじかに関係しています。つまり、人の人生観と価値観、魂の奥深くにあるもの、その人の本質に直接かかわっているのです。真理を受け入れられない人は、こういう面で変化を遂げません。神の働きを経験し、すっかり真理に入り、価値観、生存観、人生観を変え、自分の見方を神の見方に合わせ、完全に神に従い、自分を捧げられるようになってのみ、性質が変わったと言えるのです。あなたはいくらか努力しているように見えるかもしれませんが、困難にあってもめげないかもしれません。上層部から来る働きの手はずを遂行できるかもしれませんが、行けと言われたところへはどこへでも行けるかもしれません。しかし、こういうことは振る舞いにおける小さな変化に過ぎず、性質の変化となるには不十分です。あなたはたくさんの道を走り、多くの困難に苦しみ、大変な屈辱に耐えることができるかもしれません。あなたは神をととても近くに感じ、聖霊があなたの内側で何らかの働きをするかもしれません。しかし神があなたの観念に合わないことをするように言うと、あなたはやはり従わず、言い訳を探し、神を避難して抗議するまで神に逆らい、拒むかもしれません。これは深刻な問題です。これは、あなたにまだ神に敵対する本性があり、一切の変化を経ていないことを示しています。

『キリストの言葉の記録』の「性質の変化について知るべきこと」より

人は良い振る舞いをすることができますが、それは必ずしもその人に真理があるということではありません。熱意は人に教義を尊重させ、規則に従わせることしか出来ません。真理の無い人は実質的な問題を解決することが一切出来ず、教義が真理の代わりになることは不可能なのです。性質が変わった人は違います。性質の変化を経た人は真理を理解しており、あらゆる事柄を識別することができ、神の旨に沿うにはいかに行動すべきか、真理の原則に沿うにはいかに行動すべきか、神を満足させるにはいかに行動すべきかを知っており、自らが露わにする堕落の本質を理解しています。そのような人は自分の考えや観念が露わになると、識別力をもちいて肉を捨て去ることができます。性質の変化はこのように現れます。性質の変化にまつわる主要な事は、彼らが真理

をはっきり理解しており、物事を実行するときにある程度正確に真理を実践し、墮落した性質がさほど頻繁には露わにされないということです。一般的に、性質が変化した人はとりわけ理性と識別力があるように見え、真理を理解しているために独善性や傲慢をそれほど多くあらわしません。彼らは露わにされた墮落の多くを見通して識別することができ、故に傲慢さを生じさせません。彼らは人間のあるべき立場をわきまえており、いかに理性的に振る舞うべきか、いかに忠実に本分を尽くすべきか、言うべき事とそうでない事、誰に何を言い行なうべきかをわきまえています。このような人々が比較的理性的だと言われるのはそのためです。性質を変える人々は真に人間の姿を生き、真理を自分のものにしています。彼らはいつも真理と一致する話し方や見方をすることができ、あらゆる行ないに原則があり、いかなる人間や物事にも影響されず、みな自分の見方をもっていて、真理の原則を保つことができます。彼らの性質は比較的安定しており、熱しやすく冷めやすいということはなく、どのような状況にあってもいかに本分をきちんと尽くし、神を満足させるためにはいかに物事を行なうべきかを理解しています。性質が変えられた人々は、表面的に自分を良く見せるために何をすべきかに重点を置いたりしません。彼らは神に満足してもらうためにどうすべきかを心の中で明確に把握しているのです。それ故、外面的には熱心には見えなかったり、偉大なことを成し遂げたようには見えなかったりするかもしれませんが、彼らのすること全ては意味があり、価値があり、現実的な結果をもたらします。性質が変えられた人々が真理を多く得ていることは確かです。このことは彼らの物事の見方や行動の原則を通して確認できます。真理を得ていない人々は性質の変化など経験していないのは絶対です。これは人間性において成熟していれば性質の変化を得られるということではありません。性質が変えられるというのは、ある人の本性の中にあるサタンの毒の一部が、神を認識して真理を理解することによって変えられることをまず第一に指します。つまり、そのようなサタンの毒は清められ、神によって表される真理がその人に根付き、いのちとなり、存在の基礎となるということです。そうやって初めて新しい人になり、性質もそれ故に変わります。性質の変化はその人の外的な性質が以前より柔和になったことを意味するのでもなければ、傲慢だった人が理性的な言葉使いをすとか、相手の話を聞かなかった人が他人の話を聞けるようになったとかいうことを意味するのでもありません。このような外的変化を性質の変化とは言えません。もちろん、性質の変化にはこれらの状態も含まれますが、何よりも重要なのはその人の内なるいのちが変えられたということです。神の表す真理が彼らのいのちそのものとなり、サタンの毒は取り除かれ、ものの見方が全く変わり、それらのどれも、この世のものとは全く違うものとなります。彼らには

赤い大きな竜の策略と毒がはっきり分かります。彼らはいのちの真の本質を得ています。そのようにして彼らのいのちの価値が変わったのです。これが最も基本的な変化であり、性質の変化の本質なのです。

『キリストの言葉の記録』の「外面的な変化と性質の変化の相違」より

宗教の領域では、多くの人々は肉体を抑制したり、十字架を負ったりして生涯にわたって大いに苦しみ、最期の息を引き取るまで苦しみ忍耐することさえする。中には死ぬその朝まで断食を続けている者もいる。このような人々はよい食物やよい衣服を生涯自らに否定し、苦しみだけを重視する。彼らは肉体を抑制し、自らの肉を捨てられる。彼らの苦しみに耐える精神は賞賛に値する。しかし、彼らの考え方、観念、精神的態度、そしてまさに古い本性は、まったく取り扱いを受けていない。彼らは自らを真に理解していない。彼らが心に抱いている神の姿は、伝統的な抽象的で漠然としたものである。彼らの神のために苦しもうという決意は、熱意と積極的な性格から来ている。彼らは神を信じてはいるが、神を理解していないし、神の心を知りもしない。彼らは神のためにただ盲目的に働き、盲目的に苦しんでいる。彼らは識別することを一切重視しないし、自分たちの奉仕が実際に神の心を満たすようにするにはどうするかということもほとんど考慮していない。また、神を理解するためにはどうするかということもほとんど知らない。彼らの仕える神は本来の姿のものではなく、自分たちが作り上げた神、彼らから聞いた神、あるいは、書物にある伝説的な神である。そして、彼らは生き生きとした想像力と信仰心から神のために苦しみ、神が望む働きに取り組む。彼らの奉仕はあまりに不正確で、実際にはほんとうに神の心を満たすような奉仕をしている人は誰もいない。どんなに苦しむことを厭わないとしても、彼らの元来からの奉仕についての考え方と彼らの想像する神の姿は変わっていない。彼らは神の裁きと刑罰、精錬と完成を経験していないからであり、誰も彼らを真理で導いていないからである。たとえ救い主イエスを信じていても、彼らの誰一人として救い主を見たことがない。彼らはただ伝説と噂で神を知っているだけなのである。だから、彼らの奉仕は目の見えない人が父親に仕えているように、目を閉じて行き当たりばったり仕えているにすぎない。このような奉仕で最終的に何を達成できるであろうか。そして、誰がそれを認めるのであろうか。最初から終わりまで、彼らの奉仕はまったく変わらない。彼らは人間の作り出した教えを受け、自分たちの性質と好みとに基づいた奉仕をする。それでどんな褒美を受けられるのであろうか。イエスを見たペテロでさえ神の心にかなう奉仕の仕方を知らなかった。彼が理解したのは最後、老年になってのことである。このことから、取り扱いも刈り込

みも経験したことがなく、導いてくれる人がいたことがない、目の見えない人々について何が言えるであろうか。現在あなたがたのうちの多くの者の奉仕は、そうした目の見えない人たちのもののようではないのか。裁きを受けていない人々、刈り込みと取り扱いを受けず変わらずにいる人々——こうした人々はまったく征服されていないのではないか。そうした人々が何の役に立つだろうか。考え方、人生の理解、神についての理解が何の変化もなく、少しも実際に得たものがないのなら、けっして奉仕によって顕著な成果を得られない。ビジョンなしで、神の働きについての新しい理解なしでは、征服された者にはなれない。そうであるなら、あなたの神に従う方法は、あの苦しみ断食する人たちと同じである。——それは少しも役に立たない。彼らのすることには証しがないからこそ、その奉仕が無駄だとわたしは言うのである。彼らは生涯をとおして苦しみ、監獄で過ごし、あらゆる瞬間に耐え、愛と優しさを重視し、十字架を負う。彼らは世の中からけなされ、拒まれ、あらゆる苦難を経験してきた。彼らは最後まで従うが、それでも征服されておらず、征服されたことについて何の証しもできない。彼らは少なからぬ苦しみを経ているが、心の中ではまったく神を知らずにいる。彼らの古い考え方、古い観念、宗教的实践、人間がつくった理解、人間の考えは取り扱いを受けていない。そこには新しい理解がまるでない。彼らの神についての理解は、少しも真実でも正確でもない。彼らは神の心を誤解している。それが神に仕えるということでありえるであろうか。あなたが過去にどのように神を理解していたとしても、あなたは今日も同じ理解をもち続けており、神が何をしようと、自分なりの観念や考えに基づいた神に関する理解をもち続けているとしよう。つまり、神について新しい本物の理解を何ももっておらず、神の真の姿や性質を知ることができないでいるとしよう。あなたの神についての理解がまだ封建的な迷信的な考え方に基づいていて、人間の想像や観念に導かれているとしよう。もしそうなら、あなたはまだ征服されていないのである。わたしがこうしたことを今述べているのは、あなたに理解させ、この認識によって正しく新たな理解へと導くためである。また、あなたのもっている古い考えや古い認識を捨てて、新たな理解をもてるようにするためでもある。もしほんとうにわたしの言葉を飲み食いするなら、理解は大きく変わるであろう。神の言葉を飲み食いするときに従順な心を持ち続けるなら、考え方は変わるであろう。繰り返し刑罰を受け入れられる限り、古い考え方は徐々に変化するであろう。古い考え方が新たなものに置き換えられるなら、実践もまたそれに伴って変わっていくであろう。このようにして、奉仕はますます適切なもの、ますます神の心にかなうものになっていくであろう。もし自分の生活、人生の理解、神についての多くの観念を変えられるなら、持って生まれた性質は徐々に減じるであろう。これが、

そしてこれこそが、神が人間を征服した結果なのである。これが人間に見られる変化である。神を信じていながら、あなたの知っていることが、自分の体を抑制し、耐え、苦しむことだけで、自分のしていることが良いのか悪いのか、まして、それが誰のためなのかははっきりわかっていないのなら、どうしてそのような実践が変化につながるであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（３）」より

そのような宗教熱心な人たちはいつ集まっても、「お元気でいらっしゃいましたか。」と尋ねる。そして姉妹は、「神様に負い目がありますが、神様の御心をなかなか成就することができません。」と答える。また別の人は「私もなんです。神様に負い目がありますが、神様に満足していただくことができません。」と答える。この僅かな言葉にも、彼らの心の奥深くにある卑劣な心が表現されている。そのような言葉は実に忌まわしく、あまりにも不快だ。そのような人たちの本性は神に敵対している。現実に関心を合せている人たちは、心にあることをそのまま言葉にし、会話の中で自分たちの心をさらけ出す。偽りの行いはひとつもなく、礼儀にこだわらず、空虚な社交辞令もない。彼らはいつも単刀直入で、この世の規律を守ることはない。また、理性を失って大げさに振る舞う人たちがいる。他の人が歌うと踊り始め、鍋の米が焦げていることさえも気が付かない。そのような人たちは敬虔でもなく、尊敬に値しない。あまりに軽率な人たちである。全て現実の欠如の顕れである。ある人たちは霊的いのちについて語り合うとき、神に負い目があるとは語らなくても心の中には神への心からの愛を秘めている。あなたが神にどれほど負い目があるかは他の人たちとは無関係だ。あなたは人ではなく神に負い目があるのだから。それならあなたがこのことを絶えず誰かに話したところでどうなるのだろうか。あなたは外観の熱心さや見せかけではなく、現実において成長することに重点を置くべきだ。

人のうわべだけの善行が何を表すだろうか。そのようなものは肉を表し、外見上最善のことをしたところで、ただあなた個人の性質を現すだけで、いのちを現すわけではない。人のうわべだけの行動では神の願いを成就することはできない。あなたは絶えず神に負い目があると言うが、誰かにいのちを与えたり、神を愛するように誰かを導いたりすることすらできない。それで神を満足させられると信じているのか。あなたは自分のしている事が神の心からの願いであり、霊的なことだと信じているが、実にばかげている。あなたは自分が喜ぶものや自分が願うものを神も喜ぶと信じている。あなたが喜ぶものが神の喜びを表すだろうか。人の性格が神を表すことができるのか。あなたが喜ぶ

ものはまさしく神が忌み嫌うもので、あなたの習慣は神がひどく嫌い拒絶するものである。もしあなたが神に負い目を感じるなら、神の前に出て祈りなさい。それを誰かに話す必要などない。神の前で祈ることもせず、人の注目を引こうとするばかりでも神の心の願いを成就することができるだろうか。もしあなたの行動が常に見せかけだけなら、あなたは最もうぬぼれが強い人間だ。表面上良い行いをするだけで、現実性に欠けている人はどんなタイプの人間か。それは偽善者のパリサイ人で、単に宗教熱心でしかない。あなた方が見せかけの行いを止めず、変わることができないなら、あなた方の中にいる偽善的要素は増大するであろう。偽善的要素が大きくなればなるほど神に抵抗するようになり、そして遂には神に見捨てられるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「信仰においては現実に関心を合わせなければならない——宗教的儀式を行なうことは信仰ではない」より

説教と交わりの参考箇所

宗教界には多くの敬虔な人々がいて、こう言います。「私たちは主イエスを信じて変わりました。私たちは主のために尽くすことができ、主のために働き、主のために投獄の苦しみに耐え、それでも主の名を否定することがありません。私たちは多くの善行を行い、慈善団体に寄付し、貧しい人たちのために献金して助けることができます。これは大きな変化です。それゆえ私たちは天の御国へ引き上げられる資格があります。」あなたはこれらの言葉についてどう思いますか。これらの言葉について、何か洞察がありますか。清められるとはどういう意味ですか。あなたの行動が変わり善行を為したら、清められるのですか。ある人は言います。「私はすべてを捨てました。私は神に尽くすために、自分の仕事、家族、肉の欲望を捨てました。これは清められることと同じですか。」たとえあなたがこれらの事すべてを行っても、清められたという揺るぎない証拠にはなりません。それでは、重要な点は何でしょうか。どのような側面で真の清めとみなされるものを得ることができますか。真の清めとは、神に抵抗する悪魔のような性質を清めることを意味するのです。神に抵抗する悪魔のような性質の表象とは何ですか。最も明白な表象は、人の傲慢、うぬぼれ、独善や自負心、及び歪んだ心、背信、嘘、欺瞞や偽善です。これらの悪魔のような性質が人間の一部でなくなった時、人は本当に清められるのです。人間の悪魔のような性質には、次のような十二の主な兆候があると言われています。自分自身を最も栄誉ある者とみなすこと。私に従う者を栄えさせ、私に逆らう者は滅びさせること。自分より優れているのは神だけだと思ふこと。誰にも服従しないこと。他人のことをまったく考慮しないこと。いったん権力をつかむと自分の独立

王国を築くこと。権力を振るう唯一の者になることを望むこと。また、すべてのものの上に君臨したいと思うこと。そして、すべてのことを自分ひとりで決めようとする事などです。これらの徴候はすべて悪魔の性質です。人が命の性質における変化を体験する前に、悪魔のようなこれらの性質が清められなければなりません。人の性質が変わるということは、その人の本質が変わるということなので、それは新しく生まれ変わることです。以前、権力を与えられた時、その人は自分の独立王国を築くことができました。今、権力を与えられると、彼は神に仕え、神のために証しし、神の選びの民のしもべとなります。これこそが真の変化ではありませんか。以前、その人はあらゆる状況で自分自身を誇示し、他の人が自分を高く評価して崇めることを望んでいました。今、彼はどこでも神のために証しし、自分自身を誇示しません。人々が彼をどのように扱っても、彼はいっこうに構いません。人々が彼についてどのような意見を述べようと、彼はいっこうに構いません。そんなことは気にも留めないのです。彼は神を崇め、神のために証しすることだけに重点を置き、他の人たちが神を理解し、神の前で従えるように助けます。これが命の性質における変化ではありませんか。「私は愛をもって兄弟姉妹たちを扱うつもりです。どんな状況でも他の人たちのことを思いやります。自分のことは考えず、他の人の益になるように与えます。私は他の人たちが命において成長するのを助け、自分の責任を果たします。また、他の人が真理を理解して真理を獲得できるよう助けます。」これこそが自分自身を愛するように他人を愛するということです。サタンについて言うと、あなたはサタンを見分けることができ、原則を備え、サタンに対して境界線を引き、サタンの悪を徹底的に暴いて、神の選びの民が危害を受けないようにします。これは神の選びの民を守ることであり、自分自身を愛するように他人を愛することのより優れた実例です。さらに、あなたは神が愛されるものを愛し、神が憎まれるものを憎むべきです。神が憎まれるものとは、反キリスト、悪霊、邪悪な人々です。それはつまり、私たちも反キリスト、悪霊、邪悪な人々を憎むべきであるということです。私たちは神の側に立たなければなりません。私たちは彼らに妥協することはできません。神はご自身が救い祝福したいと望んでおられる者を愛されます。これらの人々のために私たちは責任を負い、愛をもって彼らを扱い、助け、導き、与え、支えなければなりません。これこそが命の性質の変化ではありませんか。さらに、あなたが何らかの過ちや間違いを犯したり、何かをする際に原則をおろそかにした時は、兄弟姉妹の批判、叱責、取り扱いや刈り込みを受け入れることができます。あなたはこれらすべてを正しく扱い、神からそれらのことを受け取り、決して恨みを抱かず、自分の墮落を解消するために真理を求めます。これこそがあなたの命における性質の変化ではありませんか。（は

い、そうです……)

宗教界で語られている人間の行動の変化は、命における性質の変化を表していますか。表せない、と皆言っています。何故でしょうか。主な理由は、その人がまだ神に抵抗しているからです。それは外観だけはたいへん敬虔に見えるパリサイ人と同じです。彼らは頻繁に祈り、聖書を説明し、律法の規律に非常によく従いました。彼らは外見的には非の打ちどころがなかったと言えるでしょう。人々は彼らに何の欠点も見つけることができませんでした。しかし、なぜ彼らはそれでもキリストに抵抗し、彼を罪に定めることができたのでしょうか。このことは何を示していますか。どんなに良い人のように見えても、真理を持たず、それゆえ神を知らないなら、やはり神に抵抗するでしょう。彼らは外見的にはとても善良に見えますが、なぜこれが命の性質の変化と見なされないのでしょうか。それは、彼らの墮落した性質はほんの少しも変わらず、彼らは依然として傲慢で、うぬぼれており、とりわけ独善的だったからです。彼らは自分の知識と理論を信じ、自分たちは聖書を最もよく理解していると思っていました。彼らは自分たちがあらゆることを理解し、他の人よりも優れていると信じていました。これこそが、主イエスが教え働いている時に、彼らが主イエスに抵抗して彼を罪に定めた理由です。終わりの日のキリストがすべての真理を表したということを宗教界が聞くと、それが真理であることを知っているにもかかわらず、キリストを罪に定めるのはそのためです。

「いのちの中へ入ることに関する説教と交わり」(138巻)より

第7章 神への信仰において理解すべき真理の他の側面

1. 神への信仰において神の新しい働きへの人々の反対の根源を知ること

関連する神の言葉

人が神に逆らう理由は、一方では、人の墮落した性質に起因しており、もう一方では神を知らないこと、神の働きの原則や人に対する神の意志についての理解に欠けることが原因である。これらの二つの要因が人間の神への反抗の歴史を成している。信仰の初心者が神に反抗するのは、彼らの本性の中にそのような反感があるからである。一方、長年信仰を持つ者たちが神に反抗するのは、彼らの墮落した性質に加えて、神を知らな

いことから生じる結果である。

『言葉は肉において現れる』の「神を知らない人はすべて神に反対する」より

神の働きは前進を続けており、その目的が変わることはないが、神の働きの実行手段はたえず変化しており、それによって神に従う人々も変化していく。神の働きが増えれば増えるほど、人はさらに徹底的に神を知るようになり、それに応じて人の性質も神の働きとともに変化する。しかし、神の働きがたえず変化しているため、聖霊の働きを知らない人々や真理を知らない愚かな人々は神の敵対者になる。神の働きは人が抱く観念とは決して一致しない。神の働きはいつも新しく、決して古くないからである。神は古い働きを決して繰り返さず、むしろこれまでなされたことのない仕事をたゆみなく行う。神はその働きを繰り返すことはなく、人は例外なく神の過去の働きに基づいて神の今日の働きを判断するので、神が新しい時代の働きの各段階を実行するのは困難を極める。人はあまりにも多くの妨げとなる物を突きつける。人の考えは偏狭すぎる。誰も神の働きを知らないのに、誰もがその働きを定義する。神から離れたら、人はいのちも真理も神の祝福も失ってしまうのに、人はいのちも真理も受け入れず、ましてや神が人類に与えるさらに大きな祝福も受け入れない。すべての人は神を得たいと願っているのに、神の働きのいかなる変化も許容することができない。神の新しい働きを受け入れない人々は、神の働きは不変であり、永久に停滞したままであると信じている。彼らの信条によれば、神から永遠の救いを得るためには律法を守ってさえいれば十分であり、悔い改め、罪を告白しさえすれば、神の心は永遠に満たされる。彼らは、律法の下で神、人間のために十字架につけられた神だけが神のはずであると考えている。また、神は聖書を超えるべきではないし、超えることはできないとも考えている。まさにこうした考えが彼らを古い律法に堅く縛りつけ、厳しい規定に束縛し続けてきた。さらに多くの人々が、神の新しい働きがどのようなものでも、預言による裏付けがなければならず、その働きの各段階で、本心で神に従うすべての者には啓示が示されなければならない、そうでなければそれは神の働きではありえないと信じている。人が神を知るようになるのはただでさえ決して容易なことではない。さらに、人の愚かな心、ならびにうぬぼれという反抗的な本性を考慮すると、人が神の新しい働きを受け入れるのはなおさらむずかしい。人は神の新しい働きを入念に調べることも、謙遜して受け入れることもない。むしろ、軽蔑的な態度を取り、神の啓示と導きを待つ。これは神に反抗し、敵対する人の行動ではないだろうか。そのような人たちがどうして神の承認を得ることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「自己の観念で神を定義する人がどうして神の啓示を受けること

ができるのか」より

神の働きにはいつも新しい進展があるので、新しい働きもあり、当然すたれた古い働きも出てくる。この古い働きと新しい働きは矛盾するものではなく、補い合うもので、そのひとつひとつが過去から続いている。新しい働きがあるから、もちろん、古い働きは取り除かれなければならない。たとえば、長年実践されてきた慣習や習慣的に用いられてきた言い習わしは、人の長年の経験や教えと相まって、人に様々な観念を形成した。人によるそのような観念の形成にとってさらに好都合なことに、古代から長年伝えられた理論の広まりに結びついて、神が自分の顔や本来の性質をまだ完全には人に現していないということである。人が神を信じる過程において、様々な観念の影響により、神に対する様々な観念的な認識は形成され、進歩し続けてきたと言える。結果として多くの宗教家が神の敵となった。人々の宗教的な観念が強ければ強いほど、彼らは神に反対し、神の敵となってしまう。神の働きはいつも新しく古いものは何ひとつなく、規則を形成することも一切なく、むしろ、継続的により大きい範囲で変化したり小さい範囲で変化したりして、新しくなっている。この働きは神自身の本来の性質の表れである。それはまた神の働きの本来の原則でもあり、神が自身の経営を成し遂げる手段の一つである。もし神がこの方法で働かないとしたら、人は変わらず、神を知ることでもできず、サタンが打ち負かされることもないだろう。よって、彼の働きのうちに一貫性のないように見える変化は継続して起きるが、それは実は周期的なものである。しかしながら、人が神を信じる方法は全く異なり、古い、親しみのある教えや制度にしがみつき、より古いものを心地よく感じる。石のように頑固で愚かな人の考えが、どのようにして神の計り知れない多くの新しい働きと言葉を受け入れることができようか。人はいつも新しく古いことが一切ない神を嫌悪する。人が好むのは、白髪で不動のアンティーク化した古い神のみだ。つまり、神と人はそれぞれ好みが異なるため、人は神の敵となった。このような不一致は、神が新しい働きをして六千年近く経った今日も多く存在する。故に、もう救済策もないのだ。…神の意図は、自身の働きを、古いものや死んだものではなく、常に新しく生き生きとしたものとし、人の拠りどころとなるものが時代や期間に合わせて変化し、永遠に続くものであったり不変のものであったりしないことである。彼は人を生かし新たにさせる神であり、人を死に至らせ古くする悪魔ではないからである。あなたがたはまだこれが分からないか。あなたは心を閉ざしているので、神について持っている観念を手放すことができない。神の働きが理不尽だからでも、人間の願望と合致していないからでもなく、無論神がいつも自分の義務に怠慢だからなどでもない。あ

あなたが自分自身の観念を手放すことができないのは、あなたが不従順すぎるからであり、そしてあなたに神の被造物らしさが少しもないからで、神があなたに対してことを難しくしているのではない。全てはあなたに起因していて、神とは関係ない。全ての苦しみと不幸は人が引き起こしている。神の意思はいつも良いもので、彼はあなたに自らの観念を作り出してほしいと願ってはいない。あなたに時代とともに変わり、新しくなってもらいたいと願っている。それでもあなたは大切なことを見極めることができず、いつも調査か分析をしている。神があなたに対してことを難しくしているのではなく、あなたが神への畏れを持っておらず、あなたがあまりに不従順なだけだ。ごく小さな被造物が、神に与えられたもののほんの一部を取り、それを使って神を攻撃しようとする。これは人の不従順ではないのか。人は神の前で自分の考えを表明する資格などではなく、価値のない、悪臭を伴う腐った格言を思いつくままに持ち出して来る資格などないと言える。カビの生えたような観念など尚更持ち出せない。それらはもっと価値のないことではないか。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えられる」より

あなた方が神の働きに逆らう、あるいは自分の観念により今日の働きを判断するのは、あなた方が神の働く原則を知らないからであり、またあなた方が聖霊の働きを真剣に受け止めないからだということを認識しなさい。あなた方が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、あなた方自身の観念と生まれつきの尊大さのせいである。それは神の働きが間違っているからではなく、あなた方が元々あまりにも反抗的だからである。人によっては、神への信仰を持った後に、人がどこから来たのかということさえ確信をもつて言えないのに、あえて聖霊の働きが正しいかそうでないかについて演説を行ったりする。彼らは、聖霊の新しい働きを持つ使徒たちに説教したり、意見したり、立場をわきまえないで余計な口を挟んだりさえする。彼らは人間性が非常に低俗で、思慮分別のかけらも持っていないのである。このような人が聖霊の働きによって拒絶され、地獄の火に焼かれる日が来るのではないか。彼らは、神の働きを認識しない代わりに、神の働きを批判し、しかも神に対して働き方の指図までする。このように理不尽な人たちがどうして神を知ることができるだろう。人は、神を求め、経験する過程で、神に対する認識を得るようになる。つまり、気まぐれに神を批判する中で聖霊の啓発を受けて神を認識するのではない。神に対する認識が正しいほど、人は神に反発しなくなる。逆に、神への認識が少ないほど、人は神に逆らう。あなたの観念、古くからの本性、人間性、性格や道徳観は、あなたが神に逆らう「資本」であり、あなたが墮落して下劣で低俗である

ほど、あなたはますます神の敵対者になる。欲深い観念の持ち主や独りよがりな性質の者は、さらに受肉した神の憎しみを買い、そのような人たちは反キリストである。もしあなたの観念が正されなければ、常に神に敵対することになり、永久に神と融和することができず、そしていつも神から離れていることになる。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

あなたがたはパリサイ人がイエスに逆らったことの根源を知りたいか。あなたがたはパリサイ人の本質を知りたいか。彼らはメシアに関する空想に満ちていた。さらに、彼らはメシアが来ると信じていただけで、いのちの真理を求めなかった。だから今日になっても未だに彼らはメシアを待ち続けている。いのちの道に関して何の認識もなく、真理の道がどのようなものかも知らないからである。これほど愚かで頑固で無知な人々が、神の祝福を得ることなどあり得ようか。彼らがメシアを見ることなどできるだろうか。彼らは聖霊の働きの方向を知らなかったために、イエスの語った真理の道を知らなかったために、さらにはメシアを理解しなかったためにイエスに敵対した。彼らはメシアに会ったことがなく、メシアとともに過ごしたこともないために、彼らはみなメシアの名前をむなしく守りながら、どのようなことをしてでもメシアの本質に逆らうという過ちを犯した。これらのパリサイ人は本質的に頑固で、傲慢で、真理に従わなかった。彼らの神への信仰の原則は、「どれほど説教が奥深く、どれほど権威が高かろうとも、あなたがメシアと呼ばれない限り、あなたはキリストではない」というものである。これらの見方は不合理でばかばかしくないのであろうか。あなたがたにもう一度問う。あなたがたが全くイエスを理解してこなかったことを考えれば、最初のパリサイ人たちと同じ誤りを簡単に起こしてしまうのではないか。あなたは真理の道を識別することはできるのか。あなたがキリストに逆らわないとあなたは本当に請け合えるか。あなたは聖霊の働きに従うことができるのか。自分がキリストに逆らうかどうか分からないのなら、あなたは既に死ぬぎりぎりのところに生きているとわたしは言う。メシアを理解しなかった人々は皆、イエスに逆らい、イエスを拒絶し、イエスを中傷することができた。イエスを理解しない人々は皆、イエスを否定し、イエスをののしることができる。そればかりか、彼らはイエスの再臨をサタンの惑わしとして見ることができ、さらに多くの人々が受肉し再来したイエスを非難するであろう。これらのことのせいで、あなたがたは恐ろしくならないのか。あなたがたが直面することは聖霊に対する冒涇であり、諸教会に向けた聖霊の言葉を台無しにし、イエスが表した全てをはねつけることとなる。それほ

ど混乱しているのなら、イエスから何を得られるというのか。あなたがたが頑なに自分の間違いに気づくのを拒絶しているのならば、イエスが白い雲に乗って肉に戻ってくる時にイエスの働きをどのようにしてあなたがたが理解できるというのか。わたしは言う。真理を受け入れず白い雲に乗ったイエスの再臨を盲目的に待つ人々は、確実に聖霊を冒涇することになり、彼らは滅ぼされる種類である。あなたがたは単にイエスの恵みを望んでおり、この上なく幸せな天国を楽しみたいだけであるが、イエスの語る言葉に従ったことはなく、肉に戻ったイエスが表した真理を受け入れてこなかった。あなたがたはイエスが白い雲に乗って戻るという事実と引き替えに何を差し出すのか。あなたがたが繰り返し罪を犯しては何度もその罪を告白するという誠意か。白い雲に乗って戻ってくるイエスへの捧げ物としてあなたがたは何を差し出すのか。自らを称賛する長年の仕事という資本だろうか。あなたがたは戻ってきたイエスに信用してもらうために何を差し出すのだろうか。それはあなたがたの、いかなる真理にも従わない傲慢な本性だろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

人が神に反対し、反抗する根源はサタンによる墮落である。サタンによって墮落させられたので、人の良心は麻痺してしまい、不道徳になり、考え方は低下し、逆行する精神状態を持ってしまった。サタンによって墮落させられる前は、人はもちろん神に従い、神の言葉を聞いた後それらに従っていた。人は健全な理知と良心を生来持っており、人間性も正常であった。サタンによって墮落させられた後、人が本来持っていた理知、良心、人間性は鈍くなり、サタンによって損なわれ、したがって人は神に対する服従や愛を失った。人の理知は異常になり、性質は動物の性質と同じになり、神に対する反抗はますます頻繁になり、深刻になっている。しかし、人はまだこのことに気づかず、認識せず、単に盲目的に反対し、反抗している。人の性質の暴露は人の理知、見識、良心の表出であり、人の理知や見識は不健全で、良心は極めて鈍くなっているのです、したがって人の性質は神に対して反抗的である。……

人の墮落した性質が発覚する源はその人の鈍くなった良心、悪意のある本性、不健全な理知でしかない。良心や理知が正常に戻ることができれば、人は神の前で神に用いられるのに相応しい人になるだろう。人がますます神に反抗的になるのは、単に良心がつねに麻痺しており、その理知が決して健全ではなく、ますます鈍くなっているからであり、そのためイエスを十字架に釘でうちつけさえしたし、終わりの日に受肉した神の肉

体が自分の家に入るのを拒絶し、神の肉体を罪に定め、神の肉体を卑しいものとみなすのである。少しでも人間性を持っていれば、受肉した神の肉体をそんなにひどく扱わないだろう。少しでも理知があれば、受肉した神にこのような卑劣な扱い方はしないだろう。少しでも良心を持っていれば、受肉した神にこのような方法で「感謝する」ことはないだろう。人は神が受肉した時代に生きているにもかかわらず、神がそのような良い機会を与えたことに感謝することができず、それどころか、神の到来を呪うか、あるいは神が肉となった事実を完全に無視し、一見したところそれに反対し、うんざりしている。神の到来を人がどのように扱うかにかかわらず、要するに、神は辛抱強く常に自らの働きを行なってきた。たとえ人が神を全く歓迎していなくても、盲目的に神に要求を突き付けてもである。人の性質はこの上なくひどくなり、理知はこの上なく鈍くなり、良心は悪い者によって完全に踏みにじられ、もともとの良心はずっと以前に途絶えてしまった。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」
より

2. 真の道を探し求めるには、理知を持たなければならない

関連する神の言葉

神と人を同等なものとして語ることはできない。神の本質と神の働きは人にとって最も深遠で理解しがたい。神が人の世でみずから働きを行わず、言葉を話さなかったら、人は決して神の意志を理解することはできないし、全生涯を神に捧げてきた人々でさえ、神の承認を得ることはできない。神の働きがなければ、人の行いがどんなによくても無駄である。神の考えはいつも人の考えより高く、神の英知は人にとって測り知れないものだからである。そこで、神と神の働きが「はっきりと見える」人々は無力で、皆傲慢で無知だとわたしは言う。人は神の働きを決め付けるべきではないし、その上、人は神の働きを決め付けることはできない。神の目には人は蟻よりも小さいのに、どうして人が神の働きを推し測ることなどできようか。「神はあんな方法やこんな方法では働かない」とか「神はこのようである、あのようである」といつも言っている人々――彼らは皆傲慢ではないだろうか。わたしたちは皆、肉体を持つすべての人々はサタンによって墮落させられていることを知るべきである。神に反抗するのは彼らの本性であり、彼らは神と同等ではなく、ましてや神の働きに助言することなどできない。神が人をいかに導くかは神自身の働きである。人は服従するべきであり、これこれしかじかの意見を

持つべきではない。人はちり芥にすぎないのだから。わたしたちは神を見つけようとしているのであり、神が考慮すべき神の働きの上に自分たちの観念を重ね合わせるべきではないし、神の働きに故意に反対するために自分たちの墮落した性質を用いることなどもってのほかである。そのような行為はわたしたちを反キリストにさせるのではないだろうか。どうしてそのような人々が神を信じているなどと言えるだろう。わたしたちは神の存在を信じているので、神を満足させ、神を見たいと望んでいるので、真理の道を求め、神と融和するための道を探すべきである。わたしたちはかたくなに神に反抗すべきではない。そのような行動に何の益があるだろう。

今日、神には新しい働きがある。あなたはこれらの言葉を受け入れないかもしれない。あなたには奇妙な言葉に感じられるかもしれないが、わたしはあなたに本性を表さないよう忠告する。神の前で本当に義に飢えかわいている人々だけが真理を得ることができ、本当に敬虔な人々だけが神によって啓発され、導かれることができるからである。口論を通して真理を求めてもそこからは何も生じない。静かに求めることによってのみわたしたちは結果を得ることができる。わたしが「今日、神には新しい働きがある」と言う時、わたしは神が再び肉となることに言及している。おそらく、あなたはこれらの言葉を気にしないか、これらの言葉を軽蔑するか、あるいはおそらくあなたにとって極めて興味深い言葉であるかもしれない。いずれにせよ、わたしは神の出現を本当に切望するすべての人々がこの事実を直視し、慎重に考慮することを希望する。結論に飛びつかない方がよい。これが賢い人々の行動すべきやり方である。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

イエスの再臨は、真理を受け入れることのできる者には大いなる救いであるが、真理を受け入れることのできない者にとっては、罪に定められるしるしである。あなたがたは自分自身の道を選ぶべきで、聖霊を冒瀆したり真理を拒んだりするべきではない。あなたがたは無知で傲慢な者でなく、聖霊の導きに従い真理を慕い求める者にならなければならない。そうすることでのみ、あなたがたの益となる。わたしは、注意深く神への信仰の道を歩むようにあなたがたに助言する。結論を急いではない。さらに、あなたがたは神への信仰において、無頓着であったり、のんきであってはならない。少なくとも、神を信じる者は謙虚で畏敬の念に満ちているべきだということを知らなければならない。真理を聞いたことがありながら鼻であしらうものは愚かで無知である。真理を聞いたことがありながら不注意に結論を急いだり非難したりする者は、おごりで包まれている。イエスを信じる者は誰も、他人をののしったり非難したりする権利はない。あ

なたがたは皆、理知があり、真理を受け入れる者でなければならない。真理の道を聞き、いのちの言葉を読んだのち、自分の信念と聖書に沿っている言葉は一万語にひとつだと信じているかもしれない。そうであれば、その一万分の一の言葉の中で求め続けなければならない。それでもわたしはあなたに謙虚であり、自信過剰にならず、思い上がらないようにと助言する。あなたの心が抱いている神へのわずかな畏敬の念から、より大きな光を得ることになる。もしあなたがこれらの言葉をよく吟味し、繰り返し思い巡らすならば、それらが真理かどうか、それらがいのちかどうか分かるであろう。ほんの数行読んだだけで、「これは聖霊によるちょっとした照らしでしかない」とか、「これは人々を惑わすために来た偽キリストだ」と盲目的に非難する人たちもいるであろう。そのようなことを言う人たちは、無知ゆえに目が見えなくなっている。あなたは神の働きや知恵をほとんど理解していない。わたしはあなたに助言する。最初からやり直さない。終わりの日における偽キリストの出現のせいで、神の言葉を盲目的に非難してはならない。惑わされることを恐れる為に、聖霊を冒瀆する者となってはならない。それはとても残念なことではないだろうか。もし良く調べた後で、これらの言葉が真理ではない、道ではない、神が表したことではないと未だに信じるならば、あなたは最後に懲罰を受けなければならない、祝福されない。もしこれほどわかりやすく明確に話された真理を受け入れられないなら、あなたは神の救いにそぐわないのではないのか。あなたは神の玉座の前に戻るほど幸運ではない人ではないのか。このことを考えなさい。軽はずみで衝動的になってはいけない。神への信仰をまるでゲームのように考えてはいけない。あなたの終着点のために、前途のために、そしてあなたのいのちのために、考えなさい。自らをいい加減に扱ってはならない。あなたはこれらの言葉を受け入れることができるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

神の足跡を探し求めている私たちは、神の心と、神の言葉、神の発する声を探り求める必要がある。神の新しい言葉があるところには神の声があり、神の足跡があるところには神の業があるからである。神による表現があるところには神の現れがあり、神の現れがあるところには真理と、道と、いのちがある。神の足跡を探し求める中で、あなたがたは「神は真理であり、道であり、いのちなのです」という言葉を無視していた。そのため、真理を受け取っても神の足跡を見出したとは思わない人が多いのである。ましてや、神の現れを認めることなどない。なんと大きな過ちだろうか。神の現れは人が思

うようなかたちで来ることはない。ましてや神が人の言うままに現れるようなことはない。神は、自分の判断で動き、自分の計画に従って働く。さらに、神には神自身の目的と方法がある。神は自分のしよとすることを人に相談したり話し合ったりする必要はない。ましてや一人一人に自分がしよとすることを知らせるようなことはない。これが神の性質であり、それはすべての人が認めるべきことである。もし神の現れをその目で見たいと思うなら、神の足跡をたどりたいと願うなら、自分自身の観念というものを超越しなければならない。神にこれをせよあれをせよと命じることは許されない。ましてや神を自分の枠の中に閉じ込めたり、自分の観念の中に押し込めたりすべきでない。そうではなく、どのように神の足跡をたどるべきか、どのように神の現れを受け止めるべきか、どのように神の新しい働きに従うべきかと問うべきなのである。これが人のすべきことである。人は真理ではなく、真理を持っているわけでもない。だから人は探し求め、受け入れ、従うべきである。

アメリカ人でも、イギリス人でも、どこの国の人でも、自分という枠を乗り越え、自分という存在を超越し、神の創造物として神の働きを見なくてはならない。そうすれば、神の足跡を枠にはめることはないだろう。それは、特定の国や民族に神が現れることはないだろうと考えている人が多いからである。ああ、神の働きの意義はなんと深く、神の現れはなんと重要か。それは人の観念や考えで測ることなどできるのだろうか。そのため、神の現れを探し求める際には、みずからの国籍や民族性という枠を突き抜けるべきである。そうすれば、自分自身の観念に制約されることなく、神の現れを喜び迎えることができる。そうでなければ、暗闇の中にいつまでもとどまり、神から認められることもない。

『言葉は肉において現れる』の「神の現れによる新時代の到来」より

神は全人類の神である。神が自分を一つの国や民族の所有物とすることはない。神が自分の計画にある働きを、形式や国、民族といった制限を受けることなく行う。これまであなたはこのような形式を考えたこともなかったかもしれないし、そのような形式があることを否定するかもしれない。神が現れる国や民族は差別されている最貧国かもしれない。しかし、神には神の知恵がある。神は、自分の力によって、また自分の真理と性質を通して、自分と心が一つになっている人々をすでに得ている。それは神が求めていた人々で、神に征服され、苦しい試練とあらゆる迫害に耐え、最後の最後まで神に従うことのできる人々である。神が形式や国の制約を受けずに現れる目的は、神が自分の計画どおりに働きを完成できるようにするためにである。たとえば、神がユダヤの地で

肉となったとき、その目的は十字架の働きを完成させ、人類をあがなうためだった。しかし、ユダヤ人は神にそのようなことができるわけがないと考えた。神が肉となって、主イエスの姿をとって現れることなどありえないと考えたのである。この「ありえない」という思いが、ユダヤ人が神を罪に定め、神に敵対してしまう原因となった。そして、最終的にはイスラエルの破滅へとつながった。今日も、多くの人が同じような間違いを犯している。神は今すぐにでも現れるかもしれないと当てもなく言いながらも、神の現れを罪に定める。その「ありえない」という思いが再び、神の現れを自分たちの想像できる範囲に押し込めてしまっているのである。わたしは、神の言葉に出会って、それを一笑に付した人々を数多く見てきた。このような態度は、神を罪に定め、冒涇したユダヤ人と何ら変わりがないではないか。真理と真剣に向き合うことがなく、ましてや真理を慕い求めることもしない。ただやみくもに研究し、気楽に待っているだけである。そのように研究し、待っていることで得られるものは何なのか。あなたは神から個人的な導きを受け取ることができるか。神が語った言葉を聞き分けることができないなら、神の現れをどうやってその目で見ることができるのか。神が現れるところでは、真理の現れと神の声がある。真理を受け取ることができる人だけが神の声を聞くことができる。そしてそういう人だけが神の現れを見ることができる。まずは、自分の観念を脇に置きなさい。立ち止まって、次の言葉をよく読みなさい。あなたが真理を慕い求めるなら、神はあなたの知性を明るくし、神の心と言葉を理解できるようにしてくれる。「ありえない」という思いを脇に置いておきなさい。人が不可能だと思えば思うほど、実際に可能になる。神の知恵は天より高く、神の思いは人の思いより高く、神の働きは人の思いや観念をはるかに超越するものだからである。不可能であればあるほど、そこには探し求めるべき真理がある。人の観念と想像を超えるものであればあるほど、そこには神の心が詰まっている。どこで自分を現そうとも、神は神だからである。神の本質が現れる場所や方法で変わることはない。神の性質は、神の足跡がある場所によらず、いつも同じである。神の足跡がどこにあらうとも、神は全人類の神である。たとえば、主イエスはイスラエル人の神というだけでなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の神でもある。さらに言えば、全宇宙で唯一無二の神である。だから、神の語る言葉から神の心を探し求め、神の現れを発見し、神の足跡に従おう。神は真理であり、道であり、いのちである。神の言葉とその現れは共存する。また、神の性質と足跡はいつでも人類に対して開いている。兄弟姉妹たちよ。ここに記した言葉に神の現れを見てとってほしい。そして、新しい時代に向かって神の足跡をたどってゆき、神の現れを待ち望む人々に用意された新天新地にたどりついてほしいのである。

3. 神を信じることに、神との正常な関係を確立すべきである

関連する神の言葉

神の信仰においては、少なくとも神と正常な関係を持つという問題を解決する必要がある。神との正常な関係がなければ、神を信仰する意義は失われる。神との正常な関係の確立は、神の存在によって心を鎮めることによって完全に実現される。神との正常な関係というのは、神のいかなる働きをも疑ったり否定したりせずに従えるということ、そしてさらに、神の前で善意を持ち、自分を顧みず、何をしている時も、神の家族の利益をもっとも重視し、神の監視を受け入れ、神の采配に従うということを意味する。あなたは何かをするときにも、神の前で自分の心を鎮めることができる。たとえあなたが神の心を理解していなくても、本分を尽くし、責任を果たすために全力を尽くす必要がある。神の心が明らかになるまで待つから、それを実践しても遅くはない。あなたと神との関係が正常になったときには、あなたと人々との関係も正常になるだろう。すべては神の言葉という基礎の上に確立される。神の言葉を飲食することにより、神の求めに応じて行動し、自らの見解を正し、神に逆らったり教会の邪魔になるようなことをしたりしないようにしなさい。兄弟姉妹のいのちに役立たないことはせず、他の人々の役に立たないことを言わず、恥ずべきことをしないようにしなさい。何をする時にも、公正かつ高潔に、神に見られても恥ずかしくないようにしなさい。時として肉体が弱いことがあるとしても、あなたは自己の利益に固執することなく、神の家族に恩恵を与えることを最優先し、義を行う。あなたがこのように行動できるなら、あなたと神との関係は正常になる。

『言葉は肉において現れる』の「あなたと神との関係はどのようなものか」より

あなたが何かをするときには、常に動機が正しいかどうかを吟味する必要がある。あなたが神の求めにしたがって行動できるなら、あなたと神との関係は正常である。これが最低限の基準である。自分の動機を吟味した結果、間違った動機が出てきた場合でも、そのような動機に背を向けて、神の言葉に従って行動できるなら、あなたは神の前で正しい者になるだろう。それは、あなたと神との関係が正常であることを示し、あなたの

することのすべてが、自己のためではなく神のためであることを示すだろう。何かをしたり言ったりするときには、常に心を正して義にかなうようにし、感情に流されたり、自分の意志で行動したりしないようにしなさい。これが神の信徒が自らを律する原則である。人の動機や背丈は小さなことの中に現れる。したがって、神によって全きものとされる道を進むためには、人はまず自分自身の動機や神との関係をはっきりさせる必要がある。あなたと神との関係が正常になって初めて、あなたは神により全きものとなり、そうして初めて、あなたに対する神の取り扱い、刈り込み、訓練、鍛錬が望ましい効果を達成することができる。それはつまり、人々が自分の心の中に神を抱いて、個人の利益を追求せず、個人の将来を考えず（これは肉の思いを意味する）、いのちに入るための重荷を背負って、真理の追求に最善を尽くし、神の働きに従うということだ。そうすれば、あなたの追求する目標は正しく、あなたと神との関係は正常である。神との関係を正すことは、霊的な旅を始めるための第一段階であると言える。人の運命は神の手の中にあり、神によってあらかじめ決められており、自分で変えることはできないが、あなたが神により全き者とされるかどうか、神のものとされるかどうかは、あなたと神との関係が正常かどうかによって決まる。おそらく、あなたには弱い部分や従順でない部分がある。しかし、あなたの見解や動機が正しい限り、そして、あなたが神との関係を正して正常な関係にしている限り、あなたには神によって全きものとされる資格がある。あなたが神と正しい関係を持たず、肉のためや自分の家族のために行動するなら、どんなに一生懸命に働いても、何の役にも立たない。あなたの神との関係が正常であれば、すべてがあるべきところに落ち着く。神が見ているのは、あなたの神の信仰についての見解が正しいかどうかだけで、それ以外は何も見ていない。あなたが誰を信じ、誰のために信じ、なぜ信じるか。あなたがこのようなことをはっきり認識し、自分の見識や実践を正すことができれば、あなたのいのちは成長し、あなたはきっと正しい道に進むことができるだろう。あなたと神との関係が正常ではなく、あなたの神の信仰についての見解が逸脱したものであるなら、それによってそれ以外のすべては台無しになるだろう。あなたがどのように神を信仰しても、何も得られないだろう。あなたと神との関係が正常な場合にのみ、あなたが肉に背を向けて、祈り、苦しみ、耐え、従い、兄弟姉妹を助けて、神により多く献身したとき、あなたは神に認められるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「あなたと神との関係はどのようなものか」より

人間は、自らの心で神の霊に触れることにより、神を信じ、愛し、神を満足させ、それによって神の満足を獲得する。また、自らの心で神の言葉に接する時、彼らは神の霊に

よって動かされる。正常な霊的生活を実現し、神との正常な関係を確立することを望むのであれば、あなたはまず自らの心を神に捧げ、神の前で自分の心を静めなければならない。自らの心を全て神に注いだ後、初めて、人間は徐々に正常な霊的生活を得ることが出来る。人間が神への信仰の中で自らの心を神に捧げず、心が神の中にあらず、神の負担を自分自身のものとして扱わなかった場合、彼らが何をしても、それは神を欺くことである。そして、まさしくそれが宗教に熱心な人々の行動のすべてである。これでは神から称賛を受けることは出来ない。神はこのような人からは何も得る事が出来ない。こういう人は、神の家の装飾品のように場所を取るだけで何の役にも立たず、神の業の脇役以外に使い道がない。神はこのような者を用いない。このような人間の内では、聖霊の働く機会はない。しかしそれ以上に、このような人には完全にする価値が無い。こういう部類の人間はまさしく「生ける屍」であり、彼らには聖霊により用いられることの出来る要素が全く無い。彼らは、すべてサタンによって占有され、サタンにより極端に腐敗させられ、また、神によって排除される対象である。現在、聖霊は、人間の長所を活用することのみならず、人間の欠点を完全なものとし、変化させることによって、人々を用いている。あなたの心を神に注ぎ、神の前に静めることが可能であれば、あなたには、聖霊により用いられ、聖霊の啓示と光を受ける可能性と資格があり、またそれ以上に、聖霊によって自分の欠点を補ってもらう機会があるであろう。自分の心を神に捧げる時、あなたは更に深く肯定的な側面に入ることができ、より高いレベルの洞察に達することができる。否定的な側面においては、自らの過ちや欠点が一層分かるようになり、神の意志を満足させることをもっと熱心に求めるようになり、受動的ではなく、活発に真理の道に入るであろう。それは、あなたが正しい人間であることを意味するであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神との正常な関係を築くことは極めて重要である」より

もしあなたが、神との正常な関係を持ちたいのであれば、自らの心を神に向けなければならない。そして、それを土台として、あなたは他の人々との正常な関係をも得るであろう。神との正常な関係を持たなければ、あなたが他の人たちとの人間関係を維持するために何をしようとも、また、そのためにいかに励み、いかに多くの労力を費やしたとしても、それは依然として人間の人生哲学に属するものであろう。あなたは、人々が自分を賞讃するように、人間の観点と哲学により、人々の間で自らの地位を維持している。あなたは、神の言葉に従って人々との正常な関係を確立してはいない。もしあなたが、人々との関係に重点を置かず、神との正常な関係を維持し、自らの心を進んで神に捧

げ、神に従うことを学んだならば、全ての人々との関係も極めて自然に正常なものとなるであろう。このようにすれば、これらの人間関係は、肉の上ではなく、神の愛という土台の上に成り立つのである。そこには肉に基づく相互関係は、ほとんど存在しないが、霊においては、交わりと同時に、互いへの愛、慰め、補給がある。これら全ては、神を満足させる心を基礎として為されるのである。このような人間関係は人生哲学によって保たれているのではなく、神のために重荷を荷うことによって自然と形成される。これらの関係には、人間の努力は不要であり、それは神の言葉の原則により行われる。あなたには、神の心に対して思慮深くあらうとする意欲があるだろうか。あなたには、神の前で「理性の無い」者となる意欲があるだろうか。あなたは、自ら進んで心を完全に神に捧げ尽くし、人々の間で自分の地位を考慮しないだろうか。あなたが接した全ての人々のうち、あなたが一番良い関係を持っているのは、誰であろうか。また、あなたが最悪の関係を持っていたのは、誰であろうか。あなたの人々との関係は、正常であろうか。あなたは全ての人々を平等に扱うだろうか。あなたの人々との関係は、自分の人生哲学に従って保たれているであろうか、それとも神の愛という基盤の上に築かれているであろうか。人が神に自分の心を捧げなければ、その人の霊は鈍感になり、麻痺し、意識を失ってしまう。このような人は神の言葉を決して理解することが無く、決して神との正常な関係を持つことは無いだろう。この種の人には、自分の性質を決して変えないだろう。人の性質を変化させることとは、人が神に自らの心を完全に捧げる過程であり、また神の言葉から啓示と光を得る過程でもある。神の業は、人を積極的に入らせるだけでなく、人が自分の消極的側面を認識した後、その側面を取り除くことが出来るようにする。あなたが、自らの心を神に捧げることが出来るのであれば、自分の霊の中の微妙な動きの一つひとつを感じる事が出来るようになり、神から受け取った一つひとつの啓示と光を知る事が出来るであろう。このことをしっかり保ちなさい。そうすれば、あなたは聖霊により完全にされる道へ、徐々に入るであろう。神の前であなたの心を静めることができればできるほど、あなたの霊は一層敏感で繊細になるであろう。そして、あなたの霊が聖霊による感動をもっと感知できるようになればなるほど、あなたの神との関係は一層正常なものとなるであろう。正常な人間関係は、自らの心を神に捧げることを基礎として成り立つのであって、人間の努力によって達成されるものではない。神なしでは、人々との関係は単なる肉の関係である。そうした関係は正常ではなく、情欲に耽溺することであり――それは神が嫌悪し、忌み嫌う関係である。たとえあなたが、自分は霊に動かされていると言っても、いつも自分が心を惹かれる人々や、自分が敬服する人々と交わりを持ちたがり、自分が心を惹かれない求道者が居て、その人に偏

見を持ち、その人とは交わろうとしないなら、それは、あなたが感情的な人間であり、神との正常な関係を全く持っていないことを、もっぱら証明するだけである。あなたは、神を欺き、自らの醜さを隠そうとしているのである。たとえあなたがある程度の理解を分かち合うことが出来ても、正しくない意図を抱いているのであれば、あなたが為す全てのことは、ただ人間の基準によってのみ、良いと見なされるものである。神はあなたを褒めはしないであろう。あなたは神の重荷によってではなく、肉によって行動している。神の前で自らの心を静め、神を愛する全ての者たちと正しいやり取りをすることが出来るなら、その時初めてあなたは神により用いられるに相応しい者になるのである。このように、あなたが他人とどのように交わろうが、それは人生哲学によるのではなく、神の重荷のことを心に思い、神の前で生きることであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神との正常な関係を築くことは極めて重要である」より

あなたは、神のいかなる発言でも、読んで理解したら、実践に移すべきである。あなたがかつてどのように実践しようが（かつてあなたの肉は弱かったかもしれないし、反抗的だったかもしれないし、反逆していたかもしれないが）、それは大きな問題ではなく、あなたのいのちが今成長することを妨げることはない。あなたが今日神と正常な関係を持つことができるなら、そこには希望がある。あなたが神の言葉を読むたびに、あなたが変わり、あなたの生活がよい方向に変わったと他の人々も認めるなら、それはあなたが神と正常な関係を持っていること、関係が正されたことを示している。神は、人々の罪を基準にして扱ったりしない。あなたが理解し認識した後、二度と反抗したり逆らったりしなければ、あなたにはまだ神の慈悲がある。あなたがこのことを理解し、神により全きものとなることを求める意志があるならば、あなたの神の前での状態は正常である。何をするときにも、必ずこう考えよ。「私がこれをやったら、神はどう思うか。それは兄弟姉妹のためになるか。神の家の働きにとって有益か」あなたの祈り、交わり、発言、仕事、人々との接触の意図を吟味し、あなたと神との関係が正常であるかどうかを吟味せよ。もしあなたが意図と意見がどのようなものであるか見分けることができないとすれば、あなたには判断力がないということであり、それはあなたが真理を知らなすぎるということを証明している。神の行うあらゆることを明確に理解し、神の言葉にしたがって物事を見て、神の側に立って物事を見ることができれば、あなたの見解は正されるだろう。したがって、神と良好な関係を築くことは、神を信仰する誰にとっても、最優先事項になる。これは誰もが、最も重要な課題として、また、人生における重要な項目として扱うべきである。あなたのやることはすべて、神との関係が正常であるかど

うかに照らして判断する必要がある。あなたの神との関係が正常であり、あなたの意図が正しいならば、それをしなさい。神との正常な関係を維持するには、個人的な利益を失うことを怖れてはならず、サタンが蔓延ることを許してはならず、サタンが自分にとって不都合な何かを見つけることを許してはならず、サタンがあなたを笑いものにすることを許してはならない。このようなことを避けようとすることは、あなたと神との関係が正常であることの現れである。それは肉のためではなく、むしろ、魂の平安のためであり、聖霊の働きを得るためであり、神の心を満たすためである。あなたが正しい状態になろうとするなら、神と良好な関係を築く必要があり、神の信仰についての自分の見解を正す必要がある。それは、自分を神のものとされ、神の言葉の実をあなたの中に示し、あなたをさらに啓発し啓蒙することを可能にする。このようにすれば、あなたは正しい道に進むだろう。神の現在の言葉を飲食し続けて、聖霊の働きの現状に溶け込み、神の現在の求めに従って行動し、古臭い慣習に従う事を止め、物事の古いやり方にしがみつくのをやめ、現在の仕事のやり方に素早く溶け込むようにしなさい。このようにすれば、あなたと神との関係は完全に正常になり、神を信仰するための正しい道に進むだろう。

『言葉は肉において現れる』の「あなたと神との関係はどのようなものか」より

4. 神の信者がもつべき聖徒らしい品格

関連する神の言葉

正常な人間性ということには、何が含まれているだろうか。識見、理知、良心、そして品格である。こうした側面それぞれについて正常性を実現出来るならば、あなたの人間性は基準に達している。あなたは正常な人間の姿を備え、神を信仰する者らしく行動すべきである。極めて高度な水準に達することや外交手腕を要求されているのではない。単に正常な人間の理知を備え、物事を洞察できる正常な人間であるべきであり、少なくとも正常な人間のように見えなければならない。それで十分であろう。現在あなたに要求されていること、全てあなたの能力の範囲内であり、これは、魚に木を登らせることでは決してない。あなたに対し無益な言葉が述べられることも、無益な働きが行われることもない。あなたの生活において現れる醜悪さを、全て捨て去る必要がある。あなたがたはサタンにより墮落させられて来たので、サタンに毒され過ぎている。あなたに求められているのは、そうした墮落したサタンのような性質を捨て去ることであり、高い

地位を得ることでも、有名人や偉人になることでもない。それは役に立たない。あなたがたに行われる働きは、あなたがたが生来備えているものに即したものである。わたしが人々に要求することには、限度がある。現在の人々が全員、中国政府の幹部のように振る舞い、中国政府の幹部のような口調を取り入れ、政府高官のような話し方をする訓練を受けたり、随筆家や小説家のような身振りや話し方の訓練を受けたりするように要求されたとしたら、それもまた失敗するであろう。おそらく実現不可能であろう。あなた方のような人々は、自分の素質にあわせて、少なくとも知恵を用い、機転を利かせて話をして、物事を明瞭に説明できるようにならなければならない。そうすれば、条件を満たすであろう。少なくとも、識見と理知を身に付ける必要がある。現在の主要事項は、墮落したサタンのような性質を捨て去ることである。あなたは、自分達が表す醜悪さを捨て去る必要がある。未だにそうしたものを捨て去っていないのであれば、どうして至高の理知や識見に触れられるであろうか。多くの人々が時代が変わったことを知っているのに、慎ましさや忍耐を実践しない。愛や聖人のような品位を備えていないこともありえる。なんと馬鹿げた人々であろうか。彼らには正常な人間性がほんの少しでもあるであろうか。語るべき証があるだろうか。彼らには識見や理知が一切ない。無論、人々の実践のうち逸脱していたり誤っている側面は修正する必要がある。過去における人々の柔軟性のない霊的生活や、感覚麻痺や愚かさの様相、このようなものは全て変わらなくてはならない。変えるということは、あなたを自墮落にさせたり、肉に耽溺させるということでも、言いたいことを言うことでもない。不注意な発言をしてはならない。正常な人間のように行動するということは、筋の通った話をするということである。然りは然り、否は否とだけ言いなさい。事実に忠実に、適切な話しかたをすること。ずるをしたり、嘘をついてはならない。性質の変化に関し、どのような限界に普通の人が到達しうるかを覚えておく必要がある。これが不明ならば、あなたは現実に入っていくことはできないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「素質の向上は、神の救いを授かるためである」より

正常な人々の性質にはひねくれた点や不正直さはなく、人々はお互いに正常な関係にあり、孤立していないし、その生活は凡庸でもなければ退廃的でもない。そこで神もすべてのものから褒め称えられ、神の言葉は人間の間に広がり、人々はお互い平和に神の配慮と保護のもとに暮らし、地上は調和で満たされ、サタンの妨害はなく、神の栄光が人間の間で最も重要なものになっている。このような人々はまるで天使である。純粹で、活気があり、けっして神について不平を言わず、地上の神の栄光だけに、ひたすら努力

を捧げる。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十六章」より

わたしには多くの望みがある。わたしの願いは、あなたがたが適切かつ行儀良く振る舞い、忠実に自分の本分を尽くし、真理と人間性を備え、神のために全てを、そして人生を投げ打つことが出来ること、などがある。こうした望みは、全てあなたがたに欠如している物事と腐敗、反抗から生まれたものである。

『言葉は肉において現れる』の「過ちは人間を地獄へ送る」より

神が用いる人間は、礼儀正しく話し、不注意に語ることが無く、神の前で常に心を静めておくことが出来るが、外見から見ると不合理であり、他の人々と正常な関係を持っていないように見える。しかし、正にこういう人こそ聖霊に用いられるに充分なのである。神の言われるところの、この「不合理な」者は、他の人々と正常な関係を持っていないように見え、彼らには外面だけの愛や実践がない。しかし、霊的なことを分かち合っている時は、彼らは心を開き、神の前での実経験から得た啓示や光を、無私無欲で他の者たちに分け与えることが出来る。彼らはこのようにして神への愛を表し、神の心を満足させるのである。他の者たちがみな彼らの中傷し、嘲笑する時、彼らは外部の人々や出来事、物事により支配されるのを回避することができ、また、なおも神の前で静まっていることが出来る。このような人には、独自の洞察があるようだ。他の者たちがどうであれ、彼らの心は決して神を離れない。他の人たちがにぎやかに、また、おもしろそうにしゃべっている時でも、彼らの心は依然として神の前にあり、彼らは神の言葉について熟考したり、あるいは黙して心の中で神に祈り、神の意図を求めたりしている。彼らは、他の人々との正常な人間関係を維持することを決して主眼とすることが無い。このような人には全く人生哲学が無いように見受けられる。こういう人は、外見上は陽気で、愛想よくて、無邪気であるが、冷静な心も備えている。これが、神が用いる人の人間像である。人生哲学や「正常な理性」などは、このような種類の人間には伝わらない。このような人は、自らの心をすべて神の言葉に捧げており、その心には唯一神しか持っていないように見受けられる。このような種類の人こそ、神の言われるところの「理性の無い」人間であり、このような人こそが、まさに神により用いられる者である。神に用いられている人の印とは、いついかなる所においても、自らの心が常に神の前にあり、他人がいかに放埒であろうと、また彼らがどれほど欲情と肉に耽溺していようと、その人の心は、決して神を離れることが無く、群衆に流されることが無いということである。

ある。唯一このようなタイプの人のみが、神が用いるのに適し、まさに聖霊により完全にされる者である。このような境地に達することが出来なければ、あなたには、神のものとされ聖霊により完全にされる資格は無い。

『言葉は肉において現れる』の「神との正常な関係を築くことは極めて重要である」より

真理を持っている人々は、実体験から証しに固く立つことができ、その信仰的立場をしっかりと守り、神の側に立ち、決して退くことがなく、神を愛する他の人々と正常な関係を持つことができ、自分達に何かが起こった時は、完全に神に従い、そして死にまでも神に従う。日々の生活におけるあなたの実践と表現は神への証しであり、教えを実践することであり、神への証しなのであり、それが真に神の愛を享受しているということなのだ。この点まで経験を重ねてくると、しかるべき成果が生み出されていることになる。あなたは実際に生きることができ、その行いがみな他の人々から賞賛の目で見られる。外見は凡庸であっても、最上の敬虔な生き方をしているのであり、神の言葉について交わるときも神に導かれ、神によって啓かれている。自分の言葉で神の心を語ることができ、現実的なことを伝えることができ、霊において奉仕することを深く理解している。話し方は率直で、礼儀正しく高潔で、争うことがなく、品があって、何かが降りかかった場合には、神の按配に従うことができ、証しに固く立つことができ、また、どんな場合にも穏やかで落ち着いていられる。このような人が真に神の愛を見たのである。また、まだ若くとも、年配の人のように振る舞う人々もいる。そうした人は成熟しており、真理を把握していて、他の人々から尊敬を受ける。そうした人々は、証しをすることができ、神の存在を示すことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する者たちは永遠に神の光の中に生きる」より

説教と交わりの参考箇所

神を本当に信じる人は、少なくとも次に挙げる霊的生活の五つの側面を毎日実行します。神の御言葉を読むこと、神に祈ること、真理について交わること、聖歌と賛美歌を歌うこと、そして、すべてのことにおいて真理を求めることです。また、あなたが教会生活を送っているなら、より大きな喜びがあることでしょう。人に物事を受け入れる一般的な能力があれば、つまり、自分で神の御言葉を読んだあと神の意図を把握することができるなら、その人は真理を理解でき、どうすれば真理に従って行動できるのかを知ることでしょう。そして、このような人が信仰において成功を遂げると言ってよいでしょう。

そのような霊的生活をしていない場合、あるいは極めて不適切な霊的生活を送り、霊的生活が断続的にしか存在しない場合、その人は混乱した信者になります。混乱した信者は、本分を尽くす際、良い成果をあげることができません。霊的生活を送ることなく神を信じるということは、ただ口先だけで信仰することです。そのような人々の心の中には神はなく、まして神への恐れなどありません。このような人々がどうして正常な人間の似姿を持つことができるのでしょうか。

.....

正常な人間のふるまい方に関しては、実践と霊的成長のために留意すべき十の要点があります。

1. 礼儀を守り、規律を知り、老人を尊敬し、若者の面倒を見なさい。
2. 自分自身と他の人たちにとって有益な正しい生活の仕方を心がけなさい。
3. 気品のある端正な服装をしなさい。奇妙な服や派手な服装は禁じられています。
4. どんな理由であれ、兄弟姉妹に頼んでお金を借りてはなりません。また他人の持ち物を気軽に使ってはなりません。
5. 異性に接するときは、節度をわきまえなければなりません。品位と公正をもって行動しなければなりません。
6. 人と口論してはなりません。他の人に辛抱強く耳を傾けることを学びなさい。
7. 衛生状態を良好に保ちなさい。ただし、現実的条件に照らし合わせてそうしなさい。
8. 他者との正しい交わりと関係を築きなさい。人々を尊重し、思いやり、互いに愛し合うことを学びなさい。
9. 困っている人を助けるためにできる限りのことをしなさい。他の人から品物を求めたり受け取ったりしてはなりません。
10. 他の人をあなたのために奉仕させてはなりません。自分が為すべき仕事を他人にやらせてはなりません。

すべての信者は自分の生活の中で最低限この十の規律に従うべきです。これらの規律を破る者は誰でも性格が貧弱です。これらは神の家の規律と呼ぶこともできます。そして、これらの規律を頻繁に破る者は必ず見捨てられます。

真理を追求する者たちは皆、昔の聖徒たちの十の肯定的な品格を模範にして自らを形成する必要があります。これらを定期的実践し保持する人は、必ず自分の大きな報いを刈り取るでしょう。これらは人類にとって極めて有益です。

聖徒の品格に倣うための十の原則：

1. 毎朝約三十分間、神の言葉を祈りながら読んで霊的デボーションを行いなさい。
2. より正確に真理を実践できるように、あらゆることにおいて日々神の意図を求めなさい。
3. あなたが接するすべての人と交わり、互いの長所から学び、互いの短所を補い合いながら、双方が進歩できるようにしなさい。
4. 楽観的な態度で生活し、絶えず聖歌や讃美歌を歌い、神の恵みに感謝しなさい。
5. 俗世間にとらわれてはなりません。常に心の中で神に近づくようにしなさい。また、他人のことに干渉しないようにしなさい。
6. 心の中に知恵を保ち、邪悪な場所や危険な場所から離れなさい。
7. 人と口論してはなりません。真理について交わり、他の人と仲良くしなさい。
8. 全てを尽くして喜んで他人を助け、彼らの悩みを軽減し、神への信仰に入る際、彼らが困難を解決できるよう助けなさい。
9. どのように他の人に従うべきか学びなさい。人々を支配したり、彼らに強制したりしてはなりません。あらゆることにおいて人々が恩恵をこうむるようにしなさい。
10. 心の中で絶えず神を礼拝し、すべてのことにおいて神が主権を握るようにはからい、あらゆることにおいて神を満足させなさい。

上に挙げた生活のための十の原則と聖徒の品格に倣うための十の方法は、すべて人々が

実行できることです。それらを理解する限り、人々は実践することができ、たまに犯す過ちを解決するのは難しいことではありません。もちろん、非常に貧弱な人性を持つ特定の人々は例外です。

「兄弟の交わり」より

正常な人性とは、主に良心、理性、品性、そして尊厳を持つことを指します。良心と理性には、寛容さを示すこと、忍耐をもって他人に接すること、誠実であること、他の人との交わりにおいて知恵を持つこと、兄弟姉妹への真の愛を持つことなどが含まれます。これらが正常な人性の中に含まれるべき五つの条件です。

第一の条件は、寛容な心を持つことです。兄弟姉妹にどのような欠点が見られても、私たちは寛容と理解を示して、彼らを正しく扱うべきです。私たちは彼らを排除したり、厳しく非難したりしてはなりません。他の人々の欠点や墮落が露わになった時は、今は神の救いの働きの期間であることを心に留めるべきです。ですから、神の選びの民の墮落が明らかにされるのは当然であり、私たちはそれを理解してあげるべきです。それはさておき、私たちは自分自身の墮落に目を留める必要があります。私たち自身に明らかにされる墮落は、必ずしも他の人よりも少ないわけではありません。私たちは他の人に明らかにされた墮落を、私たち自身の墮落とまったく同様に扱うべきです。そうすれば私たちは他の人にも寛容を示すことができます。他の人に寛容になることができないなら、あなたの理性に問題があることになります。それはまた、あなたが真理を理解しておらず、神の働きを知っていないということを示しています。神の働きを知らないということはどういう意味でしょうか。それは、神の働きがまだ終わっておらず、人間がまだ神の救いの働きの期間に生きているということを認識しないことです——私たちはまだ完全にされていません。したがって、必然的にすべての人の墮落が明らかにされるのです。今、誰もが真理を正しく追求し、自分自身の墮落を理解し、神の言葉を体験しています。誰もが真理に入る過程の中にあり、まだ真理を完全には得ていません。人々が真理を得た時、初めて命の性質が変わり始めるのです。人々がこの点を把握する時、彼らは正常な人間の理性を持つようになり、他の人を理性的に扱うようにもなります。人々に理性が欠けているなら、彼らは誰をも理性的に扱わないでしょう。

第二の条件は、他人に対して忍耐を実践することです。単に寛容であるだけでは不十分です。あなたはまた忍耐強くなければなりません。時には寛容と理解を示すだけでよい

ですが、必ずある兄弟または姉妹があなたを傷つけたり憤慨させたりするようなことをするでしょう。このような状況では、人間の墮落した性質が突発し易いです。なぜなら、私たちはみな争って自分の誇りを守るのを好み、自己中心で虚栄心があるからです。だから誰かがあなたを傷つけることを言ったり、あなたを憤慨させるようなことをするのなら、忍耐強くなければなりません。忍耐も理性の範疇に含まれています。理性がなければ、人々が忍耐を養うことはありません。しかし私たちは、どうすれば忍耐強くなれるでしょうか。他人に対して忍耐強くなりたいのであれば、まず彼らを理解する必要があります。つまり、あなたを傷つけるようなことを言う者が誰であれ、まず次のように認識すべきです。「彼の言葉は私を傷つけた。彼の言ったことは私の欠点を露わにし、私に向けられているようだった。彼の言葉が私に向けられているなら、彼は何を言いたいのだろうか。私に危害を加えようとしているのだろうか。彼は私を敵と見なしているのだろうか。私を憎んでいるのだろうか。私に復讐しようとしているのだろうか。私は彼を憤慨させたことはないので、その答えが『然り』であることはあり得ない。」そういう場合は、この兄弟または姉妹が何を言ったとしても、あなたを傷つけたり、あなたを敵として扱う意図はなかったことになります。それは確かです。それらの言葉を言った時、彼らは単に正常な人間が考えることを表現していただけなのです。彼らは真理について交わり、認識について議論し、人々の墮落を暴露し、あるいは彼ら自身の墮落した状態を認めていたのです。意図的に特定の個人を対象にしてはいなかったはずです。まず理解を示してあげると、あなたの怒りは消え去り、忍耐を得ることができます。「誰かが私をわざと攻撃して標的にし、何らかの目的を達成するために意図的にそのようなことを言うなら、どうして忍耐などできるだろうか」と尋ねる人もいるでしょう。あなたは次のように忍耐すべきです。「たとえ誰かが意図的に私を攻撃しても、私はなおも忍耐すべきだ。なぜなら彼らは私の兄弟姉妹であり、私の敵ではなく、決して悪魔であるサタンなどではないからだ。兄弟姉妹が何らかの墮落を露わにし、心に何か意図を抱くことは避けられない。これはあたりまえなのだ。私は理解を示し、同情し、忍耐しなければならない。」あなたはこのように考え、次のように神に祈るべきです。「神よ、誰かが今私の誇りを傷つけました。私は面目を失うのを受け入れることができません。私はいつも腹が立って我慢できなくなり、彼らに言い返さずにはおられません。これはまことに墮落の現れです。私には他の人への愛があるといつも思っていたが、今ある人の言葉が心に突き刺さり、私は耐えられません。私は言い返して、復讐したいのです。私の愛はどこに行ってしまったのでしょうか。これはすべてただの憎しみではないのでしょうか。私の心の中にはまだ憎しみがあるのです。神よ、あなたが私たちを憐れ

み、私たちの罪過を赦してくださるように、私たちも他の人たちを憐れむべきです。他の人に恨みを抱くべきではありません。神よ、私を守ってください。私の本性が悪化しないようにしてください。私はあなたに従い、あなたの愛の中に生きたいと思っています。私たちは何をやっても、キリストと神に背き抵抗してばかりいますが、キリストはそれでも私たちに忍耐してくださいます。神は多大な忍耐と愛をもって、この段階の働きを実行しておられます。キリストはどれほど多くの苦しみ、屈辱、罵りに耐えなければならなかったことでしょう。もしキリストが忍耐できたのであれば、私たちに要求されるほんの少しの忍耐などは何でもありません。キリストの忍耐に比べると、私たちは信じられないほど忍耐に欠けています……」このように祈るなら、あなたは自分があまりにも墮落し、あまりにも取るに足りない者であり、あなたの霊的背丈はあまりにも足りないと感じるでしょう。そしてその時、あなたの怒りは消えるでしょう。このようにして、あなたは忍耐をやしなうことができるのです。

第三の条件は、誠実に人を扱うことです。人々に対して誠実であるということは、それが他の人を助けることであれ、兄弟姉妹に奉仕することであれ、真理について交わりを持つことであれ、私たちは、何をしているかに関わらず、本心を話すべきです。さらに、あなたがそうしていないのなら、そうすることについて説教してはなりません。兄弟姉妹たちが私たちの助けを必要とする時は、いつでも助けるべきです。私たちが尽くすべき本分が何であれ、それを尽くすべきです。真実を尽くしなさい。偽ったり装ったりしてはなりません。……もちろん、誠実な人間であるためには、ある人たちを取り扱う時、多少の知恵が必要です。彼らの墮落が深すぎて彼らを信用することができず、彼らを見とおすことができず、彼らが何をするのか分からないなら、その時は知恵を使って、彼らに何もかも話すのは控える必要があります。誠実な人であるには原則が必要とされます。話すべきではないことをむやみに話してはいけません。さらには、誠実な人であるには、理性と礼儀をもって話すことが必要とされます。ある人たちは、どんなに忙しくても、誠実を実践し、誰かに心を開くことを主張します。どうしてそれが誠実な人間であることの実践になるのでしょうか。それは愚かではありませんか。誠実な人間であることとは愚か者になることではありません。それは聡明で、単純かつ心を開き、欺瞞がないことです。あなたは正しく理性的でなければなりません。誠実さとは理性という基礎の上に築き上げられます。これこそが、人々を扱う時に誠実を尽くし、誠実な人間であるということの意味です。もちろん、誠実な人間である上で最も重要なことは、神に対して誠実であることです。もしあなたが他人の前だけで誠実で、神の前では誠実で

なく、神を欺くのであれば、それは大きな問題ではないでしょうか。神の前で誠実な人になろうとするならば、あなたは自然に他人の前でも誠実になるでしょう。神の前で誠実になれないなら、他人の前で誠実になることはとうていできません。真理のどのような側面、あるいはどのような肯定的な事柄に入るかに関わらず、まず神の前でそれをするしなければなりません。いったん神の前で成果を遂げたなら、あなたは自然に他の人の前でもそれを生かすことができるでしょう。他の人の前で、これをしようあれをしようとして無理するのではなく、あなたが神の前でしたいことは何でも自由にやりさい。無理してもどうにもなりません。最も重要なことは、人間を試し彼らの心を探る神の前でそれを為すことです。あなたが神の前でこの試験に合格することができれば、あなたは本当に現実を持ちあわせていることになります。神の前でこの試験に合格できなければ、あなたは現実を持ちあわせていません——これこそが真理を実践するための原則です。

第四の条件は、知恵を持って人と接することです。「兄弟姉妹と接するのに知恵など必要だろうか。」と言う人たちもいます。そうです。知恵を使うことは、兄弟姉妹にとってはなおさら有益であるため、必要です。「兄弟姉妹に対して知恵を用いることは狡猾であることではないだろうか。」と尋ねる者もいます。知恵は狡猾さではありません。むしろ、それは狡猾とは正反対のものです。知恵を使うということは、兄弟姉妹の霊的背丈が低い時に、彼らがあなたの言うことを受け入れられない場合を考慮して、彼らとの話し方に注意を払うことを意味します。また、霊的背丈が低い者、特に真理を持っていない者、いく分墮落を露わにし、いく分墮落した性質を持っている者たちに対して、あなたが単純に心を開きすぎて何もかも話すなら、彼らは簡単にあなたの足元に付け込むか、あなたを利用するかもしれません。だから、あなたは多かれ少なかれ事前に注意を払って、話す時にはある程度の技量を身につけていなければなりません。しかしながら、人々に対して慎重であるということは、彼らを助けないという意味でも、彼らへの愛がないという意味でもありません——ただそれは、神の家に関する幾つか重要なことはすぐには伝えないで、単に真理を伝えることを意味します。彼らが命において霊的な助けを必要とし、真理の糧を必要とするならば、私たちはこの点においては、能力の限りを尽くして彼らを満足させねばなりません。しかし彼らが神の家のことについて、あるいは指導者や働き人のことについてあれこれ尋ねるなら、それを教える必要はありません。彼らにそれを教えるなら、この情報を漏らす可能性があり、これは神の家の働きに影響を与えます。言い換えれば、もしそれが彼らの知るべきでないこと、または知る必要のないことであれば、彼らに知らせてはなりません。もしそれが彼らの知るべきこ

とであれば、何もためらうことなく具体的に、全力を尽くして伝えなさい。それでは、彼らが知るべきこととは何でしょうか。人々が知るべきこととは真理の追求です——どのような真理を彼らは身につけているべきか、真理のどのような側面を理解すべきなのか、どのような本分を尽くすべきなのか、彼らにはどのような本分が尽くすに適しているのか、それらの本分をどのように尽くすべきか、どのようにして正常な人性を生きたらよいのか、どのようにして教会生活を送ればよいのか——これら全部が人々の知るべきことなのです。一方、神の家の規律や原則、教会の働き、兄弟姉妹の状態などは、外部の者やあなたの家族の不信者たちに軽々しく打ち明けてはなりません。これは私たちが知恵を用いる際守らなければならない原則です。たとえば、あなたの指導者の名前や、彼らがどこに住んでいるかなどについては決して話すべきではありません。これらのことについて話すなら、その情報がいつ不信者の耳に入るのか決して分かったものではないし、それが悪質なスパイや秘密諜報員などの手に渡れば、大きな問題になる可能性があります。これは知恵を要します。そしてこれこそが、知恵を持つことが極めて重要だと私が言う理由です。さらに、あなたが単純で心を開いていても、誰にも話せないプライベートなこともあります。あなたは、兄弟姉妹に話した後、彼らが不信仰であるかどうか、また、あなたが語ったことについて冗談を言い、それを言いふらしてあなたに問題を引き起こし、あなたの品位に傷を付けるようなことにならないかどうかを見極めるために、彼らの霊的背丈を見定めなければなりません。これが単純で心を開くことにおいても知恵が必要とされる理由です。これが正常な人性のために絶対に持っていなければならない第四の条件です——すなわち、あなたが人と接する際に知恵を持つことです。

第五の条件は、本当に神を信じる兄弟姉妹たちへの真の愛を持つことです。これには多少の思慮と実際の援助と奉仕の精神が必要とされます。私たちは真理を追求する兄弟姉妹たちと特に交わりを深め、彼らにより多くの糧を与えなければなりません。彼らが信じて間もないか、信じて何年にもなるのかは問題ではありません。教会生活にはある特定の原則があります。つまり、真理を追求する者たちに特に心を配ること、また彼らとの交わりを深め、より多くの糧と水を与えて、なるべく早く彼らに手を差し伸べて、彼らが命においてできるだけ早く成長できるようにすることです。真理を追求しない者たちに関しては、しばらく水をやった後に彼らが真理を愛していないことが明白になるなら、彼らにあまり多くの労力を費やす必要はありません。すでにあなたは人間的に可能なことはすべてやったのだから、それは必要ありません。あなたが自分の責任を果たし

たなら、それで十分です。……あなたは自分の働きを誰に集中させるべきかを見極めなければなりません。神は真理を追求しない者を完全にされるでしょうか。もし聖霊が人々を完全にしないのなら、彼らは何故やみくもに続ける必要があるでしょうか。あなたは聖霊の働きを理解していないのに、いつも自信ありげです——それは人間の愚かさで無知ではありませんか。とにかく、真理を本当に追求している兄弟姉妹たちをさらに援助しなさい。なぜなら彼らは神の救いの対象であり、神が予め定めた者たちだからです。私たちがこれらの人々と心と意思を一つにして、もっと頻繁に真理について交わり、お互いに支え合い糧を与えるなら、最終的に私たちはみな救いを得るでしょう。もしこれらの人々と一緒に歩まないのなら、あなたは神の旨を裏切ることになります。……教会内の正常な人性を持っている人たちは、真理を追求する者たちの間に身を置き、調和しながら彼らと交わり、真理を追求することを通して、心と意思を一つにして徐々に自らを神のために費やすべきです。こうして真理を追求する者たちは救われ、あなたもまた救われるでしょう。なぜなら、聖霊は真理を追求する者たちの間で働かれるからです。……

私たちは今、正常な人性の中に備え持っていないなければならない五つの側面について交わったところです。あなたがこれら五つの特性をすべて備え持っているなら、あなたは兄弟姉妹たちと調和して交わり、教会内での自分の位置を見つけ、あなたの能力を最大限に発揮して本分を尽くすことができます。

「いのちの入りについての説教と交わり」 (I) 『教会生活を築き上げる方法と教会生活を築き上げることの意味』より

5. 神への信仰は平和と祝福を求めるためだけであるべきではない

関連する神の言葉

人が初めて神を信じてから、受け取った物は何だろうか。あなたは神について何を知ただろうか。神を信じて、あなたはどれほど変わっただろうか。今、あなたがたは皆、人が神を信ずることは、ただ単に魂の救いや、肉の幸福のためでもなく、神の愛を通してその人の人生が豊かになることなどでもないと分かっている。そのように、もしあなたが肉の幸福や一時的快樂のために神を愛するなら、たとえ最後にあなたの神に対する

愛が頂点に達し、あなたが何も求めないにしても、このあなたが求める愛は依然として汚れた愛であり、神には喜ばれない。自分たちのつまらない人生を豊かにするために神を愛したり、心にぽっかりあいた穴を埋めたりするために神を愛する人たちは楽な生き方を求める人たちで、神を本当に愛することを求める人たちではない。このような愛は人の意志に反し、感情的快樂を追求しており、神はこの種の愛を必要とはしない。では、あなたの愛とはどのようなものだろうか。あなたは何のために神を愛するのか。今あなたはどのくらい神に対して真の愛を持っているのか。あなたがたのほとんどが持っている愛については先に述べた通りだ。この種の愛は現状維持のままでしかない。それは永久的不変性を得ることも、人に定着することもあり得ない。この種の愛は花が咲いた後も実がならず、しぼんでしまう花のようである。すなわち、そのように神を一旦愛した後、誰もその道を導いてくれないと、あなたは倒れてしまうだろう。もし神を愛する時代に神を愛するだけで、その後のあなたのいのちの性質に何の変化も起こさないなら、あなたは引き続き暗闇の力に覆われ、逃れることもできず、サタンに縛られ騙されることから解放されることはあり得ないだろう。そのような人は完全に神に得られることはできない。最終的には、彼らの霊、魂、体は依然としてサタンに属していることになる。これに議論の余地はない。完全に神に得られることができない人たちはすべて彼らの本来の場所に戻る。つまり、サタンの所に戻り、神からの次の段階の懲罰を受けるため、火と硫黄との燃える池に落ちるだろう。神に得られる人たちとは、サタンに逆らい、サタンの支配下から逃れる人たちのことである。そのような人たちは正式に神の国の民の中に数えられる。神の国の民はこのようになるのである。

『言葉は肉において現れる』の「信者はどんな見解を持つべきか」より

今日、実際の神を信じるので、正しい軌道に乗らなければならない。神を信じる者としてただ祝福を求めるのではなく、神を愛し、神を知ることが求めるべきである。神の導きや示しと自身の追求を通して、神の言葉を飲食し、神への真の認識において成長し、心からの真の神への愛を持つことができるようになる。すなわち、あなたの神への愛は本物で、誰もあなたの神への愛を壊したり、立ちほだかたりすることはできない。それならあなたは神への信仰の正しい軌道に乗っているということである。それはあなたが神に属していることを証明する。あなたの心は神によって所有され、他の誰にも所有されることはあり得ないからである。あなたの経験、あなたが支払った代価、そして神の働きのおかげで、あなたは神に対する自発的な愛を育むことができる。それからあなたはサタンの支配から解放され、神の言葉の光の中に生きる。あなたが暗闇の影響から

自由になったときにのみ、あなたは神を得たと言うことができる。あなたが神を信じるにあたり、これを目標としなければならない。これはあなたがた一人一人に課せられた義務である。誰もあるがままの状態に満足すべきではない。神の働きにおいて二心であったり、軽々しく見なしたりすべきではない。あなたがたは神のことをあらゆる点において、また常に考え、神のために全てのことをなすべきである。そして、あなたがたの言行においてまず神の家の利益を優先すべきである。これしか神の心と一致するものはない。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは神を信じているので真理のために生きるべきである」より

今、全ての人々は、神に仕える者は神のためにどのように苦しむかを知ることだけでなく、更に、神を信じるということは、神を愛することを求めるためであることを理解すべきである、ということを知っている。神があなたを用いるのは、単にあなたを精錬したり、苦しませたりするためではなく、あなたが神の行為を知ようになるためであり、人生の真の意義、とりわけ、神に仕えることは容易な業ではないことをあなたが知るようになるためである。神の業を体験することは、恵みを楽しむというよりも、むしろあなたの神への愛のために苦しむことである。あなたは神の恵みを享受しているのであるから、神の刑罰も享受すべきである――あなたは、これらのこと全てを体験しなければならない。あなたは神があなたの内に与える啓示を体験できることもあれば、あなたへの神の取り扱いと裁きを体験できることもある。そのようにして、あなたは全ての側面を体験する。神は、あなたに裁きの業を行い、また刑罰の業も行った。神の言葉は、あなたを取り扱ったが、それはまた、あなたに啓示と明察も与えた。あなたが逃げたいと思う時、神の手は依然としてあなたを捉えている。こうした業は、全部人間に関する全てのことが神の意のままであることをあなたが知るようになるためである。あなたは神を信じることは、苦難を受けること、または神のために多くの事を行うこと、あるいは自分の肉の平穩のため、自分にとって全てのことがうまくいき、全てが快適であることのためだと思うかも知れない――しかし、神を信じるためには、こうした目的はいずれも人間が持っていてはならないものである。あなたがそのように信じているのであれば、それは誤った見方であり、あなたは決して完全にされることはない。神の行い、神の義なる性質、神の知恵、神の言葉、そして神の驚異とはかり知れない性質は、全て人々が理解すべきことである。そうした理解により、個人的な要望、及び自分個人の希望、心中の観念を取り除きなさい。これらのことを排除してはじめて、あなたは神の要

求する条件を満たすことができる。このことを通してのみ、あなたはいのちを得、神を満足させることができるのである。神を信じることは、この値なき人々の群れを通して神の行いと栄光が表出されるために、神を満足させ、神が求める性質を実際に生き抜くためのものである。これが、神を信じるための正しい観点であり、あなたが追求すべき目標でもある。あなたは、神を信じるための正しい観点を持ち、神の言葉を得ることを求めなければならない。あなたは、神の言葉を食べ飲みし、真理を実際に生き抜き、とりわけ神の実際の行い、遍く全宇宙において為される神の素晴らしい業、また、神が肉の内に為す実際の業を見る必要がある。実際の体験を通して、人々は神がどのように自分の業を彼らの上に行うのか、また、彼らに対する神の意志は何であることを理解することができる。これらの全てはあなたの墮落したサタンによる性質を排除するためである。あなたの中にある汚れと不義を払拭し、誤った意図を取り除けば、あなたは神への真の信仰を育むことができる。真の信仰を持つことによってのみ、あなたは神を真に愛することができる。あなたは、神への信仰を基礎としてのみ、ほんとうに神を愛することができる。神を信じずに神を愛することができるだろうか。あなたは神を信じているのだから、それについては考えが混乱することはないはずである。ある人々は、神への信仰が自分に祝福をもたらすことを見るとすぐに活力に満ちる。しかし、精錬で苦しまなければならないと知るとすぐに全ての精力を失う。これが神を信じることだろうか。最終的に、あなたは信仰において神の前での完全無欠の服従を成し遂げなければならない。あなたは神を信じているが、まだ神に要求している。また、捨てきれない多くの宗教的観念がある。諦めきれない個人的な利益がある。そして、依然として肉の祝福を求め、神があなたの肉を助け出し、あなたの魂を救うことをねがう——これらは全て誤った観点を持つ人々が表すことである。宗教的信念を持つ人々は、神を信仰してはいるものの、性質を変えることや、神に関する認識を追い求めず、自分の肉の利益のみを追求している。あなたがたのうち多くの者は、宗教的信念の域に属する信仰を持っている。それは神への真の信仰ではない。神を信じるためには、人々は、神のために苦しむ心と、自分自身を捧げる意志を持っていなければならない。この二つの条件を満たさない限り、それは神への信仰とはみなされず、彼らは性質における変化を達成することはできないであろう。心から真理を追い求め、神に関する認識を求め、いのちを追い求める人々だけが、神を真に信仰している者である。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

今やあなたは、神への信仰とは何かを理解しただろうか。神への信仰は、しるしや不思議を見ることだろうか。それは天国に昇ることだろうか。神を信じることはまったく簡単なことではない。それらの宗教的慣行は、一掃されるべきである。病人の癒しや悪魔の追放を求めること、しるしや不思議を重視すること、神の恵みや平和や喜びをさらに欲しがること、明るい未来や肉の快樂を求めること、これらは宗教的慣行であり、そのような宗教的慣行は、漠然とした信仰の種類である。今日、神に対する真の信仰とは何だろうか。それは、神の真の愛を達成するために、神の言葉をあなたのいのちの真実として受け入れることであり、神の言葉から神を知ることである。明確にするために言う。以下のように言える。すなわち神への信仰は、あなたが神に従うこと、神を愛すること、さらに、神の被造物によって為されるべき本分を遂行することに資するものである。これが、神を信じることの目的である。あなたは、神の美しさ、神がいかに尊敬に値するか、造ったものの中で、神がいかに救いの働きを行いそして彼らを完全にしているかについての認識を達成しなければならない。これが、あなたが神への信仰において所有しなければならない最低限である。神への信仰は主として、肉における生活から神を愛する生活への転換、自然のままの生活から神という存在の内部での生活への転換である。そしてそれは、サタンの領域下から出て神の配慮と保護の下で生きることであり、肉への従順ではなく神への従順を達成できることであり、神があなたの心のすべてを獲得しあなたを完全にすることを可能にすることであり、さらにあなた自身を墮落したサタンのような性質から自由にすることである。神への信仰は主として、神の力と栄光があなたの中で明らかに示されるためである。その結果、あなたは、神の旨を行い、神の計画を成し遂げることができ、さらに、サタンの前で神への証しとなることができるようになる。神への信仰は、しるしや不思議を見るためであってはいけなく、あなたの個人的な肉のためであってもいけない。それは、神を知ること、神に従うことができること、そしてペテロのように、死を賭してまで神に従うことを追求する行為でなければならない。これが、信仰を達成するために必要な主なものである。神の言葉を食べて飲むことは、神を知るためであり、神を満足させるためである。神の言葉を食べて飲むことは、あなたに神についてのより大きな認識を与える。そして、そうやってはじめて、あなたは神に従うことができる。あなたは神を知ってはじめて、神を愛することができ、そしてこの目的の達成は、人が神への信仰において持つべき唯一の目的である。もし、あなたの神への信仰において、あなたがいつも、しるしや不思議を見ようとするなら、そのような神への信仰の考え方は間違っている。神への信仰とは、主に、いのちの真実として神の言葉を受け入れることである。神自身の口から出た言葉を実践し、あなた

自身の内部でそれらの言葉を成し遂げることだけが、神の目的の達成である。神を信じることに於いて、人は神によって完全にされること、神に服従することができること、そして神への完全な従順を、追求すべきである。もしあなたが不平もなく神に従うことができ、神の希望を心に留め、ペテロの靈的背丈に達し、そして神が言うところのペテロの流儀を所有するなら、それはあなたが神への信仰に成功したときであり、そしてそれは、あなたが神のものとされたことを意味するだろう。

『言葉は肉において現れる』の「すべてが神の言葉によって達成される」より

あなたは、神への自分の信仰が、どんな困難や患難も、あるいは僅かの苦難も招かないことを望む。あなたは、常にそれらの価値の無いものを追い求め、いのちの価値を全く認めず、自分の途方もない考えを真理よりも優先している。あなたには何の価値も無い。あなたは豚のように生きている——あなたと、豚と犬の間には、何か相違があるだろうか。真理を追求せずに肉を愛する者たちは皆、獣ではなかろうか。霊のない死んだ者たちは皆、生ける屍ではなかろうか。あなたの方で語られた言葉は、一体いくつあるであろうか。あなたの方で行われた働きは、ほんの少しだろうか。わたしは、あなたの方で、どれくらい与えたであろうか。それなのに、あなたがそれを得ていないのは何故だろうか。あなたが不平を言うべきことは、何かあるだろうか。あなたが肉を愛しすぎているので、何も得られなかったということではなかろうか。また、その原因は、あなたの考えが突飛すぎるからではなかろうか。また、それはあなたが愚か過ぎるからではないか。あなたは、これらの祝福を得られない場合、自分が救われなかったことを、神のせいにするのか。あなたが追いつめているのは、神を信じた後に平和を得ることができるようになること——つまり、自分の子が病気にかからないこと、自分の夫が良い職に就くこと、自分の息子が良い妻を見つけること、自分の娘がしっかりした夫を見つけること、自分の牛や馬がうまく土地を耕すこと、一年間、作物に適した気候となることなどである。これが、あなたの求めることである。あなたの追求は、ただ快適に暮らすためであり、自分の家族に事故が起こらないこと、風が自分に当たらないこと、顔に砂がかからないこと、家族の作物が洪水に遭わないこと、自分が災害を受けないこと、神に抱かれて生きること、居心地の良い住処で生活することである。常に肉を求める、あなたのような臆病者には、心や霊があるだろうか。あなたは獣ではなかろうか。わたしは何も見返りを求めずに、真理の道を与えるが、あなたは追いつめない。あなたは神を信じる者たちのひとりであろうか。わたしは真の人生をあなたに授けるが、あなたは追いつめない。あなたは豚や犬と変わらないのではないか。豚は人生も清められること

も追求せず、人生とは何かを理解しない。毎日、食べたいだけ食べた後、ただ寝るだけである。わたしは、あなたに真理の道を与えたが、あなたは未だにそれを得ていない。あなたは手ぶらである。あなたは、このような生活、つまり豚の生活続けることを望んでいるのであろうか。このような人々が生きていることの意味は何であろうか。あなたの生活は軽蔑すべきものであり、恥ずべきものであり、あなたはけがれと放蕩の中で暮らし、何も目指す目標がない。あなたの人生は、最も下劣ではなかろうか。あなたは、厚かましくも神を見上げるのであろうか。あなたは、このような経験を超えるならば、得る物は何もないのではないか。真理の道はあなたに与えられているが、最終的にあなたがそれを得られるかどうかは、あなた個人の追求によって決まる。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

今日、あなたの神への愛はどのくらい大きなものであろうか。また、神があなたの内に為したあらゆる事のうち、あなたはどのくらいの事を知っているであろうか。あなたは、これらの事を知らなければならない。神が地上に来る時、神が人の内に為した事のすべて、そして神が人に理解させた事のすべては、人が神を愛し、真に神を知るようになるためのものである。人が神のために苦しむことができ、ここに至ることができたのは、ある意味では神の愛により、別の意味では神の救いによるのであり、さらには神が人の内に為した裁きと刑罰の働きによるのである。もしあなたがたが神の裁き、刑罰、試練を受けることがなければ、そして神があなたがたに苦しみを与えることがなければ、率直に言って、あなたがたが真に神を愛することはない。人の内に為された神の働きが大きいほど、そして人の苦しみが深いほど、神の働きがどれほど意義深いものかを示すことができ、同時に、その人の心はより真に神を愛することができる。人はどのように神の愛し方を学ぶのであろうか。苦痛や精錬なしに、また、つらい試練なしに——さらに、もし神が人に与えたものが恵みと愛と慈悲だけであったなら——神への真の愛を全うすることはできるであろうか。神による試練にあって、人は自らの欠点を知るに至り、自分を取るに足らない、軽蔑すべき、卑しい存在であり、自分には何もなく、自分は何物でもないことを知る一方、神による試練にあって、神は、人が神の素晴らしさをより良く経験できるような新しい環境を作り出す。苦痛は非常に大きく、時として乗り越えられない——さらには、身も心も打ち砕くような悲しみにまで達することもある——しかし、それを経験することで、人はその内にある神の働きがいかに素晴らしいかを知り、その礎の上にのみ、人の内に神への真の愛が生まれるのである。今日、人は神の恵みと愛と慈悲だけでは、真に自分を知ることはできず、ましてや人の本質も知ることが

できないのを知っている。神の精錬と裁きによってのみ、また、そのような精錬の中にあるのみ、自分の欠点を知り、自分には何もないことを知るのである。このように、人の神への愛は神の精錬と裁きという礎の上に築かれる。もしあなたが、平和な家庭生活や物質的祝福を伴う神の恵みのみを享受するのであれば、あなたは神を得ていないのであって、神への信心は成り立っていない。神は肉における恵みの働きを既に一段階行っており、人に物質的な恵みを既に与えている——しかし人は、恵みと愛と慈悲だけでは完全になれない。人は経験により神の愛の一部分に出会い、神の愛と慈悲を知るが、ある一定の期間経験すると、人は神の恵みと神の愛や慈悲では完全になれず、人の内にある邪悪さを明らかにすることもできず、またその邪悪な性質を取り除くことも、その愛と信仰を完全にすることもできないことを理解するのである。神の恵みの働きは一時の働きであった。神の恵みの享受に依存することで神を知ることはできないのである。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

神に付き従う者の多くは、ただ、どうして祝福を受けるかや、どうして災いを避けるかということだけに気をもんでいる。神の働きと神の経営と聞くと、彼らは口を閉ざし、興味を失う。彼らはそうした退屈な問題について知っていても、いのちに成長を与えるわけでも、これといった役に立つものでもないと思い込んでいるため、神の経営についての言葉を聞いてはいても、いい加減に扱うのである。そして、受け入れるべき大切なことだとは思わず、まして、自分たちのいのちの一部として受け取ることもない。そうした人々は、神に付き従うことにおいて、ただ一つの間違った目当て、つまり祝福を受けることしかない。そこで、その目的に関わりあること以外に関心を向けることは怠惰すぎているのである。彼らにとって、神を信じるということは、祝福を受けることが最も正当な目的であって、それが信仰の価値にほかならない。その目的を果たすことができないことには、全く心を動かされない。今日神を信じている人々のほとんどは、そういう状態である。その人たちの目的や動機は、もっともらしく見える。神を信じると同時に、神のために費やし、神に身を捧げ、本分も果たすからである。青春を犠牲にし、家族や職を捨て、故郷から遠く離れて何年も懸命に働くことさえある。最終的な目的のために関心のありどころを変え、人生観を変え、求めるものの方向を変えさせる。しかし、神を信仰する目的を変えることはできない。彼らは自分なりの理想を管理するために駆け回る。どんなに道が遠くとも、途中でどんな困難や障害に出遭おうと、死をも恐れず目標達成に努力する。どんな力がそのような献身を続けさせるのだろうか。彼らの良心

だろうか。偉大で高潔な人格だろうか。最後の最後まで悪の力と戦おうとする決意だろうか。報いを求めずに神を証しする信仰心だろうか。神の心を実現させるためにすべてを捨てようとする忠誠心だろうか。それとも、途方もない個人的な欲求を一貫して放棄する奉仕の精神だろうか。神の経営の働きを知らない人がそれほど多くを捧げるとするのは、ただ驚くべき奇跡である。ここでは、そうした人がどれほど多くを捧げているかは語らずにおこう。しかしながら、彼らの行動は分析するだけの価値が十分にある。彼らと密接に関わりのある恩恵とは別に、神を理解しない人々がそれほどまでに神に捧げる理由が他に何かあるだろうか。このことの中に、これまで認識されていなかった問題を発見する。それは、人間の神との関係は単にむき出しの利己心によるものだということである。これは恵みの与え手と受け手との関係である。簡単に言うと、雇われ人と雇い主の関係のようなものである。雇われ人は雇い主から報酬をもらうためにだけ働く。こうした関係に愛情はない。ただの取引があるだけである。愛し愛される関係はなく、施しとあわれみとがあるだけである。理解はなく、抑圧された憤りと欺きだけがある。親しみはなく、越えられない溝があるだけである。物事がこういう状態に至ったとき、誰がこの傾向を元に戻せるだろうか。この関係がいかに絶望的なものになっているかを、どれほどの人がほんとうに理解できるだろうか。祝福を受ける喜びの中に浸っているとき、神とのそうした関係が、ばつの悪い、見苦しいものであるとは誰も想像できないはずである。

人類の神への信仰の最も悲しい点は、神の働きの只中に人間が自分なりの経営を行い、神の経営そのものには無関心なことである。人間の最大の失敗は、神に服従し神を礼拝することを求めると同時に、人間は自分なりの理想の終着点を打ち立て、どうしたら最大の祝福を得て最高の終着点に行けるかを計算しているところにある。たとえ自分がいかに憐れむべき、憎しみに満ちた哀れな存在かを理解したとしても、自分の理想や希望を簡単に捨て去ることのできる人がどれだけいるだろうか。また、誰が途中で足を止め、自分の事だけを考えるのをやめられるだろうか。神と密接に協力して、その経営を完成する者を神は必要としている。神に服従するために、神の経営の働きに身も心も捧げる人を神は必要としている。神は毎日手を伸ばして神に物乞いする者は必要ではない。まして、わずかばかりを差し出して、その報酬を受けようと待っているような者は、無用である。わずかばかり貢献して自分の栄冠に満足するような者を神は嫌う。神の経営の働きを嫌がり、天国に行って祝福を得ることだけを話したがる心無い人々を神は憎む。それにもまして、神が人類を救うために行なう働きがもたらす機会を通じて利を得よ

うとする人々を、神は嫌う。そうした人は、神が経営の働きで成し遂げ、獲得しようとしていることにはまったく無関心だからである。そういう人々は、神の働きがもたらす機会を利用していかに祝福を受けるかということだけに気をもんでいる。彼らは、神の心には無関心で、自分たちの未来と運命のことだけに没頭している。神の経営の働きを嫌い、神がどのように人類を救うかとか、神の心についてはまるで関心がない人々は皆、神の経営（救い）の働きと無関係に好き勝手をしている。彼らの行動は、神によって記憶されず、認められず、まして神に喜ばれることなどない。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

あなたは今、何を追い求めるべきか。あなたが追求すべき事とは、自分が神の業を表現できるかどうか、自分が神の表現となり神の現われと成りうるかどうか、自分が神に用いられるに適しているかどうかである。神はあなたの内で、実際にどれほどの業を行ったのであろうか。あなたはどれほど見て、どれくらい触れたのであろうか。どれほど体験し、味わったのであろうか。神があなたを試そうが、あなたを取り扱おうが、あなたを懲らしめようが――それが何であれ、神の行動と業があなたの上に為されたのである。しかし、あなたは、神を信じる者として、神により完全にされることを進んで追い求める者として、神の行動を自分自身の実際の体験を通して表現することが出来るであろうか。あなたは、このことを通して神の言葉を実際に生きることが出来るであろうか。あなたは、自らの実体験を通して、他の人々に与え、神の業のために自らを費やすことが出来るであろうか。神の働きのために証しするには、その働きが何であるかを表現できなければならない。そして、それはあなたの体験、認識、また、あなたが耐え忍んだ苦しみを通して行われる。あなたは、神の働きのために証しする者であろうか。あなたには、そうした志があるだろうか。神の名、そしてさらに神の働きのために証しすることができ、神の民に神が求める人間像を実際に生きることが出来るのであれば、あなたは神の証し人である。あなたは実際にどのようにして神のために証しするのであろうか。神の言葉を生きることが切に求めること。あなたの言葉を通して証しをすること。人々に神の働きを知らしめ、見せること――あなたが、まことにこれらのこと全てを求めるなら、神はあなたを完全にするであろう。もし、あなたが求める全てが、神により完全なものとされ、最終的に祝福されることのみであるならば、あなたの神への信仰に対する見方は純粹ではない。あなたは、どのようにすれば神の業を実生活において見ることが出来るか、ということを追求しているべきである。神があなたにその意志を明らかにした時、どのように神を満足させるか、神の驚異と知恵をどのように証しするのかを

求め、また、自分に対する神の訓練と取り扱いをどのように実際に示すかを追及しているべきである。これらのすべては、今あなたが解明しようとしているべき事である。神があなたを完全にした後、あなたは神の栄光にあずかることができるということだけのために神を愛するのであれば、それはまだ不十分であり、神の要求を満たさない。あなたは、神の行動を証しし、神の要求を満たし、神が人々の上に為した業を実践的に体験することができる必要がある。それが苦痛であれ、涙であれ、あるいは悲しみであれ、あなたはその全てを実践で体験しなければならない。それらは全て、あなたが神の証し人となる事が出来るためである。厳密に言うと、あなたは現在、何による支配下において苦難を経験し、完全になることを求めているのであろうか。それは神のために証しするためであらうか。それは、肉の祝福、あるいは自分の将来性のためであらうか。あなたの意図、動機、自分が目指す目標は、全て正される必要がある。それらを自分自身の意志で導くことはできない。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

6. 苦しみの意義と神の信者が負わなければならない苦しみの種類

関連する神の言葉

今日、大抵の人々はそのような認識を持っていない。そういう人々は、苦しみには価値がなく、自分は世の中から見捨てられており、家庭生活には問題があり、神に愛されておらず、将来は暗いと考えている。一部の人々にあっては、苦しみがある点に達し、死を考えるようになる。しかし、それは真の神への愛ではない。そうした人は臆病者であり、忍耐力を持たず、弱く、無力なのである。神は人に愛されることを強く願っているが、人が神を愛するほどその苦しみは大きく、より愛すればより人の試練も大きくなる。もしあなたが神を愛すれば、あらゆる苦しみがあなたにもたらされるであらう——そしてもし神を愛さなければ、多分何もかもが順調にゆき、あなたの周囲では何もかもが平和であらう。あなたが神を愛する時、周囲の多くの事が克服し難いと感じ、あなたの霊的背丈があまりにも小さいために精錬されるであらう。さらに、あなたは神を満足させることができず、神の旨はあまりにも崇高で、人の及ばぬところにあるといつも感じるであらう。そうした事すべてのために、あなたは精錬されるのである——内に弱さが

多くあり、神の旨を満足させられないものが多くあるため、内を精錬されるのである。しかし、あなたがたは、穢れは精錬によってしか拭い去れないとはっきり知らなければならない。このように、終わりの日に、あなたは神に対して証しとならなければならない。あなたの苦しみがいかに大きくても、最後まで経験しなければならず、あなたの呼吸が止まるまで神に対して忠実であり続け、神に身を委ねていなければならない。これのみが真に神を愛するという事であり、これのみが強く確固とした証しとなるのである。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

落胆してはならない。弱ってはならない。わたしはあなたに明らかにする。神の国への道は平坦ではない。何事もそう簡単ではないのだ。あなたはたやすく祝福を得たいのであろうか。今日、だれもが苦しい試練に直面しなければならない。そうでなければ、あなた方のわたしに対する愛の心がさらに強いものとなることはなく、わたしに真実の愛を抱くこともないであろう。たとえそれが些細な状況であっても、誰もがそれを通らねばならない。ただそれぞれ度合いが違うというだけのことである。その状況はわたしからの祝福のひとつなのだ。わたしの祝福を求めてわたしの前に頻繁に跪く者がどれだけいるだろうか。愚かな子たちだ。あなた方はいつでも、少しの幸運な言葉がわたしからの祝福であると感じるが、苦しみがわたしからの祝福の一部だとは感じない。わたしからの苦しみにあずかる者は、必ずわたしの甘美さにもあずかるだろう。これがわたしの約束であり、あなた方に対するわたしからの祝福である。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第四十一章」より

神が人間を精錬する業を行う時、人間は苦しむ。精錬が大きいほど人間の神への愛は深まり、人間の内に神の力がさらに現される。人間の精錬が少なければ少ないほど、人間の神への愛も少なくなり、人間の中に現される神の力も少なくなる。人間の精錬と苦痛、苦悶が多ければ多いほど、人間の神に対する真の愛が深まり、神への信仰も更に純粋なものとなり、神に関する人間の認識も深まる。多くの精錬と苦痛、多くの取り扱いと懲らしめを受ける者は、神への深い愛を持ち、神に関して、もっと深遠で鋭い認識を持つようになることを、あなたは経験の中で知るであろう。取り扱いを体験しなかった者には、表面的な認識しか無く、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を楽しめるように、彼らに恵みを授けられる。」と言うことしか出来ない。取り扱いと訓練を体験した

場合、人間は神に関する真の認識を話すことができるようになるのだ。したがって、神による人間の内的業が驚異的であればあるほど、それは一層貴重であり、有意義なものである。あなたにとって、それが測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの見解と相容れないものであればあるほど、神の業は、さらにあなたを征服し、あなたを獲得し完全にすることができる。神の業の意義とは、かくも甚大である。もし神がこのように人間を精錬しなかったら、もし神がこのような方法によって働かなかったら、神の業は効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。これが、神が終わりの日に一群の人々を選んだ特別な意義の背後にある理由である。神がこの会衆を選び獲得するであろうことは、以前に語られていた。神によってあなたがたの内に遂行される業が大きければ大きいほど、あなたがたの神に対する愛は一層深く純粋なものとなる。神の業が大きければ大きいほど、人は神の知恵を一層味わうことが出来るようになり、神に関する認識もより深くなる。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

あなたは真理のために苦難を受け、真理に自分を捧げ、真理のために恥辱を忍ばねばならず、より多くの真理を得るためには、より多くの苦難を受けなければならない。これこそがあなたの為すべきことである。あなたは平穏な家庭生活のために真理を投げ捨ててはならず、一時的な享樂のために、あなたの一生の尊厳や品位を失ってはならない。あなたは、すべての美しく良いこと、また一層有意義な人生の道を追求すべきである。あなたがこのような俗悪な生活を送り、何の目的も追求しなかったならば、あなたは人生を無駄にすることになるのではないか。そのような人生から何が得られるであろうか。あなたは、真理のために肉の享樂をすべて捨て去るべきであり、僅かばかりの享樂のために全ての真理を投げ捨ててはならない。このような人々には、品位も尊厳もなく、彼らの存在には何の意味もない。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

神の言葉の裁きを受けるとき、苦しみを恐れたり、痛みを心配したりしてはいけません。まして、神の言葉が自分の心を刺し通すのではないかと恐れてはいけません。神が私たちをどのように裁いて罰するか、私たちの墮落した本質をどのように暴くかについて、私たちは神の発する言葉をもっと読むべきであり、神の言葉を読みながら、もっと頻繁に自分とそれらを比べなければなりません。私たちにはこれらの墮落がどれもありま

すが、私たちは誰しもそれと向き合うことができます。…神の言葉の一言一句が耳に心地よいかどうか、自分に苦みや甘さを感じさせるかどうかはどうでもいいことを、私たちはまず知らなければなりません。私たちは神の言葉を残らず受け入れなければならないのです。神の言葉に対してはそのような態度をもつ必要があります。それはどのような種類の態度でしょうか。信心深さの態度でしょうか。それとも自製の態度でしょうか。それとも苦しさの態度でしょうか。言っておきますが、そのどれでもありません。私たちは信仰の中で、神の言葉が真理であることを固く保たなければなりません。それは実際に真理なのですから、理知的に受け入れなければなりません。それを認識したり認めたりすることができようとできまいと、神の言葉に対する私たちの態度はまず絶対的な受容の態度でなければなりません。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることの重要性とその道」より

神を愛するには、あらゆる事において神の心を求めることが必要で、しかもあなたに何かが起きた時には心の中で深く探り、神の心を把握し、この件に関する神の心は何か、神はあなたに何を達成して欲しいのか、どのように神の心を覚えるべきかを知ろうとしなければならない。例えば、あなたが困難に耐えなければならない何かが生じたら、その時、あなたは神の心が何であるか、どのように神の心を大切にするかを理解すべきである。自分自身を満足させてはならない。まず自分自身のことは脇へどけておきなさい。肉体ほど卑しむべきものはない。あなたは神に満足してもらおうとしなければならないし、あなたの本分を果たさなければならない。そのように考えていれば、神はこの件に関してあなたに特別な啓発を与え、あなたの心も安心するだろう。大きくても小さくても、あなたに何かが起きた時、あなたはまず自分自身は脇にどけて、肉体はすべての物事の中で最も卑しいものとみなさなければならない。あなたが肉体を満足させればさせるほど、肉体はますます勝手な行動をとる。今回肉体を満足させると、次回にはさらに欲望が大きくなり、このまま続くと、あなたは肉体をさらに愛するようになる。肉体はいつも途方もない欲望を持っており、いつもあなたに肉体を満足させることを要求する。それが食べ物や着る物に関することだろうと、自制心を失わせ、自身の弱さや怠惰に付け込むことであろうと、あなたが心の中でそれを満足させることを要求する。あなたが肉体を満足させればさせるほど、その欲望は大きくなり、肉体はますます墮落して、ついには人々の肉体は一層深い観念を心に抱き、神に背き、得意になり、神の働きに疑いを持つようになる。…したがって、あなたは肉体に反抗しなければならず、迎合してはならない。「自分の夫（妻）、子供たち、将来の見通し、結婚、家族——これらは

どれも問題ではない。私の心の中には神しかない。私は神に満足していただくために最善を尽くさなければならず、肉体を満足させてはならない。」あなたはこのような決意をいつも持っていれば、真理を実践し、自分自身は脇にどけておこうとする時、あなたはほんの少しの努力でそれが実践できるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

あなたが神の前でいのちを得られるかどうか、あなたの最終的結末はどうなるか、それはあなたが肉体にどのように反抗するかにかかっている。神はあなたを救い、選び、運命づけたが、その一方で、あなたが神に満足してもらうことを嫌がり、真理を実践することを嫌がり、神を本当に愛する心を持ってあなた自身の肉体に反抗することを嫌がるならば、最後にはあなたは身を滅ぼし、従って極度の痛みに耐えることになるだろう。あなたがいつも肉体に迎合していると、サタンが次第にあなたを内側から食べ尽くし、あなたを完全にいのちのない、あるいは霊との接触のない状態のままにしまい、ついにはあなたの心の中が完全に暗黒になる日が来る。あなたが暗黒の中で生きていると、サタンのとりこになり、もはや心の中に神を持たなくなり、その時あなたは神の存在を否定し、神を離れる。従って、あなたが神を愛したいなら、痛みの代償を払い、困難に耐えなければならない。熱心さや困難を表立って示すことも、読書量を増やしたり、さらに走り回ったりする必要はなく、それどころか、あなたは自分の心の中にあるもの、つまり、途方もない考え、個人的利益、あなた自身の判断、観念、動機付けなどを脇にどけるべきである。これが神の心である。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

神は人々に真理を実践に移すよう要求するが、それは心の中の問題に焦点を当て、神の心に従っていない考えや観念を取り扱うためである。聖霊は人々の心を感動させ、彼らを啓き、そして光を当てる。ゆえに、起こることすべての背後には戦いがある。人々が真理を実践するたびに、あるいは神への愛を実践するたびに、激しい戦いがあり、すべては肉体と折り合いを付けているように見えるかもしれないが、実のところ、彼らの心の奥底では生と死の戦いが起こりつつあり――この激し戦いの後、膨大な量の熟考をした後ようやく、勝利か敗北かが決められる。人は笑うべきか、泣くべきかわからない。人々の中の動機付けは、その多くが間違っているので、あるいは神の働きの多くは人々の観念と食い違っているので、人々が真理を実践に移す時、激しい戦いが舞台裏では行

われる。この真理を実践に移した後、最後に神を満足させる決心をする前に、舞台裏で人々は悲しみの涙を数えきれないほど流すだろう。人々が苦しみや純化に耐えるのはこの戦いのためである。これは本当の苦しみである。戦いになった時、あなたが本当に神の側に立つことができれば、あなたは神に満足してもらうことができる。真理を実践する過程で苦しむことは避けられない。人々が真理を実践する時、彼らの心の中のすべてが正しかったら、彼らは神によって全き者にされる必要はなく、戦いもなく、彼らは苦しまないだろう。人々の心の中には神が使用するのに適さないものがたくさんあり、肉体の反抗的性質も多いので、人々は肉体に反抗する教訓をもっと深く学ぶ必要がある。これは神が受難と呼ぶもので、神と共に経験することを神は人に要求した。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

人が神への信仰において求めるのは、将来のための祝福を得ることです。それが人の信仰における目的なのです。誰もがこの意図と望みを持っていますが、人間の本性にある墮落は試練を通じて解決されなければなりません。あなたが清められていない側面はどれも、あなたが精錬されなければならない側面です。これが神の采配です。神はあなたのためにある環境を作り、そこで強制的に精錬されるようにすることで、自らの墮落を知ることができるようにさせます。最終的に、あなたはむしろ死んで自分の企みや欲望を捨て、神の主権と采配に服従したいと思うまでになります。それゆえ、数年間の精錬を受けておらず、ある程度の苦難を経していない人は誰も、自身の考えや心における肉の墮落の束縛を捨て去ることが出来ないでしょう。あなたはどの側面においてもいまだサタンに束縛され、自分の欲望と要求を抱えています。それらの側面において試練を受けなければなりません。人は試練を通じることでのみ教訓を学び、真理を得て、神の意図を理解することができます。実際、多くの真理はつらい試練を経験することで理解されます。楽な環境にいるときや状況が好都合なとき、神の考えを理解したり、神の全能性と知恵を認識したり、神の義なる性質を正しく理解したりすることは誰にもできません。そのようなことはありえないでしょう。

『キリストの言葉の記録』の「試練のさなかに神を満足させるには」より

神は一人ひとりの中で働きを行ないますが、その方法が何であれ、どのような人や物事を使って力を尽くすのであれ、言葉の調子がどういったものであれ、神の最終目標は一つしかありません。それはあなたを救うことです。あなたを救うとは、あなたを変えることを意味しますが、どうして少しばかりの苦しみを受けないでいられるのでしょうか。

あなたは苦しまなければなりません。この苦しみには多くのことが含まれます。ときに神はあなたの周囲に人や物事を配し、あなたを露わにし、あなたが自分自身を知るようにすることがあります。さもないと直接あなたを取り扱い、刈り込み、露わにします。手術台の上の人と同じに、よい結末を迎えるにはいくらかの苦しみを経験しなければならないのです。神があなたを刈り込んだり取り扱ったりするたびに、人や物事を配するたびに、あなたの感情がかき立てられ、士気が高められるなら、そのような経験は正しく、あなたは霊的背丈を得て真理の現実に入ってゆきます。あなたが刈り込まれて取り扱われ、神に環境を配されるたび、何の苦痛も不快も覚え、まったく何も感じないなら、あるいは神の前に出てその心意を理解することも、祈ることも真理を求めることもしないなら、あなたは本当に麻痺しきっています。あまりに麻痺している人には霊的な感覚が決してありません。ゆえに、神には彼らに働きを行なう方法がありません。神はこう言うでしょう。「この人はあまりに麻痺していて、あまりに深く墮落させられてきた。私はこの人に多くのことを行ない、多くの努力を傾けてきた。それなのに、いまだ彼の心に呼びかけて霊を目覚めさせることができない。これは大いに問題であり、困難なことだ。」神があなたのために特定の環境や人や物事を采配し、あなたを刈り込んで取り扱ったとき、あなたがそこから教訓を学び、神の前に出て真理を求めるようになり、知らぬ間に啓かれ照らされ、真理を得たなら、あなたがこれらの環境において変化を経験し、報いを受け取り、進歩を遂げたなら、あるいは神の意図を少し理解し始め、不満を言うことをやめたなら、それはどれも、あなたがこのような環境の試練のなかでしっかり立ち、試練に耐えたことを意味します。このようにして、あなたはこの試練を経るのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理を得るには、周囲の人や物事から学ばなければならない」より

7. 神の信者は十分な善行により終着点に備えるべきである

関連する神の言葉

わたしの憐れみは、わたしを愛し、自分たちを否定する者たちに現わされている。そして、悪い者たちにもたらされる懲罰はわたしの義なる性質の証明そのものであり、それ以上にわたしの怒りの証である。災いがやって来ると、わたしに反抗する者たちすべてに飢饉や疫病が降りかかり、彼らは涙を流す。あらゆる種類の悪事を犯してきたが、長

年わたしに従って来た者たちは罪を免れることはできない。彼らも時代を超えて、ほとんど目にしたことのない災いのただ中で、絶えず恐怖と不安を抱き生きるだろう。そして、わたしだけに忠誠を示して従って来た人たちは喜び、わたしの力に拍手喝采する。彼らは言葉に表せないほどの満足感を体験し、わたしが人類にいまだかつて与えたことのない喜びの中で生活する。わたしは人の善行を宝とし、悪行を忌み嫌うからだ。わたしが初めて人類を導き始めたときから、わたしと同じ心を持った人たちの集まりを獲得することを熱望してきた。そして、わたしはわたしと同じ心を持っていない人たちを決して忘れることはなく、彼らに相応しい報いを与えて楽しむ機会を待ち望みながら、彼らを憎しみと共に心の中に持ち続けてきた。今日、遂にその日を迎え、もはや待つ必要はなくなった。

わたしの最後の仕事は人を懲罰するためだけのものではなく、人の終着点を決めるためのものでもある。さらに、わたしが行ってきたすべてのことに対して、あらゆる人たちから承認を受けるためである。わたしはすべての人にわたしが行ってきたことは正しく、わたしの行ったことは全てわたしの性質の表現であることを知って欲しいと思っている。人類を生み出したのは人の行いではなく、とりわけ大自然の行いではない。それどころか、創造されたすべてのものの中で、あらゆる生けるものを育むのはわたしである。わたしの存在なしには、人類は滅びる他なく、酷い災難を経験するだけであろう。だれも美しい太陽や月、緑にあふれる世界を再び見ることはできないだろう。人類は極寒の夜や、避けられない死の影の谷に遭遇するだけだろう。わたしは人類の唯一の救いである。わたしは人類の唯一の望みであり、さらに、わたしは全人類がその存在を託すその者である。わたしがいなくては、人類はすぐに停滞してしまう。わたしがいなくては、たとえだれもわたしに注意していなくても、人類は壊滅的被害を受け、あらゆる種類の霊に踏みつけられるだろう。わたしは、誰もできない働きをしてきた。わたしの唯一の望みは、人が何らかの善行によりわたしに報いることだ。わたしに報いることができる人は僅かだが、それでもわたしはこの世での旅を終え、わたしの働きを現わす次の段階を始める。なぜなら、わたしが長年人々の間で行き来してきたことは実を結び、わたしはそれを非常に喜ばしく思っているからだ。わたしが気にするのは人の数ではなく、むしろ彼らの善行である。いずれにしても、わたしはあなたがたが自分たちの終着点に備えて、十分な善行を積むよう望んでいる。そうすれば、わたしは満足する。さもなければ、あなたがたの誰も自分に降りかかる災いを免れないだろう。災いはわたしによりもたらされ、もちろんわたしが采配を振るものである。もしあなたがたがわたしの目に

良いと映らなければ、災いの苦しみから免れることはないだろう。患難の中にあっては、あなたがたの行動と行いは全て適切とはされなかった。あなたがたの信仰と愛は、うわべだけのもので、あなたがたは自分たちの臆病さか屈強さしか示さなかったからだ。これに関しては、わたしは良いものと悪しきもののとの評価のみをする。わたしの関心は引き続きあなたがたひとりひとりがどう行動しどう自分を表現するかであり、それに基づいてわたしはあなたがたの終着点を決定する。しかし、わたしは次のことを明白にしなければならない。患難の時に、わたしに全く忠誠を示さなかった者たちにはもはや憐れみは与えない。わたしの憐れみが与えられるのはここまでだからだ。さらに、わたしは、かつてわたしを裏切った者は誰も好まず、ましてや友の利害を裏切る者たちと係ることを望まない。その人が誰であっても、これがわたしの性質である。あなたがたに伝えなければならない。わたしを悲しませる者は誰であっても、再びわたしから慈悲を受けることはなく、これまでわたしに忠実であった者はとこしえにわたしの心に留まるだろうことを。

『言葉は肉において現れる』の「終着点のために、善行を十分積まなければならない」より

わたしの働きの最終段階において、あなたがたが見事な成果を披露でき、完全に献身しており、もはや半信半疑ではないことを望むのみである。無論、あなたがた全員が好ましい終着点を得ることもわたしは望んでいる。それでもなお、あなたがたがわたしに対して排他的かつ最終的な信心を捧げる際に最善の決断を下すことというわたし自身の条件がある。ある者に排他的な信心が無い場合、その者は間違い無くサタンに重宝されるようになり、わたしがその者を使い続けることは無い。わたしはその者を家に帰し、その両親に世話をさせるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「終着点について」より

あなたがたは開かれた正直な心でもって出来る限り自分の本分を尽くし、そのためなら喜んで何でもする覚悟をもたなければならない。あなたがたが述べた通り、その日が来た時、神のために苦難を受けて代償を払った者に神が注意を払わないことは一切無い。このような信念は保つ価値のあるものであり、決して忘れてはならないものである。あなたがたに関してわたしの気が安まるのは、こうするよりほか無い。さもなければ、あなたがたに関してわたしの気が安まることは無く、あなたがたは永遠にわたしの嫌悪の対象となるであろう。あなたがた全員が自らの良心に従い、わたしのために全てを与え、わたしの働きのために出来る限り努め、わたしの福音の働きに対して努力の生涯を捧

げるならば、わたしの心はあなたがたのために歓喜して飛び跳ねるのではなからうか。あなたがたに関してわたしの心は完全に安らぐことが出来るのではなからうか。

『言葉は肉において現れる』の「終着点について」より

もしあなたが真理の道を求めることに喜びを感じるのなら、あなたはしばしば光の中に生きている。神の家で効力者であることを喜ぶ人で、人に知られなくとも勤勉に、良心的な仕事をし、決して何かを得ようとせず、常に与える者であるのなら、その人は忠実な聖徒だと言おう。報いを求めず、ただ正直であるのだから。率直であろうとし、すべてを与える覚悟があり、神のために命を犠牲にして証しすることができるのなら、神を満足させることだけを考え、自分のことは考えず、自分のためには何も求めないほど正直なら、そのような人は光に養われ、神の国で永遠に生きる人である、とわたしは言おう。

『言葉は肉において現れる』の「三つの忠告」より

説教と交わりの参考箇所

善行とは私たちが救いを得た証しであり、私たちが真理と神の御言葉の現実に入っていることの現れでもあります。私たちが善行を積み重ねたならば、それは私たちが神の前で新たな人となり、本当の人間であることの真の証しをしていることになります。善行は、私たちが真に悔い改めたことを最も顕著に示すものです。また、善行を積み重ねたならば、真の人間らしさがあることにもなります。もしあなたが長年神を信じているものの、ほとんど善行を積んでこなかったならば、あなたに人間らしさはあるでしょうか。良心と理知があるでしょうか。あなたは神の愛に報いている者でしょうか。あなたの真の信仰はどこにあるでしょうか。神を愛し服従する心はどこにあるでしょうか。あなたが入った現実は何でしょうか。あなたにそうしたものはまったくありません。したがって、善行をまったく積まない者は、神を信じることから何も得ない者です。神による救いをまったく得ていない者であり、墮落があまりにも根深く少しも変化していないのです。善行はこのことを実に明らかにしています。

『いのちの入りについての説教と交わり (II)』の「善行を積むことの重要な意味」より

十分な善行とは何でしょうか。人間が神の働きにおける経験において尽くすことができ

る本分、あるいは尽くすべき本分、また何であれ神が人間に求められることは、——もし人がこれらのことを行うことができ、神を満足させることができるならば、——すべて善行であると言えます。あなたが神の要求を満たすことができれば、それは善行です。本分を尽くしながら神に献身しているなら、それは善行です。あなたが為すことが神の選びの民に有益であり、あなたのしていることは良いと皆が思うなら、それは善行です。人間が良心と理性において、神の意図に沿っていると信じられることは、すべて善行です。神を満足させ、神の選びの民に有益なこともまた善行です。もし誰かが、私たちが今話した善行を備え持つためにすべてを投げ出すことができれば、最終的にその人はそれらを達成することができ、それはその人が十分な善行を果たしたことを意味します。……誰もが今、本分を尽くすことを求め、救いを追求していますが、決意と願望を持つだけでは不十分です。人は実践的なふるまいを示し、実践的な行動をとらなければなりません。神の選びの民が命に入るために、あなたはどのような本分を尽くしましたか。神の要求を満たすために、あなたは何を為し、どんな代価を払いましたか。神を満足させ、神の愛に報いるために、あなたは何をしましたか。これらすべては、あなたが省みなければならないことです。あなたが多くのことを行い、神の要求を満たすために、また神の選びの民が命に入り成長するために、大きな犠牲を払ったならば、その時こそ、あなたが十分な善行を備え持っていると言えます。

『いのちの入りについての説教と交わり』（II）「善行を備え持つことの背後にある重要な意味」より

最小限本分を尽くすことは、それだけでは十分な量の善行には達しません。言い換えれば、本分を少しだけ尽くすことは、決して十分な善行とはみなされません。十分な善行とは、決して人々が想像するほど単純なものではありません。十分な量の善行を備え持つには、己のすべてを神のために費やすことが必要です。さらに、それはすべての代価を払うことと、最初から最後まで誠意を持って神が託したことに忠誠を尽くすことを要します。これこそが神の基準を満たす唯一の方法です。

本分を尽くすことにおいて実際に代価を払い、神から賞賛されることを行い、卓越し並外れて敬服と羨望にも値する仕方で本分を尽くし、善行を行ったとみなされるに至った人たちがいます。兄弟姉妹たちの中には、本分を尽くすために監獄に投げ込まれ、サタンに服従することなく多くの苦しみを体験し、証しに立った人たちもいます。また、自分の安全や利益を顧みることなく危険を冒し、大胆に正しいことを行う精神で危険な本

分を尽くすことに献身する人たちもいます。そして、福音の働きに自らを捧げることができる兄弟姉妹たちがおり、彼らは人々を救うために福音を宣べ伝える中、屈辱に耐えることができます。また、福音の働きを熱心に勤め、不平一つ口にすることなく苦難に耐え、自分と自分の家族のことを脇へ置き、どのように福音を広めれば、もっと大勢の人々を神の前に導き、神の旨を満たすことができるのかという思いでいっぱいの人たちもいます。神を満足させるために自らのすべてを費やすことに献身している者は皆、すでに善行を行った人たちです。しかし彼らは、神が要求される「十分な善行」からはまだ程遠いのです。ほとんどの人は多少の善行を備え持っているだけで、神の要求を完全には満たしていません。それには、本分を尽くすために私たちの潜在能力を深く掘り下げ、十分な善行を実行するために真理の中に深く入ることに真剣に取り組むことが要求されます。これには、私たちがどんな本分を尽くしているかに関わらず、神の心を満足させるために最良の成果を遂げようと求めることが要求されます。特に福音を広めることにおいては、私たちが受ける屈辱がどんなに大きいか、あるいは私たちがどれほど多くの苦しみに耐えるかに関わらず、もっと多くの人々に救いをもたらすことができる限り、私たちは個人の犠牲をいとうことなく、それを本分として受け止めなければなりません。これのみが最善の行為を行うことです。人々がこのような善行をもっと行うことができれば、それは十分な善行と見なすことができます。これこそが最も神に幸福と喜びをもたらすものであり、このような人々は必ず神の賞賛を受けるでしょう。それはさておき、私たちは本分を尽くすにあたって、常に良心的で細心の注意を払い、絶えず自分自身を改善することを目ざし、うわべだけで事を行うようなことは微塵もないようにしなければなりません。私たちが神のために自らを費やして、神の旨を完全に満たすことができるようになるには、忠誠を尽くして献身しなければなりません。

「兄弟の交わり」より

第8章 さまざまな種類の人々の終末と人間への神の約束

関連する神の言葉

わたしの働きは六千年しか続かない。そしてわたしは、悪しき者による全人類の支配も

また六千年より長くは続かないと約束した。それゆえもうその時は来ている。わたしはこれ以上続けたり遅らせたりはしない。終わりの日に、わたしはサタンを打ち負かし、わたしの栄光をすべて取り戻し、わたしに属する地上のすべての魂を取り戻して、これらの苦悩する魂が苦しみ的大海から逃れられるようにする。これにより地上におけるわたしの働きがすべて完了するのである。これより後、わたしは地上で再び受肉することは決してなく、すべてを支配するわたしの霊が地上で働くことは二度とない。わたしが地上で行うのはただひとつ、わたしは人類を、聖なる人類に造り直す。それは地上におけるわたしの忠実な都である。しかし、わたしは世界全体を滅ぼしたり、人類すべてを滅ぼしたりはしないことを知るべきである。わたしはその人類の残りの三分の一、わたしを愛し、完全にわたしに征服された人類の三分の一を保ち、イスラエル人が律法の下でそうであったように、この三分の一を、多くの羊と家畜、そして地のすべての豊かさにより育み、繁栄させる。この人類はわたしのもとに永遠にとどまるであろう。ただし、それは現在のどうしようもなく汚れた人類ではなく、わたしに得られたすべての人々の群としての人類である。このような人類はサタンにより破壊され、混乱させられ、包囲攻撃されることはなく、わたしがサタンに勝利した後も地上に存在する唯一の人類となる。それは今日わたしに征服され、わたしの約束を得た人類である。それゆえ、終わりの日に征服された人類は、残され永遠に続くわたしの恵みを受ける人類でもある。これはサタンに対するわたしの勝利の唯一の証拠であり、サタンとの戦いの唯一の戦利品である。これらの戦利品はサタンの支配下からわたしにより救われたのであり、わたしの六千年にわたる経営（救いの）計画の唯一の結晶であり実りである。

『言葉は肉において現れる』の「肉なる者は誰も怒りの日から逃れられない」より

本当に神に従う者たちは、自分の働きへの試みに耐えることができるが、真に神に従っていない者は、神のいかなる試練にも耐えることができない。遅かれ早かれ、彼らは追放されるが、勝利者は神の国に留まるであろう。人間が神を真に求めているかどうかは、その人の働きに対する試み、すなわち神の試練により判断されるのであり、それはその人自身の判断とは無関係である。神は誰かを気まぐれに拒むことはない。神が行う全てのことは人間を完全に確信させることができる。神は、人間に見えない事や、人間を確信させることができない働きを一つも行わない。人間の信仰が真実であるかどうかは、事実により証明されるであり、人間が決めることはできない。「麦を毒麦に変える事はできず、毒麦を麦に変える事もできない」ということは疑いの余地が無い。神を真に愛する者たちはみな最終的に神の国に留まり、神は神を真に愛する者を虐げられること

はないであろう。神の国の中の勝利者たちは、彼らの様々な役割と証しに基づいて祭司として、あるいは信者として仕えるであろう。また患難のただ中で勝利した者たちは、みな神の国で祭司の集団となるであろう。祭司の集団は全宇宙における福音の働きが終わった時に形成されるであろう。その時が到来すると、人間がなすべき事は、神の国において自分の本分を尽くし、神と共に神の国で生活することとなるであろう。祭司の集団の中には、祭司長と、祭司がいて、それ以外の者は神の子、神の民となるであろう。これは全て患難の間の神への証しにより決定される。それらは気まぐれで与えられた称号ではない。一旦人間の地位が確立すれば、神の働きは停止する。なぜなら、各人が種類に従って分類され、彼らの本来の地位に戻され、それは神の働きの成果のしるしであり、神の働きと人間の実践の最終結果であり、また神の働きのビジョンと人間の協力との結晶だからである。最後に人間は神の国で安息を得て、神もまた自らの住まいに戻って休息を得るであろう。これが神と人間の六千年におよぶ協力の最終結果である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

裁きとは何か、真理とは何かをいま理解しているか。もししているならば、裁かれることに従順に従うよう強く勧める。さもなければ、神に称賛され、神の国に連れて行かれる機会を得ることは決してないであろう。裁きを受け入れるだけで清められることのできない人、つまり裁きの働きの只中において逃げる人は、永遠に神に嫌われ拒絶される。彼らの罪は、パリサイ人の罪よりもさらに多く、深刻である。彼らは神を裏切り、神の反逆者だからである。奉仕することさえ相応しくないそのような人は、さらに過酷で、加えていつまでも終わることのない懲罰を受ける。言葉では一度は忠誠を誓いながらその後、神を裏切った反逆者を神は容赦することはない。このような人は霊、魂、体の懲罰を通して報復を受けることになる。これこそ、神の義なる性質の明示ではないのか。これが人を裁き、明らかにする神の目的ではないのか。神は裁きのあいだにあらゆる邪悪な行いをする人々すべてを悪霊がはびこる場所に引き渡し、それらの悪霊に彼らの肉体を好きなように破壊させる。そして彼らの肉体は死臭を放つ。これは彼らにふさわしい報復である。神は、それら不忠実な偽信者、偽使徒、偽勤労者の罪を一つひとつその記録書に書き留める。そして、その時が来ると、神は彼らを不浄な霊の真中に投げ入れ、不浄な霊が彼らの全身を思うままに汚すようにし、そのため彼らは決して生まれ変わることはなく、二度と光を見ることはない。一時期は神に仕えるが最後まで忠実であり続けることのできない偽善者は、神が邪悪なものに含めて数え、そのため彼らは悪人の言いなりとなり、烏合の衆の一部となる。最後には神は彼らを滅ぼす。キリストに忠

実であったことがない人、自らの強みをもって何らの貢献をしたことのない人を神は脇へやり、省みることはなく、時代が変わるときに彼らをすべて滅ぼす。彼らはもはや地上には存在せず、神の国へ入ることなどなおさらありえない。神に誠実であったことはないが、状況のせいで強制的に神を表面的に取り扱うことになった人は、神の民のために奉仕する人に含めて数えられる。これらの人々のうちほんの一部だけが生き残るが、大半は奉仕をする資格さえない人々とともに滅ぶ。最後に、神と同じ考えをもつ人すべて、神の民と子ら、そして神に祭司となるよう予め定められた人々を、神は神の国に連れて行く。彼らは神の働きの精粹となる。神が制定した範疇のどれにも当てはめることのできない人は、非信者に含めて数えられる。彼らの結末がどうなるか、あなたがたは確実に想像できることであろう。わたしは既に言うべきことをすべてあなたがたに語った。あなたがたを選ぶ道は、あなたがただけの選択である。あなたがたが理解すべきことはこれである。神の働きは神と足並みをそろえることのできない人を誰も待たず、神の義なる性質はどんな人にも憐れみを示さない。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは、真理を以て裁きの働きを行う」より

自分の肉のことしか考えず、快適さを好む者、信仰が曖昧な者、魔法の薬や魔術を行う者、淫乱でふしだらな者、ヤーウェの犠牲や神の所有を盗む者、まいないを好む者、天国へ行くことを無為に夢見る者、傲慢で自惚れが強く、個人的な名声や富のためだけに努力する者、無礼な言葉を広める者、神自身を冒瀆する者、神自身を非難し、中傷する者、他の者と徒党を組んで独立しようとする者、自分を神以上に讃美する者、軽薄な若い男性と女性諸君、悪徳に陥れられた中高年の男性と女性諸君、個人的な名声と富を喜び、他人の中で個人的な地位を追求する男性と女性諸君、悔いることのない、罪の罨から抜け出せない者は、すべて救いの限度を超えているのではなかろうか。放縦、罪深さ、魔法の薬、魔術、冒瀆、無礼な言葉は、あなたがたの中で暴動を起こし、あなたがたの中で真理の言葉といのちは踏みにじられ、あなたがたの中で聖なる言葉は汚される。汚れと反逆に満ちた異邦人であるあなたがたは、最後にどうなるであろうか。肉を愛し、肉の邪悪を行い、不浄の中に陥った者は、どうして厚かましくも生き続けることが出来ようか。あなたがたのような者は、救いの限界を超えた、うじ虫であることを知らないというのか。どうしてあなたがたに、あれこれと要求する資格があるというのか。現在まで、真理を愛さず、肉だけを愛する者には、全く変化が無い。それならば、どうしてそうした者が救われ得るだろうか。現在でさえも、いのちの道を愛さない者、神を讃美せずに神の証しとならない者、自分の地位のために謀をする者、自らを賞揚する者は

、依然として変わらないのではないか。そうした者を救うことに、何の価値があるだろうか。人間が救われるかどうかは、その人間がどの程度条件を満たしているか、どの程度の期間にわたり働きを行ってきたかによって左右されず、ましてやその人間がいくつ資格を保有しているかによって左右されない。それは、あなたの追求のなかで、何らかの効果があったかにより決められる。あなたは、救われた者が実を結ぶ木であり、青々と葉を茂らせたり豊かな花を咲かせたりはするが、実を結ばない木では無いことを知るべきである。あなたが何年も街を徘徊したとしても、だからと言ってそれに何の意味があるというのだろうか。あなたの証は、どこにあるだろうか。神に対するあなたの敬愛は、あなた自身や、あなたの欲望に対する愛に劣る。そうした者は、退化した者ではなかろうか。あなたは、どうして救いの規範となることが出来ようか。あなたの本性は変えられず、あなたは反逆的過ぎて、救われることが出来ない。そうした人間は排除されるのではなかろうか。わたしの業が完了する時は、あなたの終わりの日が訪れる時ではなかろうか。わたしはあなたがたに対して、極めて多くの業を行い、極めて多くの言葉を述べてきた。そのうち、あなたがたの耳に入った言葉の量は、どの程度であろうか。そのうち、あなたがたが従った言葉の量は、どの程度であろうか。わたしの業が終わる時は、あなたがわたしに反抗したり、わたしに反対したりするのを終える時でもある。わたしの業の期間において、あなたがたは常にわたしに反対する行動を取り、決してわたしの言葉に従わなかった。わたしは自分の業を行い、あなたは、あなたの業を行い、あなたは自分の小さな王国を建てる。あなたがたは、きつねと犬の群れのようにであり、あなたがたの行動は、全てわたしに反対するものである。あなたがたは常に、自分のことだけを愛するものを抱こうとする。あなたがたの敬愛は何処にあるのか。あなたがたの行動は、すべて偽りである。あなたがたには、服従や敬愛が一切無い。あなたがたの行動は、全て偽りであり、冒涇である。そうした人々が救われ得るであろうか。性的倫理が欠如し、好色な男性は、常に妖艶な売春婦を惹き付けて「享楽」に耽溺することを望む。わたしはそうした性的倫理が欠如した悪魔を救わず、そうした不浄な悪魔を忌み嫌う。その好色さ、妖艶さにより、あなたがたは陰府に落とされた。あなたがたは、自分に対して何を述べるであろうか。あなたがたのように不浄な悪魔や悪霊のような者は、極めて凶悪である。あなたがたは非常に不快である。どうしてそうしたくずのような人々が救われるであろうか。罪から抜け出せずにいる人々は、それでも救われるであろうか。これらの真理、この道、そしてこのいのちは、あなたにとって何の魅力も無い。あなたがたは罪深さ、金銭、地位や名声、利益、肉の享楽、男性の端正さ、女性の色っぽさに惹かれる。あなたがたには、どのような資格があって、わたしの国に入るとい

のか。あなたがたの像は、神よりも尊大であり、あなたがたの地位は神よりも高く、人々の中でのあなたがたの名声は言うまでも無い。あなたがたは、他人に崇拜される偶像となっている。あなたは、大天使となったのではなかろうか。人間の最後が示される時は、救いの業が完了する時でもあり、あなたがたのうち多くの者が、救いの限界を超えた屍となっており、排除されなければならない。救いの業の期間において、わたしは人々に対して親切に接する。その業が終わる時、様々な種類の者の結末が示され、その時わたしは親切では無いであろう。何故なら、人々の結末が既に示され、各人が分類されており、それ以上救いの業を行う意味が無いであろうからである。それはひとえに、救いの時代が終わり、その後、救いの時代は二度と戻って来ないからである。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

しかし、古い世界が存続する間、わたしは国々の上に怒りを投げつけ、わたしの行政を全宇宙に公布し、違反する者には刑罰を下す。

わたしが全宇宙に向かって話すと、人間はみなわたしの声を聞き、そこで、わたしが全宇宙で行ってきた業を見る。わたしの心に逆らう者、つまり、人間の行いでわたしに敵対する者は、わたしの刑罰を受けて倒れる。わたしは天の多くの星々を取ってそれらを新しくし、わたしにより、太陽と月は新たになる——空はもはや以前のものではない。地上の無数の物事が新たになる。すべては、わたしの言葉により完全になる。全宇宙の多くの国々は、新たに区切られ、わたしの国に置き換わる。地上の国々は永遠に消え去り、わたしを崇める一つの国になる。地上のすべての国々は破壊され、存在しなくなる。全宇宙の人間のうち、悪魔に属する者はみな、滅ぼし尽くされる。サタンを礼拝する者はみな、わたしの燃える炎に倒れる——つまり、今、流れの中にいる者以外は、灰になるのだ。わたしが多くの民を罰するとき、宗教界にいる者は、わたしの業に征服され、程度の差はあれ、わたしの国に戻る。彼らは聖なる方が白い雲の上に乗って降臨するのを見たからである。人間はみな、種類に従い、それぞれの行いに応じて刑罰を受ける。わたしに敵対した者たちは、みな滅びる。地上での行いがわたしと関わりのなかった人たち、その人たちは、自分たちの行いによって、地上にわたしの子らとわが民の支配下で存在を続ける。わたしは無数の人々と無数の国々にわたしを現し、わたしは自ら声を発して地上にわたしの大いなる働きの完了を告げ、全人類が自分たちの目でそれを見られるようにする。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十六章」より

わたしは今、わが民の間を歩き回り、わが民の中で生きている。今日、わたしに本物の愛を抱いている者たちは幸いである。わたしに服従する者は幸いである。その人たちは必ずや、わたしの国にとどまるであろう。わたしを知る者は幸いである。その人たちは、必ずや、わたしの国で権力を振るうであろう。わたしを追い求める者は幸いである。その人たちは必ずやサタンの束縛から逃れ、わたしの中にある祝福を享受するであらう。自らを捨てることのできる者は幸いである。その人たちは、必ずやわたしのものとなり、わたしの国の富を相続するであろう。わたしのために走り回る者を、わたしは記念し、わたしのために尽くす人を、わたしは喜んで抱こう。わたしに捧げ物をする人に、わたしは喜びとなるものを与えよう。わたしの言葉に喜びを見出す者を、わたしは祝福する。その人たちは必ずや、わたしの国の棟木を支える柱となるであろう。その人たちは、必ずやわたしの家で何もののにも及ばない豊かさを得、彼らに並ぶものは一人もいない。あなたがたは、自分に与えられた祝福を受け入れたことがあるか。あなたがたは、あなたがたのために結ばれた約束を求めたことがあるか。あなたがたは、必ずや、わたしの光の導きの下、闇の力の要塞を打ち破るだろう。あなたがたは、闇のただ中であっても、あなたがたを導く光を絶対に見失いはしないだろう。あなたがたは、必ずや、すべての被造物の主人となる。あなたがたは、必ずや、サタンの前で勝利する。あなたがたは、必ずや、赤い大きな竜の国が滅びるとき、無数の大衆の中で立ち上がり、わたしの勝利を証しするであろう。あなたがたは、必ずや、秦の国にあって、決意を固くし、揺るぐことがないだろう。あなたがたの耐え忍ぶ苦しみにによって、あなたがたはわたしからの祝福を相続する。そして、必ずや、全宇宙にわたしの栄光を輝かせるだろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十九章」より

立ち上がって、わたしに協力しなさい。心からわたしのために尽くす者を、わたしは決して惨めに扱わない。心からわたしに献身するなら、わたしはあなたにわたしのすべての祝福を授けよう。完全に自分自身をわたしに捧げなさい。あなたが食べる物、着る物、あなたの将来、すべてがわたしの手の中にある。わたしはあなたの永遠の尽きることのない楽しみのために、それらのすべてを適切に整える。なぜならわたしは、「心からわたしのために尽くす者へ、わたしは必ず大いにあなたを祝福しよう」と言ったからだ。すべての祝福は、心からわたしのために自分を捧げる一人ひとりのところへ来る。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十章」より

わたしがあなた方のために用意したもの、つまり、世界中の稀有で貴重な宝があなた方

に与えられるのだ。あなた方は、現時点では、それを思い浮かべることも、想像することもできない。そして、このようなことを楽しんだことがある者は一人もいない。これらの祝福があなた方の上に臨むとき、あなた方はいつまでも心から楽しむが、これらはすべてわたしの力、わたしの行為、わたしの義、そして何よりも、わたしの威厳であることを忘れてはならない。（わたしは、恵みを示すよう選んだ者たちに恵みを示し、憐れみを示すよう選んだ者たちに憐れみを示す。）その時、あなた方は親を持つことはなく、血縁関係もない。あなた方は皆、わたしの愛する民、わたしの最愛の子らである。それ以降は、誰もあなた方を弾圧しようとしないうだろう。それは、あなた方が大人に成長する時となり、あなた方が鉄の杖で国々を支配する時となるであろう。わたしの愛する息子たちを妨げようなどとするのは誰か。わたしの最愛の息子たちを敢えて攻撃しようとするのは誰か。父が栄光を受けたので、彼らはみなわたしの愛する子らを敬うだろう。誰も想像すらできなかったことがすべて、あなた方の目の前に現れる。それらは無限で、無尽蔵で、終わることがない。もうしばらくすれば、あなた方はもはや太陽の焼けつく暑さに耐える必要はなくなる。また、寒さに苦しむ必要もなくなり、雨も、雪も、風さえもあなた方には及ばなくなる。それは、わたしがあなた方を愛しているからであり、それは完全にわたしの愛の世界になる。わたしはあなた方が望むすべてのものを与えよう。また、あなた方が必要とするすべてのものをあなた方のために用意しよう。わたしは義ではないなどと言う者は誰か。わたしは直ちにあなたを殺す。それは前に言ったように、わたしの怒りは（邪悪な者たちに対して）永遠に続き、わたしはほんの少しも容赦しないからである。しかし、（わたしの最愛の子らへの）わたしの愛も永遠に続くだろう。わたしは少しもそれを惜しまない。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの初めの言葉」の「第八十四章」より

一旦、征服の働きが完了すると、人類は美しい世界に連れて行かれる。もちろん、この生活はまだ地上にあるが、現在の人間の生活とは全く違う。それは全人類が征服された後の生活であり、それは地上の人間にとって新しい始まりとなり、人類がそのような生活を送ることは、彼らが新しく美しい領域に入ったという証拠となるであろう。それは地上における人と神の生活の始まりとなる。そのような美しい生活の前提として、人は清められ征服されたあと、造り主の前に服従する。それゆえ、征服の働きとは、人類が素晴らしい終着点に入る前の、神の働きの最終段階である。そのような生活は地上における人類の未来の生活であり、それは地上で最も美しい生活、つまり人が待ち焦がれていたような生活であり、世界史上、人が決して達成したことのないような生活である。

それは六千年の経営（救い）の働きの最終的結果であり、人類が最も待ち望んでいたものであり、それはまた、神が人間に約束していたものでもある。しかし、この約束はすぐには実現されない。終わりの日の働きが完成され、人が完全に征服され、すなわちサタンが完全に打ち負かされて、初めて人類は未来の終着点に入るのである。人は精錬された後、罪の性質がなくなる。なぜなら、神はサタンを打ち負かしたので、敵対勢力による侵略はなく、人の肉を攻撃する敵対勢力がなくなるからである。そのようにして、人は自由になり、聖くなり、永遠の中に入るだろう。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

人類がみな本来の姿を回復し、それぞれ自分の本分を尽くし、自分の立場を守り、神のすべての定めに従うことができたなら、神が地上で一団の、自身を礼拝する人たちを得、自身を礼拝する国を打ち立てたことになる。神は地上で永遠の勝利を得、自身に敵対する者たちは永遠に滅びる。これは神が最初に人を造った時の意図を回復し、神が万物を造った意図を回復し、地上での神の権威、万物の中での神の権威、敵の間での神の権威をも回復したことになる。これらは神が完全に勝利を得たことのしるしである。その後人類は安息に入り、正しい軌道に乗った生活に入る。神も人との永遠の安息に入り、神と人が共有する永遠の生活に入る。地上の汚れと不従順は消え、地上の嘆き悲しみも消える。神に敵対する地上のあらゆるものも存在しなくなる。神と神に救われた人たちだけが残り、神の創造物だけが残る。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

神を愛する者だけが神を証しでき、彼らだけが神の証人であり、彼らだけが神の祝福を受け、彼らだけが神からの約束を受け取る。神を愛する者は神と親しい者であり、神に愛され、神と共に幸いを享受できる。こうした人々だけが永遠に生き、また、こうした人々だけが神の顧みと守りの下、永遠に生きる。神は愛するべき対象であり、人々に愛されるにふさわしい対象だが、すべての人が神を愛せるわけではない。誰もが神を証しして、神と共に力をもつわけでもない。神を証しできるので、すべての努力を神の働きに捧げられるので、真に神を愛する者は天下のどこを歩いてもあえて敵対しようとする者がいない。また、地において力を振るい、神の民みなを支配できる。こうした人々は世界中からやって来る。話す言葉は違い、肌の色も異なっているが、その存在は同じ意味を持っている。彼らには神を愛する心があり、みな同じ証しをし、同じ決意を持ち、

同じことを願っている。神を愛する者は世界中を自由に歩くことができ、神を証しする者は、全宇宙を旅できる。こうした人々が、神の愛する者であり、その人たちは神の祝福を受けており、神の光の中で永遠に生きる。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する者たちは永遠に神の光の中に生きる」より

神に完全にしてもらうことができる人たちは、神から祝福や嗣業を受け取ることでできる人たちである。すなわち、そのような人たちは、神が所有するものそして神という存在を取り入れる。そうすることによって取り入れたものは彼らが内部に持つものとなる。すなわち、彼らは、神の言葉が彼らの中に働いたものすべてを所有している。神という存在が何であれ、あなた方は、その存在のすべてをまさにそのまま受け入れることができる。そうすることによって、真理を生きることができる。これが、神によって完全にされ、神のものとされた人である。そのような人だけが、次に掲げる、神が授ける祝福を受け継ぐ資格がある。

1. 神の愛のすべてを受け取ること。
2. あらゆる事柄において神の旨に沿って行動すること。
3. 神の導きを受け取り、神の光の下で生き、神の啓示を受けること。
4. 地上で神によって愛された象徴のように生きること、すなわち、ペテロと同じように真に神を愛すること、神の為に十字架にかけられ、死が神の愛に対する報いに相応しいと感じるほどに神を愛すること、そしてペテロと同じ栄光を受けること。
5. 地上のすべての人によって愛され、敬われ、称賛されること。
6. 死やハデスの束縛のすべてを克服すること、サタンに働く機会を与えず、神のものとされていること、新鮮でいきいきとした霊的状态であること、いささかの疲れもないこと。
7. 人生のあらゆるときに、あたかも神の栄光の日の到来を見てきた人のように、言語を絶するほどの高揚感や気持ちの高まりをもてること。
8. 神とともに栄光を受け取ること、そして神の最愛の聖人たちに似た容貌をもてること。

9. 神が地上で愛するもの、すなわち神の最愛の子になること。

10. 姿を変えて、神と共に、肉を超越して第三の天まで引き上げられること。

このような神の祝福を受け継ぐことができる人だけが、神によって完全にされ、神のものとされた人である。あなたは、何かを獲得してきただろうか。どれほどまで、神はあなたを完全にしてくださるだろうか。神は手当たり次第に、人を完全にしない。人が見ることができる状態と明白な結果がある。人が思うように、神への信仰がある限り神によって完全にされ神のものとされ、神の祝福や嗣業を地上で受け取ることができる、ということではない。そのような事柄は極めて難しく、姿を変えるというような話になるとなお一層難しい。現在、あなた方が主として追求すべきことは、すべての事柄において神によって完全にされることであり、そしてあなた方が向かい合っているすべての人、事柄、物事を通して、神によって完全にされることである。そうすることによって、神という存在のより多くのものがあなた方の中へ取り込まれる。あなた方は神から、より多くより大きな祝福を受け継ぐ資格を得る前に、まず地上で、神からの嗣業を受け取らねばならない。今述べたことのすべてが、あなた方が追求すべきことであり、最初に理解すべきことである。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされた人々への約束」より